宮古市埋蔵文化財調査報告書53

# 赤前Ⅲ遺跡　赤前Ⅳ八枚田遺跡　赤前Ⅴ柳沢遺跡
# 赤前Ⅵ釜屋ヶ沢遺跡　小堀内Ⅲ遺跡

## ――宮古市水産課津軽石環境整備事業関係――

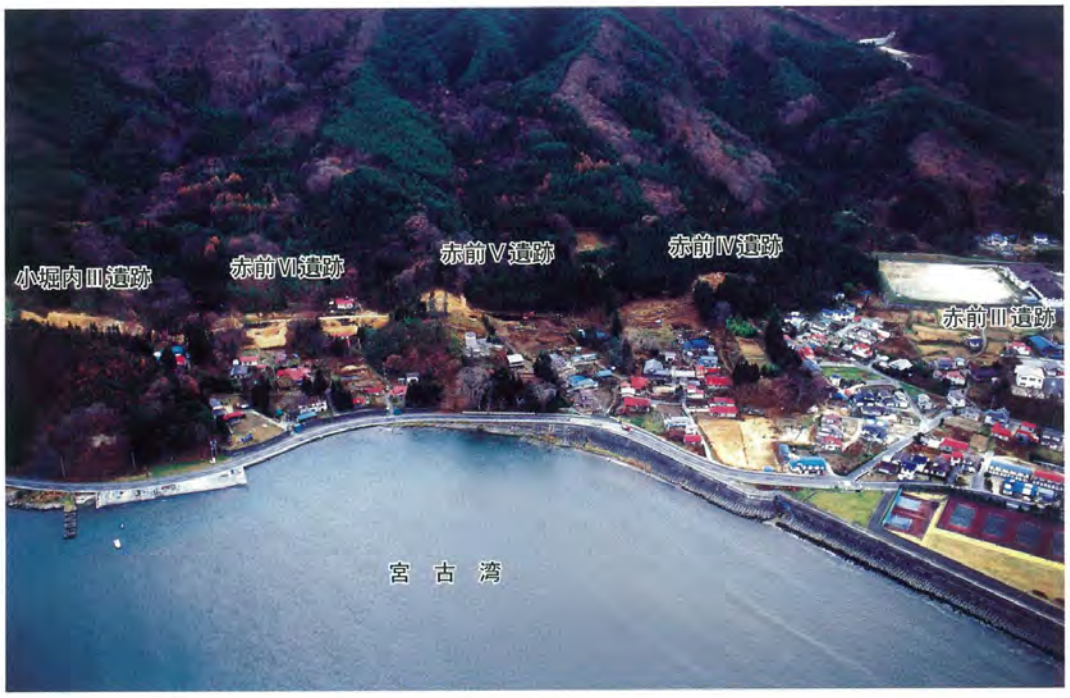
1999.3

岩手県宮古市教育委員会

宮古市埋蔵文化財調査報告書53
A Report on the Archaeological Research in Miyako City, No.53

# 赤前Ⅲ遺跡　赤前Ⅳ八枚田遺跡　赤前Ⅴ柳沢遺跡
# 赤前Ⅵ釜屋ヶ沢遺跡　小堀内Ⅲ遺跡

## ――宮古市水産課津軽石環境整備事業関係――




1999.3

岩手県宮古市教育委員会
The Miyako Bord of Education
Miyako, Iwate, Japan

# 序　　文

宮古市ではこれまで400箇所余りの遺跡が確認されております。それらの遺跡のほとんどが大小の河川の流域に分布しております。今回の発掘調査は、津波避難道の建設に先立って津軽石川の河口部に近い小堀内、赤前地区でおこなわれました。調査は平成５年度から平成９年度まで五つの遺跡を横断する形で進められ、その成果が本報告書としてまとめられるにいたりました。

縄文、弥生、奈良、平安の各時代の住居跡が発掘されるなど大きな成果をあげることができましたが、なかでも古代の製鉄に関連した遺構、遺物の出土が多いことは今回の調査の大きな特徴といえるかと思われます。古代の人々が当時画期的であったであろう鉄の生産にどのように関ってきたのか、その解明の大きな手が掛りとなるものと思われます。

最後になりましたが、野外での調査、資料の整理にあたり御協力いただきました多くの関係者、各位に感謝申上げるとともにこれらの成果が広く活用されることを願って序文といたします。

宮古市教育委員会
教育長　中　屋　定　基

# 例　　言

1．本書は宮古市水産課津軽石環境整備事業に伴い平成５年から平成９年かけて実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．調査の主体は宮古市教育委員会である。発掘調査は阿部が担当した。本書の編集、執筆は阿部が担当し、竹下、高橋、鎌田、加納、工藤がこれを補佐した。

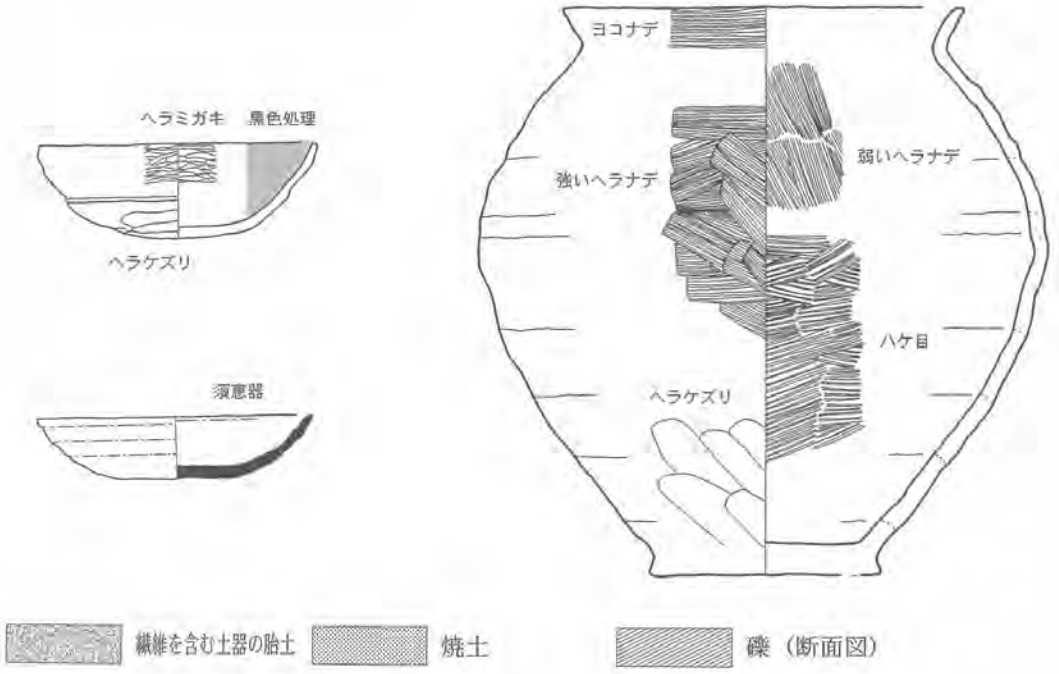
3．調査座標は任意の座標である。道路の建設に際して組まれた座標をそのまま用い、北側の工事区域の起点を原点としている（第４図参照）。

原点の座標は下記のとおりである。

ＲＸ　＋1000、ＲＹ　＋1000

4．高さは標高値をそのまま使用した。

5．遺物の表現については下記のとおりとした。




6．土層観察に際しては、「新版標準土色帖」（1967、小山正忠、竹原秀雄）を参考とした。

7．整理作業、報告書の作成にあたって下記の方々からご協力、ご教示頂いた。記して感謝申し上げます。

高橋與右衛門（岩手県埋蔵文化財センター）小田野哲憲（岩手県埋蔵文化財センター）

八木光則（盛岡市教育委員会）八重樫忠郎（平泉町教育委員会）

佐藤正彦（陸前高田市立博物館）熊谷賢（陸前高田市立博物館）

8．出土した遺物、実測図、写真など調査に関る資料は、宮古市教育委員会が一括して保管している。

9．鉄製品の保存処理、遺物の分析は下記の機関に依頼した。

新日鉄グループ　株式会社ニッテツ・ファイン・プロダクツ

釜石文化財保存処理センター

パリノ・サーヴェイ株式会社

# 目　　次

序文
例言
目次

Ⅰ　調査経過 …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査要旨 …… 1
　3．調査体制 …… 2
Ⅱ　遺跡の立地環境 …… 3
Ⅲ　調査の結果 …… 11
　1．**小堀内Ⅲ遺跡** …… 11
　　1－1．調査概要と基本層 …… 13
　　1－2．検出した遺構、遺物 …… 22
　　a．住居跡、製鉄遺構 …… 22
　　b．土坑跡 …… 55
　　c．溝跡 …… 57
　　d．遺構外出土遺物 …… 59
　　1－3．まとめ …… 61
　2．**赤前Ⅵ釜屋ケ沢遺跡** …… 63
　　2－1．調査概要と基本層序 …… 67
　　2－2．検出した遺物 …… 67
　　2－3．まとめ …… 69
　3．**赤前Ⅴ柳沢遺跡** …… 71
　　3－1．調査の概要と基本層序 …… 73
　　3－2．検出した遺構と遺物 …… 80
　　a．住居跡 …… 80
　　b．焼土遺構、焼骨の分布、土坑跡、溝跡 …… 92
　　c．遺構外出土遺物 …… 99
　　3－3．まとめ …… 101
　4．**赤前Ⅳ八枚田遺跡** …… 103
　　4－1．調査の概要と基本層序 …… 105
　　4－2．検出した遺構と遺物 …… 113
　　（1）縄文時代
　　a．住居跡 …… 113

（2）弥生時代
a．住居跡……118
b．土坑跡……124
（3）奈良時代
a．住居跡……127
（4）平安時代
a．住居跡と製鉄遺構……136
b．土坑跡……178
c．掘立柱建物跡……188
d．溝跡……192
e．道状遺構と土溝跡……200
（5）遺構外出土遺物……203
4－3．まとめ……217
5．赤前Ⅲ遺跡……221
5－1．調査の概要と基本層序……223
5－2．検出された遺構と遺物
（1）縄文時代
a．住居跡……231
b．土坑跡……231
c．陥穴状土坑跡……235
（2）平安時代
a．住居跡、製鉄遺構……237
b、道状遺構……255
（3）土坑群……255
（4）遺構外出土遺物……258
5－3．まとめ……269
Ⅳ　種実遺体の同定……271
Ⅴ　調査のまとめ……273
a．古代の土器について……273
b．製鉄遺構について……274
c．植物、動物遺存体について……280
写真図版……281
報告書抄録……327

# 図 版 目 次

第１図　位置図 …… 4
第２図　地形図 …… 5
第３図　周辺の遺跡分布図 …… 6
第４図　遺跡の配置と周辺の地形 …… 7
＜小堀内Ⅲ遺跡＞
第５図　平成５年度調査区全体図 ……15
第６図　平成５年度調査区土層断面図 ……16
第７図　Ｂ区、Ｄ区、Ｅ区遺構配置図 ……17
第８図　Ｂ区、Ｅ区土層断面図 ……19
第９図　Ｄ区土層断面図 ……20
第10図　Ａ区、Ｃ区全体図、土層断面図 ……21
第11図　Ｂ－１号竪穴住居跡 ……23
第12図　Ｂ－１号竪穴住居跡カマド ……25
第13図　Ｂ－１号竪穴住居跡出土遺物（１） ……26
第14図　Ｂ－１号竪穴住居跡出土遺物（２） ……27
第15図　Ｄ－１号竪穴住居跡 ……29
第16図　Ｄ－１号竪穴住居跡カマド ……30
第17図　Ｄ－１号竪穴住居跡出土遺物（１） ……33
第18図　Ｄ－１号竪穴住居跡出土遺物（２） ……34
第19図　Ｄ－１号竪穴住居跡出土遺物（３） ……35
第20図　Ｄ－１号竪穴住居跡出土遺物（４） ……36
第21図　Ｄ－２号竪穴住居跡（１） ……38
第22図　Ｄ－１号竪穴住居跡（２） ……39
第23図　Ｄ－２号竪穴住居跡カマド、鍛冶炉跡 ……40
第24図　Ｄ－２号竪穴住居跡出土遺物（１） ……41
第25図　Ｄ－２号竪穴住居跡出土遺物（２） ……42
第26図　Ｅ－１号製鉄遺構 ……43
第27図　Ｅ－１号製鉄炉跡 ……45
第28図　Ｅ－１号製鉄炉跡出土遺物（１） ……46
第29図　Ｅ－１号製鉄炉跡出土遺物（２） ……47
第30図　Ｅ－２号竪穴住居跡 ……49
第31図　Ｅ－２号竪穴住居跡カマド ……52
第32図　Ｅ－２号竪穴住居跡出土遺物 ……53
第33図　Ｄ－３号竪穴住居跡 ……54
第34図　Ｄ－３号竪穴住居跡カマド ……54
第35図　Ｂ－２号、Ｂ－３号、Ｂ－４号、Ｂ－５号土坑跡 ……55

第36図　Ｂ－３号土坑跡出土遺物 …… 56
第37図　Ｄ－４号溝跡 …… 57
第38図　Ｄ－４号溝跡出土遺物 …… 57
第39図　Ｂ区遺構外出土遺物 …… 58
第40図　Ｄ区遺構外出土遺物 …… 59
＜赤前Ⅵ釜屋ケ沢遺跡＞
第41図　赤前Ⅵ釜屋ケ沢遺跡調査区全体図 …… 65
第42図　赤前Ⅵ釜屋ケ沢遺跡遺物包含層出土遺物（１）…… 68
第43図　赤前Ⅵ釜屋ケ沢遺跡遺物包含層出土遺物（２）…… 69
＜赤前Ⅴ柳沢遺跡＞
第44図　Ａ区遺構配置図 …… 75
第45図　Ｄ区遺構配置図 …… 76
第46図　Ｂ区全体図、土層断面図 …… 77
第47図　Ｃ区全体図、土層断面図（１）…… 78
第48図　Ｃ区全体図、土層断面図（２）…… 79
第49図　Ｄ－１号竪穴住居跡 …… 81
第50図　Ｄ－１号竪穴住居跡カマド …… 83
第51図　Ｄ－１号竪穴住居跡出土遺物 …… 84
第52図　Ａ－１号竪穴住居跡 …… 86
第53図　Ａ－１号竪穴住居跡カマド …… 87
第54図　Ａ－１号竪穴住居跡出土遺物（１）…… 88
第55図　Ａ－１号竪穴住居跡出土遺物（２）…… 89
第56図　Ａ－１号竪穴住居跡出土遺物（３）…… 90
第57図　Ａ－２号竪穴住居跡 …… 91
第58図　Ａ－２号竪穴住居跡出土遺物 …… 92
第59図　Ａ－９号炉跡と焼骨の分布 …… 93
第60図　Ａ－９号炉跡 …… 93
第61図　Ａ－３号、Ａ－４号土坑跡 …… 94
第62図　Ａ－３号土坑内炉跡 …… 95
第63図　Ａ－３号土坑跡出土遺物 …… 96
第64図　Ａ－５号溝跡、Ａ－６号焼土遺構、Ａ－７号炉跡 …… 97
第65図　Ａ－８号土坑跡 …… 98
第66図　Ａ区遺構外出土遺物 …… 100
第67図　Ｄ区遺構外出土遺物 …… 100
＜赤前Ⅳ八枚田遺跡＞
第68図　Ａ区遺構配置図 …… 106
第69図　Ａ区、Ｂ１区土層断面図 …… 107
第70図　Ｂ２～Ｂ４区遺構配置図 …… 108

第71図　Ｂ２～Ｂ４区土層断面図 ……109
第72図　Ｃ区全体図 ……111
第73図　Ｂ－４号竪穴住居跡 ……114
第74図　Ｂ－４号竪穴住居跡カマド ……115
第75図　Ｂ－４号竪穴住居跡出土遺物 ……115
第76図　Ｂ－５号竪穴住居跡 ……116
第77図　Ｂ－５号竪穴住居炉跡 ……116
第78図　Ｂ－５号竪穴住居跡出土遺物 ……117
第79図　Ｂ－15号竪穴住居跡 ……119
第80図　Ｂ－15号竪穴住居炉跡 ……120
第81図　Ｂ－15号竪穴住居跡出土遺物 ……121
第82図　Ｂ－３号竪穴住居跡 ……123
第83図　Ｂ－３号竪穴住居炉跡 ……123
第84図　Ｂ－３号竪穴住居跡出土遺物 ……124
第85図　Ｂ－７号、Ｂ－８号土坑跡 ……125
第86図　Ｂ－７号、Ｂ－８号土坑跡出土遺物 ……126
第87図　Ｂ－14号竪穴住居跡、Ｂ－19号土坑跡……128
第88図　Ｂ－14号竪穴住居跡カマド ……129
第89図　Ｂ－14号竪穴住居跡出土遺物（１）……130
第90図　Ｂ－14号竪穴住居跡出土遺物（２）……131
第91図　Ａ－８号竪穴住居跡 ……133
第92図　Ａ－８号竪穴住居跡焼土遺構Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ ……134
第93図　Ａ－８号竪穴住居跡出土遺物 ……135
第94図　Ａ－１号竪穴住居跡 ……137
第95図　Ａ－１号竪穴住居跡カマド ……138
第96図　Ａ－１号竪穴住居鍛冶炉跡 ……139
第97図　Ａ－１号竪穴住居跡出土遺物（１）……140
第98図　Ａ－１号竪穴住居跡出土遺物（２）……141
第99図　Ａ－２号竪穴住居跡 ……143
第100図　Ａ－２号竪穴住居跡出土遺物 ……144
第101図　Ａ－３号竪穴住居跡 ……145
第102図　Ａ－３号竪穴住居跡焼土遺構Ⅰ ……146
第103図　Ａ－３号竪穴住居跡出土遺物 ……146
第104図　Ａ－４号竪穴住居跡 ……148
第105図　Ａ－４号竪穴住居跡鍛冶炉跡 ……149
第106図　Ａ－４号竪穴住居跡出土遺物 ……149
第107図　Ａ－５号焼土遺構 ……151
第108図　Ａ－５号焼土遺構Ⅰ、Ⅱ ……152

第109図　Ａ－５号焼土遺構出土遺物 ……153
第110図　Ａ－６号製鉄遺構（１） ……154
第111図　Ａ－６号製鉄遺構（２） ……155
第112図　Ａ－６号製鉄遺構鍛冶炉跡、焼土遺構Ⅰ、Ⅱ ……156
第113図　Ａ－６号製鉄遺構焼土遺構Ⅲ ……157
第114図　Ａ－６号製鉄遺構出土遺物（１） ……158
第115図　Ａ－６号製鉄遺構出土遺物（２） ……159
第116図　Ａ－６号製鉄遺構出土遺物（３） ……160
第117図　Ａ－７号竪穴住居跡 ……163
第118図　Ａ－７号竪穴住居跡カマド ……164
第119図　Ａ－７号竪穴住居跡出土遺物 ……165
第120図　Ｂ－１号、Ｂ－２号竪穴住居跡 ……166
第121図　Ｂ－１号、Ｂ－２号竪穴住居跡出土遺物 ……167
第122図　Ｂ－11号製鉄遺構 ……168
第123図　Ｂ－11号製鉄炉跡、焼土遺構Ⅰ ……169
第124図　Ｂ－12号竪穴住居跡 ……171
第125図　Ｂ－12号竪穴住居跡カマド ……172
第126図　Ｂ－11号製鉄遺構、Ｂ－12号竪穴住居跡出土遺物（１） ……173
第127図　Ｂ－11号製鉄遺構、Ｂ－12号竪穴住居跡出土遺物（２） ……174
第128図　Ｂ－11号製鉄遺構、Ｂ－12号竪穴住居跡出土遺物（３） ……175
第129図　Ｂ－13号竪穴住居跡 ……177
第130図　Ｂ－13号竪穴住居跡出土遺物（１） ……178
第131図　Ｂ－13号竪穴住居跡出土遺物（２） ……178
第132図　Ａ１区土坑、溝跡 ……179
第133図　Ａ１区土坑、溝跡出土遺物 ……180
第134図　Ａ－20号、Ａ－21号土坑跡 ……181
第135図　Ａ－20号、Ａ－21号土坑跡出土遺物 ……182
第136図　Ａ－53号、Ａ－54号、Ａ－58号土坑跡、Ａ－55号焼土遺構 ……183
第137図　Ａ－53号、Ａ－58号土坑跡出土遺物 ……184
第138図　Ａ－56号土坑跡 ……185
第139図　Ａ－56号土坑跡出土遺物 ……185
第140図　Ｂ－６号土坑跡 ……186
第141図　Ｂ－16号土坑跡 ……187
第142図　Ｂ－16号土坑跡出土遺物 ……187
第143図　Ｂ－17号土坑跡 ……188
第144図　Ａ区掘立柱建物跡 ……189
第145図　Ａ区中央部土坑群出土遺物 ……191
第146図　Ａ－９号溝跡 ……193

第147図　Ａ－９号溝跡出土遺物 ……194
第148図　Ａ－10号溝跡 ……195
第149図　Ａ－11号、Ａ－12号溝跡 ……196
第150図　Ａ－57号溝跡 ……197
第151図　Ａ区溝跡出土遺物（１） ……198
第152図　Ａ区溝跡出土遺物（２） ……198
第153図　Ａ区溝跡出土遺物（３） ……199
第154図　Ｂ－18号溝跡 ……201
第155図　Ｂ－18号溝跡出土遺物 ……201
第156図　Ｂ－９号道状遺構 ……202
第157図　Ｂ－９号道状遺構出土遺物 ……202
第158図　Ａ区遺構外出土遺物（１） ……204
第159図　Ａ区遺構外出土遺物（２） ……205
第160図　Ａ区遺構外出土遺物（３） ……206
第161図　Ｂ区遺構外出土遺物（１） ……207
第162図　Ｂ区遺構外出土遺物（２） ……208
第163図　Ｂ区遺構外出土遺物（３） ……209
第164図　Ｂ区、Ｃ区遺構外出土遺物（４） ……211
第165図　Ｂ区遺構外出土遺物（５） ……212
第166図　Ｂ区遺構外出土遺物（６） ……213
第167図　Ｂ区遺構外出土遺物（７） ……215

＜赤前Ⅲ遺跡＞

第168図　Ａ区全体図、土層断面図 ……225
第169図　Ｂ区遺構配置図・土層断面図 ……227
第170図　Ｃ区遺構配置図・土層断面図 ……229
第171図　Ｄ区全体図・土層断面図 ……230
第172図　Ｂ－４号竪穴住居跡・Ｂ－５号、Ｂ－10号土坑跡 ……232
第173図　Ｂ－４号竪穴住居跡出土遺物 ……233
第174図　Ｂ－５号土坑跡出土遺物 ……234
第175図　Ｃ－１号陥穴状土坑跡 ……235
第176図　Ｂ－１号竪穴住居跡 ……238
第177図　Ｂ－１号竪穴住居跡カマドⅠ、Ⅱ ……239
第178図　Ｂ－１号竪穴住居跡出土遺物（１） ……240
第179図　Ｂ－１号竪穴住居跡出土遺物（２） ……241
第180図　Ｂ－１号竪穴住居跡出土遺物（３） ……242
第181図　Ｂ－２号竪穴住居跡 ……245
第182図　Ｂ－２号竪穴住居跡カマド・鍛冶炉跡 ……246
第183図　Ｂ－２号竪穴住居跡出土遺物（１） ……247

第184図　Ｂ－２号竪穴住居跡出土遺物（２）……248
第185図　Ｂ－３号製鉄遺構と周辺の土坑跡……251
第186図　Ｂ－３号製鉄炉・焼土遺構Ⅰ……252
第187図　Ｂ－３号製鉄遺構出土遺物（１）……253
第188図　Ｂ－３号製鉄遺構、周辺の土坑跡出土遺物（２）……254
第189図　Ｄ区道状遺構……256
第190図　Ｄ区道状遺構出土遺物……256
第191図　Ｂ区東部土坑跡……257
第192図　Ａ区遺物包含層出土遺物（１）……259
第193図　Ａ区遺物包含層出土遺物（２）……260
第194図　Ａ区遺物包含層出土遺物（３）……261
第195図　Ａ区遺物包含層出土遺物（４）……262
第196図　Ａ区遺物包含層出土遺物（５）……263
第197図　Ａ区遺物包含層出土遺物（６）……264
第198図　Ｂ区遺物包含層出土遺物……266
第199図　Ｃ区遺物包含層出土遺物……267
第200図　Ｄ区遺物包含層出土遺物……267

# 挿　図　目　次

挿図１　Ａ区建物跡……188
挿図２　古代の土器集成（１）……273
挿図３　古代の土器集成（２）……274
挿図４　古代の土器集成（３）……275
挿図５　古代の土器集成（４）……276

# 写真図版目次

**遺構写真**

**＜小堀内Ⅲ遺跡＞**


写真図版１　小堀内Ⅲ遺跡調査区全景・旧道の石碑 ……283
写真図版２　Ｂ－１号住居跡 ……284
写真図版３　Ｄ－１号住居跡 ……285
写真図版４　Ｄ－２号住居跡 ……286
写真図版５　Ｅ－１号製鉄遺構 ……287
写真図版６　Ｅ－２号住居跡・Ｅ－３号土坑跡 ……288
写真図版７　Ｄ－３号住居跡・土坑跡・溝跡 ……289


**＜赤前Ⅵ釜屋ケ沢遺跡＞**


写真図版８　赤前Ⅵ釜屋ケ沢遺跡全景 ……290


**＜赤前Ⅴ柳沢遺跡＞**


写真図版９　赤前Ⅴ柳沢遺跡調査区全景 ……291
写真図版10　Ｄ－１号住居跡・Ｄ区全景・Ｄ区土層堆積状況 ……292
写真図版11　Ａ－１号住居跡 ……293
写真図版12　Ａ－２号住居跡・Ａ－３号土坑跡 ……294
写真図版13　Ａ－３号土坑跡・Ａ－５号溝跡・Ａ－６号土坑跡 ……295


**＜赤前Ⅳ八枚田遺跡＞**


写真図版14　Ｂ－４号住居跡 ……296
写真図版15　Ｂ－５号、Ｂ－３号、Ｂ－14号住居跡 ……297
写真図版16　Ｂ－15号住居跡 ……298
写真図版17　Ａ－８号、Ａ－２号住居跡 ……299
写真図版18　Ａ－２号住居跡・Ａ－20号土坑跡 ……300
写真図版19　Ａ－３号、Ａ－４号住居跡・Ａ－５号焼土遺構 ……301
写真図版20　Ａ－６号製鉄遺構 ……302
写真図版21　Ａ－７号、Ｂ－１号、Ｂ－２号住居跡 ……303
写真図版22　Ｂ－11号製鉄遺構・Ｂ－12号住居跡 ……304
写真図版23　Ｂ－11号製鉄炉跡 ……305
写真図版24　Ｂ区遺構の配置・Ｂ－13号住居跡・Ｂ－17号土坑跡 ……306
写真図版25　Ａ区土坑跡 ……307
写真図版26　Ｂ１区坑跡・Ｂ－９号道状遺構 ……308
写真図版27　Ａ－９号溝跡 ……309
写真図版28　Ａ－57号溝跡・Ａ区中央部全景 ……310


**＜赤前Ⅲ遺跡＞**


写真図版29　Ａ区全景 ……311
写真図版30　Ｂ区遠景・Ｂ区遺構検出状況 ……312

写真図版31　Ｂ－４号住居跡・Ｂ－５号、Ｂ－６号土坑跡 ……313
写真図版32　Ｂ－１号住居跡 ……314
写真図版33　Ｂ－２号住居跡 ……315
写真図版34　Ｂ－２号製鉄遺構 ……316
写真図版35　Ｂ区東部土坑跡・遺跡見学会 ……317
写真図版36　Ｃ区全景・Ｃ－１号土坑跡 ……318
写真図版37　Ｄ区全景・Ｄ－１号道状遺構 ……319
**遺物写真**
**＜小堀内Ⅲ遺跡＞**
写真図版38　Ｂ－１号、Ｄ－２号住居跡出土遺物 ……320
写真図版39　Ｅ－１号製鉄遺構、Ｅ－２号、Ｄ－１号住居跡出土遺物 ……321
写真図版40　Ｄ－１号住居跡出土遺物 ……322
**＜赤前Ⅴ柳沢遺跡＞**
写真図版41　Ａ－１、Ａ－２号住居跡出土遺物 ……323
**＜赤前Ⅳ八枚田遺跡＞**
写真図版41　Ａ－３号、Ｂ－12号住居跡出土遺物 ……323
写真図版42　Ｂ－８号、Ｂ－14号、Ｂ－15号住居跡出土遺物・Ｂ区遺構外出土遺物……324
**＜赤前Ⅲ遺跡＞**
写真図版43　Ｂ－１号、Ｂ－２号住居跡・Ｂ－３号製鉄炉出土遺物 ……325
写真図版44　Ａ区包含層・Ｂ－４号住居跡・Ｂ－５号土坑跡・Ｃ区出土遺物 ……326

# 付　表　目　次

第１表　小堀内Ⅲ遺跡出土鉄滓集計表 …… 60
第２表　赤前Ⅳ八枚田遺跡Ｂ－６号土坑跡出土動物遺存体（貝類）集計表 ……186
第３表　赤前Ⅳ八枚田遺跡出土鉄滓集計表 ……216
第４表　赤前Ⅲ遺跡出土鉄滓集計表 ……268

# Ⅰ　調査経過

## 1．調査に至る経過

平成４年に宮古市水産課の津軽石環境整備事業にさきだって教育委員会との協議が行われ、その際に道路建設工事予定区域が遺跡の包蔵地にあたることが判明した。その後の協議で各年度の工事予定区域を年度の前半に発掘調査を行うという取決めがなされた。調査は平成５年度から実施され、平成10年度に完了した。

## 2．調査要旨

**平成５年度**

| | |
|---|---|
| 調査地点 | 小堀内Ⅲ遺跡　　宮古市大字赤前第14地割字小堀内13ほか |
| | 赤前Ⅵ釜屋ケ沢遺跡　宮古市大字赤前第13地割字釜屋ケ沢24－1ほか |
| 調査期間 | 野外調査　平成５年８月２日～平成５年11月19日 |
| | 室内整理　平成５年11月22日～平成６年３月31日 |
| 調査面積 | 小堀内Ⅲ遺跡　　560㎡ |
| | 赤前Ⅵ釜屋ケ沢遺跡　1020㎡ |
| 検出遺構・遺物 | 遺物包含層（縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器など） |

**平成６年度**

| | |
|---|---|
| 調査地点 | 小堀内Ⅲ遺跡　宮古市大字赤前第14地割字小堀内13ほか |
| | 赤前Ⅴ柳沢遺跡　宮古市大字赤前第12地割27－1ほか |
| 調査期間 | 野外調査　平成６年10月５日～平成６年12月26日 |
| | 室内整理　平成６年12月25日～平成７年３月30日 |
| 調査面積 | 小堀内Ⅲ遺跡　　1950㎡ |
| | 赤前Ⅴ柳沢遺跡　1200㎡ |
| 検出遺構 | 小堀内Ⅲ遺跡　竪穴住居跡　５、製鉄炉跡　１、鍛冶炉跡　２、土坑跡　５ |
| | 赤前Ⅴ柳沢遺跡　遺物包含層 |
| 遺　　物 | 土師器、須恵器、鉄製品（紡錘車、刀子など）、土製品（紡錘車、羽口）、鉄滓 |

**平成７年度**

| | |
|---|---|
| 調査地点 | 赤前Ⅴ柳沢遺跡　　宮古市大字赤前第12地割字柳沢27－1ほか |
| | 赤前Ⅳ八枚田遺跡　宮古市大字赤前第11地割字八枚田40－2ほか |
| 調査期間 | 野外調査　平成７年６月９日～平成７年12月26日 |
| | 室内整理　平成８年１月８日～平成８年３月29日 |
| 調査面積 | 赤前Ⅴ柳沢遺跡　608㎡ |
| | 赤前Ⅳ八枚田遺跡　1980㎡ |
| 検出遺構 | 赤前Ⅴ柳沢遺跡　竪穴住居跡　２、土坑跡　４、焼土遺構　３、溝跡　１ |
| | 赤前Ⅳ八枚田遺跡　竪穴住居跡（縄文時代　１、弥生時代　２、奈良時代　２、平安時代　７）、掘立柱建物跡　１、製鉄遺構　２、鍛冶炉　３、土坑跡　46、溝跡　６、道状遺構　１ |

遺　　物　縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、砥石、土製品（羽口）、鉄製品（刀子、小刀など）、鉄滓

**平成８年度**

室内整理　平成８年６月３日～平成９年３月31日

**平成９年度**

調査地点　赤前Ⅲ遺跡　宮古市大字赤前第11地割字八枚田92番地ほか

調査期間　野外調査　平成９年６月５日～平成９年８月22日

室内整理　平成９年８月25日～平成10年３月31日

調査面積　930㎡

検出遺構　竪穴住居跡　３（縄文時代　１、平安時代　２）、製鉄炉跡　１、鍛冶炉跡　１、土坑跡　13、陥穴状遺構　１、道状遺構　１

遺物包含層（縄文時代前期を主体とする）

遺　　物　縄文土器、石器、弥生土器、土師器、須恵器、鉄製品（刀子、鉄鏃など）、土製品（フイゴの羽口）、鉄滓など

**平成10年度**

室内整理　平成10年４月16日～平成11年３月30日

## ３．調査体制

調査委託者　宮古市水産課

調査主体　佐藤　勇逸　宮古市教育委員会教育長（平成９年４月まで）

中屋　定基　〃　（平成９年４月～　）

調査総括　岩田　善弘　宮古市教育委員会社会教育課課長（平成５年度）

浦野　光廣　〃　（平成６年度～平成９年度）

中洞　惣一　〃　（平成10年度～　）

事務担当　瀬川　康平　宮古市教育委員会社会教育課課長補佐（平成10年度）

田鎖　春雄　〃　社会教育課係長（平成６年度～平成９年度）

野崎　政博　〃　社会教育主事

坂下　昇　〃　社会教育主事補～庶務主査

調 査 員　竹下　将男　宮古市教育委員会社会教育課主任

高橋　憲太郎　〃

鎌田　祐二　〃

橋本　晃一　〃　主事（平成７年度まで）

三浦　千秋　〃　主事（平成８年９月まで）

加納　由美　〃　主事（平成９年）

阿部　豊　〃　埋蔵文化財調査員（非常勤、主担当）

工藤　剛司　〃　埋蔵文化財調査員（非常勤）

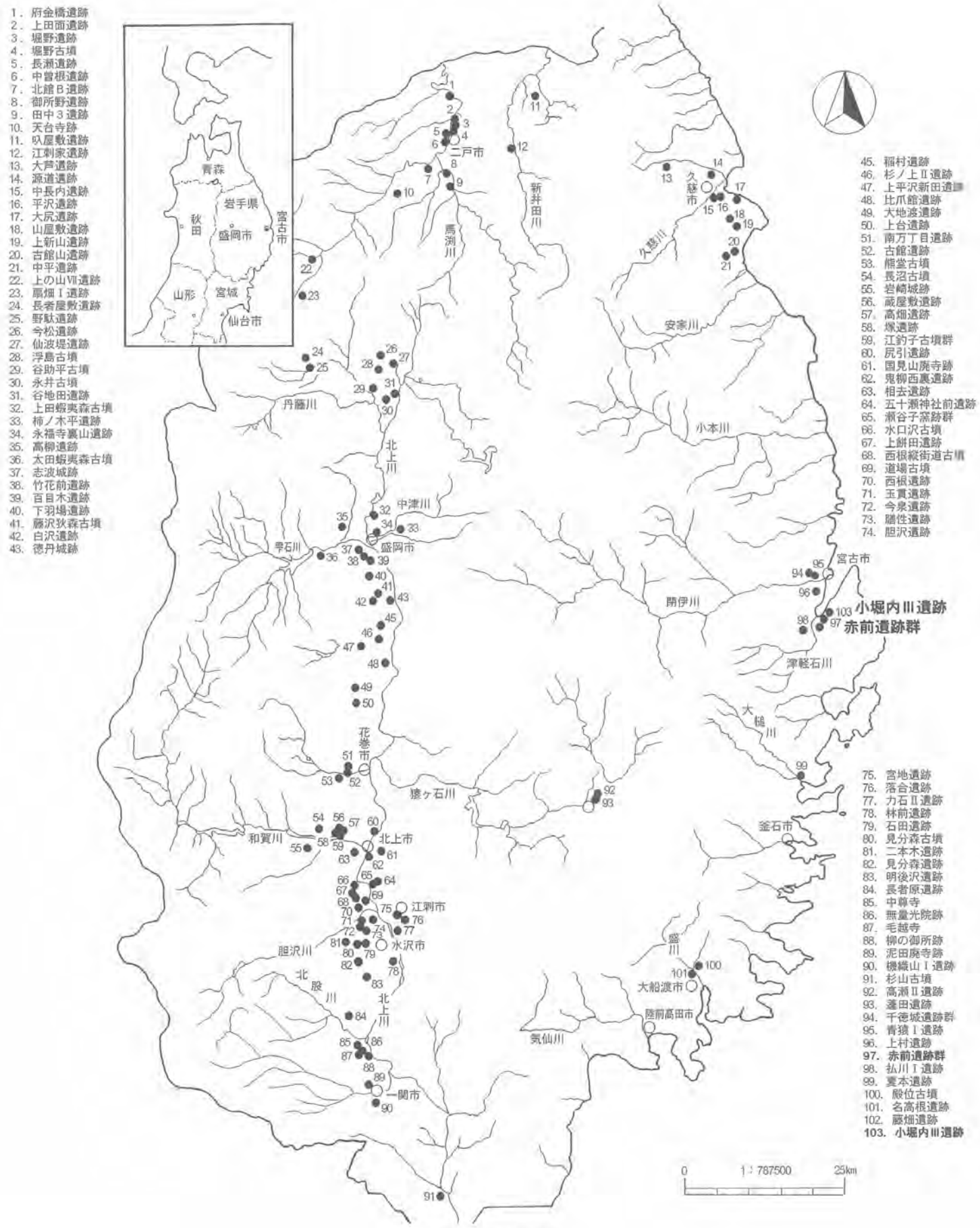
調査の実施にあたり次ぎの各位から多大の御協力を頂いた。記して感謝もうしあげます（敬称略）。

＜野外調査＞

吉田 弘子、木村 文子、佐々木 砂織、鈴木 いそ子、佐々木 力、盛合 幹一郎、山根 一郎、坂下 節朗、北村 嘉健、在原 正利、松原 和憲、摂待 太一、小縄 史郎、山内 専太郎、中屋 東一、水本 正男、菅野 琢司、古舘 友三、今津 東一、佐々木 健、中居 磯雄、佐伯 裕則、中嶋 正裕、松尾 喜一郎、平野 孝盛、柳沢 秀平、三浦 貞行、佐々木 紀行、前川 友宏、北田 政江、中野 恵子、佐々木 貞子、中野 京子、信夫 幸子、斎藤 敏昭、富塚 保也、中村 京平、小島 忠男、藤井 洋一、君沢 和三郎、松尾 石五郎、菊池 清八、小成 裕信、堀内 良子、盛崎 次男、佐野 利男、島田 義道、斉藤 貞子、菅原 テルミ、藤谷 晶子、刈屋 昭三、永田 美弥子、久保田 チエ、舘下 久雄

＜資料整理＞

中村 明子、斉藤 貞子、堀内 良子、吉田 純子、志賀 規子、安中 直美、古舘 悦子、久保田 加代子、遠藤 千紘、工藤 純子、阿部 希葉、斎藤 京子、佐々木 厚子、長洞 妙子、佐々木 純子

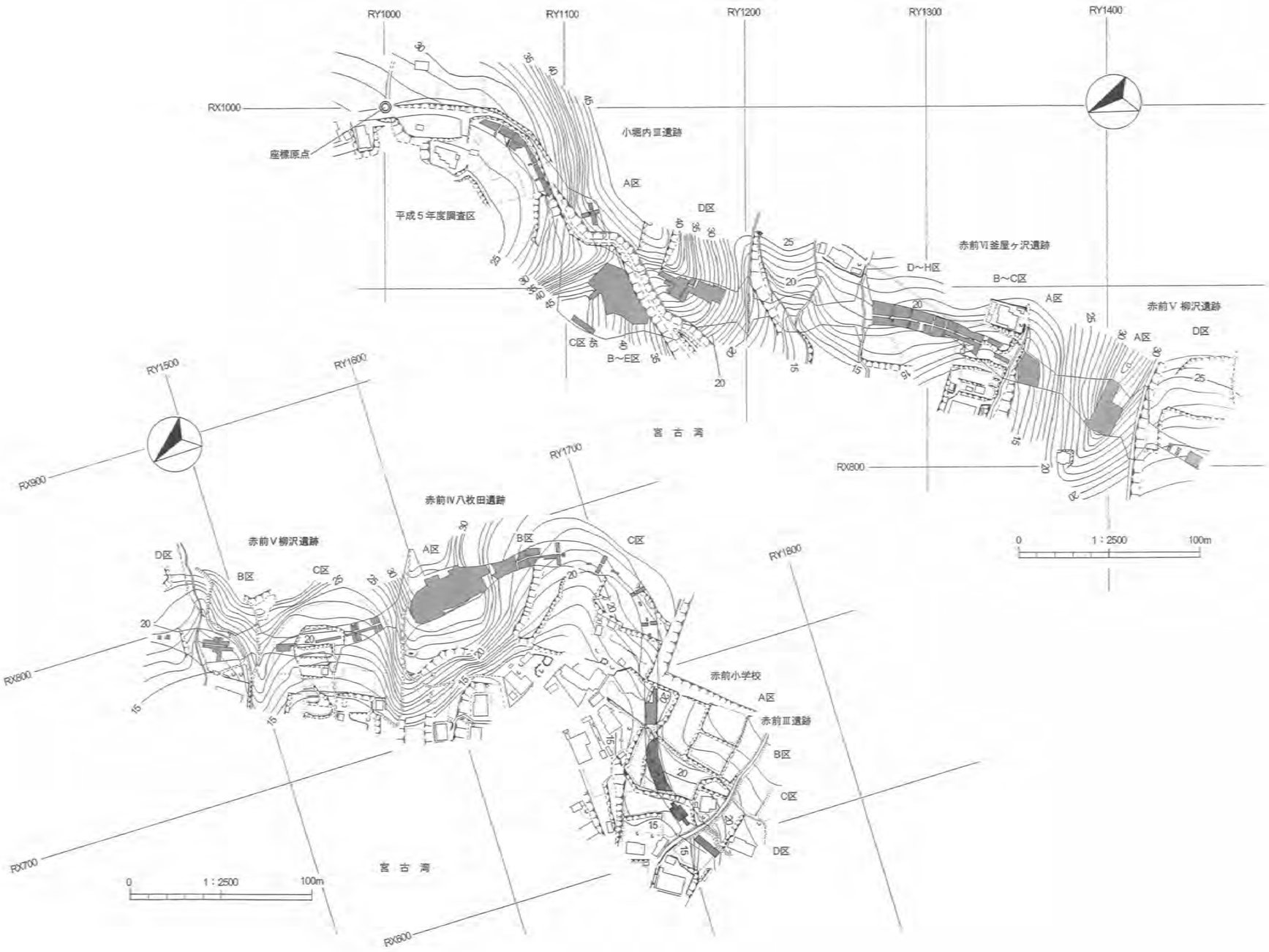

1．府金橋遺跡
2．上田面遺跡
3．堀野遺跡
4．堀野古墳
5．長瀬遺跡
6．中曽根遺跡
7．北館Ｂ遺跡
8．御所野遺跡
9．田中３遺跡
10．天台寺跡
11．叺屋敷遺跡
12．江刺家遺跡
13．大芦遺跡
14．源道遺跡
15．中長内遺跡
16．平沢遺跡
17．大尻遺跡
18．山屋敷遺跡
19．上新山遺跡
20．古館山遺跡
21．中平遺跡
22．上の山Ⅶ遺跡
23．扇畑Ⅰ遺跡
24．長者屋敷遺跡
25．野駄遺跡
26．今松遺跡
27．仙波堤遺跡
28．浮島古墳
29．谷助平古墳
30．永井古墳
31．谷地田遺跡
32．上田蝦夷森古墳
33．柿ノ木平遺跡
34．永福寺裏山遺跡
35．高柳遺跡
36．太田蝦夷森古墳
37．志波城跡
38．竹花前遺跡
39．百目木遺跡
40．下羽場遺跡
41．藤沢狄森古墳
42．白沢遺跡
43．徳丹城跡
45．稲村遺跡
46．杉ノ上Ⅱ遺跡
47．上平沢新田遺跡
48．比爪館遺跡
49．大地波遺跡
50．上台遺跡
51．南万丁目遺跡
52．古館遺跡
53．熊堂古墳
54．長沼古墳
55．岩崎城跡
56．蔵屋敷遺跡
57．高畑遺跡
58．塚遺跡
59．江釣子古墳群
60．尻引遺跡
61．国見山廃寺跡
62．鬼柳西裏遺跡
63．相去遺跡
64．五十瀬神社前遺跡
65．瀬谷子窯跡群
66．水口沢古墳
67．上餅田遺跡
68．西根縦街道古墳
69．道場古墳
70．西根遺跡
71．玉貫遺跡
72．今泉遺跡
73．膳性遺跡
74．胆沢遺跡
75．宮地遺跡
76．落合遺跡
77．力石Ⅱ遺跡
78．林前遺跡
79．石田遺跡
80．見分森古墳
81．二本木遺跡
82．見分森遺跡
83．明後沢遺跡
84．長者原遺跡
85．中尊寺
86．無量光院跡
87．毛越寺
88．柳の御所跡
89．泥田廃寺跡
90．機織山Ⅰ遺跡
91．杉山古墳
92．高瀬Ⅱ遺跡
93．蓬田遺跡
94．千徳城遺跡群
95．青猿Ⅰ遺跡
96．上村遺跡
97．赤前遺跡群
98．払川Ⅰ遺跡
99．妻本遺跡
100．殿位古墳
101．名高根遺跡
102．藤畑遺跡
103．小堀内Ⅲ遺跡
小堀内Ⅲ遺跡
赤前遺跡群
青森
岩手県
秋田
盛岡市
宮古市
山形
宮城
仙台市
二戸市
久慈市
盛岡市
宮古市
北上市
江刺市
水沢市
一関市
釜石市
大船渡市
陸前高田市
新井田川
馬渕川
久慈川
安家川
小本川
丹藤川
北上川
中津川
雫石川
閉伊川
津軽石川
大槌川
花巻市
猿ヶ石川
和賀川
胆沢川
北股川
盛川
気仙川
0
1：767500
25km

第１図　位置図

宮古湾
小堤内Ⅱ遺跡
赤前Ⅵ釜屋ヶ沢遺跡
赤前Ⅴ柳沢遺跡
赤前Ⅳ八枚田遺跡
赤前Ⅲ遺跡
M1 大起伏山地
Mm 中起伏山地
Ms 小起伏山地
Pd 山麓地及び他の緩斜面
H1 丘陵地Ⅰ
GtⅠ 砂礫段丘Ⅰ
GtⅡ 砂礫段丘Ⅱ
GtⅢ 砂礫段丘Ⅲ
F 扇状地
Ft 崖錐性扇状地
P 谷底平野及び氾濫平野
Gp 海岸平野及び三角州
N1 自然堤防
Fr 旧河道
Sb Dr 浜及び川原
Rb 磯
Dt 裸出砂丘、砂嘴、砂州
C 人工改変地
崖

第２図　地形図

第３図　周辺の遺跡分布図




第４図　遺跡の配置と周辺の地形

# II　遺跡の立地

## a．宮古市の立地

宮古市は三陸海岸のほぼ中央に位置する。本州の最東端にあたる重茂半島は北東にむかって太平洋に突出し、その西側に宮古湾が形成される。宮古湾には東から閉伊川、南から津軽石川の２つの大きな川が流れ込む。市の大部分は丘陵と山地で占められ、平地は湾岸と両河川の流域に分布し、現在の市街地はその平坦地に築かれている。

宮古市の縁辺部を形成する丘陵、山地は北上山地の東端にあたる。丘陵地は北から小本丘陵、千徳丘陵、八木沢丘陵、豊間根丘陵と連なり、その背後に黒森山地、花輪山地が控えている。山地は内陸にいくほど高くなり、市内では西端の亀ケ森で1112.4m、峠の神山で1229.7mあたりが最も高くなり、さらに西にむかって早地峰山（1914m）を頂点とする。重茂半島は十二神山（731m）を頂点とする山塊に占められ、縁辺部にわずかながら丘陵地を形成している。
宮古市で確認されている400余りの遺跡は、大部分が閉伊川、津軽石川の流域、これらの丘陵地に分布する。

海岸線は宮古市を境として大きく景観を異にしている。北には海岸段丘が発達した隆起性の海岸線が連なり、かなり険しい表情を見せる。南は沈降性の入組んだ海岸であるリアス式海岸が続き、大小の湾を形成し変化に富んだ景色を見せているばかりではなく貝塚の多いことでも知られている。また、海域を見た場合津軽暖流，三陸沖を北上する黒潮暖流、南下する親潮など三海流の影響を受けている。黒潮はアジ、サバ、イワシ、サンマなど沿岸性多獲魚類の母体であり、親潮はシロサケ、マス類、タラ類、カレイ類などの北方寒流系の魚種をもたらしている。さらに海流の影響は海藻類にも及び、温帯性種、亜寒帯性種のほかに、対馬暖流の影響であろう日本海固有の海藻を産出している。

宮古市の気候を「宮古市の自然」を参照しながら見てみたい。そのなかで石塚は、吉良竜夫の温量指数[1]の利用がきわめて有効であるとして、宮古市の温度気候と植生分布を考察している。宮古市の温量指数は179.4°で、吉良の分類によれば宮古市は冷温帯に属する。冷温帯と暖温帯の境界は中間温帯といわれ、その指標であるモミ・イヌブナ林は、内陸部では一ノ関付近、沿岸部では宮城県との境を北限としている。しかしモミをのぞいたイヌブナ林の分布は北にのびて宮古市を北限としていることが観察されており、「宮古市は温度気候的には冷温帯域ではあるが、仙台市付近によく発達する中間温帯のモミ・イヌブナ林地帯の北方への推移帯の北端部という性格をもち、植生分布帯の考察上極めて興味ある位置をしめる」と報告されている。また、寒さの点では、前述した海流の影響を受けて内陸部にくらべてはるかに冬が暖かい。しかしその影響も海岸のごく狭い地域に限られており、内陸にむかって急激な冬の気温の低下がみられる。

本州でもっとも東に張出した位置にある宮古市は、地形的にも気候的にも「境界」にあるというのが大きな特徴の一つである。このことは当地方の文化にさまざまな影響を与えているものと思われる。

1．どのくらいの温度が持続するかという暖かさの総量を示す指数である。月平均気温５℃以上の月を、植物の生育できる期間と考え、その期間について、月平均気温から５度を引いた値を積算して求める（中公新書

「照葉樹林文化」)。

2．吉良は185°～180°を暖温帯の領域としている。

参考・引用文献

石塚和雄ほか　1979「宮古市の自然」宮古市

上山春平編　　1969「照葉樹林文化」中央公論社

## b．遺跡の立地と周辺の遺跡

小堀内Ⅲ遺跡、赤前遺跡群は宮古湾の湾頭東側に位置する。そこからは宮古湾、津軽石川河口を一望のもとに眺めることができる。重茂半島の縁辺部の山麓にあたり、背後の山地から流れ出る小河川により扇状地が形成されており、遺跡群はそれらの尾根と扇状地に立地している。

周辺の遺跡は湾岸部や津軽石川の流域に沿って分布している。津軽石地区ではこれまで6遺跡で調査が行われている。昭和54年の赤前Ⅳ八枚田遺跡、57年の赤前Ⅲ遺跡山麓斜面のでは平安時代の竪穴住居跡、縄文前期の遺物包含層が出土している。また平成8年の同遺跡低地部の調査では縄文中期を主体とした炉跡、土坑跡などが出土している。平成4年に調査された赤前Ⅰ牛子沢遺跡では城館遺跡に関連した陶磁器が出土している。南の藤畑遺跡では平成9年に製鉄炉跡と奈良時代の住居跡が出土した。対岸の沼里遺跡では平成9年に奈良時代と思われる鍛冶炉跡が出土し、南の払川遺跡では平成2年に奈良時代の集落跡が出土している。

当地域には製鉄関連の遺構、遺物が多く出土することは、すでに分布調査の段階で指摘されていたことであるが、これらの周辺の調査や今回の調査であらためて裏付けられたことになる。

**津軽石地区発掘調査一覧**

| 遺　跡　名 | 調査年度 | 調査担当 | 遺構・遺物 | 報告書など |
|---|---|---|---|---|
| 赤前Ⅳ八枚田 | 昭和54年 | 武田　将男 | 平安住居跡、縄文前期遺物包含層 | 「赤前報文84」 |
| 赤前Ⅲ | 昭和57年 | 武田　将男 | 平安住居跡 | 「赤前報文84」 |
| 赤前Ⅰ牛子沢 | 昭和59年 | 武田　将男 | 竪穴、中世陶磁器など | 未報告 |
| 払川Ⅰ | 平成2年 | 朴澤　正耕ほか | 奈良住居跡、建物跡、縄文陥穴 | 「払川報文91」 |
| 赤前Ⅰ牛子沢 | 平成4年 | 鎌田　祐二 | 土坑跡、縄文中期包含層、陶磁器 | 「赤前Ⅰ牛子沢95」 |
| 赤前Ⅲ | 平成8年 | 阿部　　豊 | 縄文中期炉跡、土坑跡 | 未報告 |
| 沼里 | 平成9年 | 阿部　　豊 | 奈良？鍛冶炉跡 | 未報告 |
| 藤畑 | 平成9年 | 工藤　剛司 | 奈良住居跡、鍛冶炉跡 | 「藤畑報文98」 |

# 1. 小堀内Ⅲ遺跡

## １－１．調査概要と基本層序

小堀内Ⅲ遺跡は、宮古市の遺跡コードLG54-0142として登録された遺跡である。

東から延びてくる山地は宮古湾まで張出し、湾の手前で低くなるが、再び盛上がって湾際に小高い山塊を形成する。小堀内Ⅲ遺跡は、その低い部分に位置し、北側の低地と南の尾根状の緩斜面で構成される。最も低い部分は江戸時代に開削され、最近まで旧道としてつかわれていた。峠には「弘化四丁未天龍沢山」（1847年）と刻まれた道祖神が建てられている。旧道は遺跡の中央部を南北に貫いている。

**平成５年度（1993年）調査区**（第５図）

平成５年の調査は、北側の道路工事の起点から始めた。北側の低地部で、前述した旧道の西側の緩斜面である。Ａ～Ｆの小区に分けて地山面まで掘下げる方法で調査を行った。

Ｃ区のあたりが最も高い地点である。Ｅ区付近がもっとも深く、堆積層も厚くなり、Ｆ区にむかって再び浅くなっていく。遺物はⅢ、Ⅳ層から小土器片が数点出土しただけである。磨滅し図化できなかった。

基本層序（第６図）

Ⅰ層　軟らかい黒褐色土で、全域に分布する

Ⅱ層　やや締りのある黒色土で、主に北側に厚く堆積する。

Ⅲ層　軟らかい暗褐色土で、南側斜面に堆積する。

Ⅳａ層　やや締りのある黒褐色土で、南側斜面に堆積する。

Ⅳｂ層　やや締りのある褐色土で、地山への漸移層である。

Ⅴ層　　固い黄褐色土の地山層である。

**平成６年度（1994）年度調査区**

平成６年度は調査区を南側の尾根に移した。旧道を境に東西二つに分け、それぞれを地形に応じてさらに小区に分けて調査を行った。西側は、小山塊の急斜面をＣ区、その下の緩斜面をなす尾根の平坦部をＢ区、Ｂ区から南へ下りた所に形成された平坦地をＥ区とした。東側は、尾根の先端部にあたる平坦地をＡ区とし、Ａ区から南の沢にむかって下っていく緩斜面をＤ区とした。

**Ａ区**（第10図）

堆積層は平坦部では薄く、斜面にかけて厚くなる。遺物は出土していない。

基本層序

Ⅰ層　やや締りのある暗褐色土で、全域に堆積する。

Ⅱ層　軟らかめの黒色土で、斜面に堆積する。

Ⅲ層　やや締りのある褐色土で、地山への漸移層である。

**Ｃ区**（第10図）

堆積層は１層である。遺物は出土していない。

基本層序

Ⅰ層　締りのないにぶい黄褐色土である。

**Ｂ、Ｅ区**（第７図）

Ｂ区は尾根鞍部の平坦面である。南側で竪穴住居跡、北側で土坑跡が出土している。Ｅ区

の平坦部からは、製鉄炉跡、竪穴住居跡、土坑跡などが出土している。

基本層序（第８図）

Ⅰ層　やや締りのある暗褐色土で、全域に堆積するがＢ区の東側とＥ区では重機による伐採の際に撹乱された。

Ⅱ層　締りのある黄褐色土で、Ｂ区南斜面に堆積する。１号住居構築の際の排土とおもわれる。

Ⅲ層　締りのある暗褐色土で、Ｂ区からＥ区にかけての斜面に堆積する。旧表土層とおもわれる。

Ⅳ層　Ｅ区の平坦面に堆積する密で締りのある黒色土層である。炭粒を多く含む。

Ｄ区（第７図）

南向きの緩斜面である。斜面の上位、中位部から竪穴住居跡、溝跡などが出土している。

基本層序（第９図）

堆積層は１層である。

Ⅰ層　締りのある黒褐色土で、全域に堆積する。

Ａ区土層観察表

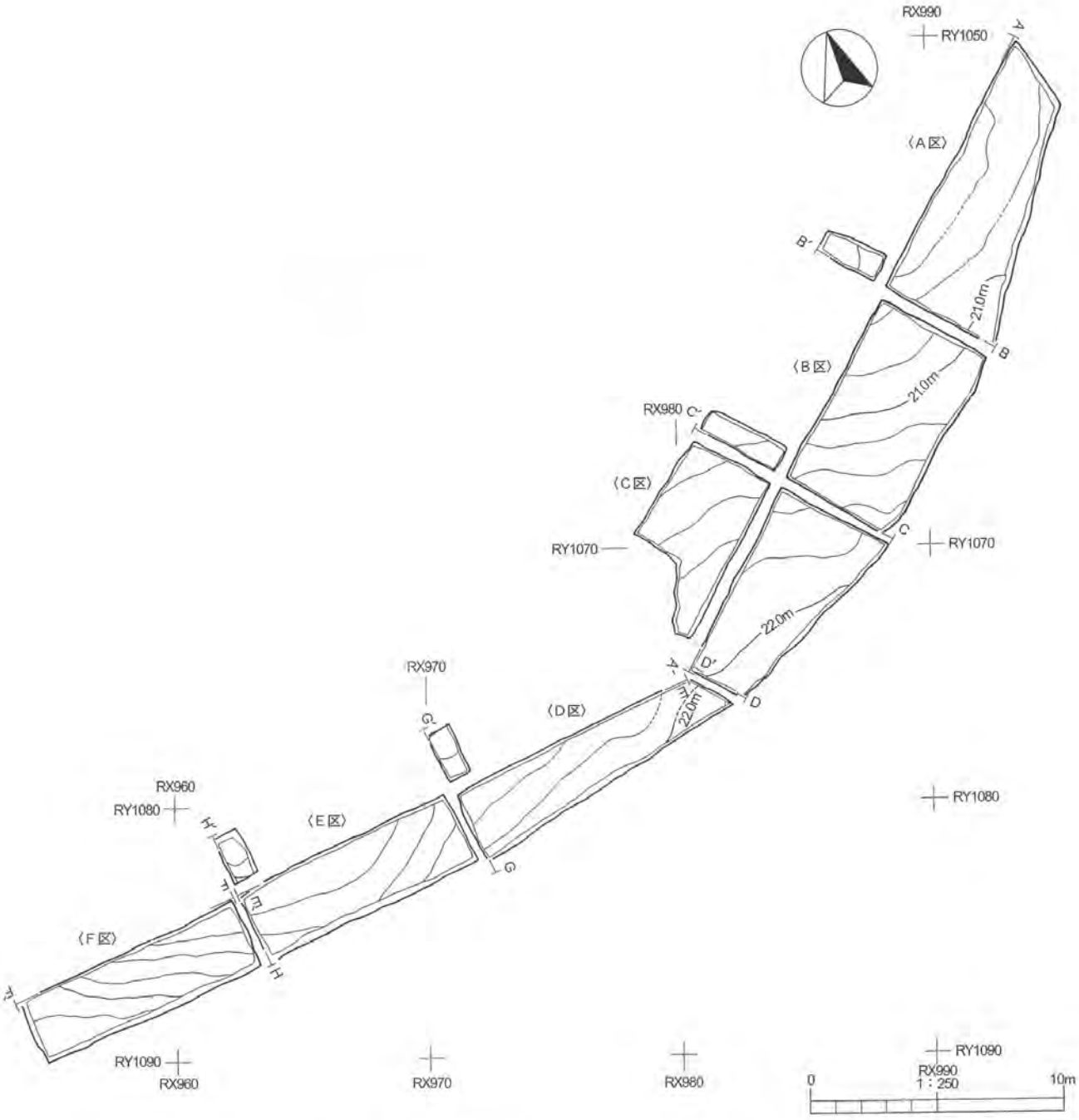
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 10YR2/4 黒褐色　砂壌土 | 10YR3/3 10%　砂壌土 | 中、疎 |
| Ⅱ | 10YR2/1　黒色　砂壌土 | 10YR3/2 10%　砂壌土 | 中～軟、疎 |
| Ⅲ | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR2/3 15%　砂壌土 | 中、中　地山漸移層 |

Ｃ区土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 10YR5/4 にぶい黄褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |

Ｂ，Ｅ区土層観察表

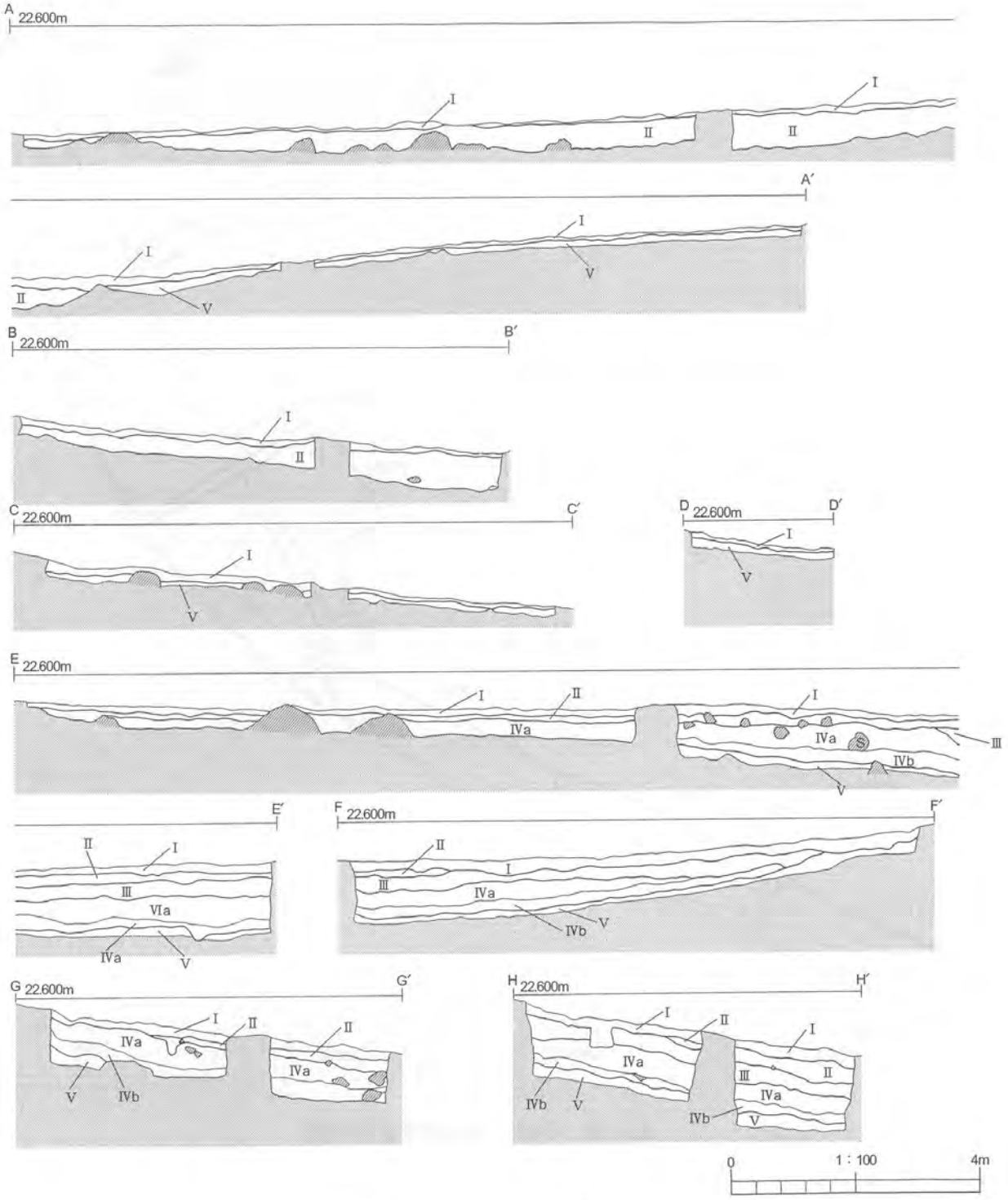
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ（表土） | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土<br>10YR5/4　5%　砂壌土 | |
| Ⅱ | 10YR5/8　黄褐　砂壌土 | 10YR4/6　15%　砂壌土<br>10YR4/4　10%　砂壌土 | 廃棄された土 |
| Ⅲ（旧表土） | 10YR3/3　暗褐　砂壌土 | 10YR3/4　10%　砂壌土 | 土器、焼土、炭 |
| Ⅳ | 10YR2/1　黒　　シルト質埴壌土 | | 中、密　→　炭多 |



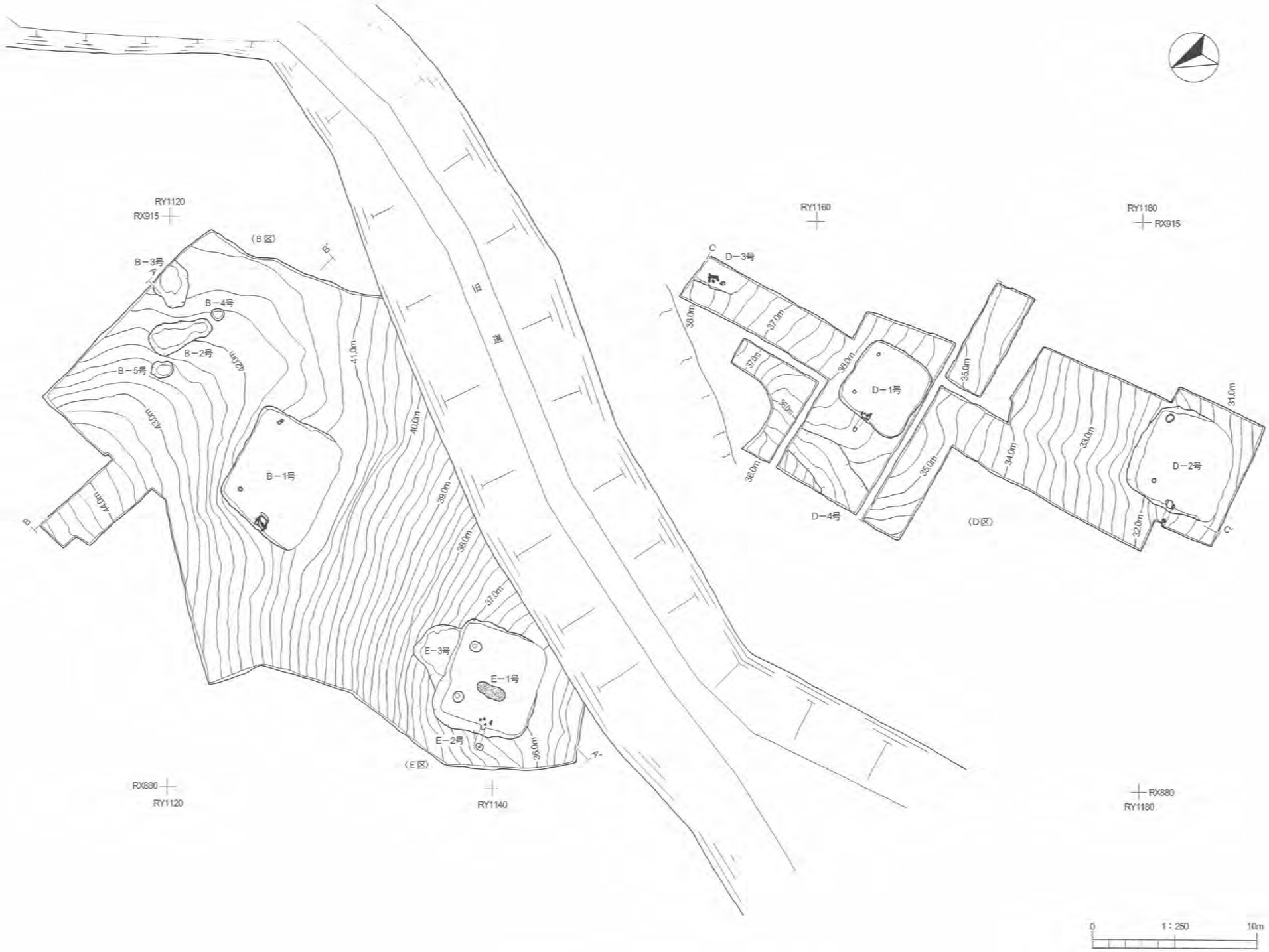

第５図　平成５年度調査区全体図

平成５年度調査区土層観察表

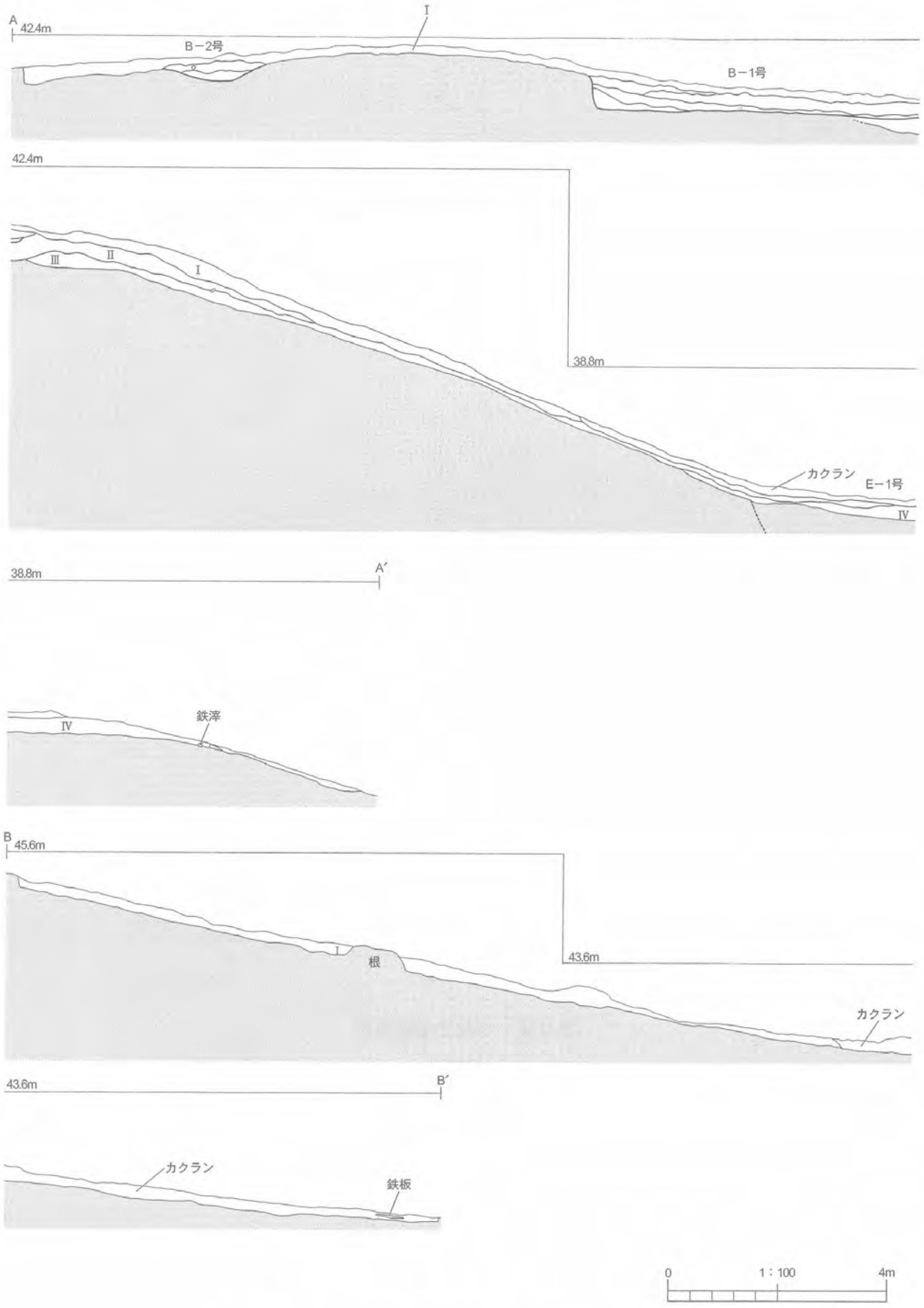
| 層　　名 | 基　本　土 | 土　　性 |
|---|---|---|
| Ⅰ | 10YR3/2　黒褐 | 軟、疎 |
| Ⅱ | 10YR2/1　黒 | 中～軟、中～疎 |
| Ⅲ | 10YR3/4　暗褐 | 中～軟、疎→土器片 |
| Ⅳa | 10YR2/3　黒褐 | 中、中～疎、疎→土器片 |
| Ⅳb | 10YR4/6　褐 | 中～軟、疎→地山への漸移層 |
| Ⅴ | 10YR5/8　黄褐 | 中～固、中→地山 |



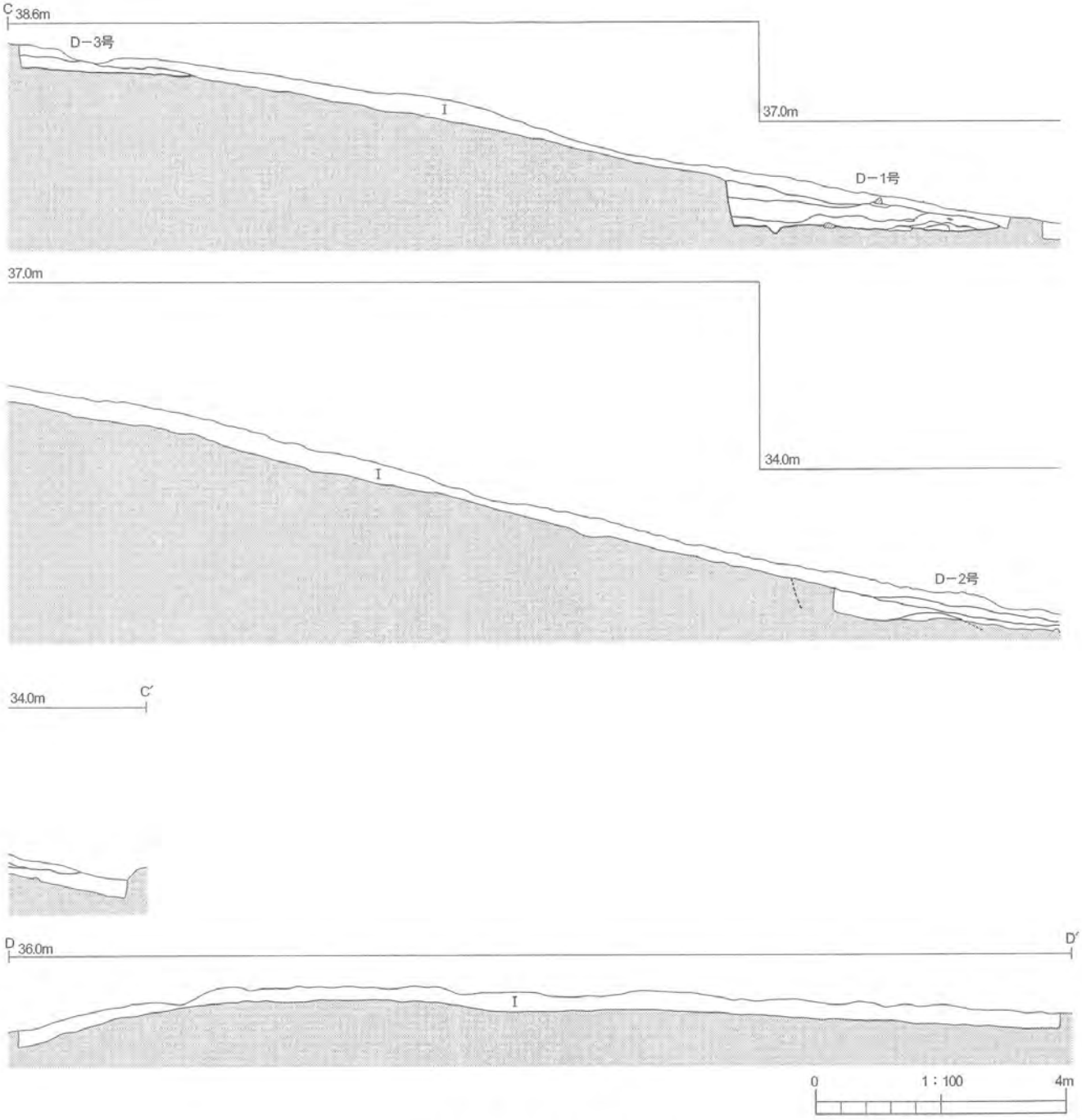

第６図　平成５年度調査区土層断面図




第７図　Ｂ，Ｄ，Ｅ区遺構配置図



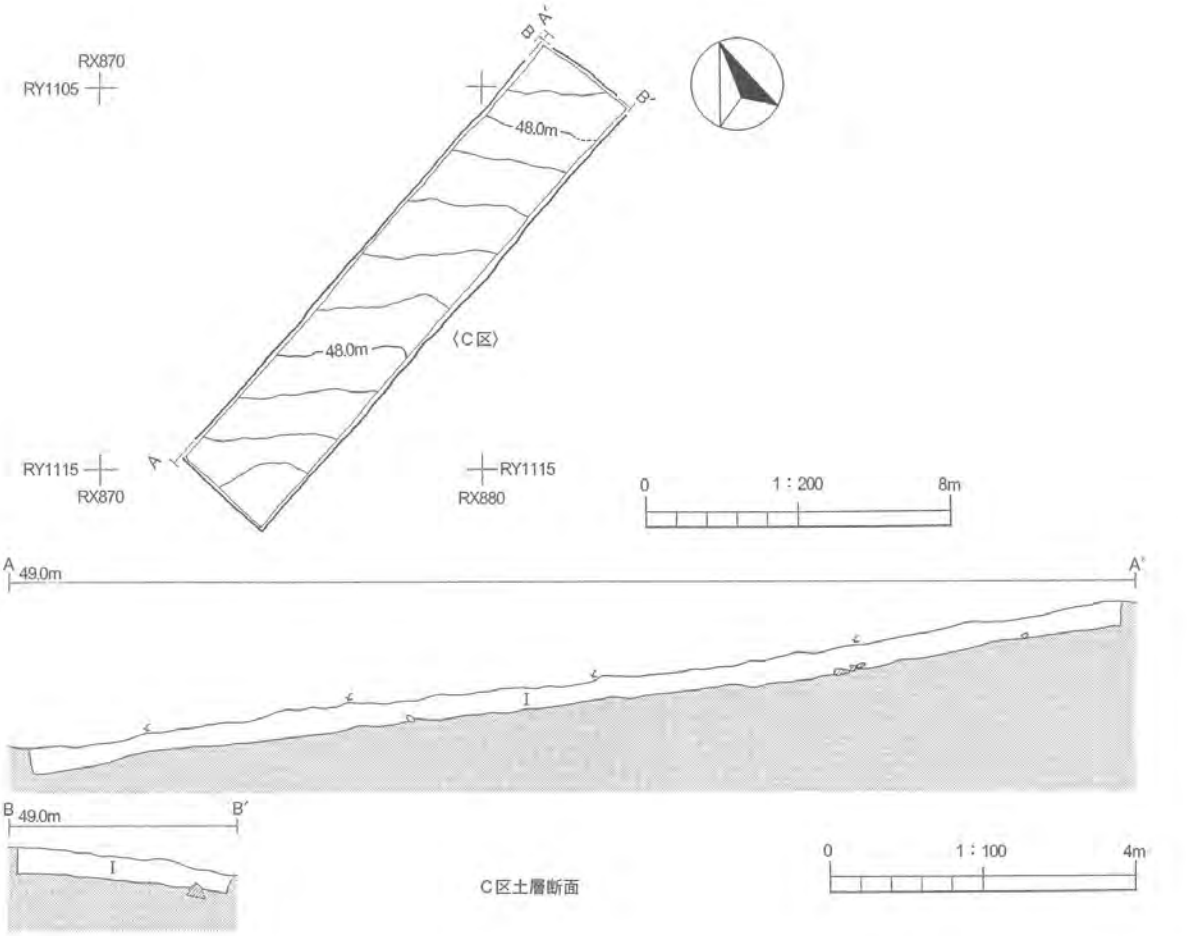

第８図　Ｂ，Ｅ区土層断面図

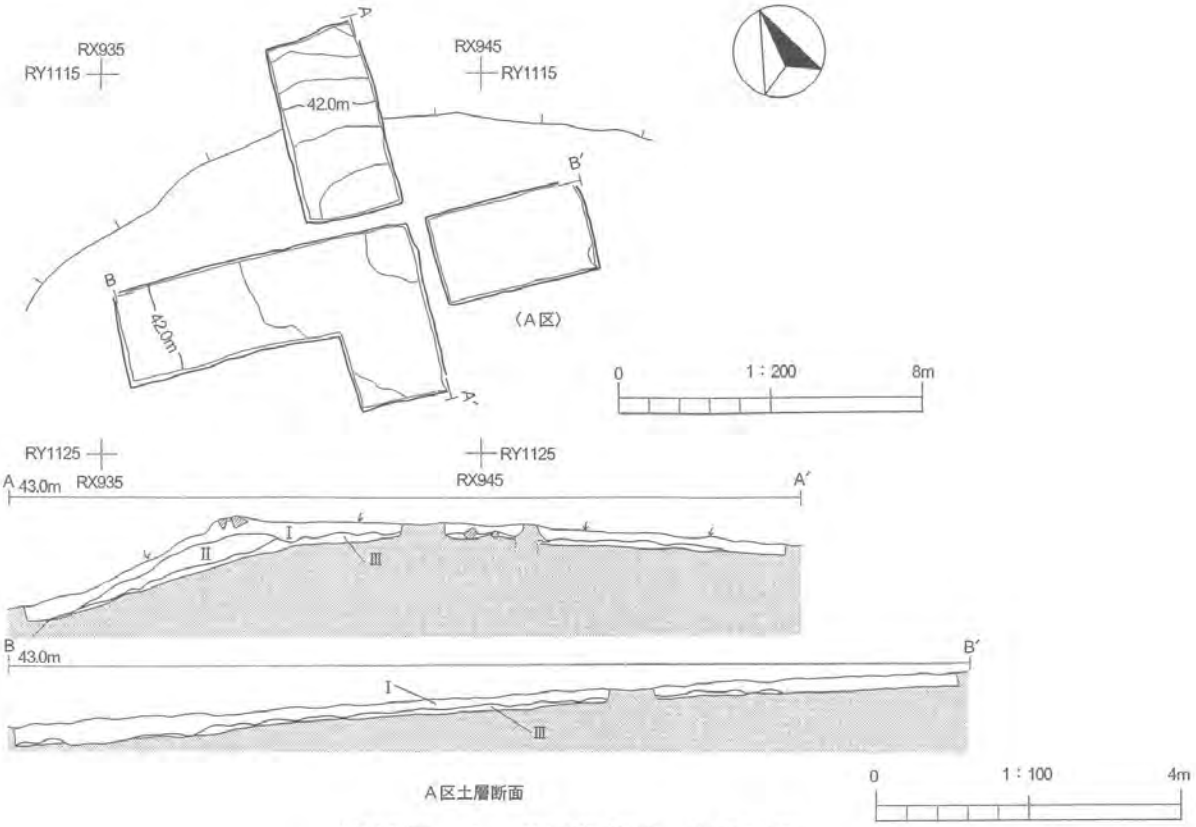



第９図　Ｄ区土層断面図

Ｄ区土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 土　　性 |
|---|---|---|
| Ⅰ | 10YR2/3 | 中、疎 |




**第10図　A，C区全体図、土層断面**

## １－２．検出した遺構と遺物

### ａ．住居跡、製鉄遺構

**Ｂ－１号竪穴住居跡**（第11図）

＜検出状況＞　Ｂ区のほぼ中央、南向きの平坦地に位置する。検出面は地山面である。

＜形状、規模＞　形状は隅丸方形である。規模は東西7.0m、南北約6.0mと推定される。

＜埋土＞　大きく２層に分けられる。暗褐色土のＡ層と黄褐色土のＢ，Ｃ層に大別される。いずれも自然堆積と考えられる。焼土Ⅰ、Ⅱは埋土層に含まれていたものである。

＜壁、床面＞　南側では明瞭な壁は検出できず、床面の範囲はベルトの層位などから推定した。壁は、北側でほぼ直立し、東西でやや外反しており、最大高は北側で0.6mである。周溝、貼床は検出されなかった。

＜柱穴＞　床面から土坑は７基検出した。土坑の形状はほぼ円形である。掘り方の深さからみてＰ１、Ｐ３が主柱穴と考えらる。東壁際の隅丸方形の浅い掘り込みは、出入口の施設かと思われる。掘り込みの規模は、２ｍ×１ｍ、深さ約20cmである。

(cm)

| PIT | Ｐ１ | Ｐ２ | Ｐ３ | Ｐ４ | Ｐ５ | Ｐ６ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 25 | － | 22 | 50 | 20 | 50 |
| 深さ | 55 | 15 | 50 | 15 | 30 | 20 |

＜カマド＞（第12図）　西壁のほぼ中央、壁際に袖石に天井石が乗せられた状態で出土した。その北側で焼土の広がりと炭塊が検出を検出している。円形に掘り窪めた土坑の脇に袖石を組んで構築している。規模は東西１ｍ、南北0.8mで、大型のほうである。Ｋ１層は固く焼き締った焼土層である。煙道、煙出しは検出されなかった。

**出土遺物**（第13、14図）

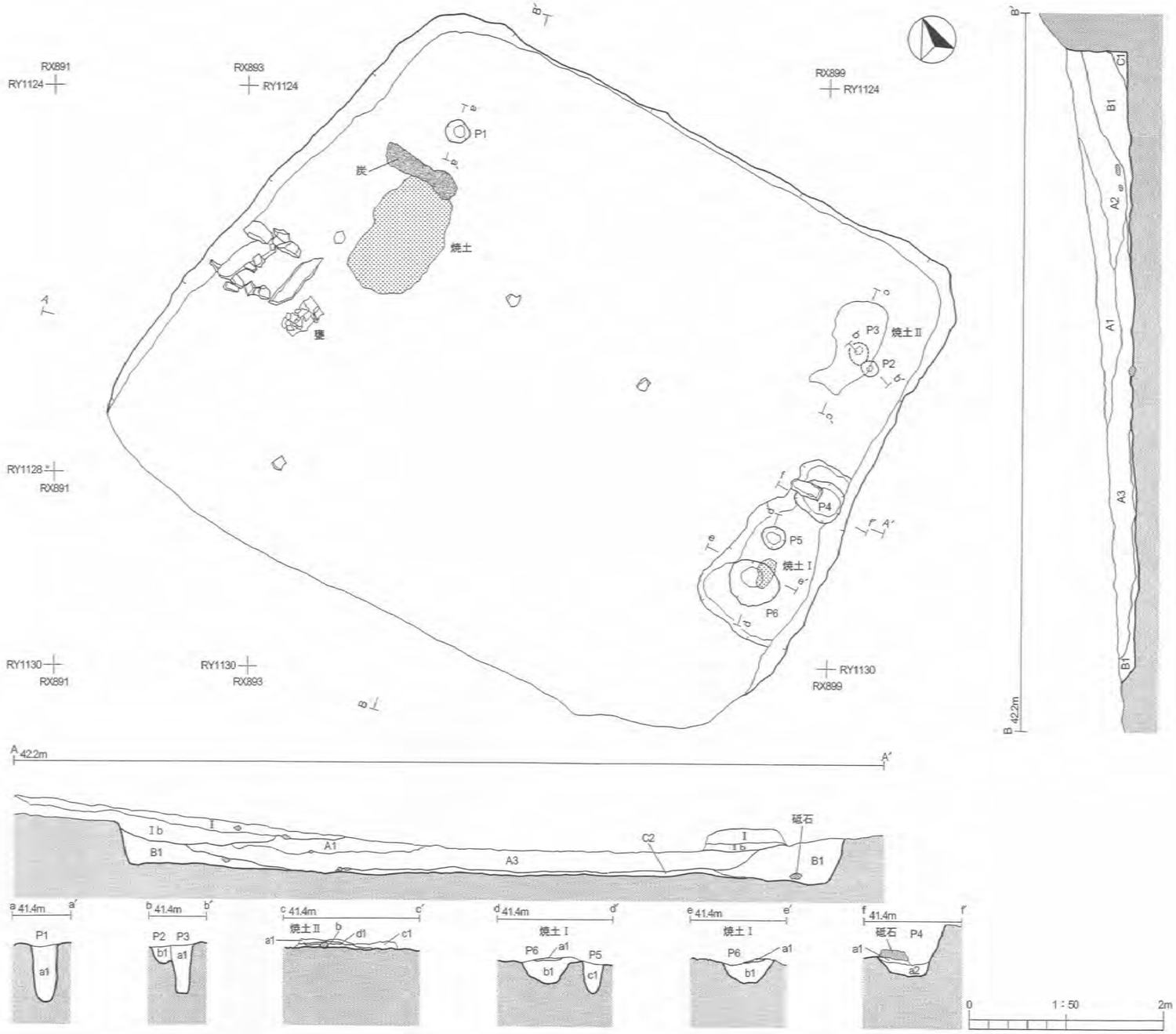
１、２は床面に近いＢ層下部から重なって出土した土師器の坏である。いずれも平底で、わずかに内湾しながら立上がる。器面が磨滅しており、調整痕は、１のヘラナデ、２のヘラナデとミガキががわずかに観察されただけである。２は内黒処理が施されている。３、４はロクロ不使用の土師器の甕である。いずれもカマド周辺の床面から出土している。３、４とも肩部に段をもち、口径と体部径がほぼ等しい長胴甕で、口縁部はヨコナデ、体部は内外面にヘラナデで調整されている。

５はＢ層から出土した砥石である。７面を使用し、各面で線状痕が観察された。長さ28cm、幅は６ｃｍ～11cmである。

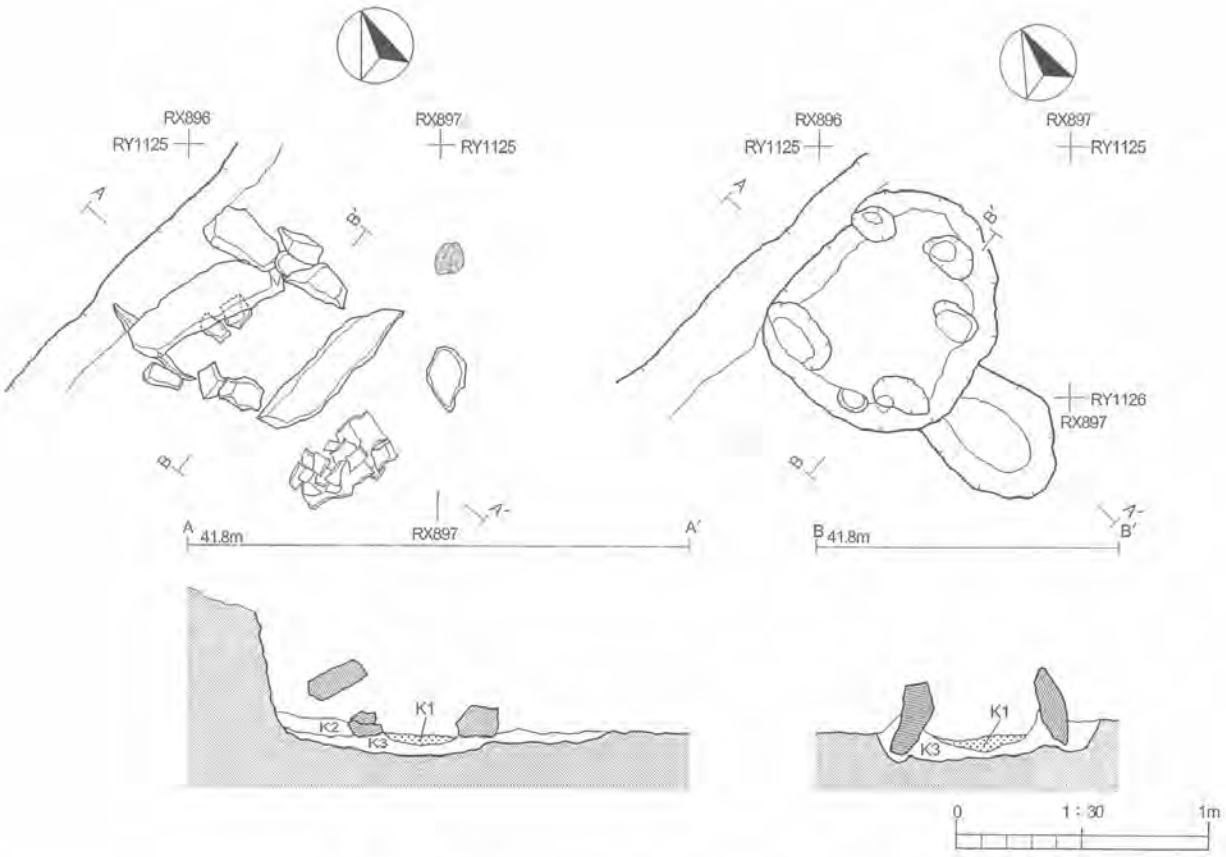
６は床面から出土した土製品で紡錘車である。上面と側面は磨滅し調整痕は明瞭ではないが、底面はケズリ調整されている。上径４cm、底径６cm、高さ３cm、孔径７mmである。

７～10はいずれもＡ層から出土した鉄製品である。７は刀子の茎か。８は柄状の製品で、面取りされ、中心がくびれる。区（まち）があって、ホゾ状の四角錐がついて、先細りになる。長さ７cm、最大径1.5cmである。９、10は角釘の頭部と体部と思われる。

＜時期＞　床面、最下層の遺物から奈良時代と推定される。




第11図　Ｂ－１号竪穴住居跡



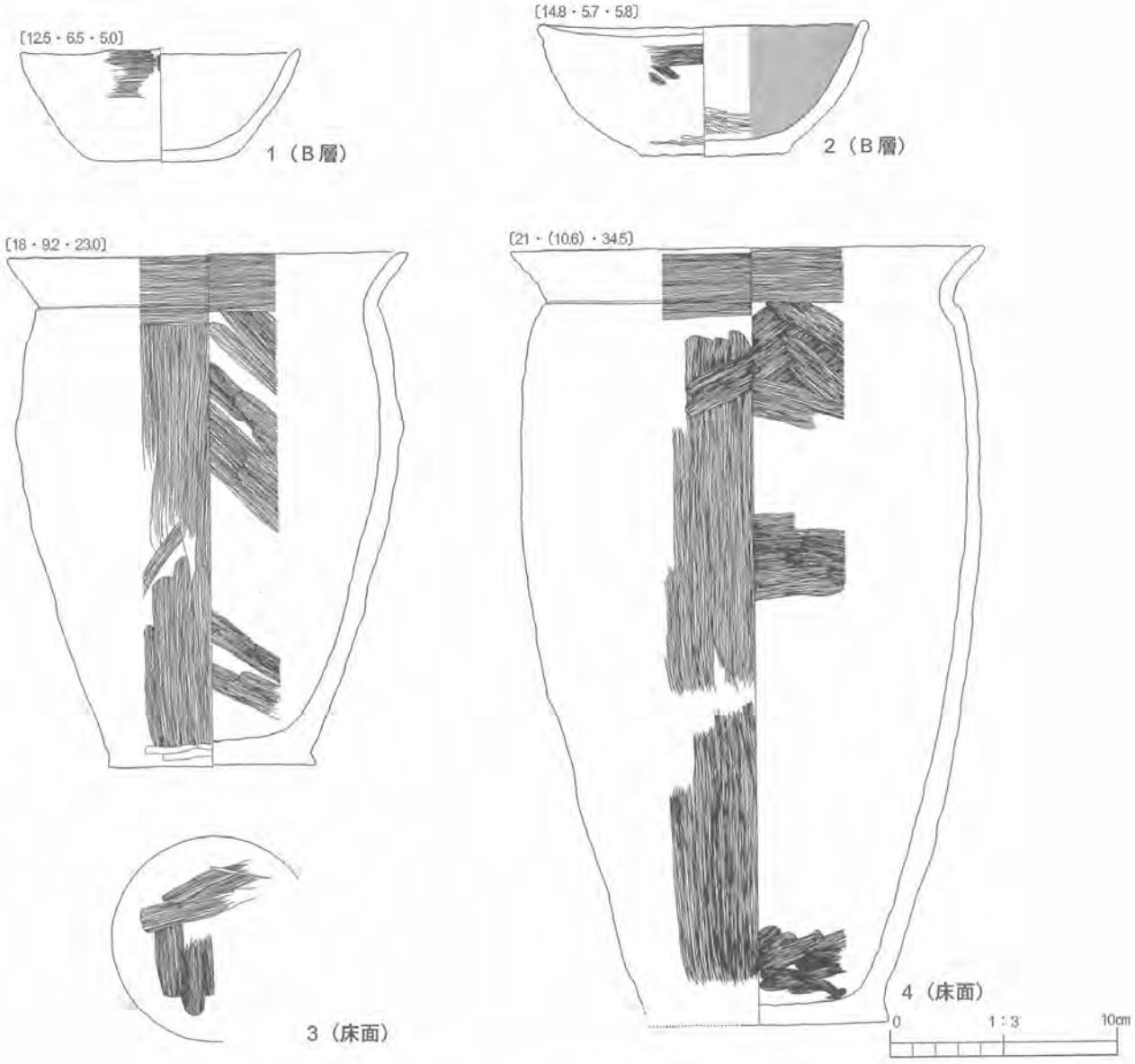

第12図　Ｂ－１号竪穴住居跡カマド

Ｂ－１号竪穴住居跡埋土土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A 1 | 10YR3/3　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　15%　砂壌土 | 中~固、中　→　炭、焼土粒 |
| A 2 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR3/3　10%　砂壌土 | 中、中　→　炭粒少 |
| A 3 | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR3/4　10%　砂壌土 | 中、中 |
| B 1 | 10YR5/8　黄褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中　中　→　土師、砥石 |
| C 1 | 10YR6/8　明黄褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 固、疎　→　小礫 |
| C 2 | 10YR5/4　にぶい黄褐　砂壌 | 10YR4/4　10%　砂壌土<br>10YR4/6　5%　砂壌土 | 中、中　→　炭、土器 |

Ｂ－１号竪穴住居跡焼土Ⅱ土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| a 1 | 7.5YR5/8　明褐　砂壌土 | | 固、密 |
| b 1 | 10YR2/1　黒　砂壌土 | | |
| c 1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | | 中、中 |
| d 1 | 10YR7/8　黄橙　砂壌土 | | 中、中 |



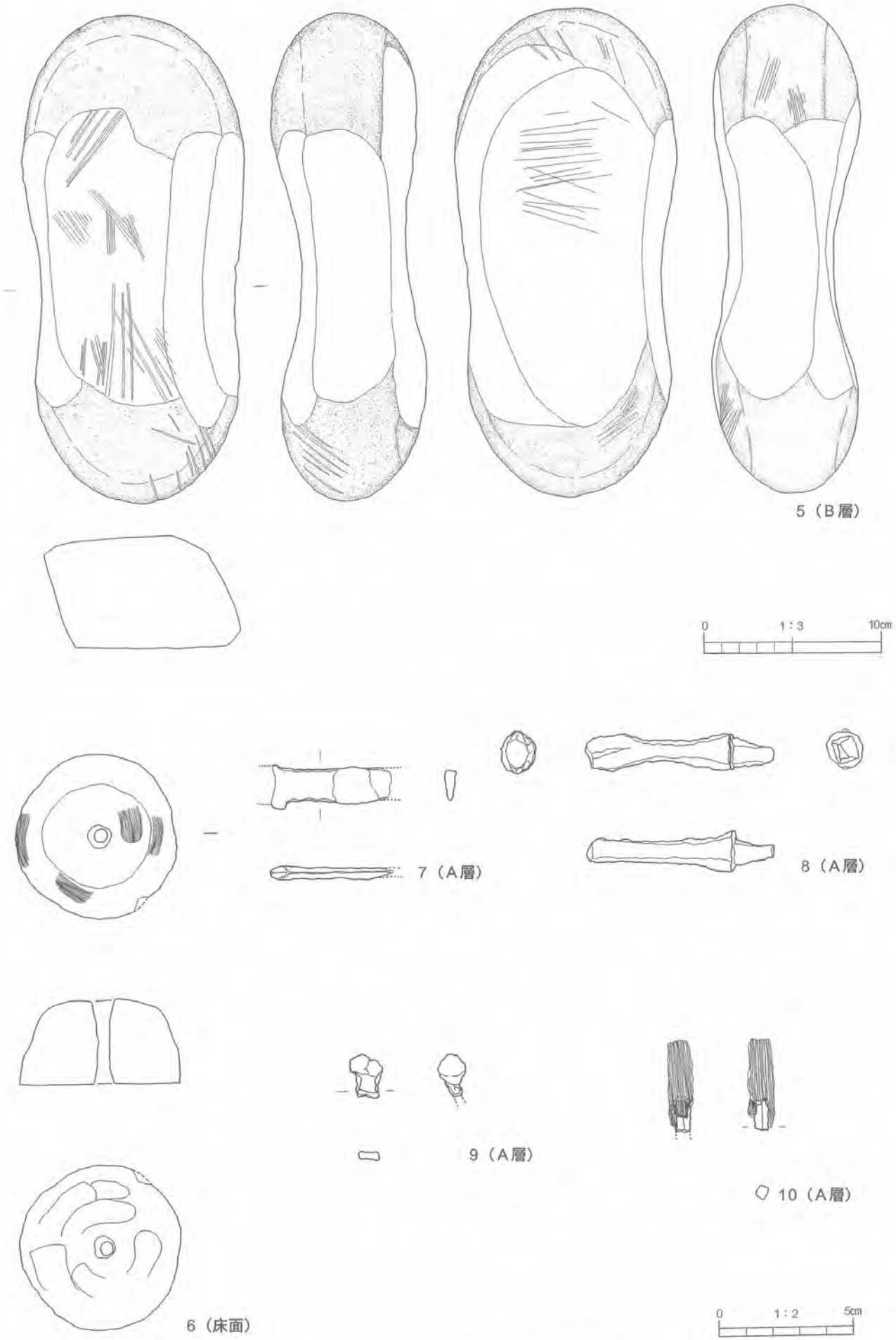

第13図　B－1号竪穴住居跡出土遺物（1）

B－1号住居跡カマド土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K1 | 5YR5/8　明赤褐　砂壌土 | 5YR5/6　10%　砂壌土 | 固、密 |
| K2 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR6/8　10%　砂壌土 | 固、中 |
| K3 | 7.5YR5/6　明褐　砂壌土 | 10YR4/8　10%　砂壌土 | 中、密 |

B－1号住居跡土坑土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P1　a1 | 10YR5/4　にぶい黄褐　砂壌土 | 10YR4/6　15%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P2　b1 | 10YR5/6　黄褐　砂壌土 | | 軟、疎　小礫多数 |
| P3　a1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/4　10%　砂壌土 | |
| P4　a1 | 10YR4/6　褐（暗）　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 中、中 |
| P4　a2 | 10YR5/6　黄褐　砂壌土 | 10YR5/4　10%　砂壌土 | 中、中 |
| P5　c1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/4　10%　砂壌土 | |
| P6　a1 | 5YR4/8 赤褐　砂壌土 | 5YR5/8 10%　砂壌土<br>7.5YR4/6 10%　砂壌土 | |
| P6　b1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 中、中、土師片、炭 |




第14図　B－1号竪穴住居跡出土遺物（2）

**Ｄ－１号竪穴住居跡**（第15図）

＜検出状況＞　Ｄ区の斜面中位に位置し、地山面から検出した。

＜形状・規模＞　平面形は隅丸正方形で、規模は南北4.8m、東西4.6mである。壁高は北側で８cm、南側で10cm、外傾して直線的に立上がる。床面は平坦で、周溝、貼床は検出していない。

＜埋土＞　Ａ、Ｂ層は黒褐色～褐色土層で自然堆積層である。Ｃ層からは炭、焼土、粘土などが混じってくる。図示した焼土は廃棄されたもので、この竪穴に伴うものではない。また焼土層（ａ１）からイネが出土している（巻末「種実遺体の同定」参照）。最下層上面に焼土が散在するという出土状況は、Ｂ－１号住居跡、後述するＤ－２号住居跡と共通している。

＜柱穴＞　土坑は４基出土している。北側の壁にそって掘られた２基が主柱穴である。

(cm)

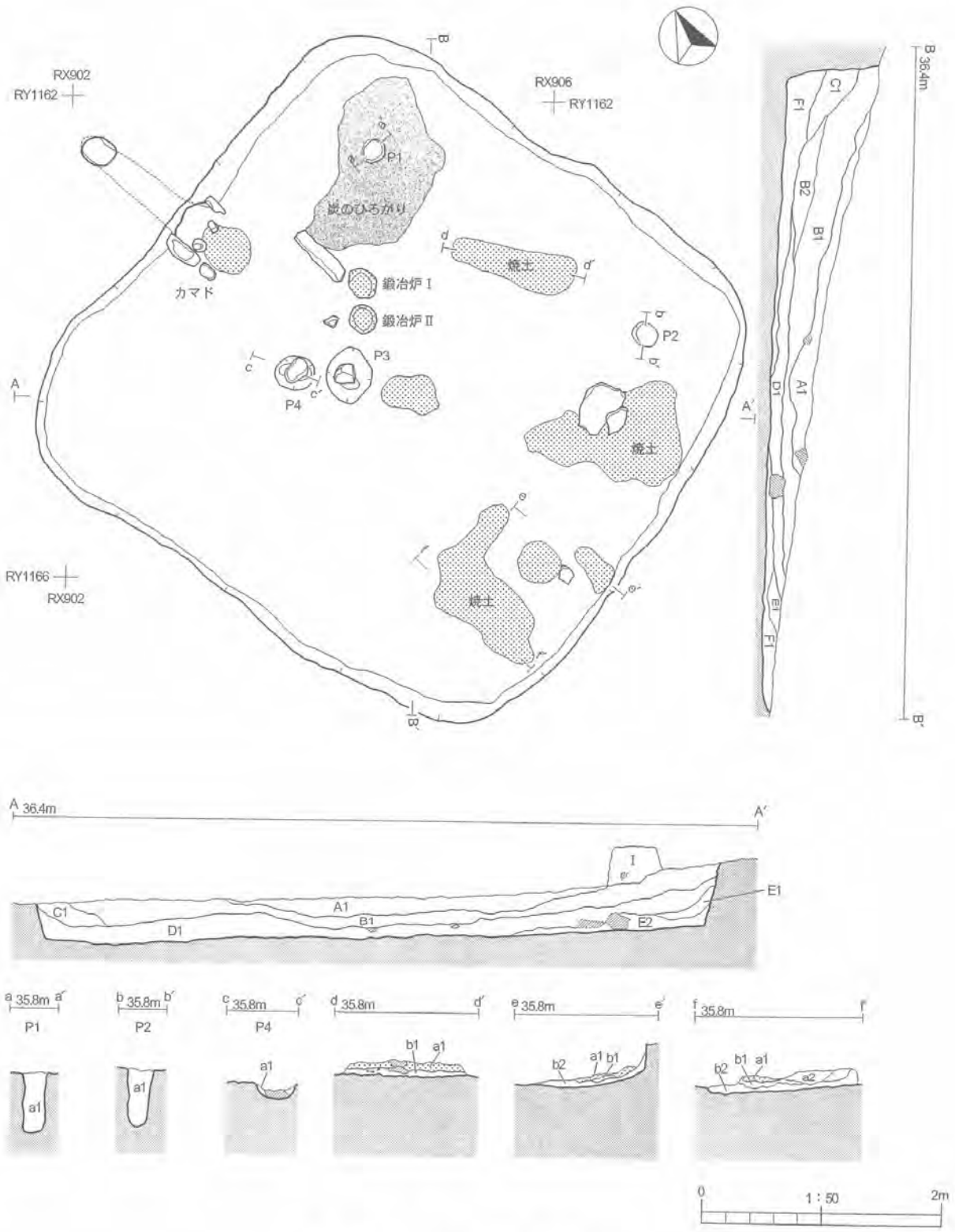
| PIT | 1 | 2 | 3 | 4 |
|---|---|---|---|---|
| 径 | 20 | 20 | 45 | 30 |
| 深 | 50 | 48 | 10 | 10 |

＜カマド＞（第16図）　西壁の中央に設けられている。くり貫き式のカマドである。火床部は浅く掘り込んで、両側に袖石を埋設する。煙道は煙出しにむかってやや上向きに掘られ、煙出しは垂直に掘られている。規模は、火床部が45cm×40cmで、煙道の径は25cm、煙出しのは径30cmである。埋土は３層に分れ、Ｋ３層が固く焼き締った焼土層である。

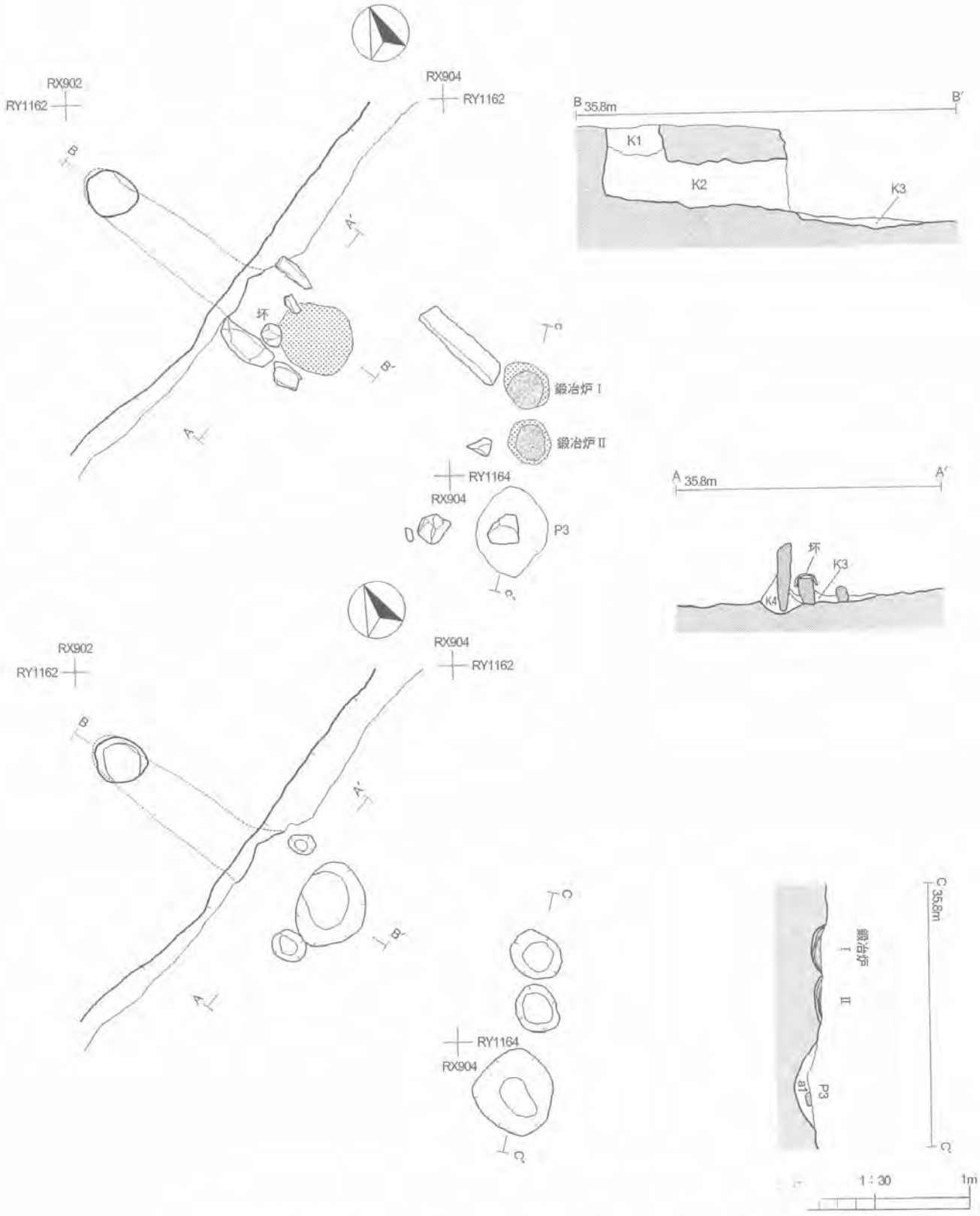
＜鍛冶炉Ⅰ、Ⅱ＞（第16図）

カマドから１mばかり離れた所で検出した。炉Ⅰ、Ⅱとも平面形は不整円形で、円形の炭の広がりを赤褐色土の輪が囲む形で検出された。また断面の構造も、炭層（Ｋ１）、ガチガチの還元焼成層（Ｋ２）、よく焼き締った酸化焼成層（Ｋ３）と重なっている点も共通する。規模は、炉Ⅰが28cm×22cm、深さ５cm、炉Ⅱが25cm×22cm、深さ４cmである。

Ｋ１層から羽口片、ハンマースケールが出土している。炉Ⅰと炉Ⅱの時期については、時期差を示す資料もなく、同時期のものと考える。




第15図　D－1号竪穴住居跡




第16図　D－1号竪穴住居跡カマド、鍛冶炉Ⅰ、Ⅱ

D－1号竪穴住居跡埋土土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| I | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR3/3　10%　砂壌土 | 中、疎 |
| A1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 中、中、土器 |
| B1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR4/4　15%　砂壌土<br>10YR3/4　5%　砂壌土 | 中～軟、中、土器、炭塊多 |
| B2 | 10YR4/6　褐（暗）砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 軟、疎、炭粒少 |
| C1 | 10YR5/6　黄褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 軟、疎、炭粒少 |
| D1 | 10YR3/4　暗褐（明）　砂壌土 | 10YR4/4　15%　砂壌土 | 軟、疎、羽口、土器、炭塊 |
| E1 | 5YR4/4　にぶい赤褐　砂壌土 | 5YR5/6　10%　砂壌土<br>7.5YR3/4　5%　砂壌土 | 軟、中、炭 |
| F1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 軟、疎、炭塊多 |

D－1号住居跡カマド土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K1煙道埋土 | 10YR5/6　黄褐　砂壌土 | 10YR5/4　10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| K2煙道埋土 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土<br>10YR6/6　5%　砂壌土 | 軟、疎 |
| K3焼土層 | 5YR5/8　明赤褐　砂壌土 | | 中～固、密、焼土層 |
| K4 | 注　記　な　し | | |

D－1号住居跡柱穴土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P1　a1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P2　a1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR5/4　10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P4 | 注　記　な　し | | |

D－1号住居跡焼土土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| a1 | 5YR5/8　明赤褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 軟、中、炭多　焼土と炭　イネ |
| b1 | 10YR5/8　黄褐　砂壌土 | 5YR5/8　5%　砂壌土 | 軟、疎、焼土混じり |
| b2 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR5/8　5%　砂壌土 | 軟、疎、炭粒、粘土混じり |

D－1号住居跡鍛冶炉Ⅰ、Ⅱ、土坑跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K1 | 10YR2/1　黒　砂壌土 | 10YR2/2　10%　砂壌土 | 固、疎　炭層 |
| K2 | 2.5Y6/2　灰黄　砂壌土 | 2.5Y5/2　10%砂壌土 | 固、密　還元焼成 |
| K3 | 5YR5/8　明赤褐　砂質埴土 | 5YR4/6　10%砂質埴土 | 固、密　酸化焼成 |
| P3　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/4 10%砂壌土<br>5YR5/8 10%砂壌土 | 軟、疎　円礫 |

**出土遺物**（第17～20図）

遺物は、埋土中～下層、床面から出土している。１～18は坏である。１は丸底風の平底で、体部下半に段をもち、外傾しながら直線的に立上がる。調整は内外面ともミガキで、内黒処理を施される。２はカマドの台にかぶせてあったものである。丸底風の平底で、体部下半に段をもち、底部から直線的に立上がる。内外面、底面にミガキ処理を施し、内黒である。３は丸底風の平底で、底部からやや内湾しながら立上がる。体部下半にに段をもつ。４は丸底と思われるが、器厚が薄く、底部からやや内湾して立上がる。内面はミガキ、外面下半部にはケズリ処理を施し、内黒である。５は丸底で、内湾しながら立上がり、体部半ばに段をもつ。内外面にミガキ処理を施し、内黒である。器高は高めである。６は平底である。直線的に立上がり、器高は低く、器厚は厚い。底面はケズリ処理されて、内黒である。７は須恵器の坏である。底部

切離しは回転糸切りである。底部から直線的に立上がっている。８は丸底風の平底で、底部から直線的に立上がり、体部下半に段をもつ。内外面にミガキ、底面にケズリ調整を施し、内黒である。９は平底で、底部から直線的に立上がっている。内外面にミガキ処理を施して、底面はケズリ調整と刻線が認められれた。内黒である。10は酸化焔焼成によるロクロを使用の坏である。底面切離しは回転糸切りで、やや丸みをもって立上がる。内面はミガキ調整、黒色処理が施されている。11は丸底と推定されるが、丸みをもって立上がる。内面はミガキ調整と黒色処理を施されている。器高は高めである。12は10と同じく酸化焔焼成によるロクロ使用の坏である。底部が張出し、直線的に立上がっている。内面はミガキ調整と黒色処理が施されている。13はロクロ使用と推定されるが、ミガキ、ケズリ調整痕のためロクロ目は認められなかった。底面から直線的に立上がっている。黒色処理が施され、底面にはケズリ調整と刻線が観察された。14～18は須恵器の坏である。いずれも底部切離しは回転糸切りである。14は底面からやや丸みをもって立上がり、口縁部がわずかに外反する。15、16は底部から丸みをもって立上がり、17、18は底部から直線的に立上がっている。

19～35までは土師器の甕である。19、20は口縁部に最大径をもつ長胴甕で、20は胴部がやや膨らみ、口唇部が玉縁状に成形される。21は口縁部に最大径をもつ小形の長胴甕で、底部からわずかに丸みをもって立上がり、口縁部は外反する。22は球胴甕の頸～体部で、頸部に明瞭な段をもつ。23は口縁部と体部の径がほぼ等しい。体部は膨らみ、頸部に段をもつ。24は口縁部に最大径をもつ長胴甕で、体部はわずかに膨らみをもち、口縁部は体部との明瞭な境をもたず、口唇部は玉縁状に成形される。25は体部に最大径をもつ球胴甕と推定される。口縁部は短く、頸部に段をもつ。26は口縁部が直線的に外反する甕である。長胴甕の口縁部と推定される。27は口縁部に最大径をもつ長胴甕と推定される。口縁部は直線的に外反し、口唇部は玉縁状に成形される。28は直に立上がる口縁部である。29～35は甕の底部である。明瞭な張出しをもつものと（30、32、35）持たないものに分れる。29、31、34の底面はケズリ調整され、30、32、33、35は底面に木葉痕を残す。

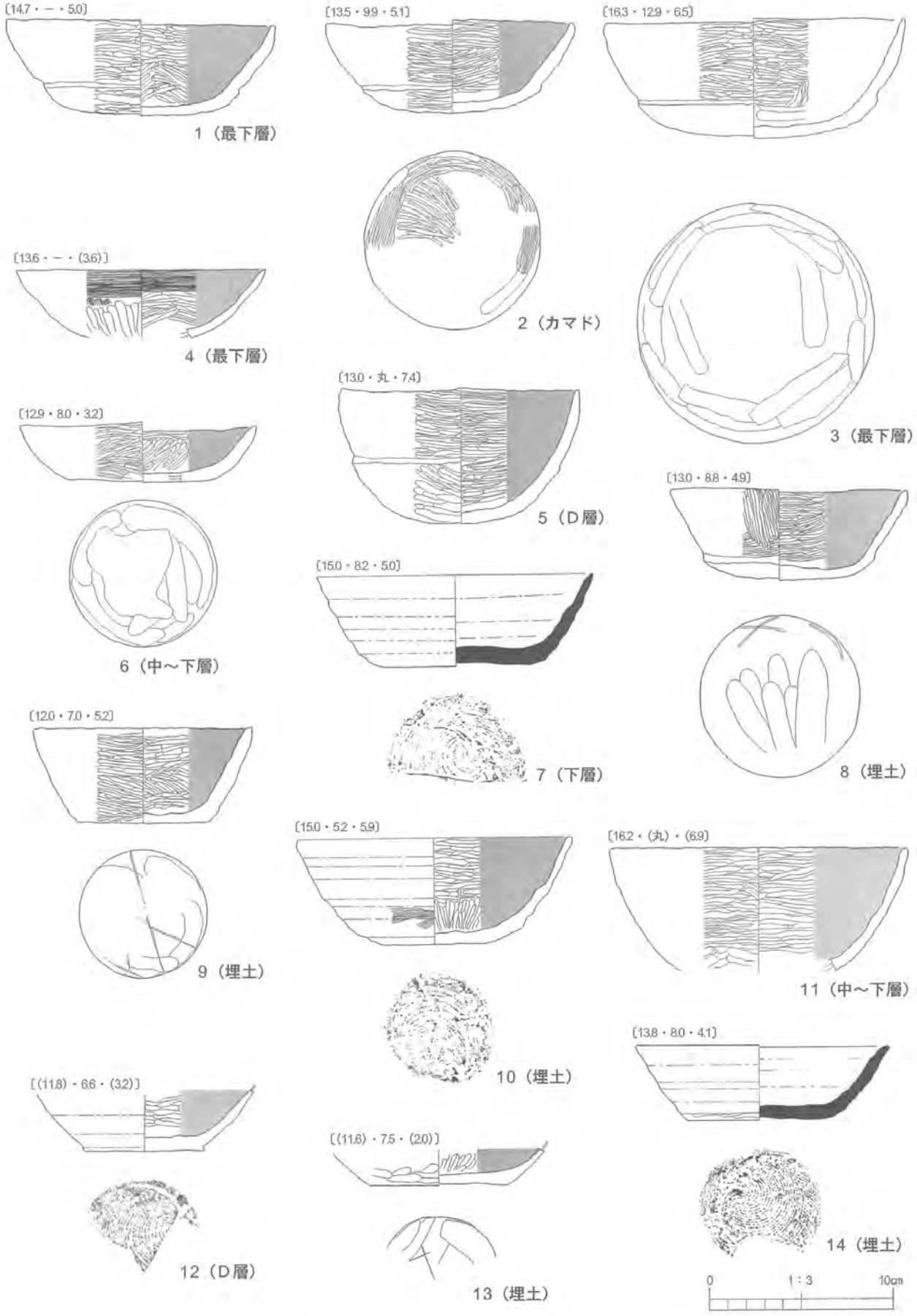
36、37は須恵器片である。36は甕の肩部、37は長頸壷と思われる壷の頸部片である。

38～42は縄文土器である。39を除きいずれも交互刺突文をもつ。

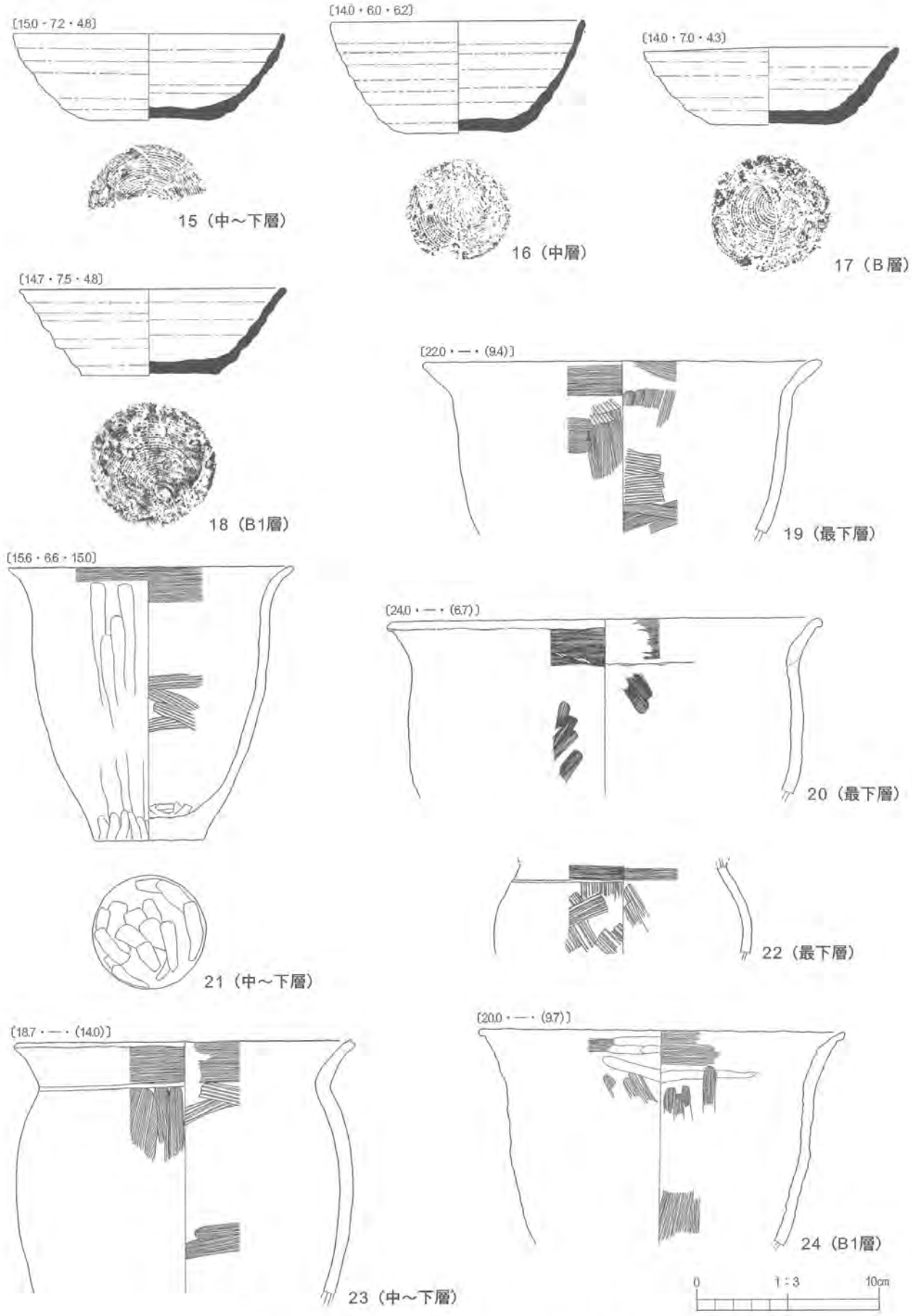
43～46は土製品で、いずれもふいごの羽口片で小形のものである。43～45は炉Ｉ（鍛冶炉）に伴って出土したものである。いずれも内面にナデ調整痕？を残す。43の孔径は，推定で2.0cmである。44、45のトーンで示した部分は灰色に変色している部分である。44の孔径は、推定で2.5cmである。45は外面にケズリ調整痕を残す。

47～50は床面あるいは最下層から出土した鉄製品である。47は刀子の茎から区（まち）へかかる部分と思われる。最大幅1.5ｃｍである。48は鎌の刃部と思われる。幅は2.6cmである。49、50は角釘の体部片である。49は0.6cm×0.4cmである。50は0.6cm×0.2cmである。

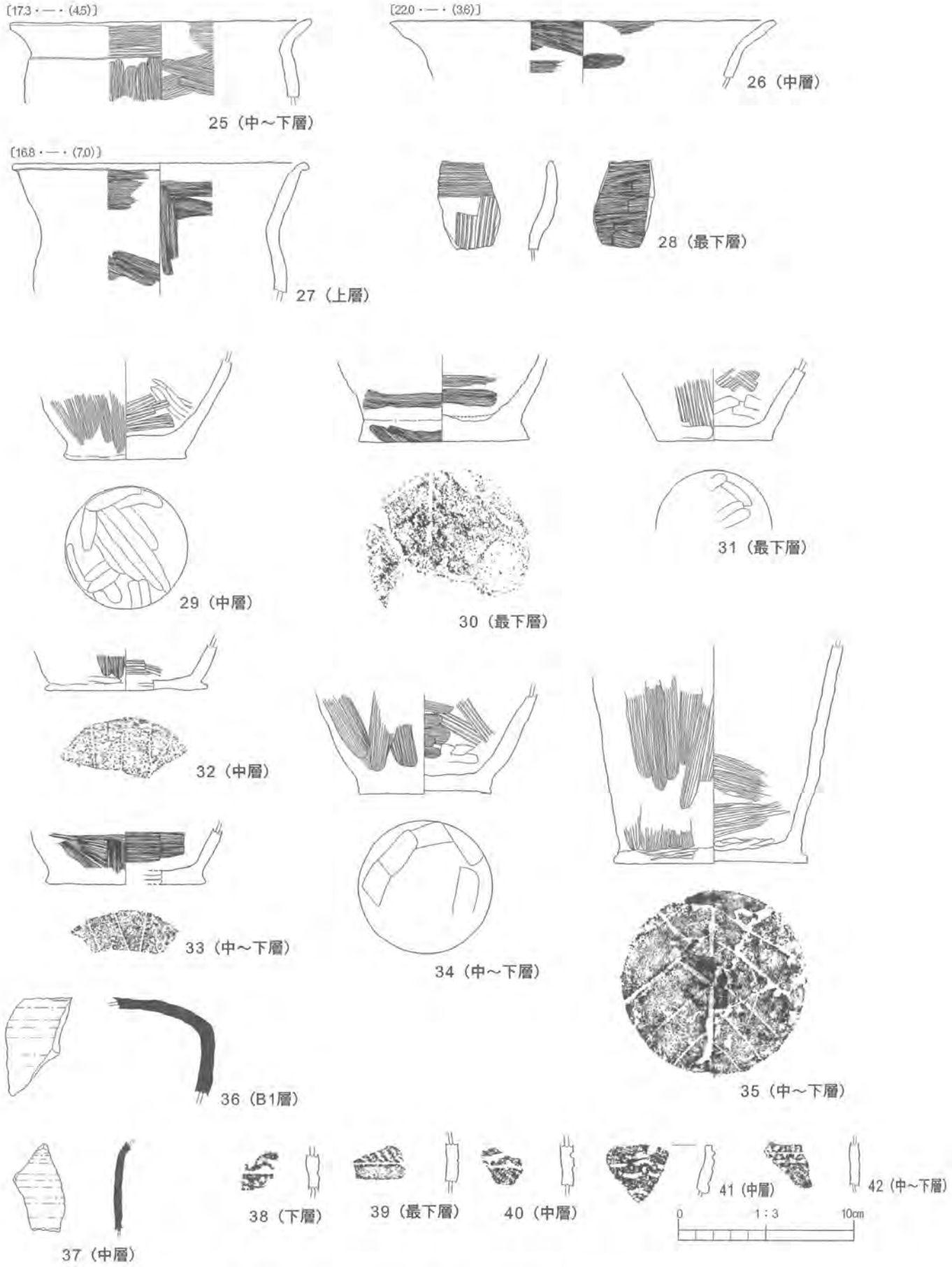
この他に竪穴埋土焼土ａ１層からは３粒のイネが出土している。巻末の分析調査報告書を参照されたい。



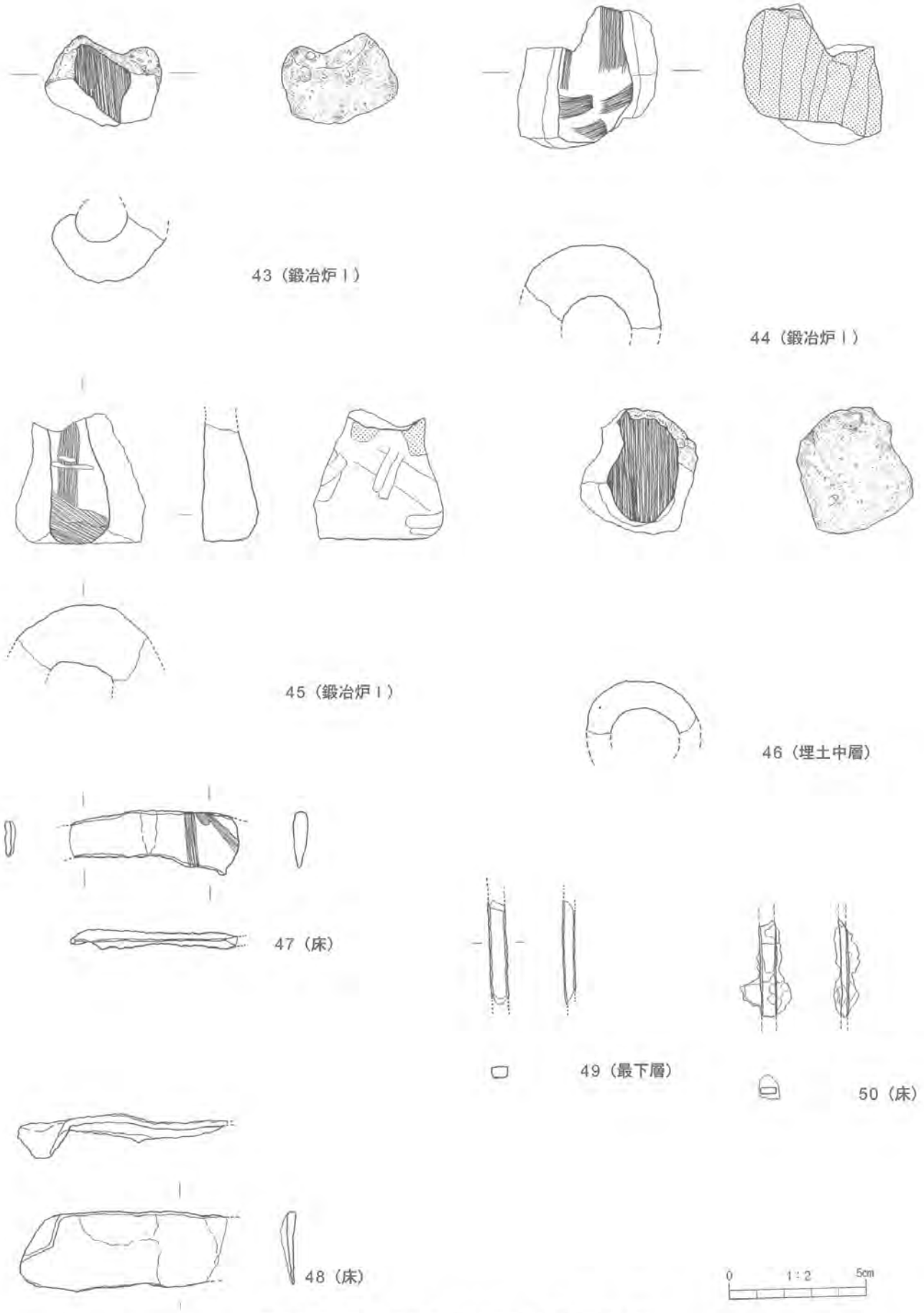

第17図　D－1号竪穴住居跡出土遺物（1）




第18図　D－1号竪穴住居跡出土遺物（2）




第19図　D－1号竪穴住居跡出土遺物（3）




第20図　D－1号竪穴住居跡出土遺物（4）

**Ｄ－２号竪穴住居跡**（第21、22図）

＜検出状況＞　Ｄ区南の緩斜面に位置する。検出面は地山面である。

＜形状・規模＞　平面形は、隅丸の不整方形で、規模は東西6.0m、南北も残存床面までを測ると6.0mであり、正方形の竪穴であったと推定される。壁は北、東、西の３面で確認され、壁高は北側で1.0mである。

床面は平坦である。周溝は北の壁際で検出している。幅は約15cm、深さは約10cmである。

＜埋土＞　Ａ～Ｃ層の黒褐～褐色層が自然堆積層で、焼土や炭の混じったＤ層以下の黄色土層は人為的な堆積である。床面の周辺部に散在する焼土はＥ層上面のものであり、前述したようにこの焼土の出土状況は、Ｂ－１号住居跡、Ｄ－１号住居跡と共通する。

＜柱穴・土坑＞　床面周辺部で８つの小土坑が確認された。Ｐ２、Ｐ３、Ｐ６、Ｐ７が主柱穴にあたると思われる。東側の壁際のＰ５については、カマドの反対側の壁際という配置が前述のＢ－１号竪穴住居跡の例と類似しており、やはり出入口などの施設が想定できると思われる。Ｐ１からは鉄製紡錘車が出土している。

(cm)

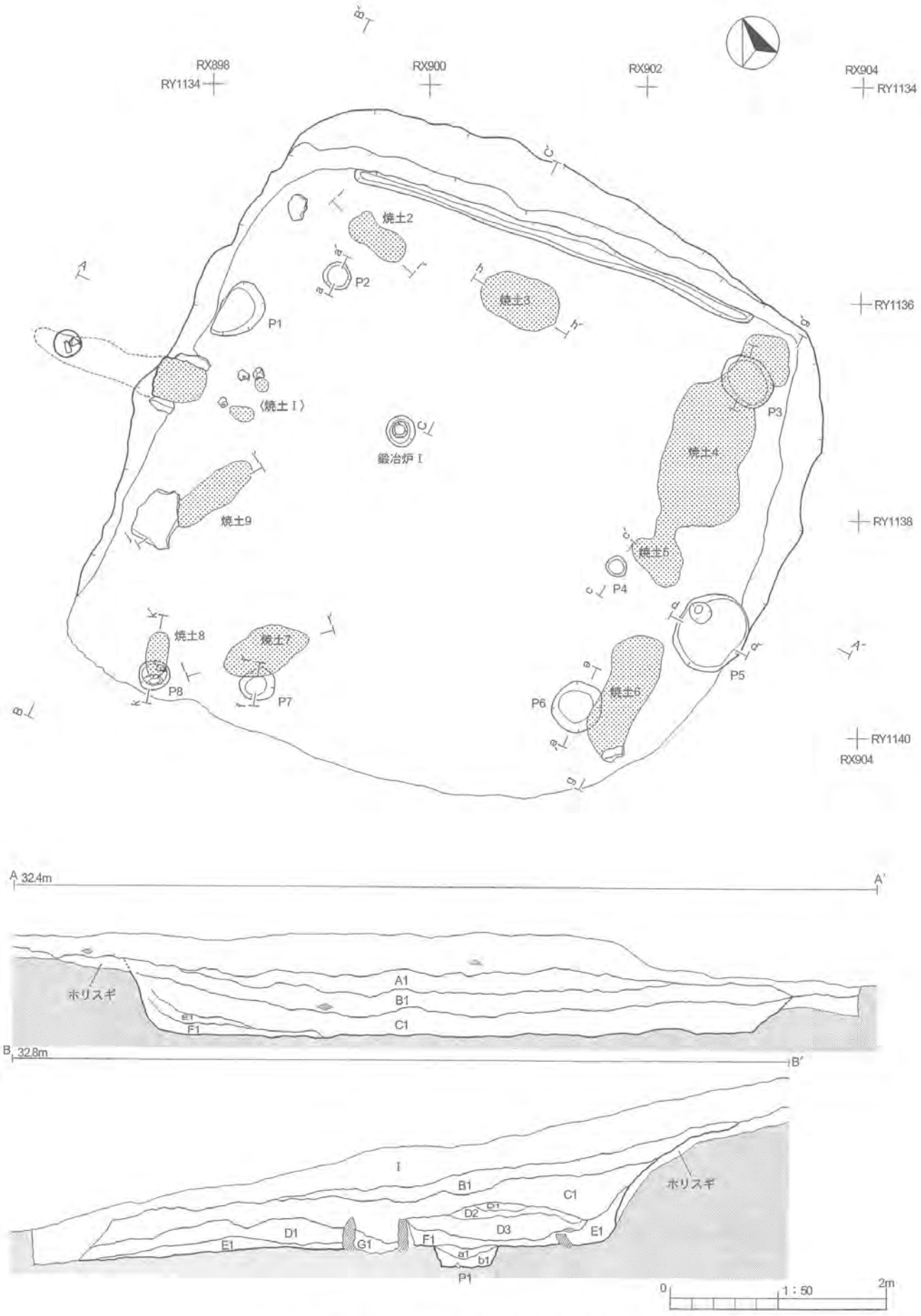
| PIT | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 60×40 | 22 | 42 | 20 | 75×65 | 50 | 28 | 15 |
| 深 | 18 | 48 | 13 | 10 | 10 | 30 | 15 | 5 |

＜カマド＞（第23図）　西壁の中央部に位置する。くり貫式である。火床部は、浅く掘り込まれ、袖石は埋設されず、粘土質の土で固定されている。煙出しは外傾して掘られ、煙道はほぼ水平に掘られていたが、煙出しをかなり過ぎている。煙出しが後から掘られたのであろうか。規模は、火床部が65cm×60cm、煙出しの径25cm、煙道の径は約15cmである。Ｋ２層が焼土層であるが、固く焼き締ってはいない。Ｋ１層からは12、3cmの大きさの礫が多数出土している。竪穴を廃棄する際に投込んだものと思われる。

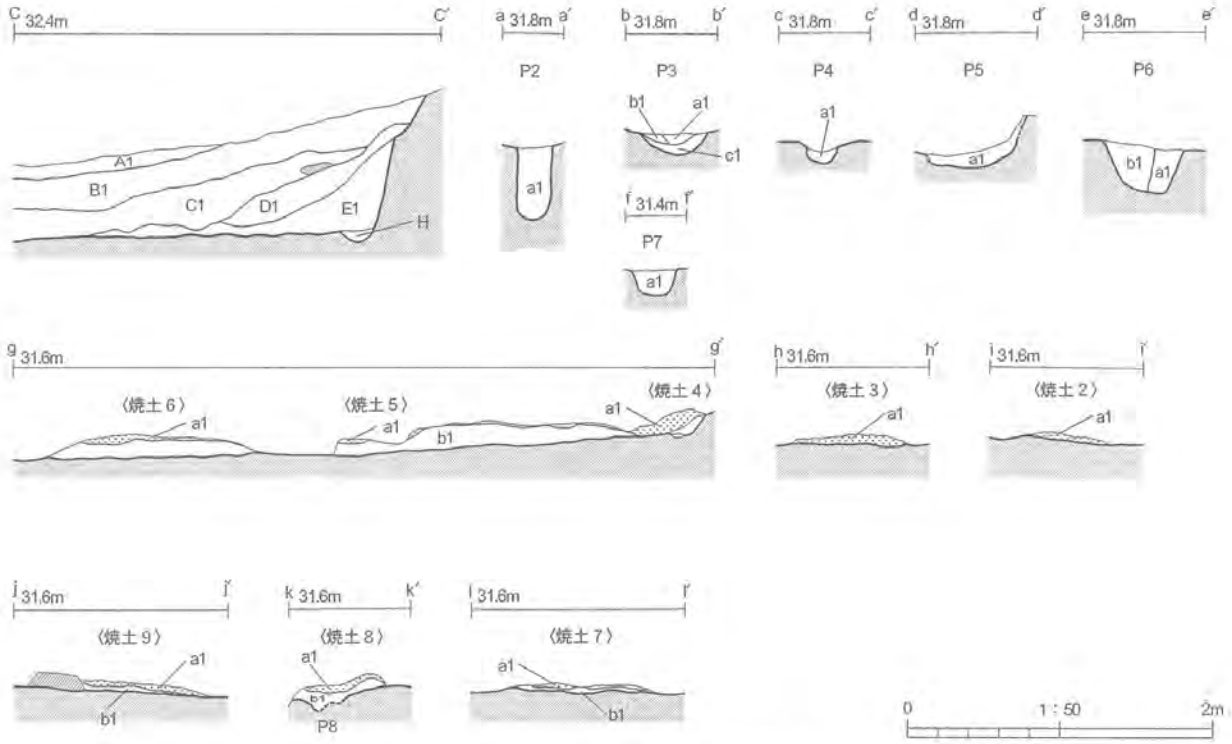
＜鍛冶炉Ｉ＞（第23図）　床面のほぼ中央で検出した。平面形は円形で、Ｄ－１号住居炉Ｉ、Ⅱと同じように、円形の黒色土層を赤褐色土の輪が囲む形で出土した。また、断面の構造についても、還元焼成層（Ｋ２）、酸化焼成層（Ｋ３）となっている点も共通している。Ｄ－１号と異なっている点は、こちらは１段掘り込まれた面が炉となっていることである。周辺部から小形の羽口が出土している。鍛造剥片は確認していないが、構造などからみて鍛冶炉と考えられる。規模は径27cm、深さ11cmである。

**Ｄ－２号住居跡土層観察表**

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A 1 | 10YR2/3 黒褐（暗）砂壌土 | 10YR2/2 10% 砂壌土 | 中～軟、中 → 土師、須恵 |
| B 1 | 10YR3/4 暗褐 砂壌土 | 10YR4/4 15% 砂壌土<br>10YR4/6 5% 砂壌土 | 軟、疎 |
| C 1 | 10YR4/6 褐 砂壌土 | 10YR4/4 10% 砂壌土 | 軟、疎 → 土器 |
| D 1 | 10YR5/6 黄褐 砂壌土 | 10YR4/4 10% 砂壌土 | 軟、疎 |
| D 2 | 7.5YR4/6 褐 砂壌土 | 5YR4/6 10% 砂壌土 | 中、疎 → 焼土、炭粒 |
| D 3 | 10YR6/6 明黄褐 砂壌土 | 10YR5/6 10% 砂壌土 | 固、密 → 円礫 |
| E 1 | 7.5YR4/4 褐 砂壌土 | 10YR4/6 10% 砂壌土<br>10YR5/6 10% 砂壌土 | 軟、疎 → 焼土粒、炭 |
| F 1 | 10YR5/8 黄褐 砂壌土 | 10YR6/6 15% 砂壌土 | 軟、疎 →カマド構築土？ |
| G 1 | 10YR6/6 明黄褐 砂壌土 | 10YR5/6 10% 砂壌土 | 中～固、密 →カマド構築土？ |




第21図　D－2号竪穴住居跡（1）




第22図　D－2号竪穴住居跡（2）

D－2号竪穴住居跡柱穴土層観察表

| 層　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| P1　a1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/4　15%　砂壌土<br>10YR5/6　10%　砂壌土 | 軟、疎　→　紡錘車、焼土、炭 |
| P2　a1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 中～固、中 |
| P3　a1 | 10YR7/8　黄橙　砂壌土 | 7.5YR7/8　10%　砂壌土<br>10YR8/1　5%　砂壌土 | 固、密　→　粘質土 |
| P3　b1 | 2.5Y6/3　にぶい黄　砂壌土 | 10YR4/4　5%　砂壌土 | 固、密　→　粘質土 |
| P3　c1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 2.5Y6/3　3%　砂壌土 | 固、密　→　粘質土 |
| P4　a1 | 10YR5/6　黄褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中～固、中～密 |
| P5　a1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 中～固、疎 |
| P6　a1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P6　b1 | 10YR5/6　黄褐　砂壌土 | 10YR5/4　10%　砂壌土 | 中～固、疎 |
| P7　a1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 中～軟、疎 |

D－2号竪穴住居跡焼土土層観察表

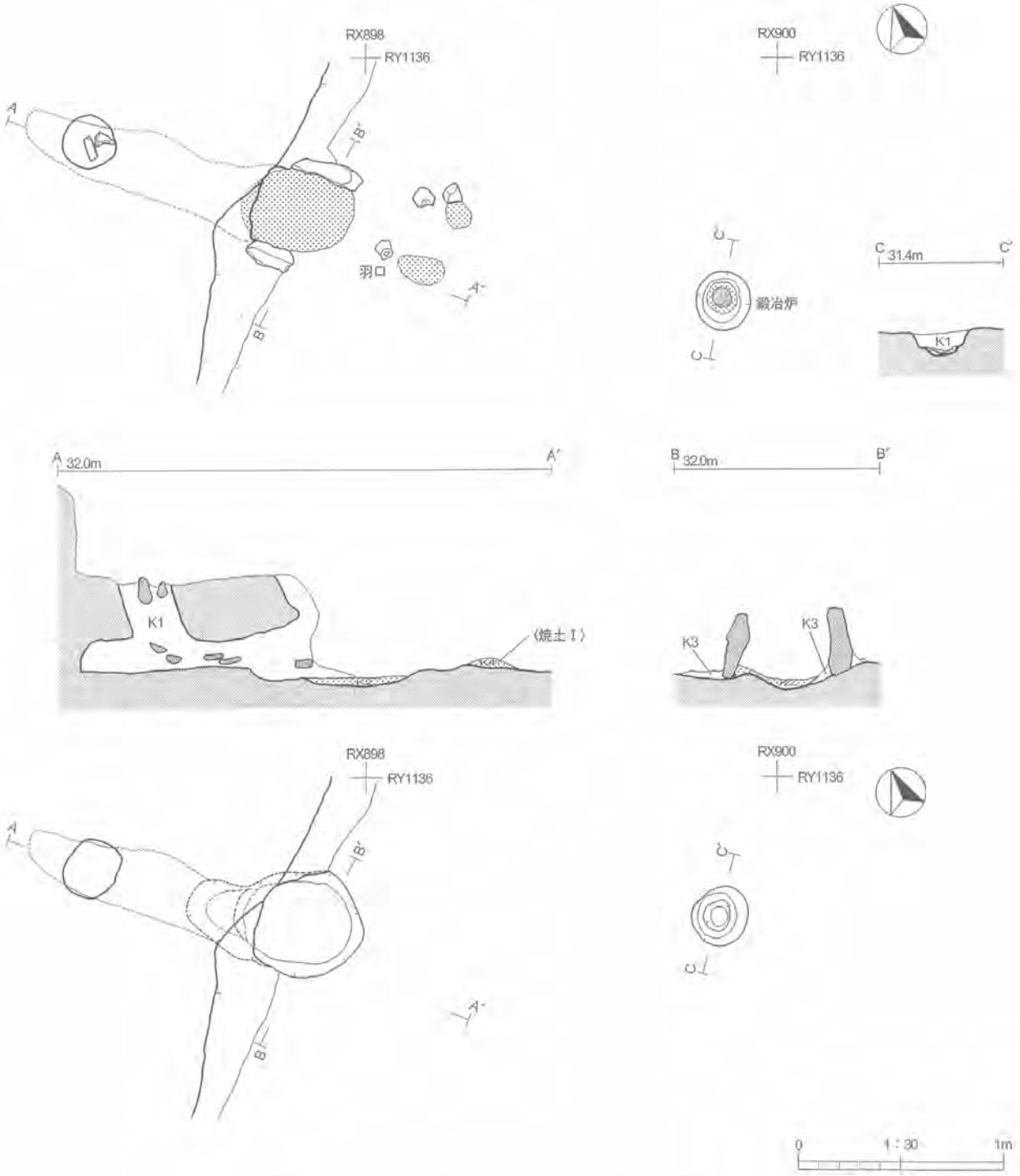
| 層　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 焼土2　a1 | 5YR5/8　明赤褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中～固、中～密 |
| 焼土3　a1 | 7.5YR4/4　褐　砂壌土 | 5YR5/8　15%　砂壌土<br>10YR4/6　10%　砂壌土 | 中、中～軟 |
| 焼土4　a1 | 7.5YR4/4　褐　砂壌土 | 5YR5/8　10%　砂壌土 | 中、中～密 |
| 焼土4　b1 | 10YR5/6　黄褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中、中 |
| 焼土5　a1 | 7.5YR3/4　暗褐　砂壌土 | 5YR5/8　15%　砂壌土 | 軟、疎 |
| 焼土5　b1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| 焼土6　a1 | 10YR5/8　黄褐　砂壌土 | 7.5YR3/4　10%　砂壌土 | 中～固、中～密 |

D－2号住居跡カマド土層観察表

| 層　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| K1 | 7.5YR5/8　明褐 | 10YR4/4　20%5 | 軟、疎？ |
| K2 | 10YR4/6　褐 | 10YR4/4　10% | 軟、疎　→　礫多 |
| K3 | 注記なし | | |
| 焼土I | 7.5YR5/8 明褐 | 10YR 4/6　15% | 中、中 |

D－2号住居跡鍛冶炉土層観察表

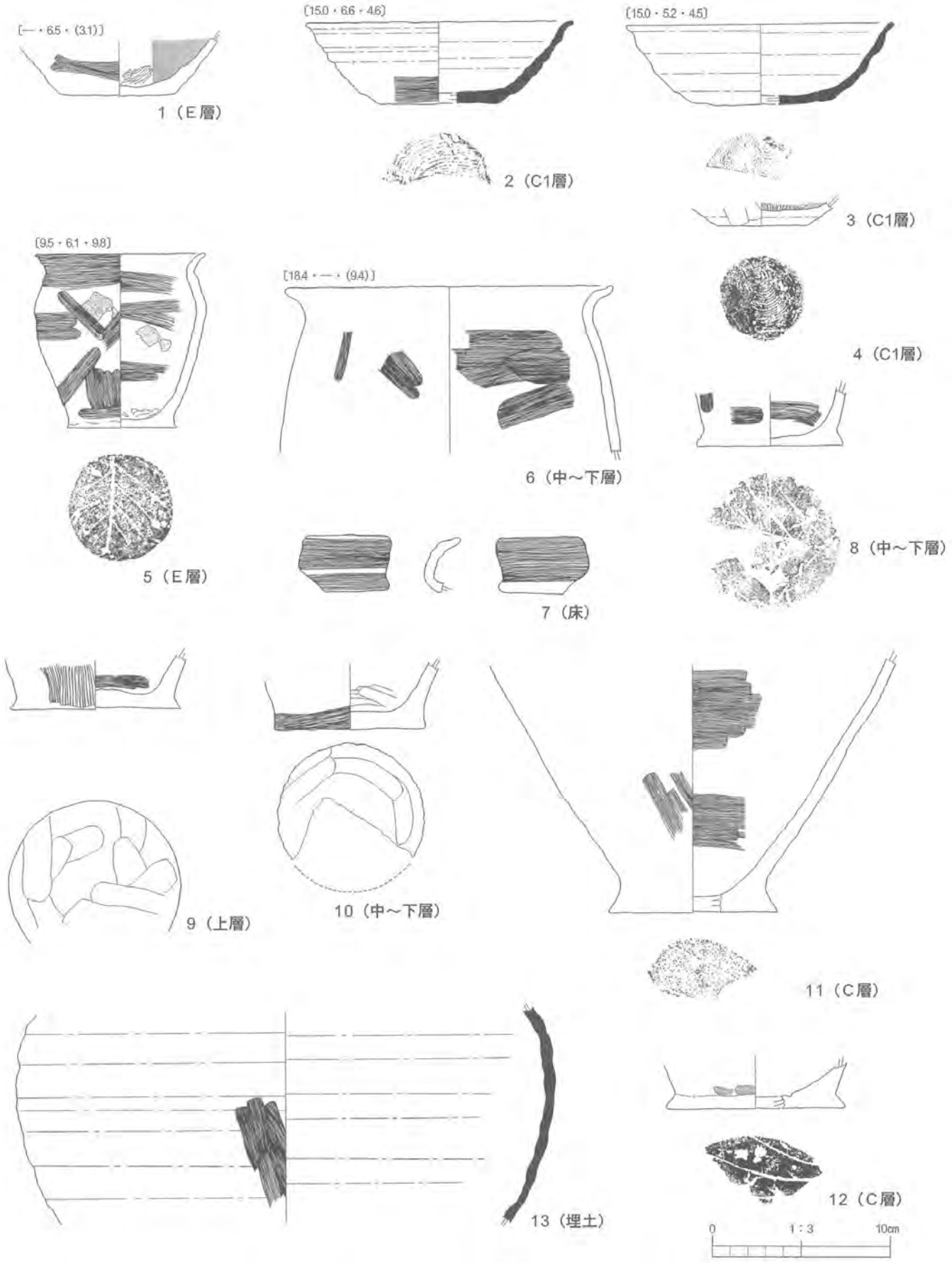
| 層　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| K1 | 10YR5/6　黄褐 | 10YR4/4　10% | 中～軟、疎 |
| K2 | 注記なし | | 還元炎焼成 |
| K3 | 注記なし | | 酸化炎焼成 |



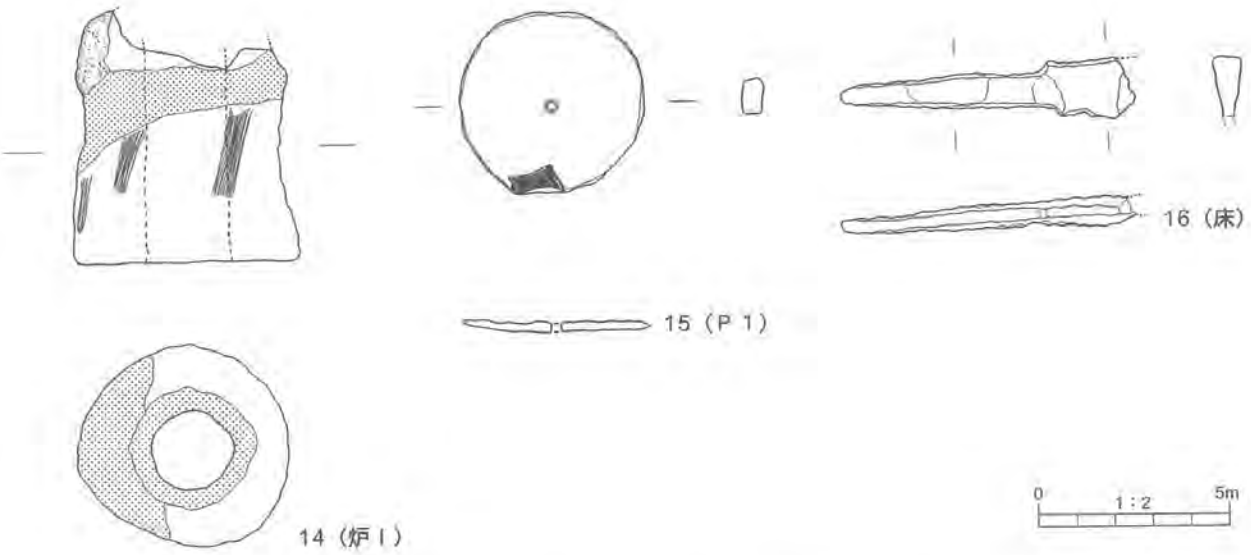

第23図　D－2号竪穴住居跡カマド、鍛冶炉

**出土遺物**（第24、25図）

床面から出土した土器は7の土師器の甕だけである。1は、土師器で平底の坏である。底部から直線的に立上がる。内面にミガキ処理を施し、内黒である。2、3は須恵器の坏である。




第24図　D－2号竪穴住居跡出土遺物（1）




第25図　D－2号竪穴住居跡出土遺物（2）

底面の切離しはいずれも回転糸切りであり、器形も類似し、底部からわずかに丸みをもちながら立上がり、口縁部で外反する。4は酸化焔焼成による土師器の坏である。内面にミガキ調整と黒色処理が施されている。

5～12は土師器の甕である。5は体部上半に最大径をもつ小形長胴甕である。内、外面の一部に炭化物が付着している。底面に木葉痕を残す。6は口縁部が短く、強く外反する甕である。体部に最大径をもつ長胴甕と思われる。7は体部の強く張出す球胴甕の口縁部と推定される。8～12は甕の底部である。いずれも明瞭な張出しを持つ。8、12は底面に木葉痕を残し、9、10は底面をケズリ調整されている。11は体部の強く張出す球胴甕の底部で、底部に木葉痕を残す。

13は須恵器広口壷？の体部片で、外面にナデ調整痕が認められた。

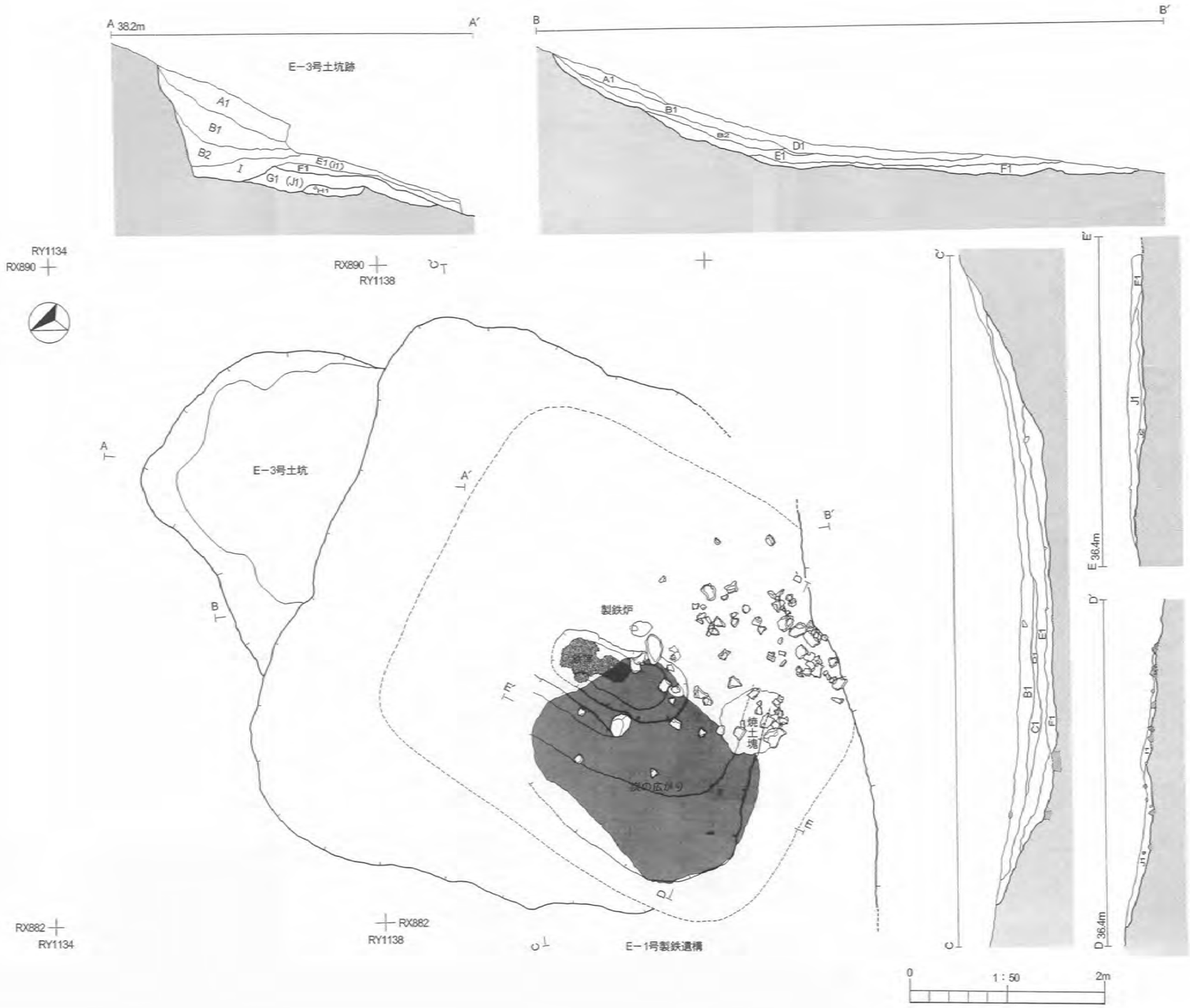
14はふいごの羽口で、炉Ⅰ（鍛冶炉）に伴うものである。ほぼ完形である。トーンで示したのは、側面図が灰色に変色している部分、断面図が焼成を受け明赤褐色に変色した部分である。長さ約7㎝、外径5.5㎝、孔径2.2㎝である。

15、16は鉄製品である。15はP 1のa 1層から出土した紡錘車である。外径4.8㎝、孔径0.2㎝、厚さ0.2㎝である。16は床面の東端から出土した刀子の茎と刃部である。長さ8㎝である。

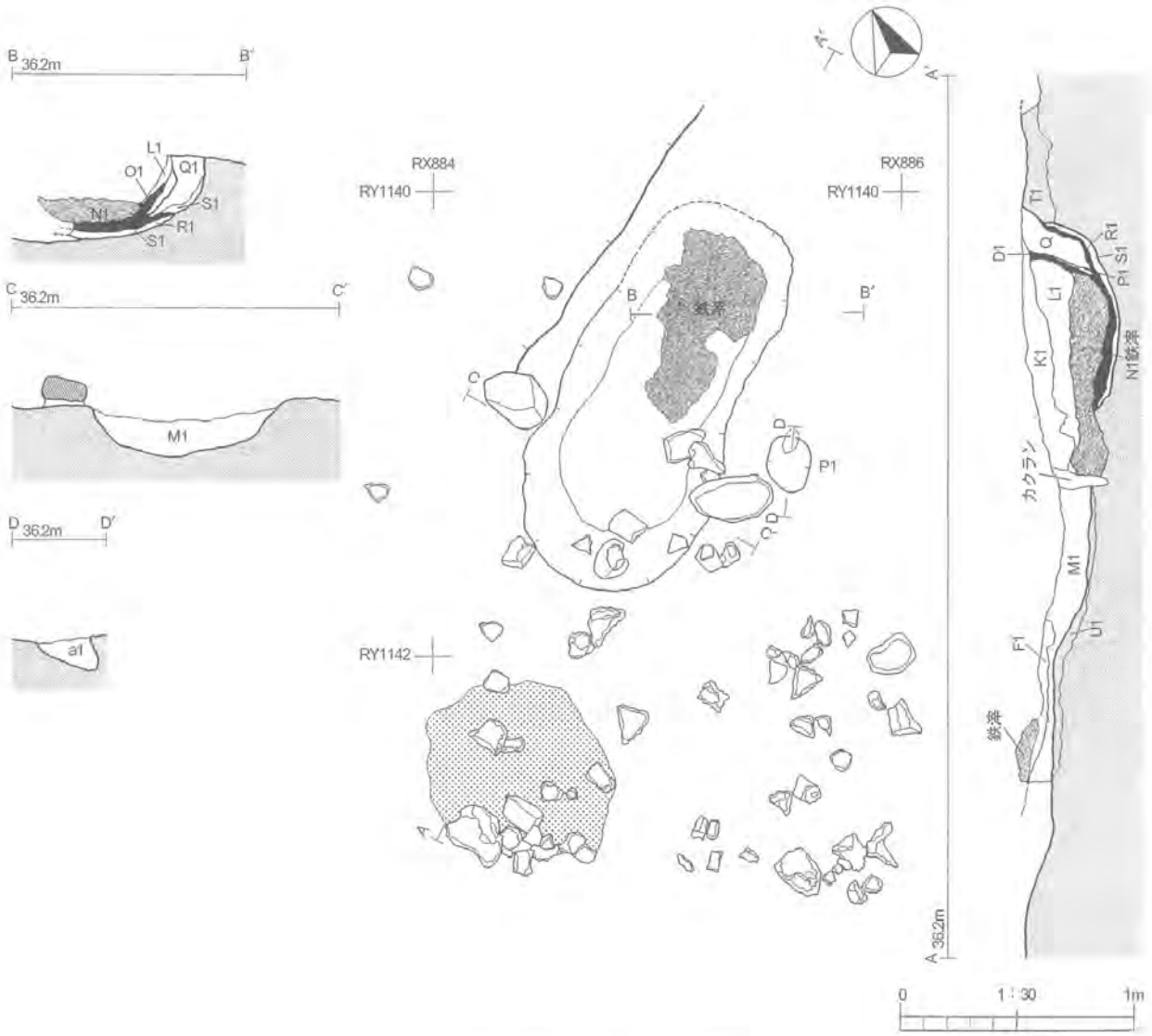
**E－1号製鉄遺構**（第26図）

＜検出状況＞　E区は斜面の下位に形成された狭い平坦部である。遺構は、そのほぼ中央部に位置する。製鉄遺構は、E－3号土坑跡と後述するE－2号竪穴住居跡が廃棄された跡地を利用して構築されている。遺構の南東隅が江戸時代の旧道の開削の際に削られている。検出面は表土層の直下である。

＜形状・規模＞　廃棄されたE－3号土坑跡とE－2号住居跡の縁辺部が自然堆積により埋った段階で構築している。形状は、隅丸方形の竪穴の北側に土坑の半分を合せた形になっているが、明瞭な壁が立上がっているわけではなく、擂鉢の形状に類似する。竪穴の規模は、南北




第26図　Ｅ－１号製鉄遺構、Ｅ－３号土坑跡




第27図　Ｅ－１号製鉄炉跡

6.7m×東西6.5m、土坑の半径は2.0m。点線で示した範囲が床面の平坦面である。

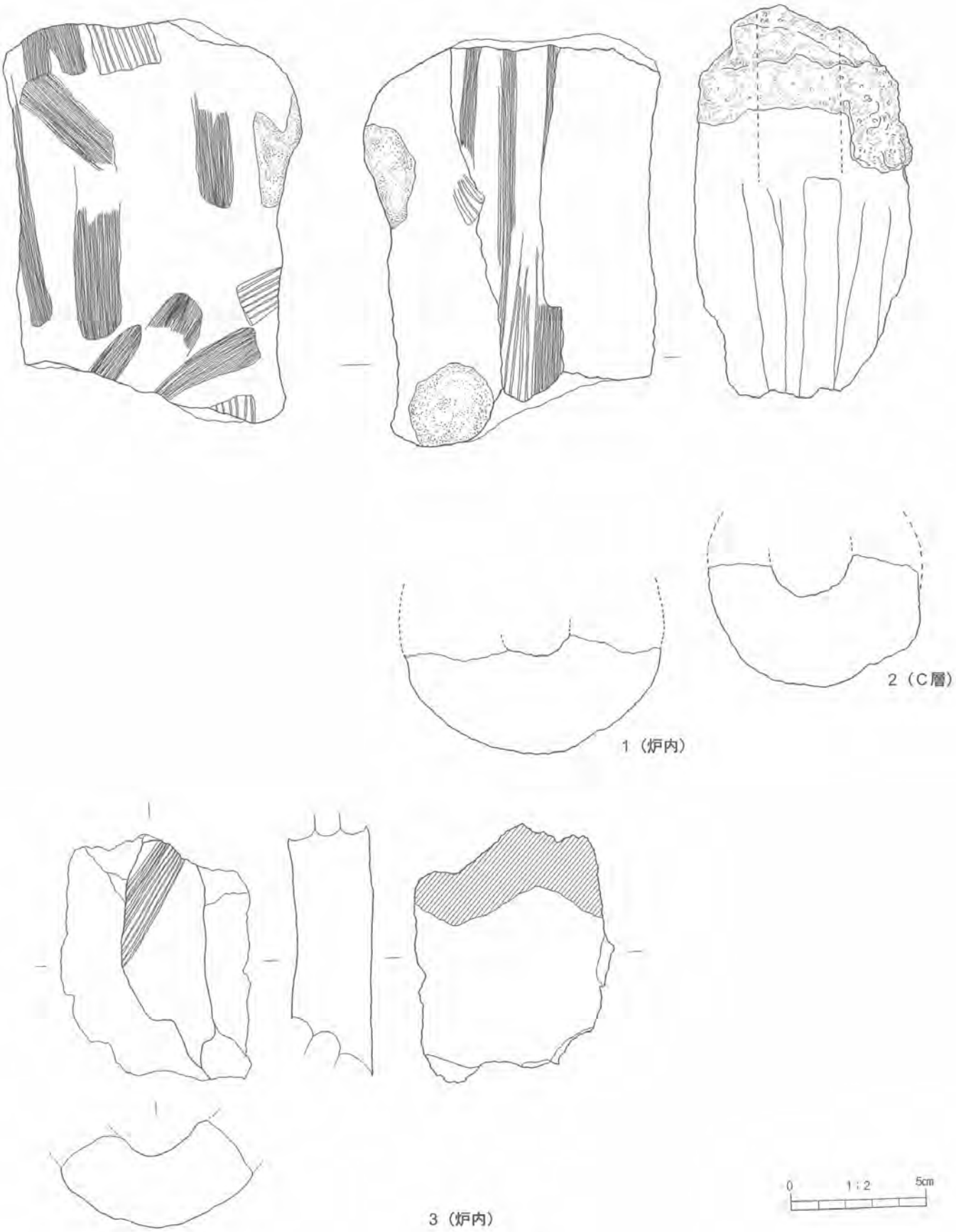
＜埋土＞　Ａ１層は表土である。Ｂ１、２層は細かい炭粒、焼土粒を多量に含んだ褐色層である。Ｃ層は炭粒を多量に含む黒色層で、Ｄ層は赤褐色の焼土層である。遺物を含まない褐色土Ｅ層が続き、鉄滓、羽口など多量の遺物を含むＦ層上面が操業面となる。Ｃ層、Ｄ層の炭と焼土層の広がりを確認したが、炉跡などは出土せず、廃棄されたものと判断した。

Ｊ１～Ｉ２層は炉周辺の堆積層である。Ｊ１層は大量の鉄滓、羽口片、焼土塊などを含む黒褐色層である。Ｉ層は炭塊、炭粒、焼土粒などを多く含む密な黒色土層である。

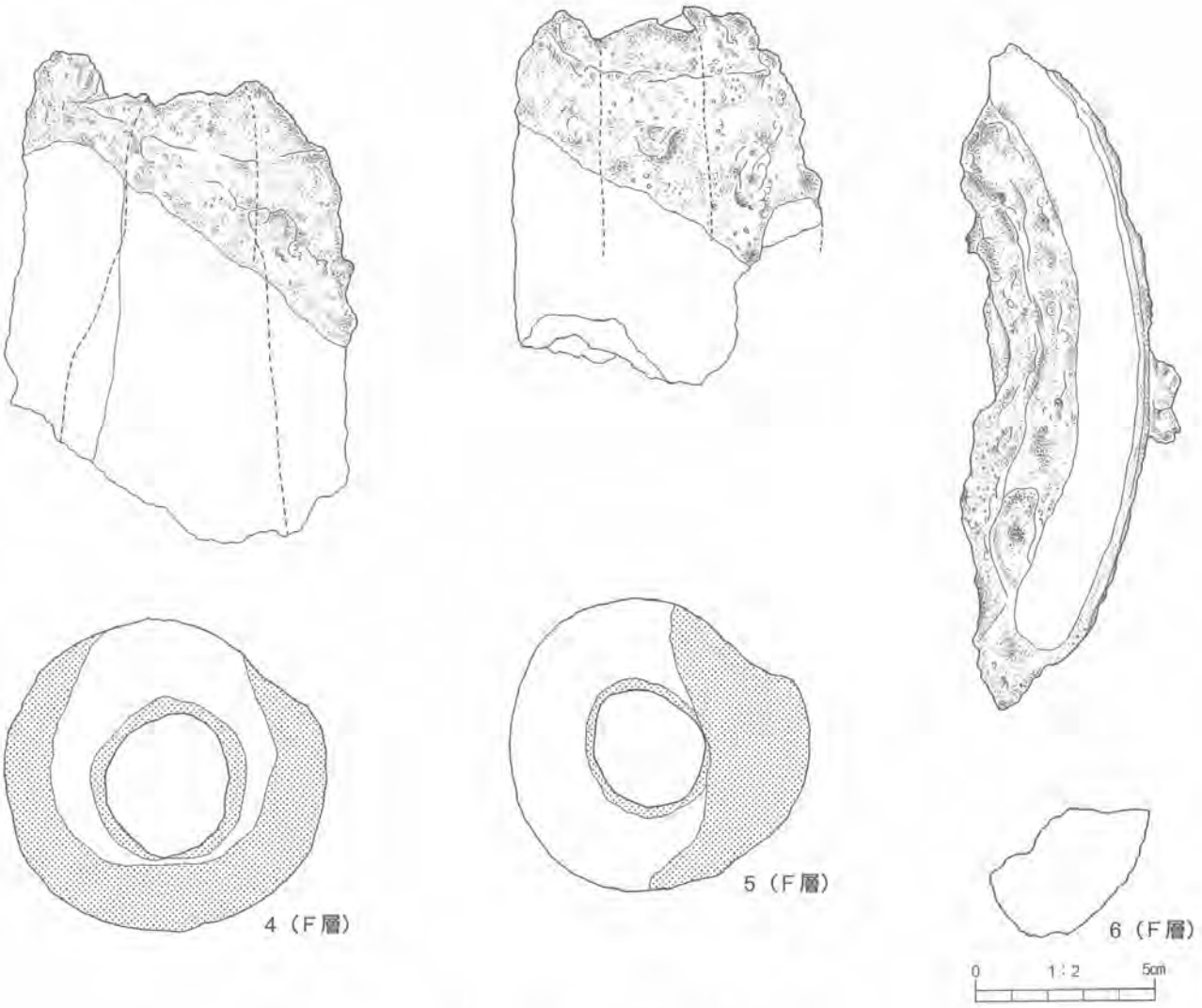
Ｇ１、Ｈ１は褐色土層で、Ｅ－３号の埋土である。

**Ｅ－１号製鉄炉跡**（第27図）

＜検出状況＞　竪穴の床面ほぼ中央に位置する。炉の南西側で炭の広がり（Ｉ層）、南東側で鉄滓、焼土、炉壁片などの堆積（Ｊ層）を確認した。炉の両側で幅30cmと35cmの２個の礫を検出した。




第28図　E－1号製鉄炉跡出土遺物（1）




第29図　E－1号製鉄炉跡出土遺物（2）

＜形状・規模＞　平面形は南半分がやや膨らむ楕円形で、船底状に掘り込まれ、壁はやや外傾しながら立上がる。炉床部の傾斜はなく、ほぼ水平である。長径1.7m、短径0.7～0.8mである。北半分がやや深く掘り込まれ、北側の最深部で40cm、南側で0.1mである。

＜埋土＞　K1、L1は焼土塊、粘土ブロックなどを含む崩壊土層。M1は流動滓などの細かい鉄滓や羽口片などを含む暗褐色土層。N1層は、炉床に形成された鉄滓の塊で、最大厚約15cmである。その下に還元焼成層O1と酸化焼成層P1が続く。Q1は黄褐色の構築土層で、さらにその下に再び還元焼成層R1と還元焼成層S1が続いている。T1はE－2号竪穴住居の埋土である。

下部構造が認められるのは炉床鉄滓が残る北側の部分だけである。また、北側の2重になっている下部構造から、少なくとも2度炉が構築されていることがわかる。

＜土坑＞　P1は、炉の東側で検出された小土坑であるが、柱穴か否かは不明である。

**出土遺物**（第28、29図）

1～6はふいごの羽口である。1はヘラナデ調整痕をもち、鉄滓は部部的に付着しているだけである。外径は約10cmと推定する。2はケズリ調整を施される。外径は8.0cm、孔径は約3.0

cmと推定する。３のトーンで示した部分は灰色に変色した部分である。４と５のトーンは焼成を受け赤褐色に変色した部分をしめしたものである。外径9.0cm、孔径3.5cmである。５は外径約8.0cm、孔は不整円形で孔径は3.0～3.5cmである。６はＦ層から出土した平坦面をもつ椀形滓である。この他に総計約137kgの鉄滓が出土しているが、内訳は巻末の鉄滓集計表（60頁）に示した。

### Ｅ－３号土坑跡（第26図）

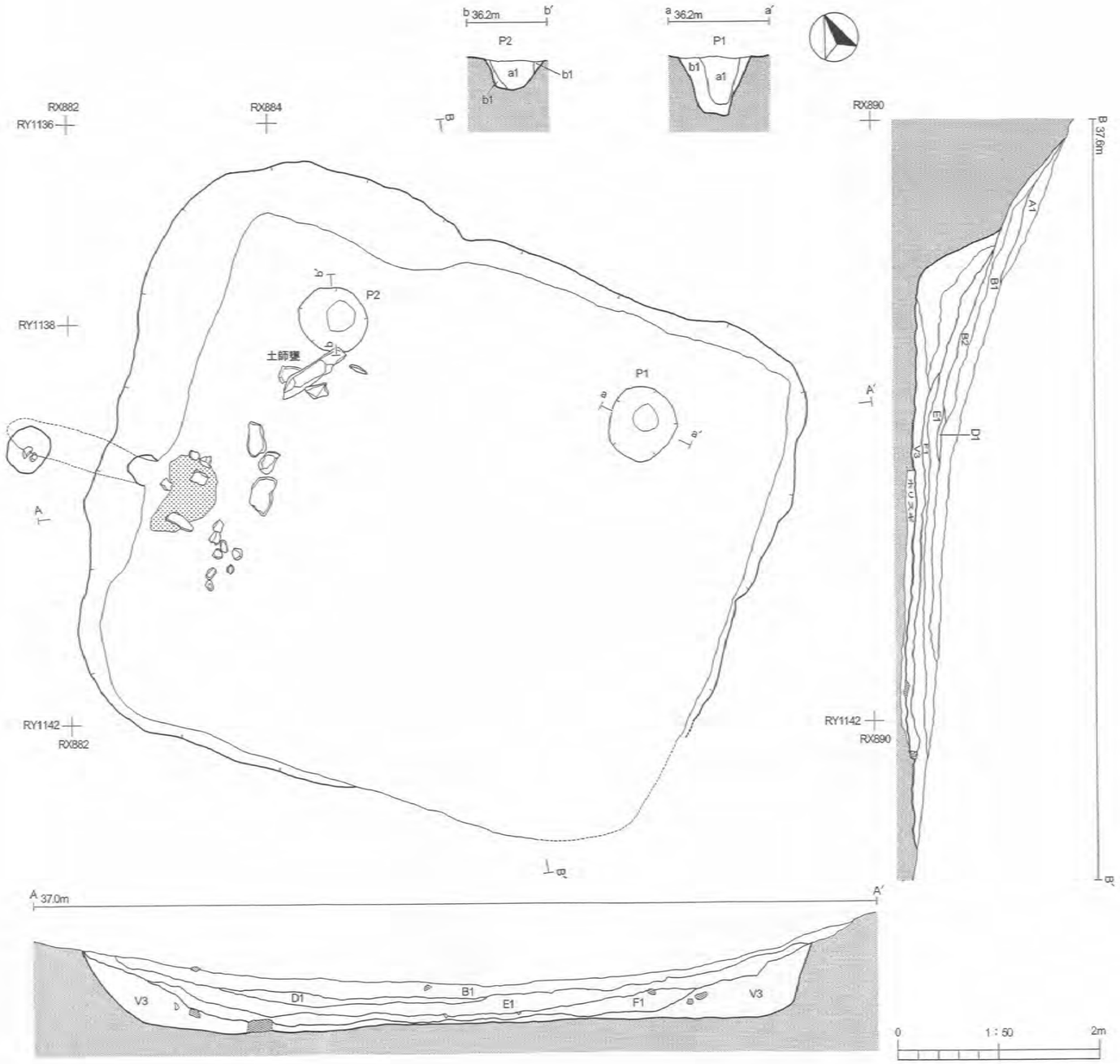
径約4.0mの土坑と推定される。遺物は上層から縄文土器片が数点出土したのみで、時代の決めてとはならず、時期は不明である。

Ｅ－１号製鉄遺構埋土土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| B1 | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR3/3　10%　砂壌土 | 軟、中、焼土粒、炭粒多 |
| B2 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR3/3　15%　砂壌土 | 軟、疎、焼土粒、炭粒多 |
| C1 | 10YR2/1　黒　砂壌土 | 10YR3/3　15%　砂壌土 | 軟、中、炭粒多 |
| D1焼土層 | 5YR4/8　赤褐　砂壌土 | 7.5YR4/6　20%　砂壌土<br>7.5YR3/4　10%　砂壌土 | |
| E1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 7.5YR4/4　10%　砂壌土 | 中、中 |
| F1 | 10YR3/3　暗褐　砂壌土 | 10YR2/1　15%　砂壌土 | 軟、疎、鉄滓、羽口、炭多 |
| G1 | 7.5YR4/6　明褐　砂壌土 | 7.5YR5/6　10%　砂壌土 | 中～固、中　→　下部に炭塊 |
| H1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 7.5YR4/6　10%　砂壌土 | 中、中 |
| I1 | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR4/6　5%　砂壌土 | 軟、疎、鉄滓、羽口、焼土塊など多 |
| J1 | 10YR2/2　黒褐　砂壌土 | 10YR2/3 10%　砂壌土 | 中、中～密、鉄滓少 |
| J2 | 10YR1.7/1　黒　砂壌土 | 10YR2/1　10%　砂壌土 | 中～軟、中、炭塊、焼土粒多 |

Ｅ－１号製鉄炉土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K1 | | | 羽口、焼土塊のブロック |
| L1 | | | 鉄滓ブロック→炉床 |
| M2 | | | 流動滓など細かい鉄滓、焼土塊多 |
| O1 | 2.5Y4/2　暗灰黄　砂壌土 | 2.5Y4/3　10%　砂壌土 | 固、疎→還元炎焼成層 |
| P1 | 5YR4/6　赤褐　重埴土 | 5YR4/4　10%　砂壌土 | 固、疎→薄く、短い酸化炎焼成層 |
| Q1 | 10YR5/6　黄褐　重埴土 | 10YR4/6　10%　重埴土 | 固、密、炭粒、焼土塊少→構築土層 |
| R1 | 2.5Y3/2　黒褐　砂壌土 | 2.5Y3/1　15%　砂壌土 | 固、疎→還元炎焼成層 |
| S1 | 5YR4/6　赤褐　重埴土 | 5YR4/4　10%　重埴土 | 固～中、疎→酸化炎焼成層 |
| T1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中～軟、中、炭粒、焼土塊　E－2号覆土 |
| U1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中～軟、疎、焼土塊、炭粒多 |




第30図　E－2号竪穴住居跡

**Ｅ－２号竪穴住居跡**（第30図）

＜検出状況＞　Ｅ－１号製鉄遺構の直下から検出した。

＜形状・規模＞　平面形は隅丸方形で、東西6.5m、南北5.5mである。南側の壁は確認できなかった。壁高は北側で80cm、西と東で60cmである。

床面は平坦である。周溝は検出されなかった。

＜埋土＞　Ｖ層上面が前述した製鉄炉の操業面である。Ｖ層がＥ－２号の埋土である。褐色土層で、遺物はほとんど出土せず、土師器甕の小片１点のみである。

＜柱穴＞　北側の壁に沿って２本検出している。形状は円形で、いずれも柱痕が確認できた。

(cm)

| PIT | Ｐ１ | Ｐ２ |
|---|---|---|
| 径 | 70 | 70 |
| 深 | 60 | 30 |

＜カマド＞（第31図）　西側の壁のやや南寄りに位置する。くり貫式である。火床部は浅く掘り窪めているが、袖石の埋設跡は確認できなかった。煙道は煙出しにむかってやや下降し、煙出しは内傾して掘られている。煙道の径は20cm～15cm、煙出しの径は約25cmを測る。埋土は３層に分れ、Ｋ３層が焼土層である。Ｋ１層上部からは10cm程の礫が多数出土した。

**出土遺物**（第32図）

遺物は床面からは土師器の坏、甕が出土しているが、坏は細かく砕けて図化できなっかた。坏はロクロ不使用で内黒処理されている。

１は床面から一括して出土した土師器甕である。口縁部に最大径をもつ小形の長胴甕で、底径は小さく、底部に膨らみをもち、体部で直線的に立上がる。口縁部は外反する。調整は口縁部にヘラナデ、底部、底面にケズリが施されている。２、３は土師器甕の口縁部で、いずれもヨコナデ調整を施されている。４は縄文土器（浅鉢？）の底部である。

Ｅ－２号住居跡土層観察表

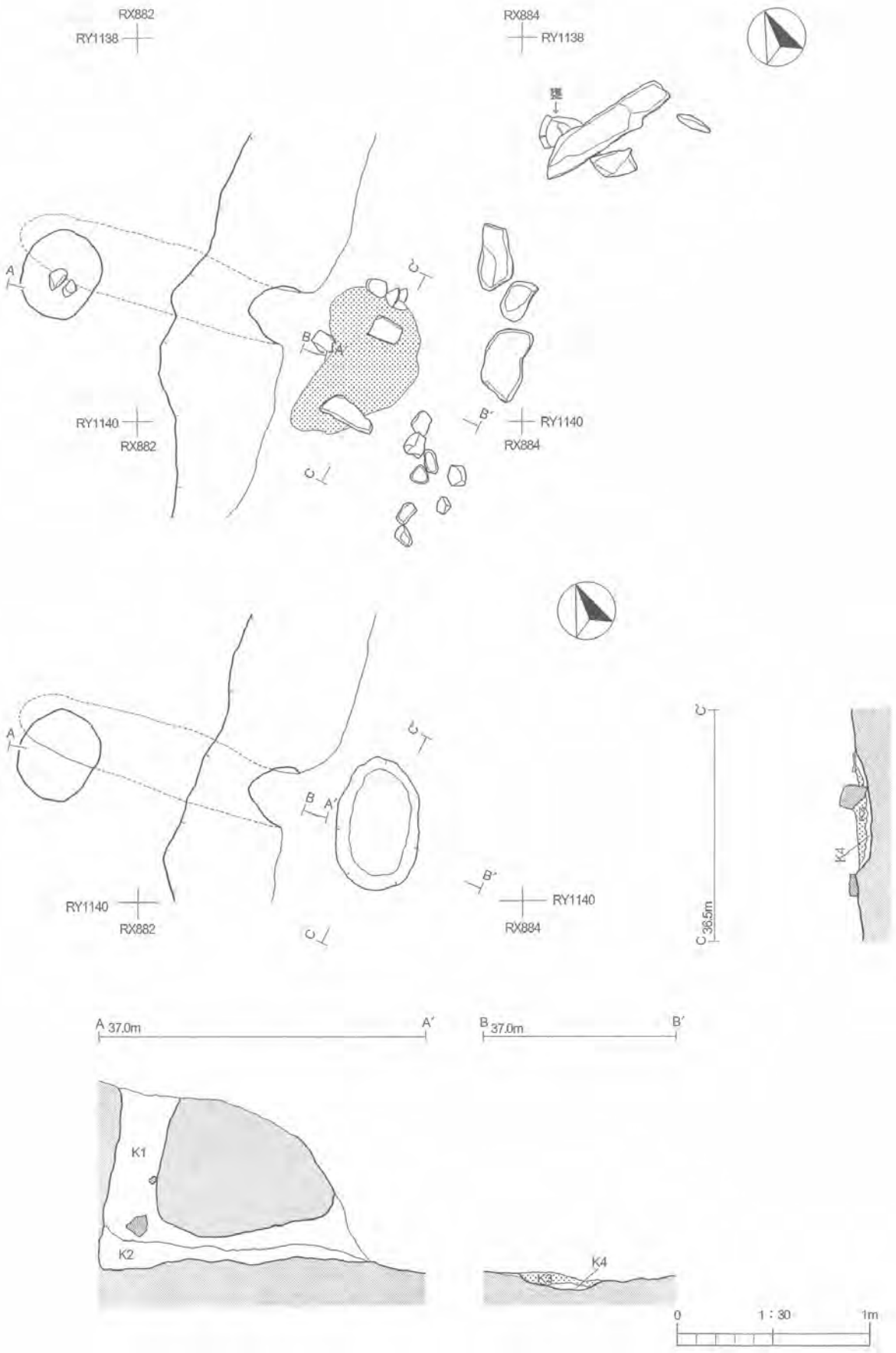
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ｖ１ | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 中、中 |
| Ｖ２ | 10YR5/6　黄褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中、中 |
| Ｖ３ | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 中、中、土師片 |

Ｅ－２号住居跡柱穴土層観察表

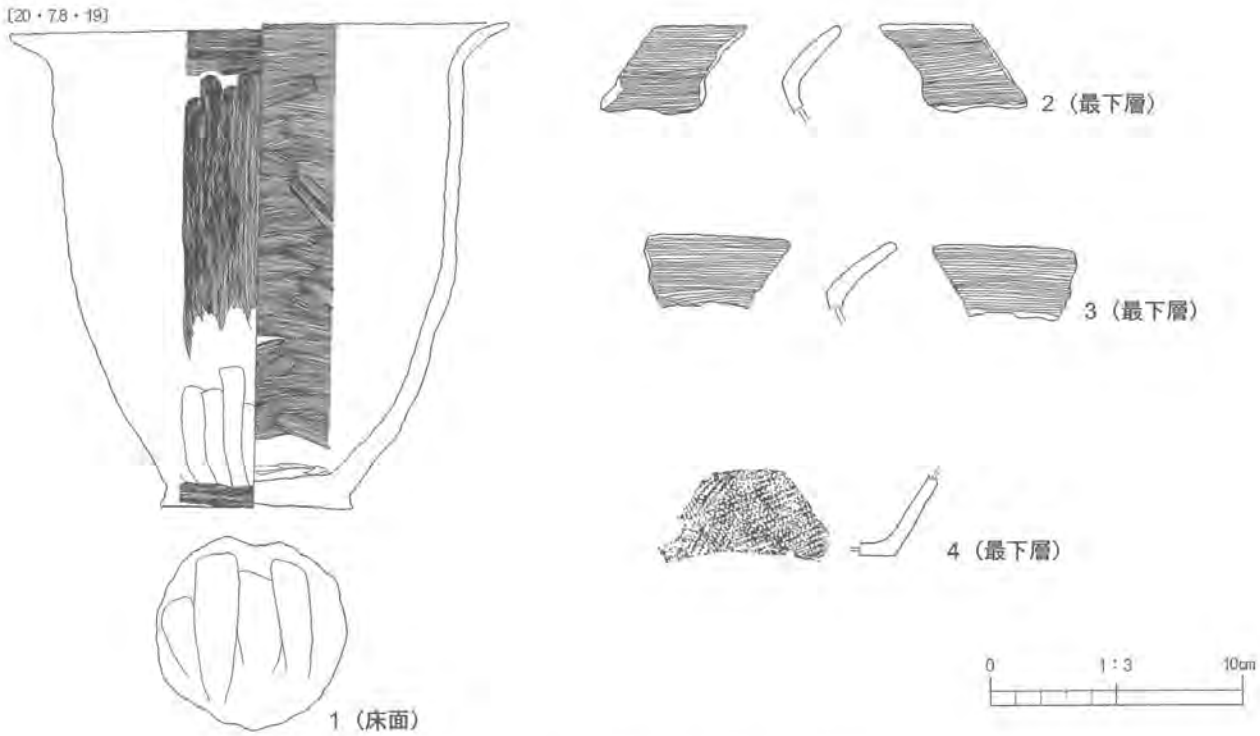
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ｐ１　ａ１ | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6　15%　砂壌土 | 中～固、中 |
| Ｐ１　ａ１ | 10YR5/6　黄褐　砂壌土 | 10YR5/8　10%　砂壌土 | 中～固、中 |
| Ｐ２　ａ１ | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6　15%　砂壌土 | 中～固、中 |
| Ｐ２　ｂ１ | 10YR5/6　黄褐　砂壌土 | 10YR5/8　10%　砂壌土 | 中～固、中 |

Ｅ－２号住居跡カマド土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ａ１ | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR6/4　15%　砂壌土 | 軟、疎　→円礫多 |
| Ｂ１ | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| Ｋ１焼土 | 5YR5/8　明赤褐　砂壌土 | 5YR4/6　10%　砂壌土 | 中、密 |
| Ｋ２ | 7.5YR5/6　明褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 中～固、中 |




第31図　E－2号竪穴住居跡カマド




第32図　Ｅ－２号竪穴住居跡出土遺物

**Ｄ－３号竪穴住居跡**（第33図）

＜検出状況＞　Ｄ区の北端、斜面の上位に位置する。地山面からの検出である。

＜形状・規模＞　住居の南西部のみの検出で、形状、規模ともに不明である。

床面は平坦である。柱穴、周溝は検出されなかった。

＜埋土＞　Ａ１の暗褐色土、Ｂ１の褐色土に大別される。

＜カマド＞（第34図）　壁際に石組みと焼土が検出されたが、煙道、煙出しは確認できなかった。火床部は、掘り窪めて袖石を埋設している。　Ｋ２層が焼土層であるが、焼き締ってはいない。

＜時期＞　床面の遺物から奈良時代に伴う。

**出土遺物**

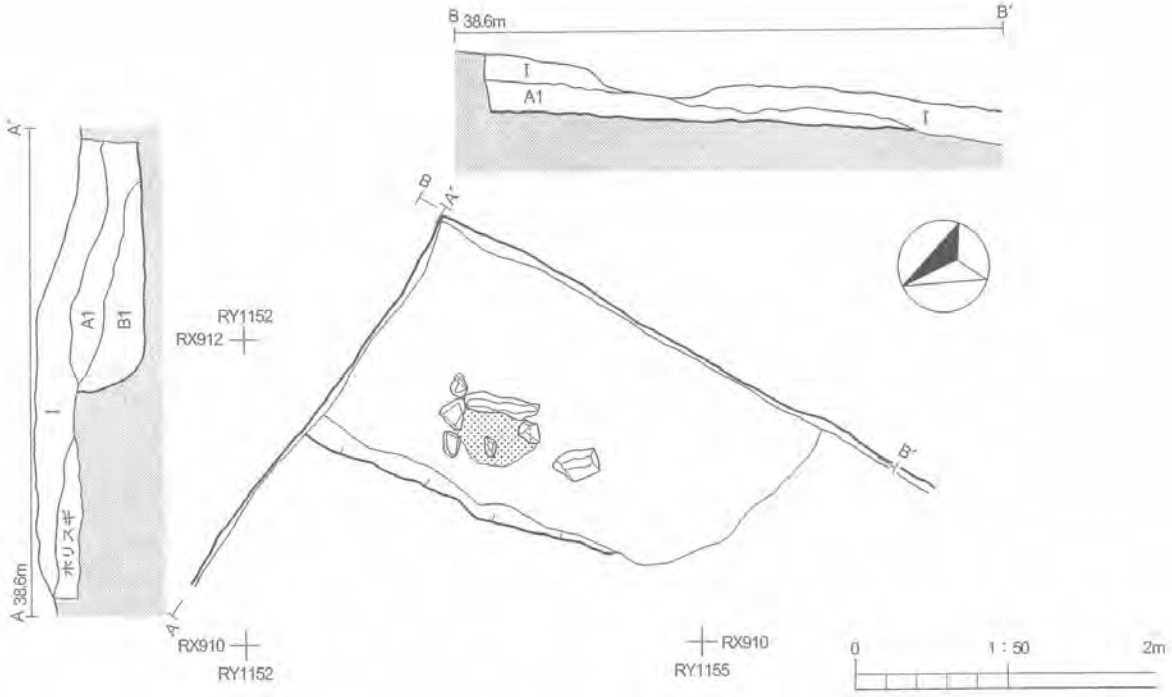
埋土から坏片が出土したが、小さすぎて図化できなかった。ロクロ不使用の内黒処理をほどこされた坏である。

**Ｄ－３号住居跡埋土土層観察表**

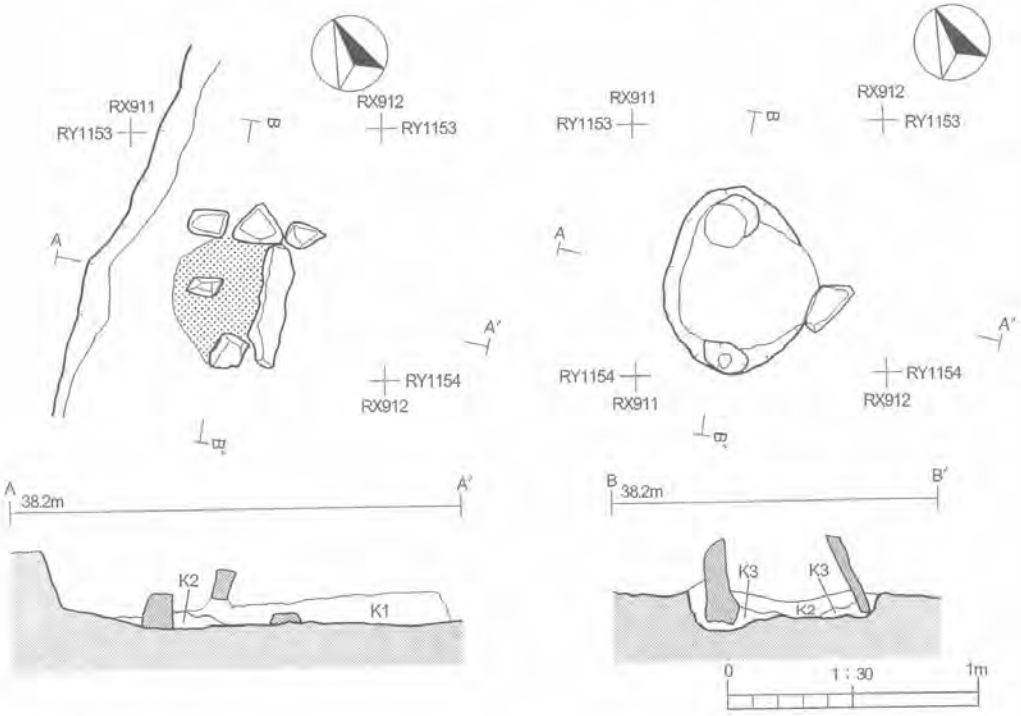
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ａ１ | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/6　20%　砂壌土 | 軟、疎 |
| Ｂ１ | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 軟、疎、土器 |

**Ｄ－３号住居跡カマド土層観察表**

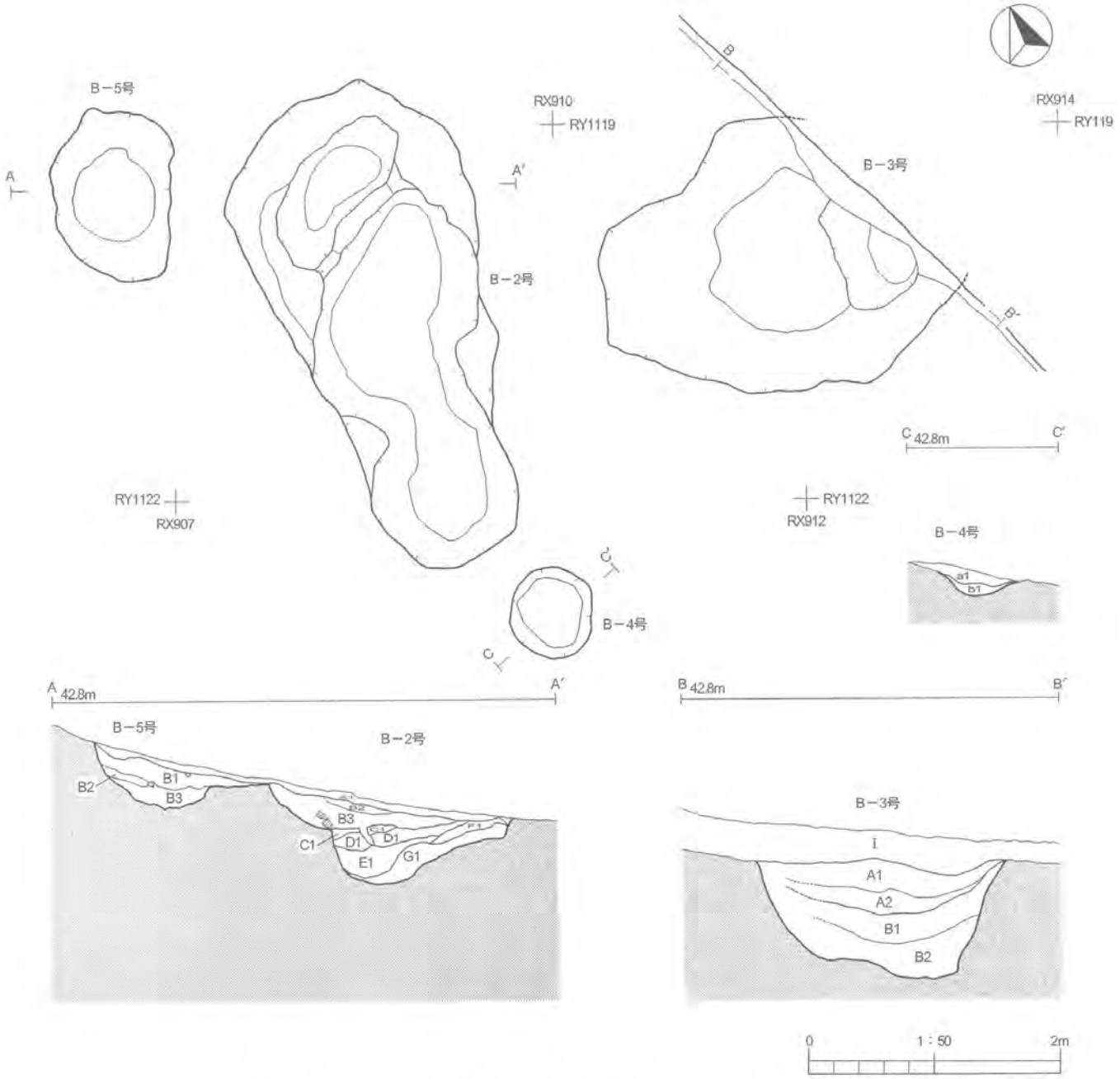
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ｋ１ | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| Ｋ２焼土 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 5YR4/8　10%　砂壌土 | 中～軟、中～密　→焼土粒多 |




第33図　D－3号竪穴住居跡




第34図　D－3号竪穴住居跡カマド



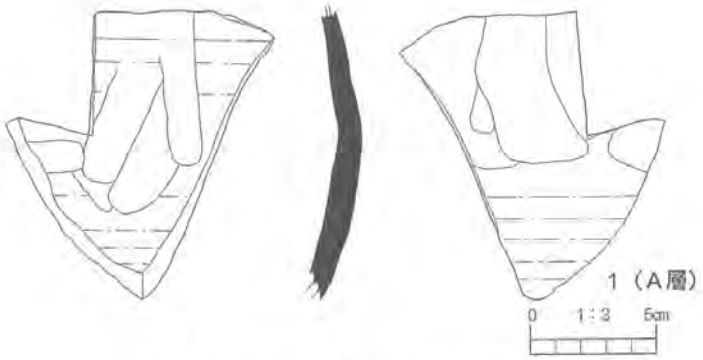

第35図　Ｂ－２号，Ｂ－３号，Ｂ－４号、Ｂ－５号土坑跡

ｂ．土坑跡

**Ｂ－２号，Ｂ－３号、Ｂ－４号、Ｂ－５号土坑跡**（第35図）

＜検出状況＞　Ｂ区の北側の緩斜面に位置し、Ｂ－１号住居跡とは尾根を挟んで反対側にあたる。検出面は地山面である。

＜形状・規模＞　Ｂ－２号土坑跡は、南北方向に長い不整楕円形である。規模は４ｍ×1.6ｍ、最深部で70cmである。Ｂ－５号土坑跡は、不整円形である。規模は1.3ｍ×90cm、最深部40cmである。Ｂ－３号土坑跡の形状は不整円形と推測する。規模は、径約2.0ｍ、最深部90cmである。Ｂ－４号は、形状は円形である。規模は径70cm、最深部で15cmである。




第36図　B－3号土坑出土遺物

＜埋土＞　B－2号のA～B層の黄色土とC～G層の褐色土に大別される。A～B層は、B－5号と共通しており同時期のものと判断した。B－3号は、黒褐色土と褐色土に大別される。

**出土遺物**（第36図）

B－2号の最下層と床から土師器片が出土している。1はB－3号のA層から出土した須恵器片である。内外面ともケズリ調整が施されている。

B－2号、B－5号土坑土層観察表

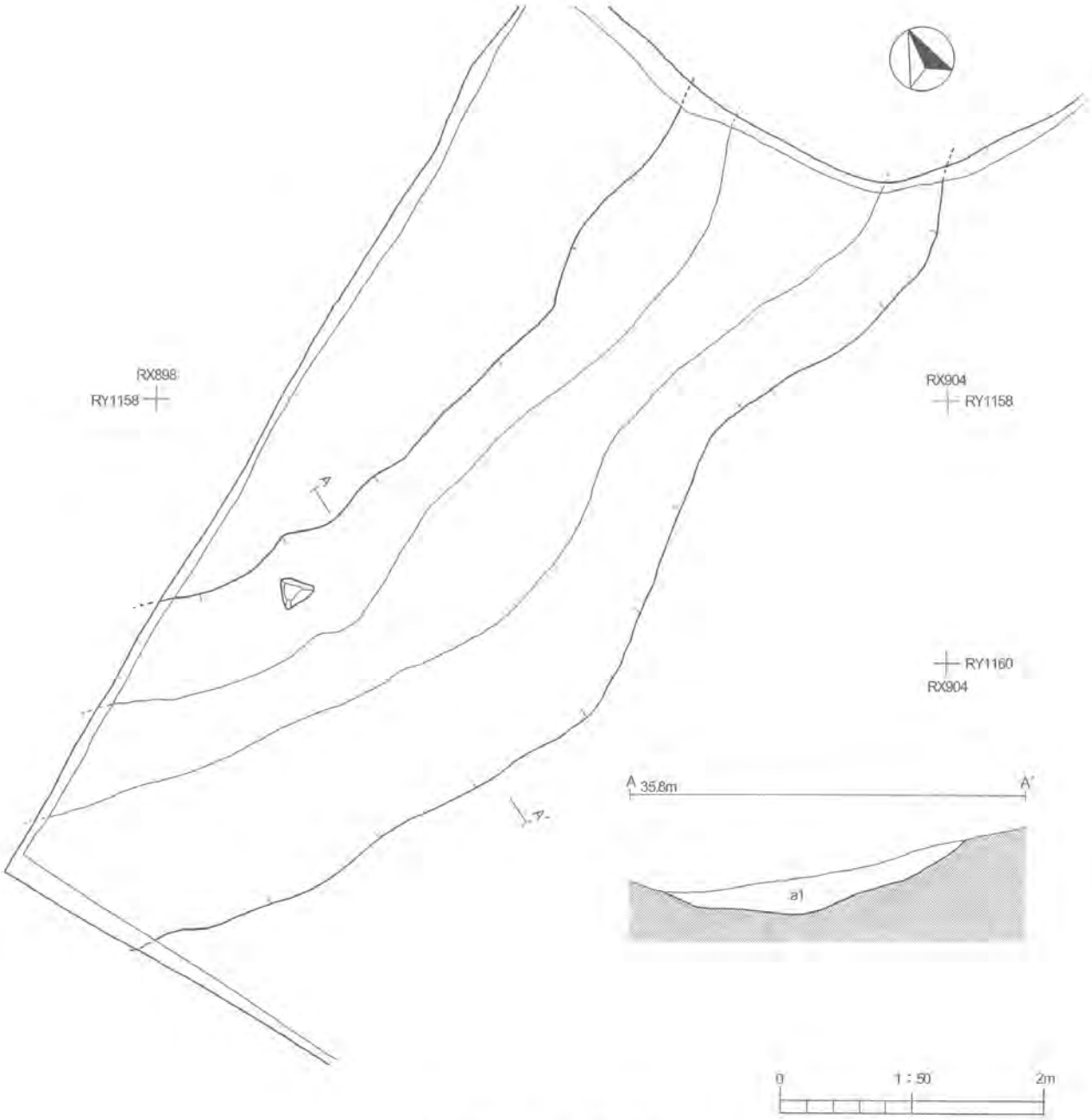
| 層　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | | | 表土1層 |
| B1 | 10YR5/6　黄褐　砂壌土 | 10YR5/4　10%　砂壌土 | 固、中 |
| B2 | 10YR5/8　黄褐　砂壌土 | 10YR6/6　5%　砂壌土 | 中~固、中 |
| B3 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 固、中 |
| C1 | 10YR5/8　黄褐　重埴土 | 10YR4/6　10%　重埴土 | 中~固、密　粘土層 |
| D1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR6/6　5%　砂壌土 | 軟、中 |
| E1 | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR4/6　15%　砂壌土 | 軟、疎 |
| F1 | 10YR5/8　黄褐　重埴土 | 10YR4/6　15%　砂壌土 | 固、密　粘土層 |
| G1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 中~固、中 |

B－4号土坑跡土層観察表

| 層　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| a1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR3/4　10%　砂壌土 | 固、中 |
| b1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR5/4　10%　砂壌土 | 固、中 |

B－3号土坑跡土層観察表

| 層　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| I | | | |
| Ib | 10YR3/3　暗褐　砂壌土 | 10YR2/3　10%　砂壌土 | 中、中、焼土、炭粒微 |
| A1 | 7.5YR3/2　黒褐　砂壌土 | 10YR3/4　10%　砂壌土 | 中~軟、中、須恵器 |
| A2 | 7.5YR3/2　黒褐（暗）砂壌土 | 7.5YR3/4　10%　砂壌土 | 軟、中、須恵器、炭粒多 |
| B1 | 10YR4/6　褐（明）　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| B2 | 10YR4/6　褐（暗）　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 軟、疎 |




第37図　D－4号溝跡

c．溝跡

**D－4号溝跡**（第37図）

＜検出状況＞　D区中央部、D－1号住居跡の西側から検出した。検出面は地山面である。

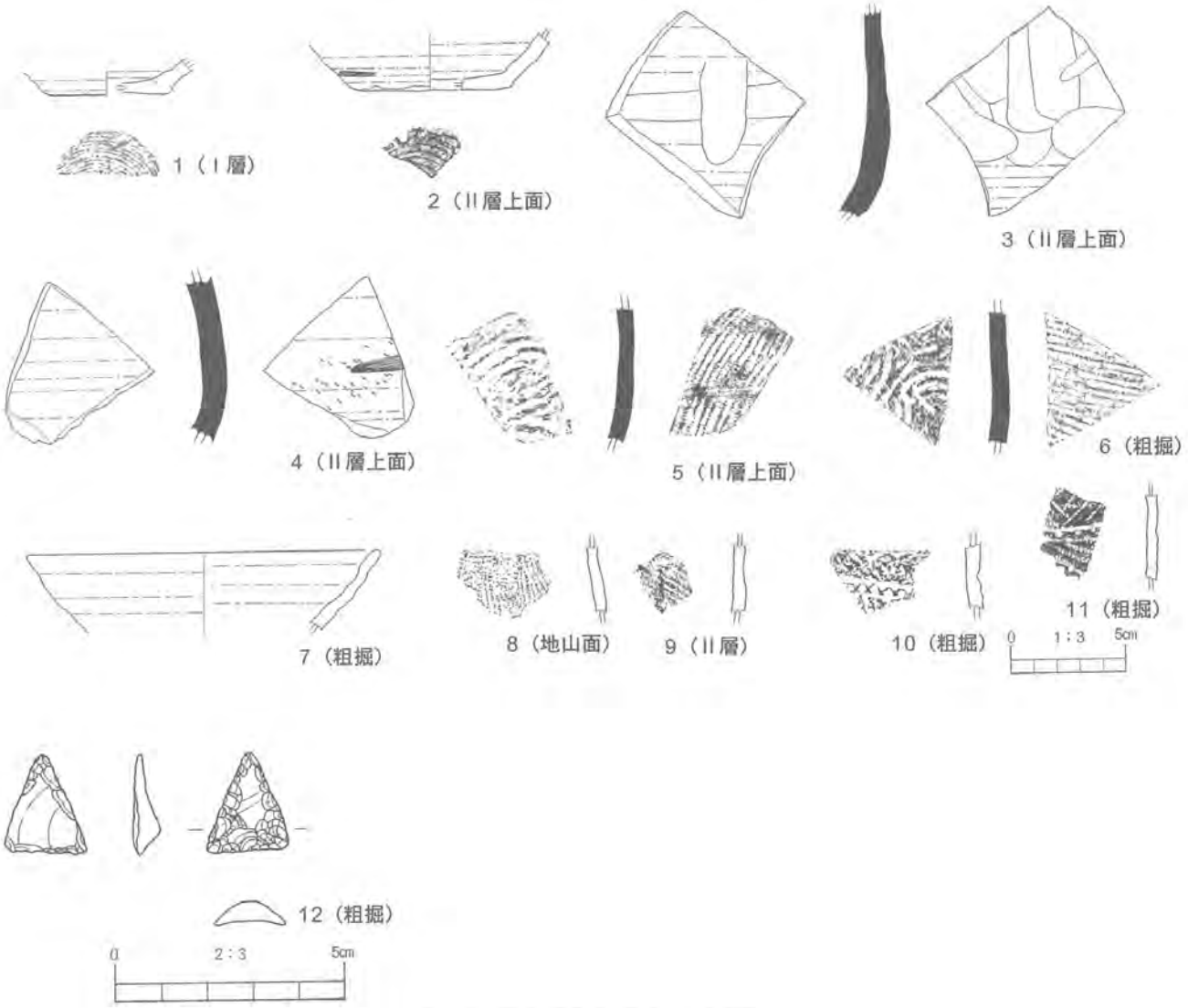
＜形状・規模＞　西側にむかって下る斜面を北東から南東方向に延びている。最大幅は2.5m、深さは検出面から約30cmである。

＜埋土＞　あまり締りのない暗褐色土層である。

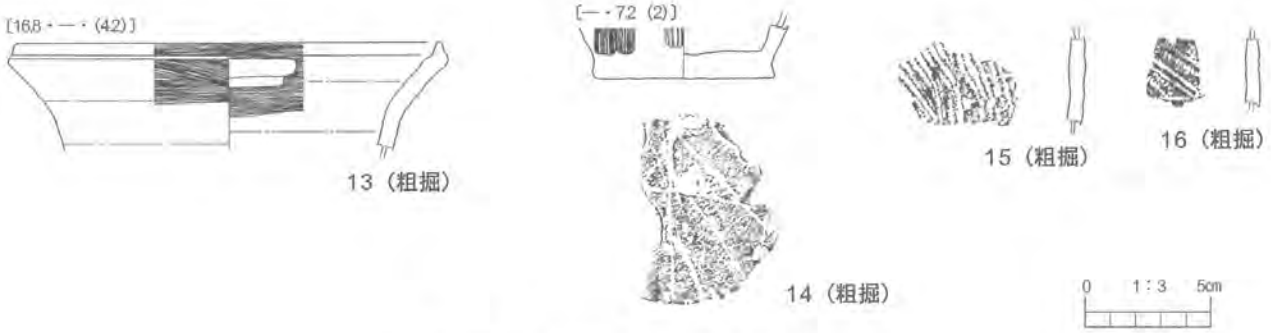
**出土遺物**（第38図）

須恵器の甕と思われる体部片1点のみである。内外面にタタキメ調整されている。

第38図　D－4号溝跡出土遺物




第39図　B区遺構外出土遺物




第40図　D区遺構外出土遺物

d．遺構外出土遺物

B区遺構外出土遺物（第39図）

遺物はB区とE区の間をつなぐ斜面で出土したものである。

1、2はロクロ使用の土師器の坏で、底部切離しは回転糸切りである。3から6は須恵器の体部片である。3はナデ、5、6はタタキメ調整が施される。7はロクロ成形の土師器坏で、いわゆるあかやき土器である。8～11は縄文土器である。8，9は撚糸文、10、11は交互刺突文が施されている。12は無茎鏃である。平基で基部は18mmを測る。

D区遺構外出土遺物（第40図）

いずれも粗掘りの際に出土したものである。

13はロクロ成形の土師器甕、あかやき土器の口縁部である。14は土師器甕の底部で、やや張出し、木葉痕をもつ。15、16は縄文土器である。15は撚糸文、16は沈線による施文である。

第１表　小堀内Ⅲ遺跡出土鉄滓集計表

| 形状 | 反応度 | E－1号製鉄炉跡 | D－1号住居跡 | 総計（g） |
|---|---|---|---|---|
| 飴状 | 合計：H | 2510 | | 2510 |
| | 合計：M | | | |
| | 合計：L | | | |
| | 合計：N | 10880 | | 10880 |
| 塊状 | 合計：H | 8290 | 140 | 8430 |
| | 合計：M | 3210 | | 3210 |
| | 合計：L | 18390 | | 18390 |
| | 合計：N | 32090 | 620 | 32710 |
| 炉内残留 | 合計：H | 430 | | 430 |
| | 合計：M | 5010 | | 5010 |
| | 合計：L | | | |
| | 合計：N | 33760 | | 33760 |
| 炉壁 | 合計：H | | | |
| | 合計：M | | | |
| | 合計：L | | | |
| | 合計：N | 9700 | | 9700 |
| 炉壁を噛む | 合計：H | | | |
| | 合計：M | | | |
| | 合計：L | | | |
| | 合計：N | 7000 | | 7000 |
| 椀形 | 合計：H | 7440 | | 7440 |
| | 合計：M | | | |
| | 合計：L | 620 | | 620 |
| | 合計：N | 6320 | 600 | 6920 |
| 全体の合計：H | | 18670 | 140 | 18810 |
| 全体の合計：M | | 8220 | | 8220 |
| 全体の合計：L | | 19010 | | 19010 |
| 全体の合計：N | | 99750 | 1220 | 100970 |

鉄滓を形状により分類したものをさらにそれらの金属鉄の残留度を示すメタルチェッカーによる反応度を表にまとめたものである。[1]

H：小さな金属鉄を残留する。　M：一般の金属鉄を残留する

L：大きな金属鉄を残留する　　N：金属鉄を含まない。

出土鉄滓の総量は、炉壁の分を除いて137kgである。また炉内残留に含めた炉床に形成された鉄滓の重量は、25.5kgであった。

1．本報告書の鉄滓の形状分類に際しては、下記の報告書を参考にしました。
佐々木清文ほか　1996「山ノ内Ⅱ遺跡調査報告書」　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

## １－３．まとめ

竪穴住居跡５棟、製鉄炉跡１基、土坑跡４基が出土している。土器、製鉄炉については「調査のまとめ」で他の遺跡のものと一括して検討したいので、ここでは住居跡、土坑跡、遺構外出土遺物などについてのみまとめておきたい。

### ａ．住居跡について

住居跡は、旧道で区切られた２つの南向きの斜面に立地している。北側の斜面の中位にＢ－１号住居跡、下位に製鉄炉跡とＥ－２号住居跡、南側の斜面では、上位にＤ－３号住居跡、中位にＤ－１号住居跡、下位にＤ－２号住居跡がそれぞれ位置している。製鉄炉跡がＥ－２号住居跡と重複しているほかは、住居跡の切り合い関係はない。Ｄ－１号とＤ－２号の２棟が鍛冶炉をともなっている。Ｂ－１号、Ｄ－１号、Ｅ－２号は奈良時代前半～中頃に伴う住居跡である（巻末「調査のまとめ」）。

住居跡の平面形状はすべて隅丸方形で、いずれもカマドを西壁に設けている。柱穴を勾配側に配置する点も類似点といえるように思われる。さらに埋土をみた場合、前述したようにＢ－１号住居跡、Ｄ－１号住居跡、Ｄ－２号住居跡の埋土最下層上面に焼土層が堆積している点、Ｄ－１号やＤ－２号の埋土層に須恵器の坏などが含まれている点なども注目される。

また住居跡の立地環境を見たとき、「斜面」に立地するというのが大きな特徴といえるように思われる。これは、尾根の平坦部や山麓の緩斜面などの良好な環境に立地する一般的な集落と大きく異なるところである。海を目の前にしながそれを避けるようにわざわざ見晴しの悪い場所を選んで居を構えていることは、たんに海からの強い風を避けただけのことなのであろうか。この集落がもつ製鉄という「専業的性格」と関連するものと思われる。

また、遺物で時期を特定できなかったＤ－３号、Ｄ－２号の住居跡についても配置、構造、埋土状況などからみて製鉄炉跡も含めて一つの集落を形成していたのではないかという想定の可能性があるように思われる。上位に規模の大きなＢ－１号住居跡、中位～下位に鍛冶炉を伴った中規模のＤ－１号、Ｄ－２号の住居跡、そして製鉄炉という配置である。製鉄遺構を伴った集落の立地、構成などは、今後の大変興味深い課題と思われる。さらに多くの資料が集るのをまって再検討していきたい。

### ｂ．土坑跡について

Ｂ区の規模の大きなＢ－３号土坑からは須恵器片が出土しており、大まかに９世紀代のものと推定され、Ｂ－１号住居跡よりは新しいことは確認できたが、その性格については不明である。Ｂ－２号土坑は掘り方の形状、埋土に含まれていた粘土などから製鉄炉などを築こうとして中途で放棄した跡とも考えられる遺構である。

**住居跡一覧表**

| 住居番号 | 平面図 | 規模 | 柱穴数 | カマドの位置 | 煙道 | 鍛冶炉 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Ｂ－１号住居跡 | 隅丸方形 | 7.0m×6.0m | 2 | 西壁 | 検出せず | | 奈良 |
| Ｄ－１号住居跡 | 隅丸方形 | 4.8m×4.6m | 2 | 西壁 | 上り勾配 | ○ | 奈良 |
| Ｄ－２号住居跡 | 隅丸方形 | 6.0m×6.0m | 4 | 西壁 | 水平 | ○ | |
| Ｅ－２号住居跡 | 隅丸方形 | 6.5m×5.5m | 2 | 西壁 | 下がり勾配 | | |
| Ｄ－３号住居跡 | 不明 | 不明 | － | 西壁 | 検出せず | | |

c．植物遺存体について

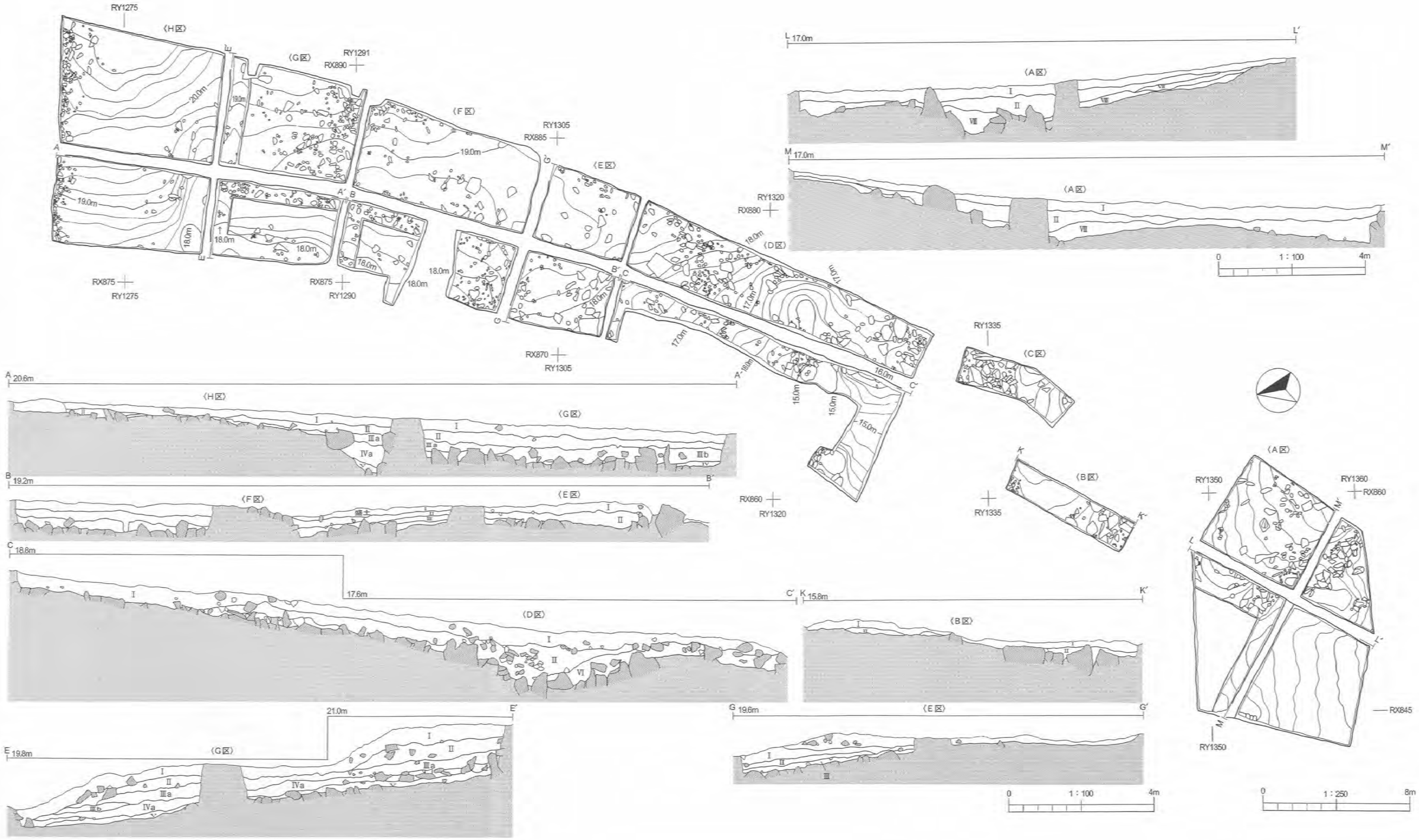
Ｄ－１号埋土最下層の焼土から炭化したイネが出土している。今回の調査では、南の赤前Ⅳ八枚田遺跡からもやはり微量であるがイネが出土している。さらに磯鶏館山遺跡から出土例も報告されている。[1]

d．遺構外出土遺物について

遺構外出土遺物は、Ｂ区から出土した数片の「あかやき土器」と、Ｄ－１号、Ｄ－２号住居跡の埋土から出土したの須恵器やロクロ使用の坏などが注目される。

1．竹下將男　他　1995「磯鶏舘山遺跡発掘調査報告書」宮古市教育委員会

# 2. 赤前VI釜屋ヶ沢遺跡




第41図　赤前Ⅵ釜屋ケ沢遺跡調査区全体図

## ２－１．調査概要と基本層序

赤前Ⅵ釜屋ケ沢遺跡は、宮古市の遺跡コード番号LG54-0160として登録されている。遺跡は山麓に立地し、北の沢と南の尾根に挟まれた斜面である。今回の調査は緩斜面を南北に横断する形で行われた。

<検出状況>（第41図）Ｈ区からＦ区までは削平された平坦面が続いてる。Ｆ区からは昭和初期に建てられたという家屋の礎石が盛土の上に残されていおり、その頃に削平されたものと思われる。Ｄ区からＡ区にかけては、いくつかの沢で開析されて大きく落込んだ箇所もあり、起伏に富んだ地形である。Ｄ区のⅥ層、Ａ区のⅧ層で水が湧き出している。

遺物はＡ区に集中し、とりわけⅡ層上面、Ⅱ層下部から出土している。Ⅱ層上面からは薄い焼土層のほかに染付磁器、角釘、煙管、「寛永通宝」などが出土しており、江戸時代の生活面であったことが推定される。Ⅱ層下部出土の土師器、須恵器などの遺物は、南側尾根上（赤前Ⅴ柳沢遺跡Ａ区）で検出した平安時代の住居跡に関連するものと思われる。

## ２－２．検出した遺物

**出土遺物**（第42、43図）

１は縄文土器である。沈線により「Ｌ」字状の無文帯を区画する。大木10に伴う。

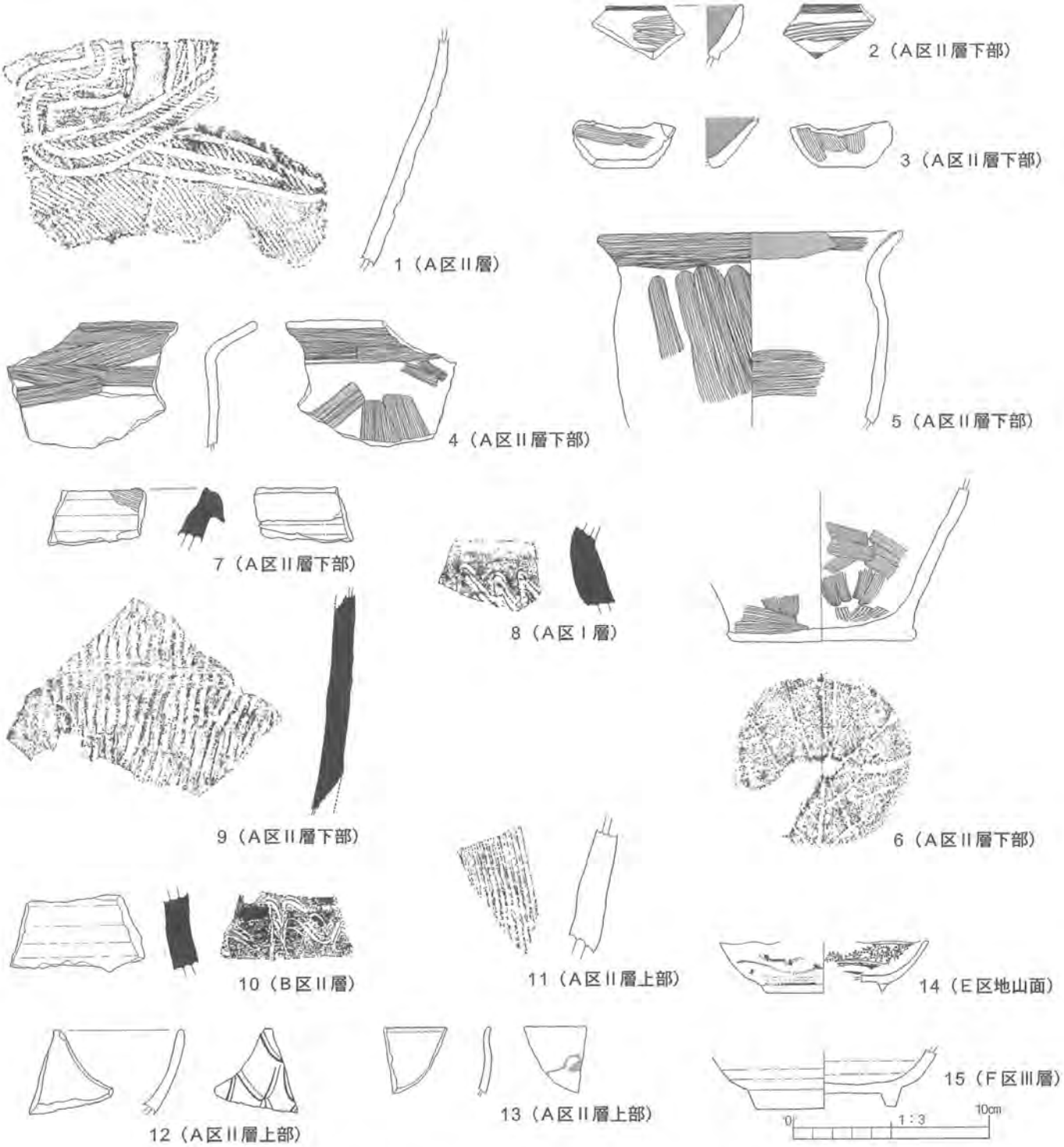
２～６は土師器である。２、３は黒色処理された坏の口縁部と体部である。４～６は甕である。４の口縁部は長く、外反しまっすぐ立上がる。５は小形の長胴甕である。口縁部の内面には炭化物が付着する。６は木葉痕をもつ底部で、張出しは弱い。

７～10は須恵器である。７は甕あるいは壺の口縁部である。８～10は体部片である。９は外面にタタキメ調整痕を残し、８、10は外面にヘラで引っ掻いたような波状の調整痕？をもつ。いずれも胎土は密で焼成良好である。

11～15は陶磁器である。11は擂鉢である。両面に鉄釉が施される。12～14は染付磁器である。12碗で、は外面に二重網目文を施文する。肥前産のいわゆる「くらわんかで」である。→18世紀前半～中葉。13は湯飲みか。内湾しながら直に立上がり、口縁部がわずかに外反する。外面に雲文を施し、釉には細かい貫入がはいる。産地年代不明。14は皿である。三角高台に成形され、内面にタコ唐草文、外面に草文を施す。19世紀中葉以降のものである。15は陶器の皿である。高台は面取りされ、畳付をのぞき全面に薄い緑釉が施されて、細かい貫入がはいる。胎土はにぶい黄橙で、密、焼成は良好である。

赤前Ⅵ釜屋ケ沢遺跡土層観察表

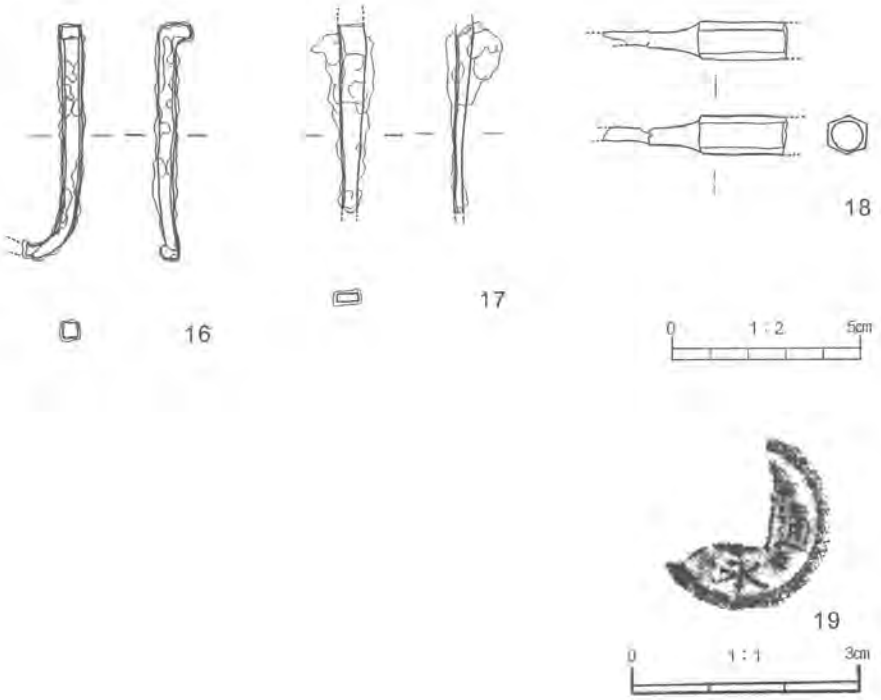
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 10YR2/3黒褐色　砂壌土 | 10YR2/2　15%　砂壌土 | 表土、陶磁器片 |
| Ⅱ | 10YR2/1黒色　砂壌土 | 10YR2/3　15%　砂壌土 | 土師器、石器、陶磁器 |
| Ⅲ | 10YR3/4暗褐色　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | やや固 |
| Ⅳ | 10YR2/3黒褐色　砂壌土 | 10YR3/3　15%　砂壌土 | 北側で検出された土層 |
| Ⅴ | 10YR2/2黒褐　シルト質埴壌土 | 10YR2/1　15%　シルト質埴壌土1 | 水性堆積層 |
| Ⅵ（D区Ⅲ） | 10YR2/1黒色　砂壌土 | 7.5YR3/410%、砂壌土<br>5YR4/815%　砂壌土 | 焼土塊 |
| Ⅶ（A区） | 7.5YR3/4暗褐色　砂壌土 | 7.5YR4/6　10%、砂壌土<br>10YR4/65%　砂壌土 | 炭塊、粘土塊 |
| Ⅷ（A区Ⅲ） | 10YR3/2黒褐色　砂壌土 | 10YR2/4　15%　砂壌土 | 大礫 |




第42図　赤前VI釜屋ケ沢遺跡遺物包含層出土遺物（1）

16、17は鉄製品である。いずれも釘である。16はほぼ完形であり、17は胴部である。16は長さ6.5cm、幅４mmである。

18、19は銅製品である。18はキセルの吸口である。ラウのつなぎの部分は六角に面取りしている。長さ５cm、径１cmである。19は銅銭で、銭銘は「寛永通宝」である。




第43図　赤前Ⅵ釜屋ヶ沢遺跡遺物包含層出土遺物（2）

## ２－３．まとめ

遺構は出土せず、Ａ区で遺物包含層のみを検出した。包含層の年代は２時期に分れる。江戸時代の遺物を含む層と平安時代、縄文時代の遺物を含む層である。

江戸時代の遺物としては肥前産の染付磁器が注目されるが、全体的にみて江戸時代後期の遺物と思われる。

平安時代の遺物は大まかに９世紀代のものと思われる。このことはＡ区のすぐ南に位置する尾根（赤前Ｖ柳沢遺跡Ａ区）から出土した平安時代の竪穴住居跡の年代とも重なり、住居跡に伴う遺物も含まれていると思われる。

遺構の存在を考えてみた場合、今回の調査結果から調査区の南半分、Ａ区からＦ区の間はいくつかの沢に開析されてかなり落込んだ湿地を形成していることがわかったことから、調査区の東の山麓に存在する可能性が高い。

# 3. 赤前Ⅴ柳沢遺跡

## ３－１．調査の概要と基本層序

赤前Ｖ柳沢遺跡は、宮古市遺跡コードLG54-0089として登録されている遺跡である。

山麓の二つの尾根と二つの扇状地で構成される。北側の尾根をＡ区とした。その南の扇状地は、沢を境として北側をＤ区、南側をＢ区とした。南側の尾根は幅が狭くとくに調査区を設定せず、その南の扇状地をＣ区とした。

Ｂ，Ｃ区の調査は平成６年に、Ａ、Ｄ区の調査は平成７年に行った。

Ａ区（第44図）

宮古湾に向かって延びる尾根である。尾根は中位から低位にかけて比較的広い平坦部をもつ。平坦部からは竪穴住居跡、土坑跡、焼土以降などが出土している。

基本層序

Ⅰ層　締りのない暗褐色土で、全域に分布する。

Ⅱ層　締りのない黒褐色土で、主に北側の斜面に堆積する。

Ⅲ層　黄褐色土の混じるやや締った褐色土で、地山への漸移層である。

Ｂ区（第46図）

尾根から沢にむかう北向きの斜面である。

Ⅰ層　締りのない黒褐色土層である。

Ⅱ層　やや締りがあり、密な黒色土層で、斜面の北側に堆積する。

Ⅲ層　やや締りもある黄褐色土層で、斜面の北側に堆積する。北側上面に大小の礫が多く混入する。

Ⅳ層　締りがあり、密な黒色土である。旧表土である。

Ⅴ層　締りのある暗褐色土層である。

Ⅱ、Ⅲ層はいずれも斜面の北側、沢の縁に堆積しており、沢が氾濫した際に堆積したものと思われる。

遺物はⅠ層から陶磁器片、Ⅳ層から縄文土器小片３点が出土しているが、図化できなかった。

Ｃ区（第47、48図）

南側の扇状地であるが、南半分（Ｃ３区とＣ４区の間）はかつて水田として利用されていた湿地である。

基本層序

Ｃ１～Ｃ２区（第47図）

Ⅰ層　締りのない暗褐色土である。低地で厚く堆積する。

Ⅱａ層　締りのない黒褐色土で、おもに斜面部に堆積する。

Ⅱｂ層　締りのない暗褐色である。

Ⅲ層　やや締りがある黒褐色土である。

Ⅳ層　締りのない褐色土である。大小の礫を含む地山への漸移層である。

Ｃ３、Ｃ４区（第48図）

Ⅰ層　締りのない褐色土層である。

Ⅱ層　締りのない黒褐色土層である。湿地側は一部グライ化している。

Ⅲ層　やや締りのある褐色土層である。

Ⅳ層　やや締りのある暗褐色土層である。

Ⅴ層　固めの褐色土層である。

Ⅵ層　締りがあり密な黒褐色土層である。水分を含み一部酸化している。

Ｃ４区のⅢ～Ⅴ層の褐色土層については人為的なものか否かについては確認できなかった。

遺物は、Ｃ１、Ｃ２区のⅠ層から土師器、陶磁器の小片が数点、Ⅱ～Ⅲ層から縄文土器、土師器の小片が数点出土している。Ｃ３、Ｃ４区からは出土していない。

Ｄ区（第45図）

Ｄ区は、Ａ区とＢ区の間にはさまれた緩斜面で、畑地として使用されていた。Ｄ１～Ｄ５区に分けて調査を行った。中央のＤ３区から竪穴住居跡と土坑跡が出土している。

基本層序

Ⅰ層　締りのない黒褐色土層である。

Ⅱ層　締りのない黒色土層である。旧表土層である。

Ⅲ層　やや締りのある褐色土層である。Ｄ１、Ｄ２区で観察された層である。

Ⅳ層　締りがあり密な砂質の黒褐色土層である。Ｄ４、Ｄ５区で観察された層である。

Ⅴ層　締りがあるがやや粗い砂質の暗褐色土層である。Ｄ４、Ｄ５区で観察された。

Ⅵ層　締りのある黒褐色土層である。住居跡の検出面である。

Ⅶ層　締りのある粗い砂質のにぶい黄褐色土層である。

Ⅷ層　締りのある粗い砂質の黄褐色土である。

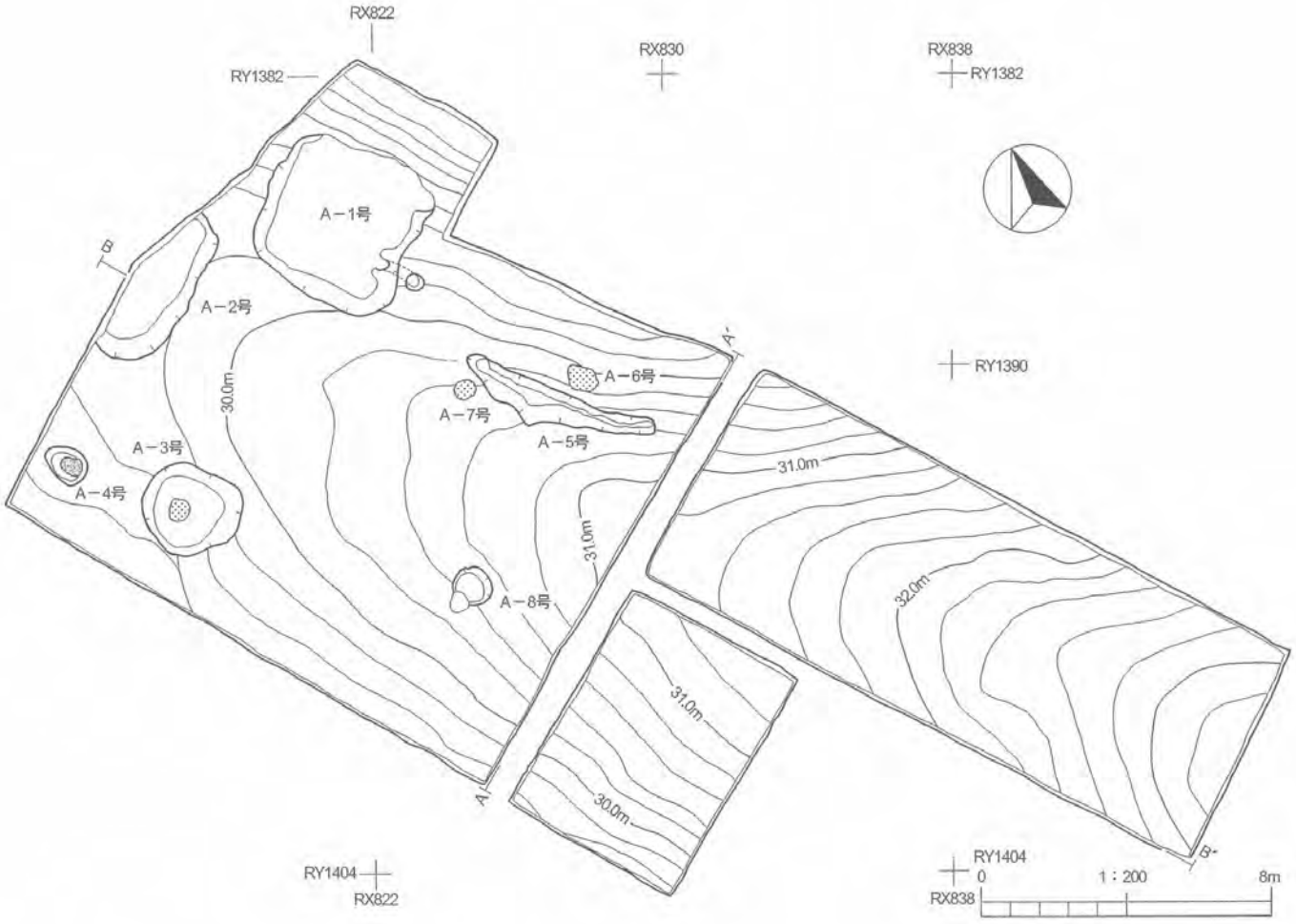
Ⅸ層　締りのある密な砂質の暗褐色土である。

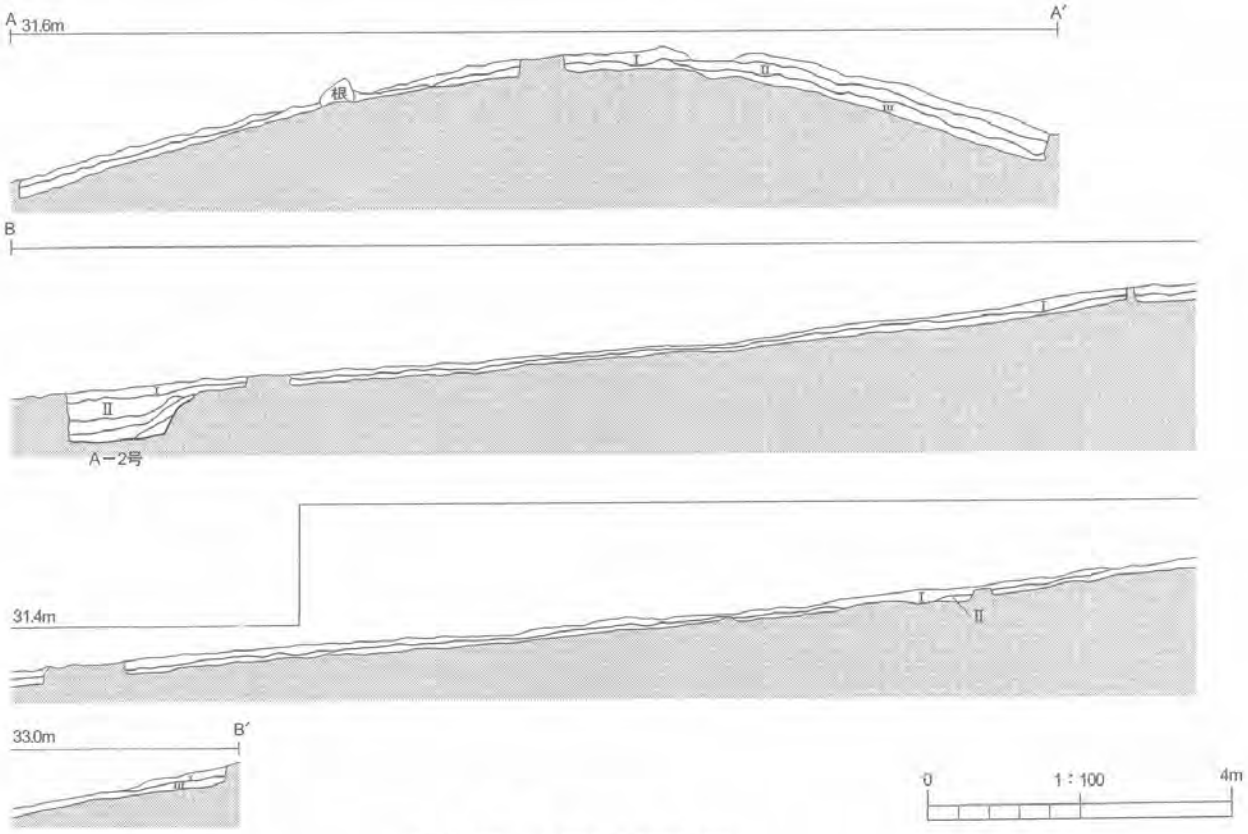
Ⅹ層　締りがあり密なにぶい黄褐色土である。大小の礫を含む地山への漸移層である。

竪穴住居跡はいくつかの水性堆積層の上の掘り込まれている。

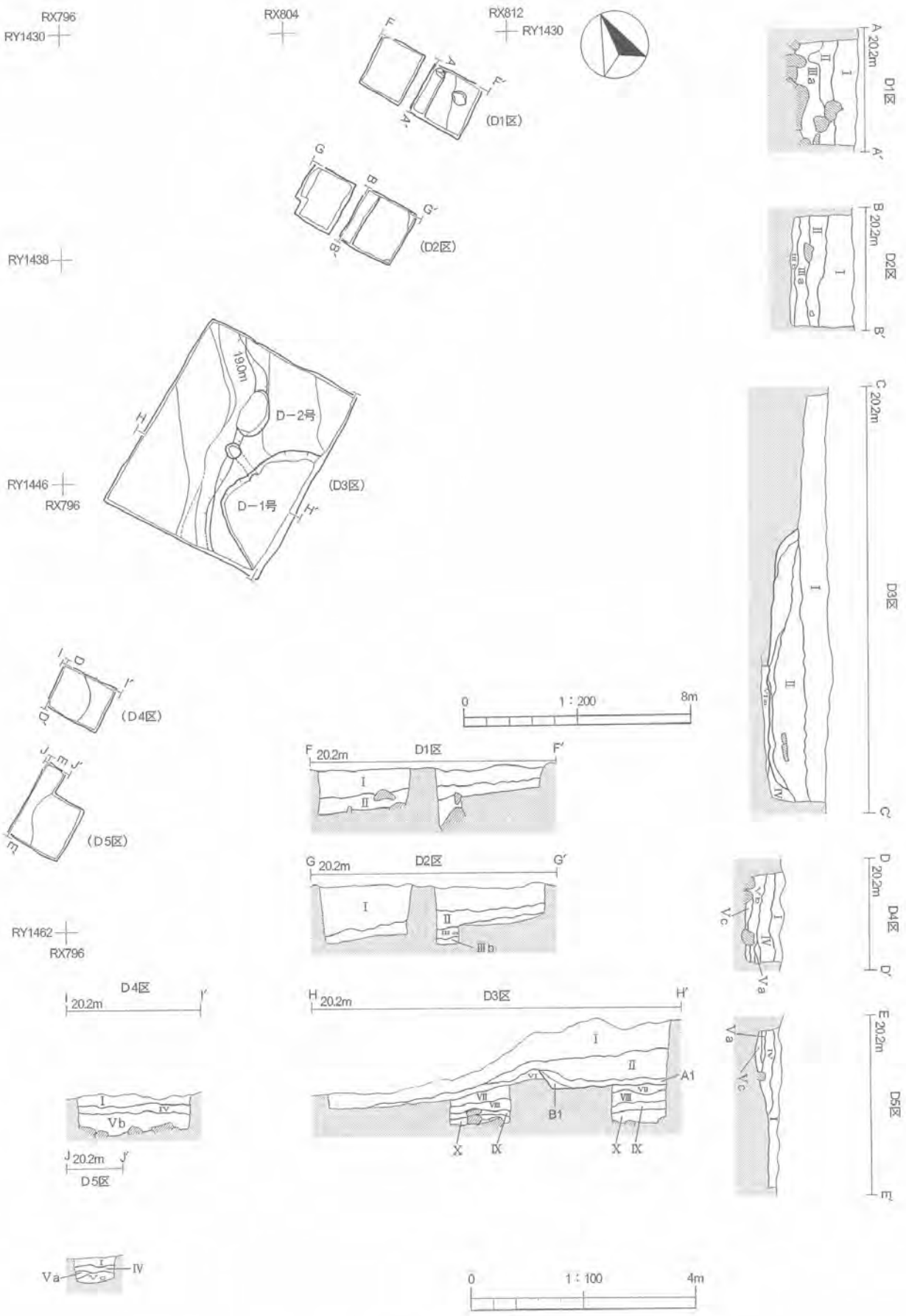
Ａ区土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ表土 | 10YR3/3　暗褐　砂壌土 | 10YR2/4　10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| Ⅱ黒 | 10YR2/2　黒褐　砂壌土 | | 遺物がかなり出土する。 |
| Ⅲ | 注記なし | | 地山への漸移層 |

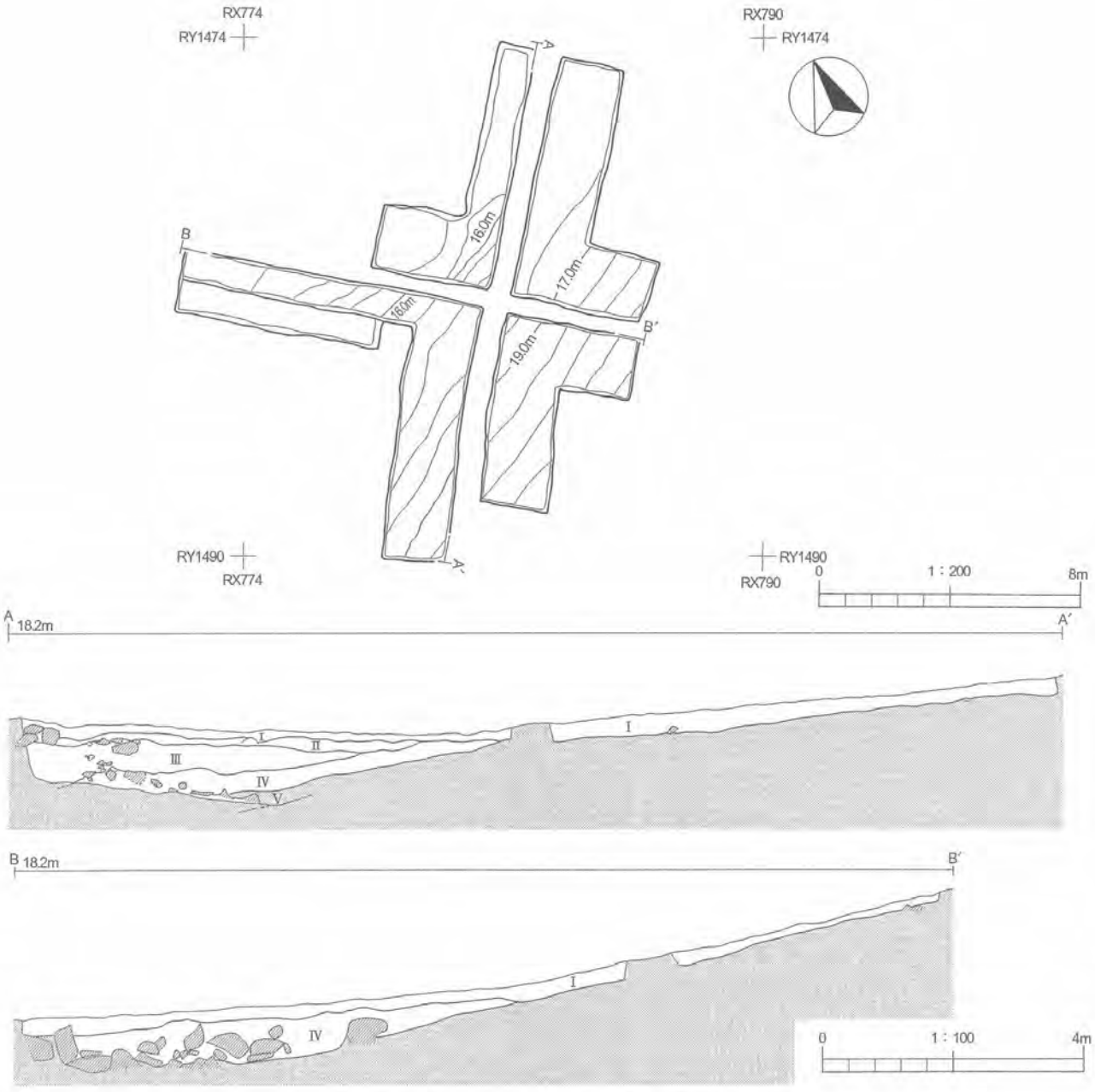



第44図　A区遺構配置図



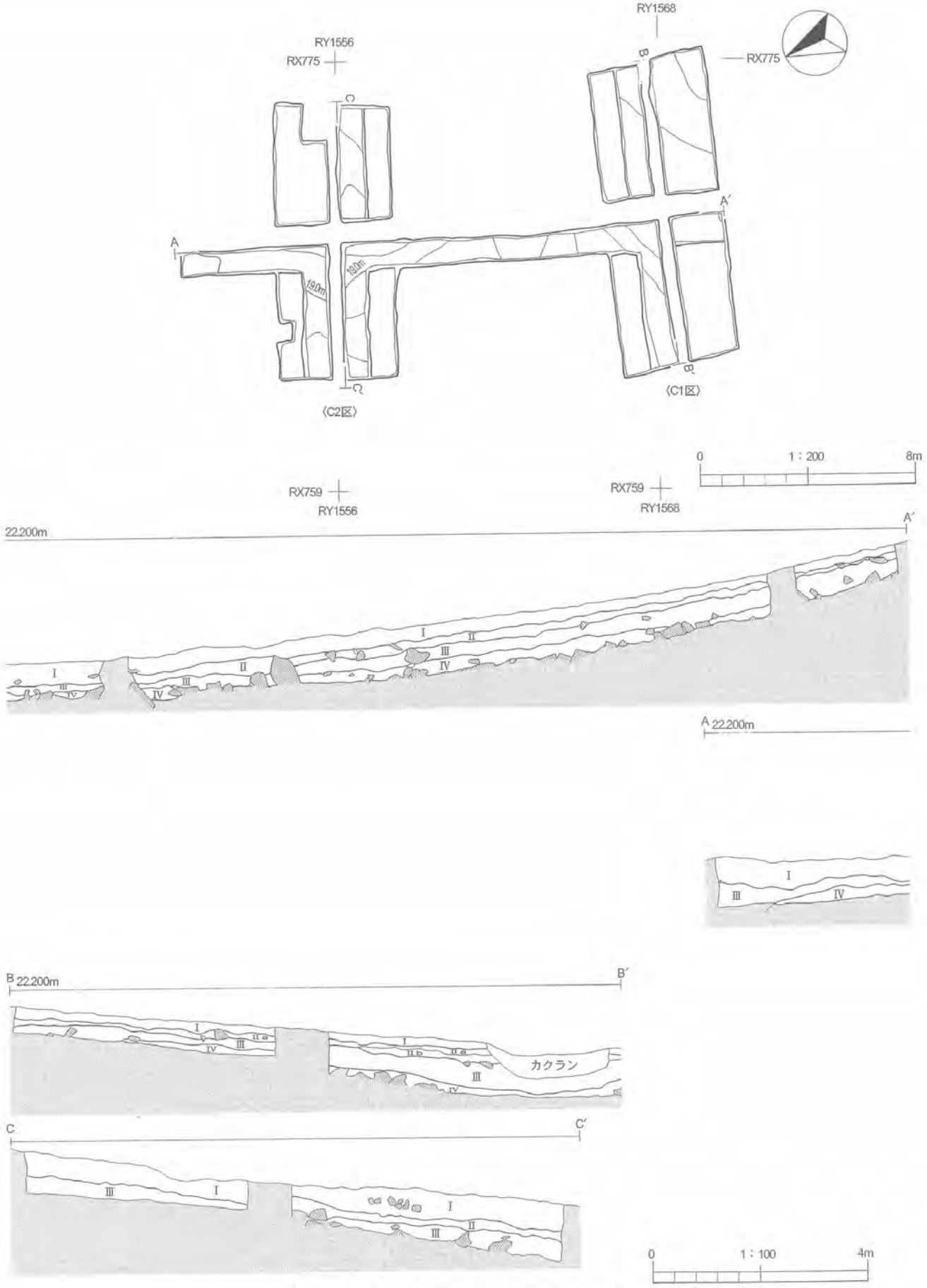

第45図　D区遺構配置図




第46図　B区全体図、土層断面図

B区土層観察表

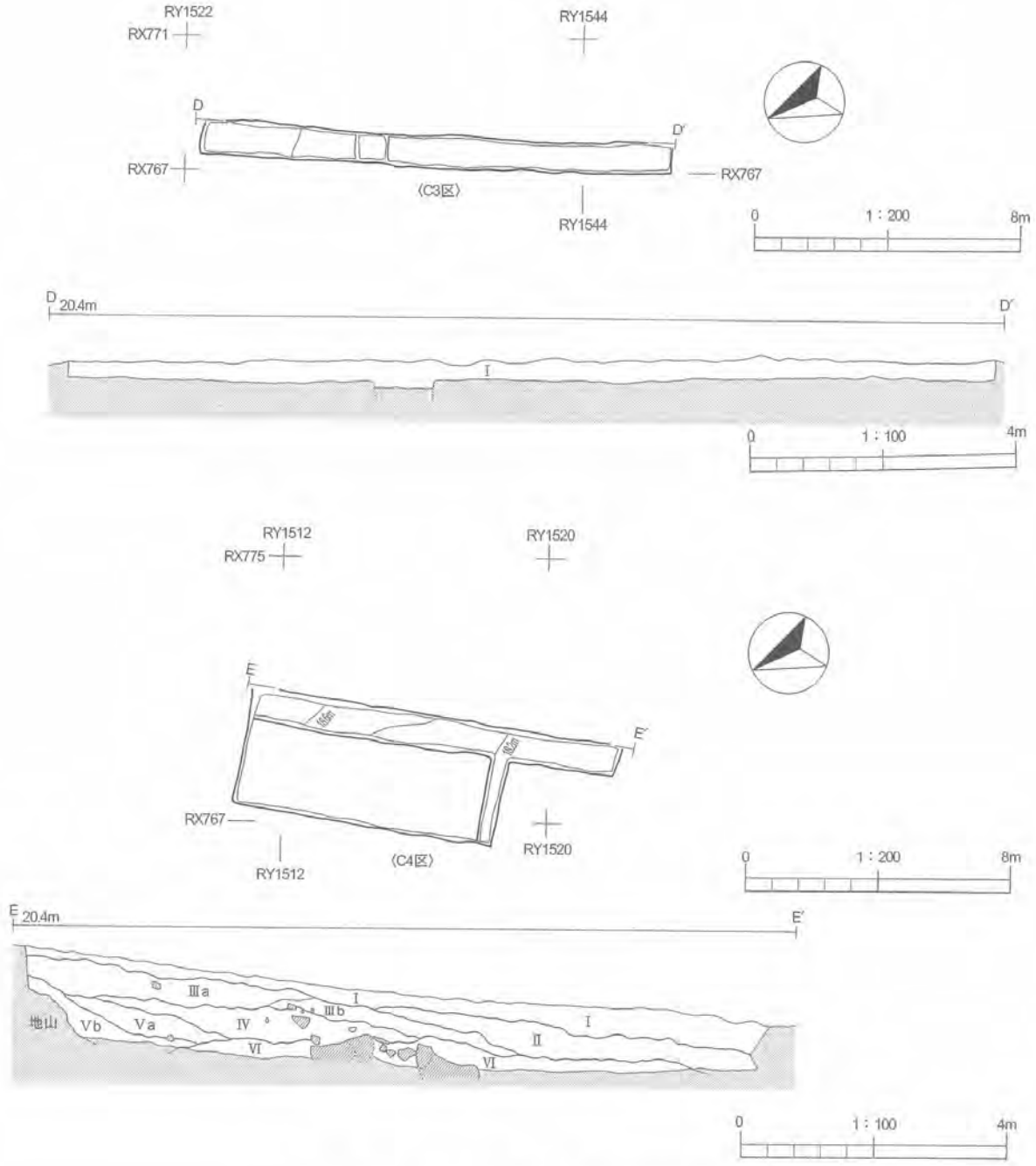
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 注記なし | |
| Ⅱ | 10YR2/1　黒　砂壌土 | 注記なし | |
| Ⅲ | 10YR5/6　黄褐　砂壌土 | 注記なし | 上面に礫層　→　盛土層 |
| Ⅳ | 10YR2/1　黒　シルト質埴壌土 | 注記なし | シルト質　→　旧表土層 |
| Ⅴ | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 注記なし | |




第47図　C区全体図、土層断面図（1）

C１～C２区土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| Ⅱ | 10YR2/1　黒　砂壌土 | 10YR2/2　10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| Ⅲ | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR2/1　20%　砂壌土 | 軟、疎 |
| Ⅳ | 10YR2/2　黒褐　砂壌土 | 10YR3/4　20%　砂壌土 | 中、中 |
| Ⅴ | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 軟、中 |




**第48図　C区全体図、土層断面図（2）**

C３区土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| Ⅱ | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR2/2　20%　砂壌土 | 軟、疎 |
| Ⅲa | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 中～軟、疎 |
| Ⅲb | 10YR4/6　褐（暗）砂壌土 | 10YR3/4　15%　砂壌土 | 軟、疎 |
| Ⅳ | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR3/3　10%　砂壌土 | 中、疎 |
| Ⅴa | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR3/4　10%　砂壌土 | 中～固、中　→　炭微 |
| Ⅴb | 10YR4/6　褐（明）砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 中、中～密　→　炭微 |
| Ⅵ | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR2/2　15%　砂壌土 | 中～固、中～密 |

## ３－２．検出された遺構と遺物

### ａ．住居跡

**Ｄ－１号竪穴住居跡**（第49図）

＜検出状況＞　Ｄ３区南東部に位置する。検出面はⅥ層上面である。住居跡の北西部のみの検出である。

＜形状・規模＞　平面形は出土した部分から隅丸方形と推定される。規模は東西方向で少なくとも４ｍを測る。壁高は東側で40cmである。

床面は平坦である。柱穴、周溝は検出されていない。

＜埋土＞　Ａ、Ｂ層は黒色土層で、あまり遺物を含まない。自然堆積層である。Ｃ１層はカマドの南に堆積した炭の層である。

＜カマド＞　（第50図）

北側の壁のほぼ中央に設けられている。くり貫式である。火床部は、掘り窪めて、袖石を据えて粘土で固めている。煙道はほぼ水平に掘られ、煙出しは垂直に立上がる。火床部の規模は、0.9m×0.7mである。煙道の径は25cm、煙出しの径は50cmである。

埋土は、Ｋ２、３層がカマド周辺に堆積していた焼土、炭混じりの層である。Ｋ６層上面が固く焼き締った焼土面、Ｋ４、７、８、９、１０層は構築土層である。

**出土遺物**（第51図）

１～３は土師器の坏である。１は丸底風の平底で、体部半ばで内反する。内面に稜線、外面に段をもち、黒色処理が施される。２も丸底風の平底で，底部からやや直線的に立上がる。体部半ばに段をもち、黒色処理されている。３は平底で、底部から膨らみをもって立上がる。黒色処理されている。４、５は頸部の沈線を境に口縁部は無文、体部は縄文を施す甕の頸部と推定される。６は交互刺突と縄文が施されている。４～６は弥生に伴うものと思われる。

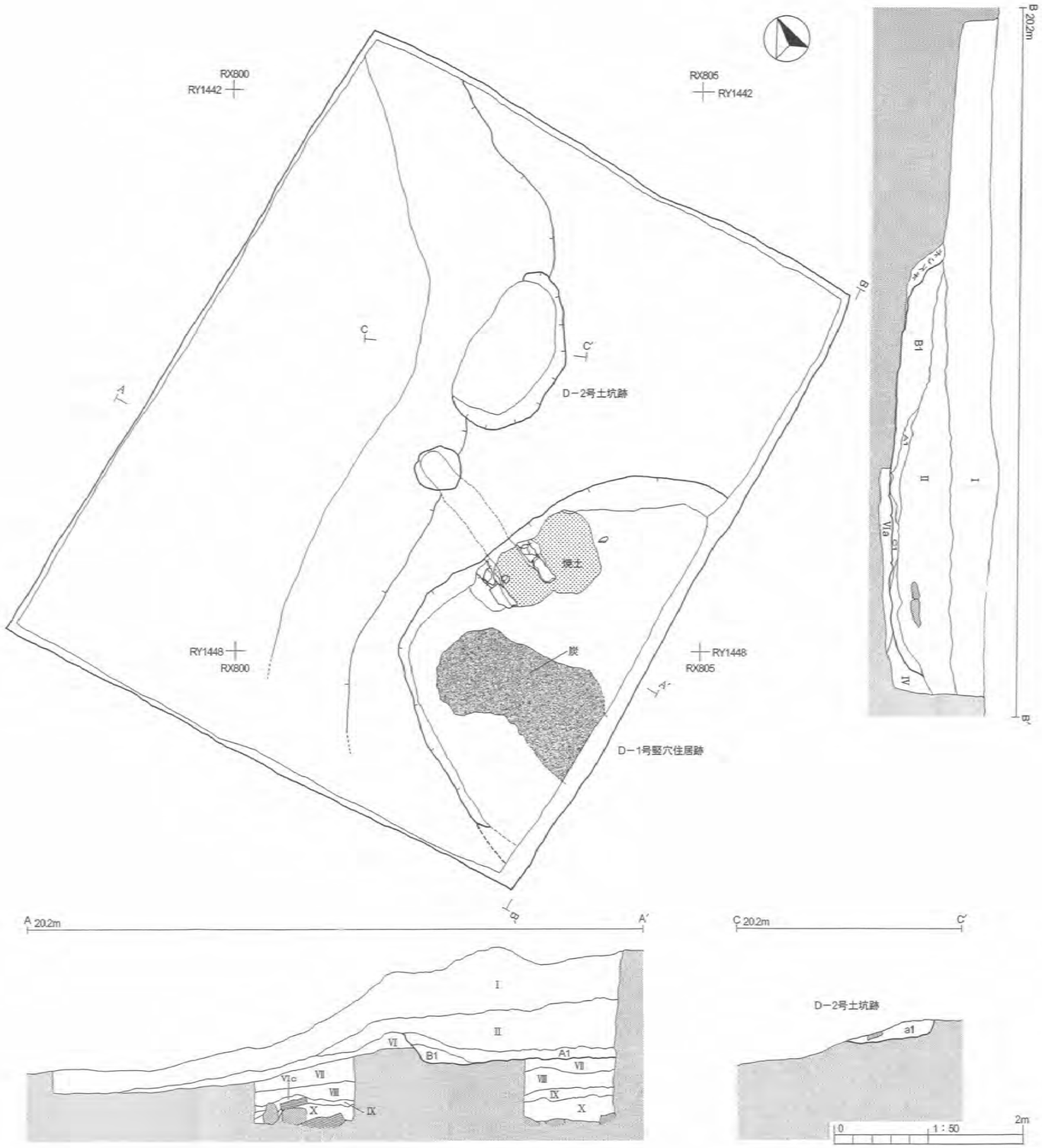
＜時期＞　床面の出土遺物から奈良時代と思われる。

**Ｄ－２土坑跡**（第49図）

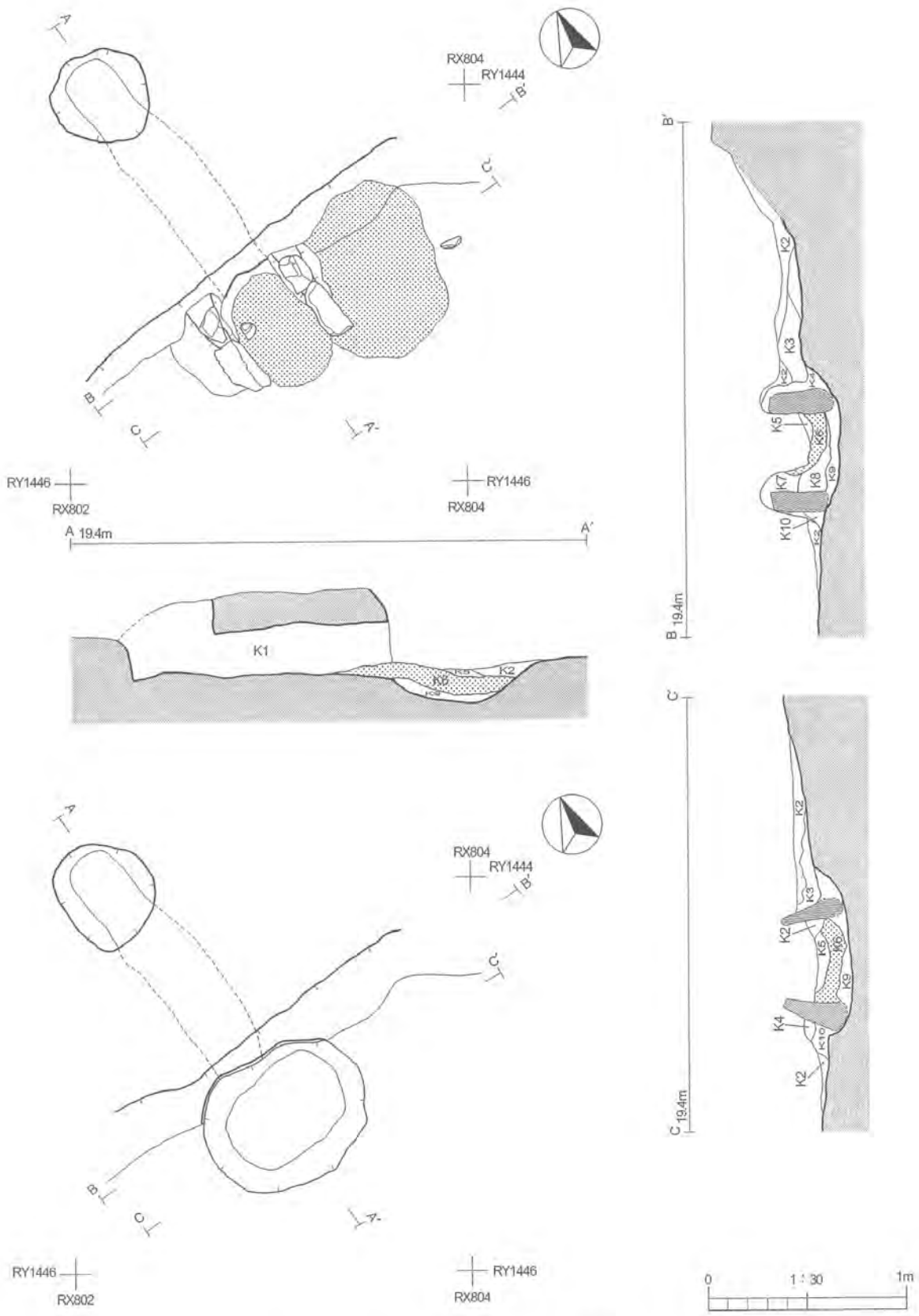
Ｄ－１号住居跡の北の斜面際に掘られた浅い土坑である。半円形で、長軸1.7m、短軸1.0m、深さ20cmである。縄文土器と土師器が１点ずつ出土している。

**Ｄ区土層観察表**

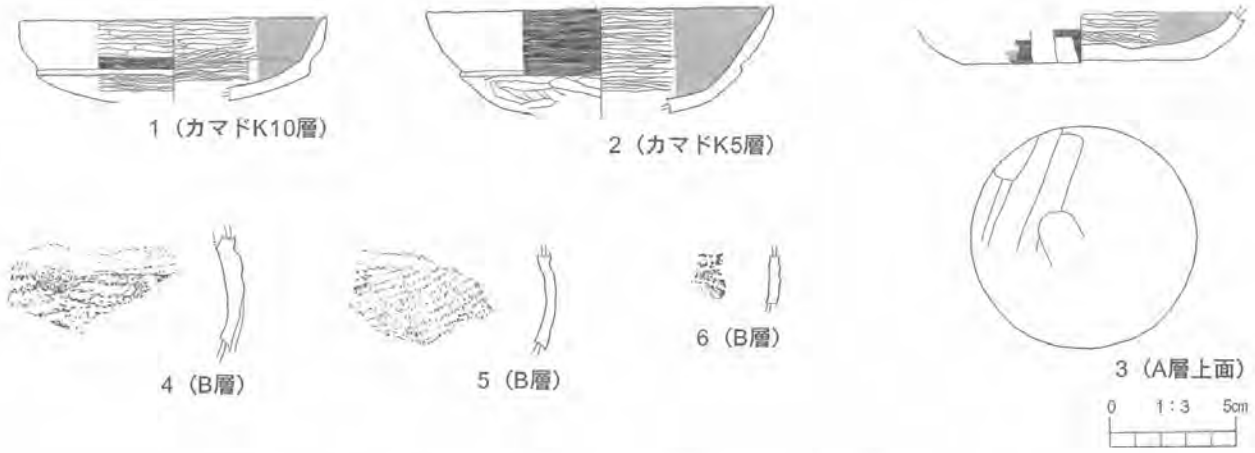
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR3/3　10%　砂壌土 | 軟、疎　→　土器片など |
| Ⅱ | 10YR2/1　黒　砂壌土 | 10YR2/2　10%　砂壌土 | 軟、疎　→　土器片など |
| Ⅲa（D1，2区） | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR2/3　10%　砂壌土 | 中、中 |
| Ⅲb（D1，2区） | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 中、中　→ |
| Ⅳ（D3、4区） | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR3/3　10%　砂壌土 | 固、中 |
| Ⅴa（D4、5区） | 10YR2/3　黒褐　シルト質壌土 | 10YR3/4　10%　シルト質壌土 | 中～固、密　→水性堆積層 |
| Ⅴb（D4、5区） | 10YR3/3　暗褐　シルト質壌土 | 10YR3/4　15%　シルト質壌土 | 中、中～密　→水性堆積層 |
| Ⅴc（D4，5区） | 10YR6/3　にぶい黄橙シルト質壌土 | 10YR7/3　10%　シルト質壌土 | 固、疎　→水性堆積層 |
| Ⅵ（D3区） | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR3/3　暗褐　砂壌土 | 固、中 |
| Ⅶ（D3区） | 10YR4/3　褐　シルト質壌土 | 10YR5/4　10%　シルト質壌土 | 固、粗　→　炭少 |
| Ⅷ（D3区） | 10YR5/6　黄褐　シルト質壌土 | 10YR6/4　10%　シルト質壌土 | 固、疎　→　水性堆積層 |
| Ⅸ（D3区） | 10YR3/3　暗褐　シルト質壌土 | 10YR2/3　10%　シルト質壌土 | 固、密　→水性堆積層 |
| Ⅹ（D3区）漸移層 | 10YR4/3　にぶい黄褐　砂 | 10YR3/4　10%　砂壌土 | 固、密　→大礫多、地山への漸移層 |




第49図　D－1号竪穴住居跡




第50図　D－1号竪穴住居跡カマド




第51図　D－1号竪穴住居跡出土遺物

D－1住居跡土層観察表

| 層　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR1.7/1 黒 砂壌土 | 10YR2/1 10% 砂壌土<br>10YR6/2 2% 砂壌土 | 中、中 → 焼土粒、炭多 火山灰？ |
| B1 | 10YR2/2 暗褐 砂壌土 | 10YR2/3 10% 砂壌土 | 中～固、疎 → 土器、炭多 |
| B2 | 10YR2/2 暗褐 砂壌土 | 10YR2/3 10% 砂壌土<br>10YR3/4 10% 砂壌土 | 中～固、疎 → 土器、炭多 |
| C1炭層 | 10YR2/1 黒 砂壌土 | 10YR1.7/1 20% 砂壌土 | 中～固、中 |

D－1住居跡カマド土層観察表

| 層　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| K1 | 10YR2/1 黒 砂壌土 | 10YR3/4 10% 砂壌土 | 軟、疎 → 焼土粒多 |
| K2 | 10YR2/3 黒褐 砂壌土 | 10YR3/3 10% 砂壌土 | 軟、疎 → 炭塊、焼土粒多 |
| K3 | 10YR3/4 暗褐 砂壌土 | 7.5YR4/4 10% 砂壌土 | 中～固、中～疎 → 焼土粒多 |
| K4 | 10YR5/8 黄褐 砂壌土 | 10YR6/8 10% 砂壌土 | 中～固、中～密 → カマド構築土 |
| K5 | 7.5YR2/3 極暗褐 砂壌土 | 7.5YR3/4 10% 砂壌土 | 中～軟、中 → 炭、焼土塊 |
| K6 | 7.5YR4/4 褐 砂壌土 | 7.5YR3/4 10% 砂壌土 | 中～固、中～密 →上面に多量の焼土塊 |
| K7 | 10YR2/3 黒褐 砂壌土 | 10YR5/8 20% 砂壌土 | 軟、疎 → 炭塊多 |
| K8 | 7.5YR2/3 極暗褐 砂壌土 | 10YR2/3 20% 砂壌土 | 中～疎 → 焼土粒 |
| K9 | 7.5YR4/6 褐 砂壌土 | 7.5YR4/4 10% 砂壌土 | ？、疎 |
| K10 | 10YR4/4 褐 砂壌土 | 10YR3/4 10% 砂壌土 | 中、中 → 土器片 |

D－2号土坑跡土層観察表

| 層　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| a1 | 10YR2/1 黒 砂壌土 | 10YR2/3 10% 砂壌土 | 軟、疎 → 土器片 |

A－１号竪穴住居跡（第52図）

＜検出状況＞　A区の西端、尾根の北向きの斜面上に位置する。地山面から検出した。

＜形状・規模＞　平面形は隅丸の不整正方形で、規模は一辺が約4.3mである。壁高は、南側で70cmである。床面は、所々に地山に含まれる大小の石がそのまま残されており、小起伏をもつ。周溝、張床などは検出されていない。

＜埋土＞　A層は黒褐色土で、前述した炭、焼骨片のほかに鉄製品が多数出土している。B、C層から多数の土師器片が出土し、D層は粘土質の黄褐色土、遺物は出土していない。
E層は土器、焼土、炭などを含む最下層の褐色土である。

＜柱穴＞　床面から小土坑が７つ検出しているが、いずれも掘りは浅く、柱あたりもみとめられない。

(cm)

| PIT | P1 | P2 | P3 | P4 | P5 | P6 | P7 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 30 | 30 | 35 | 40 | 30 | 30 | 35 |
| 深 | 5 | 5 | 5 | 5 | 10 | 5 | 10 |

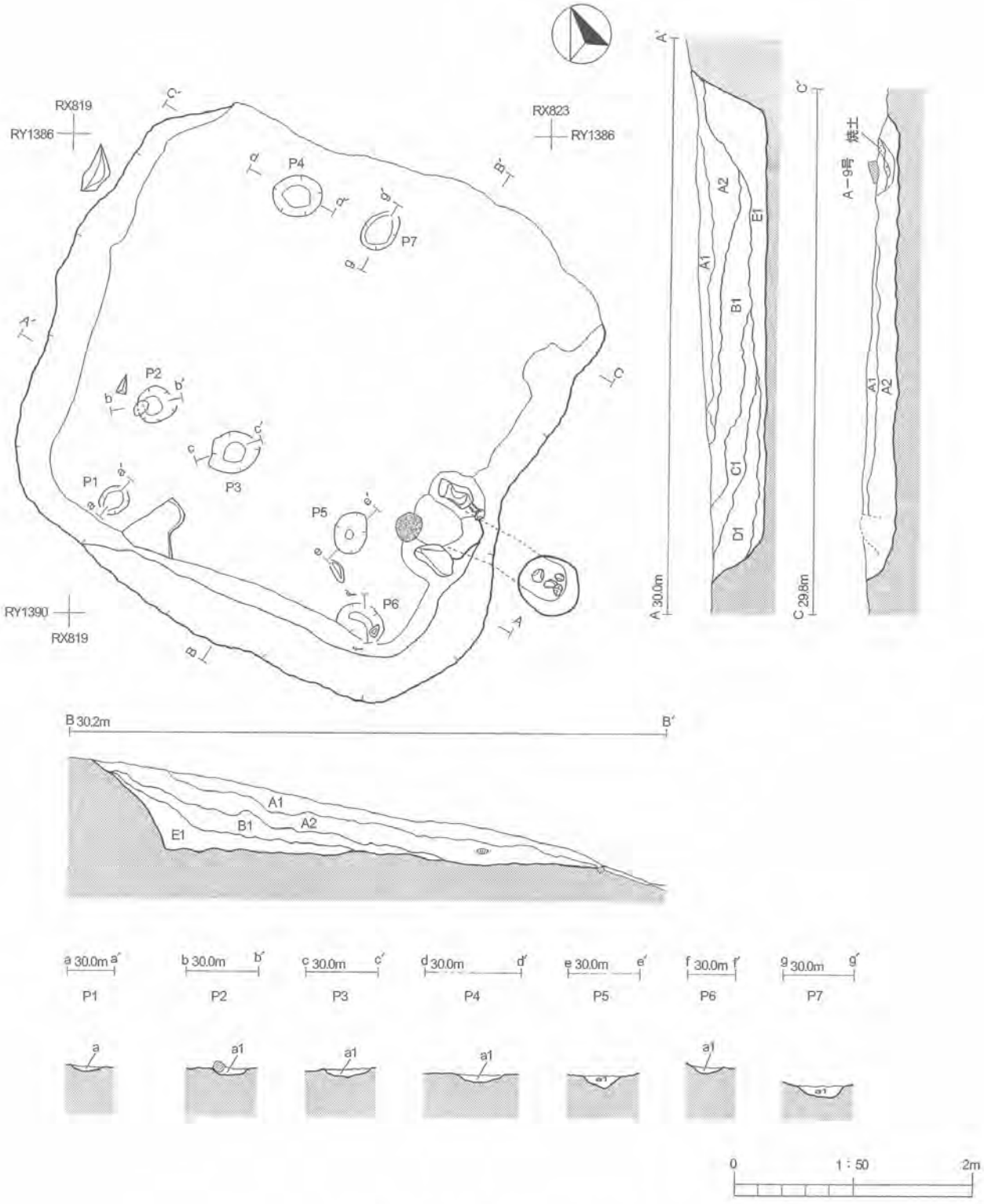
＜カマド＞（第53図）東壁のやや南寄りに設けられている。くり貫き式である。火床部は掘り窪めて、袖石を粘土で据える。煙道は煙出しにむかってかって下がり気味で、煙出しは垂直に掘られている。火床部の規模は、40cm×30cmである。煙道の径は32cm、煙出しの径は55cmと大きい。Ｋ１層上部の礫は、廃棄されたさいに埋められたものと考えられる。Ｋ４層は焼き締った焼土層である。Ｋ２層からは微量の粒状鉄滓が出土している。

A－１号住居跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR2/2　黒褐　砂壌土 | 10YR2/1　10%　砂壌土 | 中、中 → 鉄製品、貝、土器 |
| A2 | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR3/3　15%　砂壌土 | 中～軟、中 → 土器 |
| B1 | 10YR4/4　暗褐　砂壌土 | 10YR3/3　10%　砂壌土 | 中、中、土器、焼土粒多、炭 |
| C1 | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR4/6　15%　砂壌土 | 中、中 → 土器多 |
| D1粘土層 | 10YR5/8　黄褐　砂質埴土 | 10YR5/6　10%　砂質埴土 | 固、密 |
| E1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/6　15%　砂壌土 | 中、中～密 → 土器多、焼土粒、炭少 |

A－２号住居跡柱穴土層観察

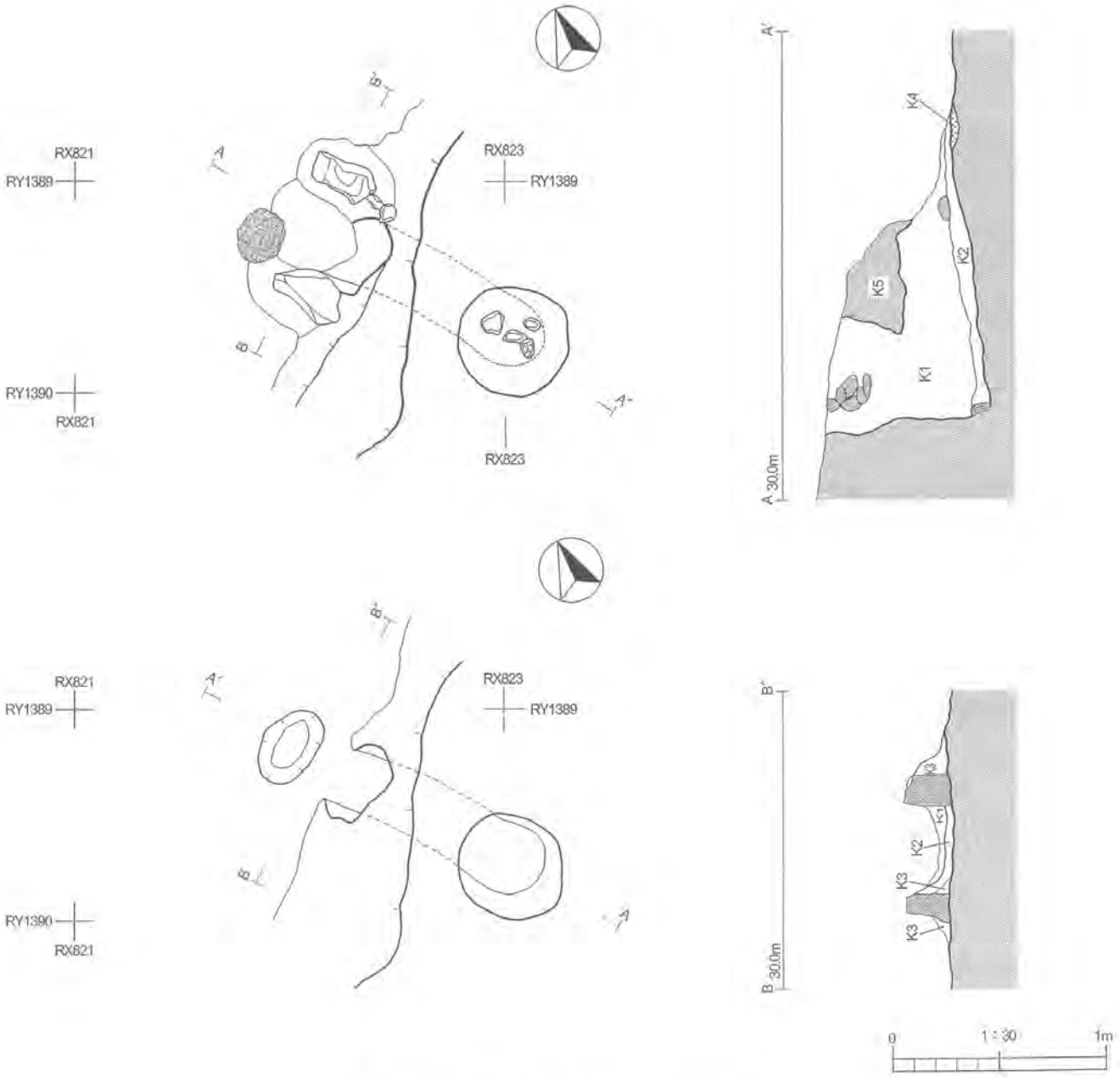
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P1　al | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 軟、中 |
| P2　al | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土<br>10YR5/6　5%　砂壌土 | 中、中～疎 |
| P3　al | 10YR3/3　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 中、中 → 炭少 |
| P4　al | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR3/4　5%　砂壌土 | 中、中 |
| P5　al | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR3/4　5%　砂壌土 | 中、中～密 → 炭少 |
| P6　al | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR3/4　10%　砂壌土 | 中、中～密 → 炭微 |
| P7　al | 10YR4/4　褐 | 10YR5/6　10% | 中、疎 |




第52図　A－1号竪穴住居跡

A－1号住居跡カマド土層観察表

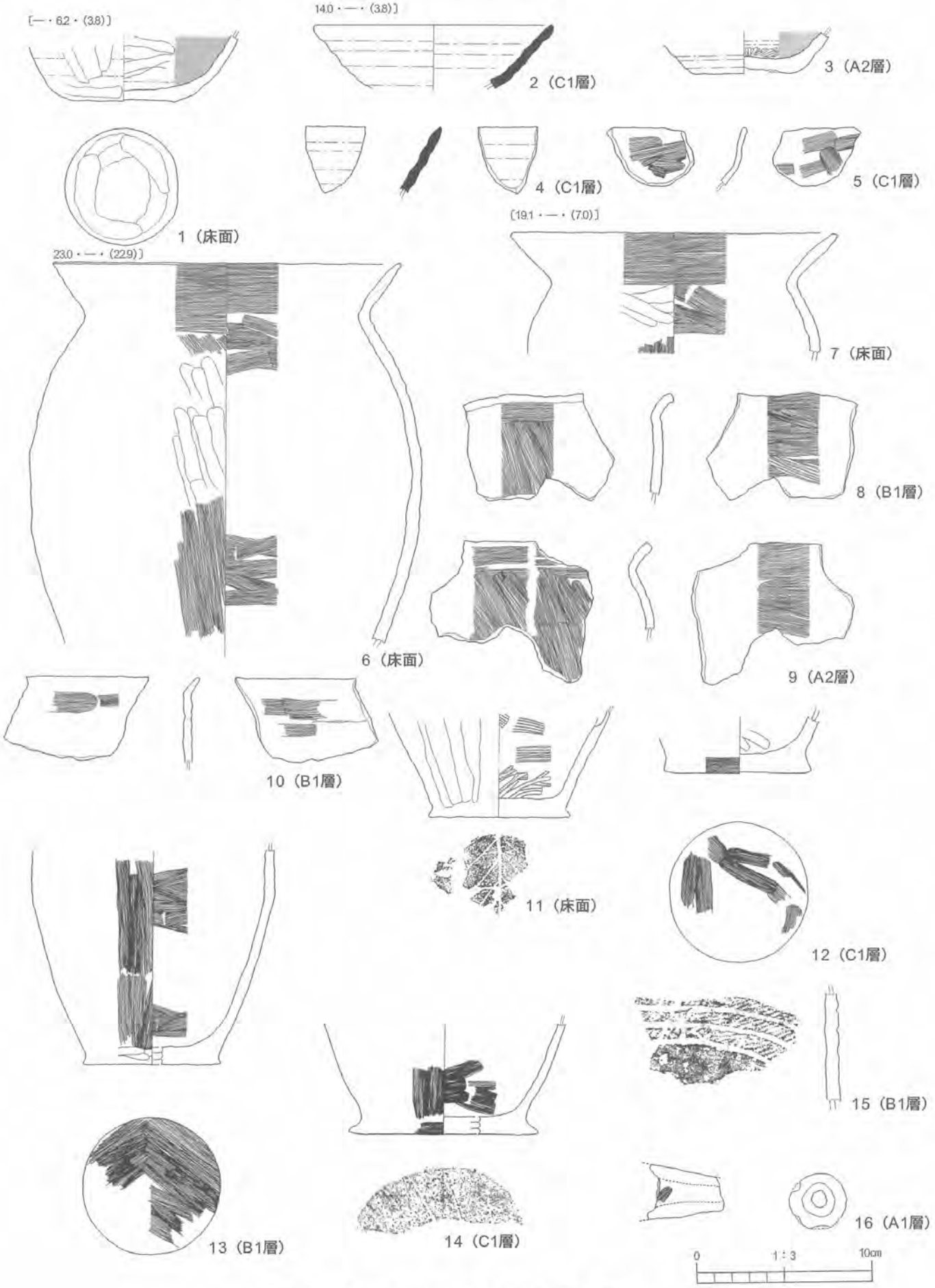
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K 1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 7.5YR4/6　10%　砂壌土 | 軟、疎　→　焼土粒多 |
| K 2 | 5YR4/4　にぶい赤褐　砂壌土 | 5YR4/6　10%　砂壌土 | 軟、疎　→　焼土塊、土製品（支脚？）多 |
| K 3 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中、疎　→　焼土粒少 |
| K 4 | 2.5YR4/8　赤褐　砂壌土 | 2.5YR4/6　5%　砂壌土 | 固ガチガチ、中～密 |
| K 5 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　20%　砂壌土 | 中、中 |



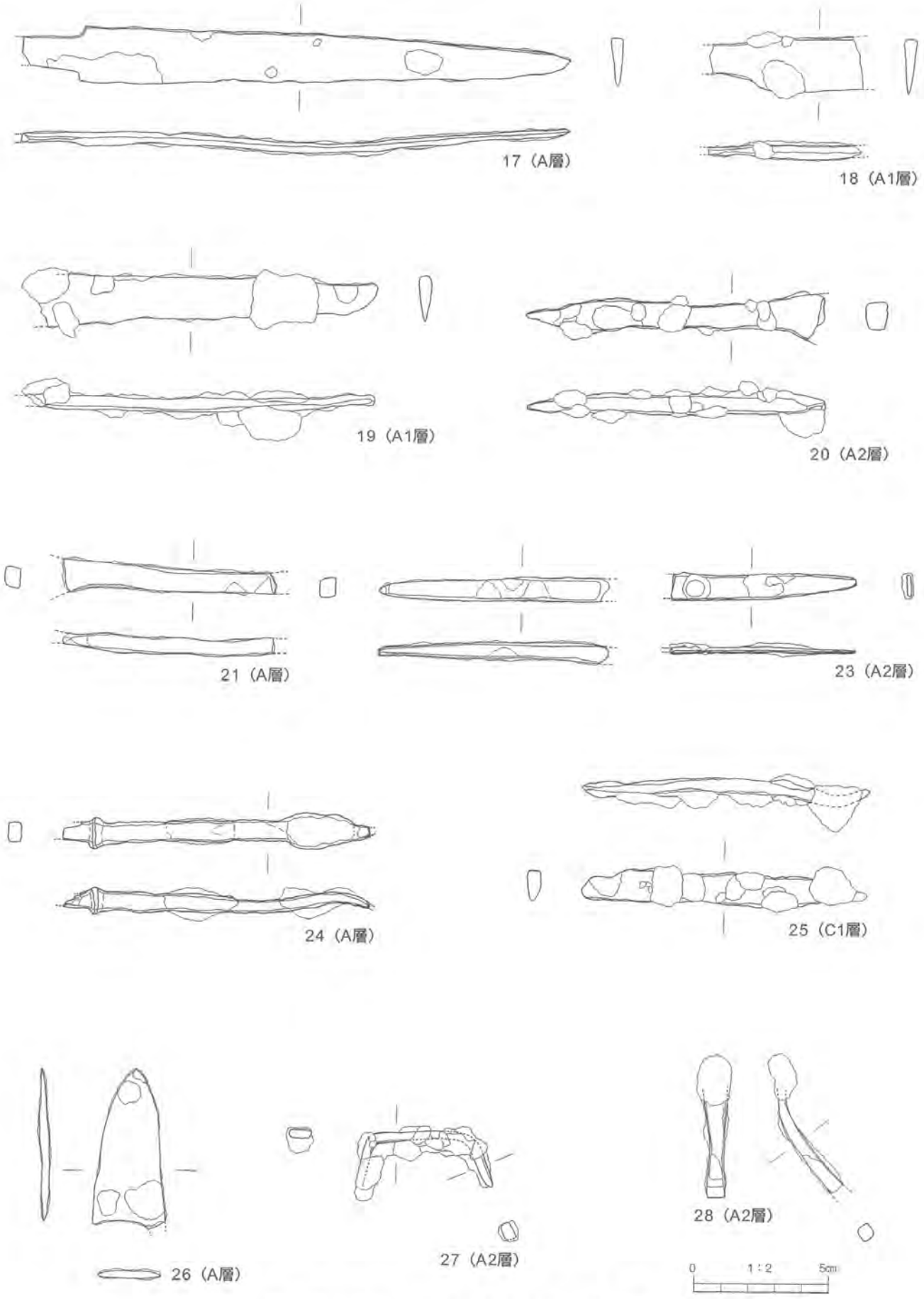

第53図　A－1号竪穴住居跡カマド

**出土遺物**（第54～56図）

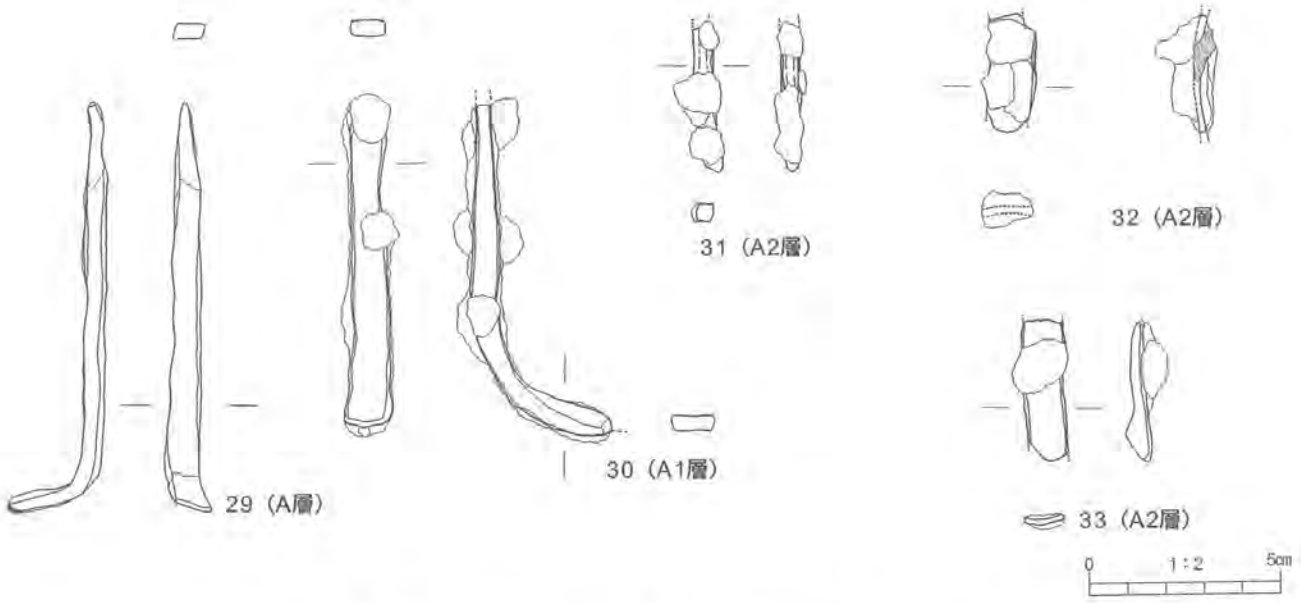
1はロクロ使用の土師器の坏である。底部からやや丸みをもって立上がる。内外面の一部と底面にケズリ調整を施し、黒色処理をしている。2、4は須恵器の坏である。体部から口縁部へ直線的に立上がる。3は土師器のロクロ成形の坏である。内面底部の周辺にミガキ調整、黒色処理を施しているが、外面底部は欠損し調整等は不明である。5は器厚の薄い土師器であるが、器形は不明である。調整痕からみると小形甕と思われる。6～14までは土師器甕である。6は長い口縁部をもつ球胴甕である。7も6とほぼ同じ器形であるが、体部の膨らみは小さい。8～10はいずれも短い口縁部をもつ甕である。8、10は体部に膨らみをもたない長胴甕で、9




第54図　A－1号竪穴住居跡出土遺物（1）




第55図　A－1号竪穴住居跡出土遺物（2）




第56図　A－1号竪穴住居跡出土遺物（3）

は体部上半に強い膨らみをもつ甕と推定される。11～14は甕の底部である。13をのぞいて明瞭な張出しをもつ。11、14は底面に木葉痕を残し、12、13は底面をヘラナデ調整されている。

15は沈潜と磨消しで施文された縄文土器である。16は注口土器の注口である。

17～33は鉄製品である。26をのぞいてすべてA層から出土したものである。18～24は刀子である。17～19は刃部である。17は全長20.5ｃｍ、身幅２cmである。18は全長5.5cm、身幅２cmである。19は長さ12.5cm、身幅２cmである。20～23までは茎である。長さは、20が11cm、21が８cm、22が8.5cm、23が７cmである。24は、区（まち）と考えられる張出しが成形してあり、やはり茎と思われる。長さは11.5cmである。25はやや厚い刃部らしきものが成形してある。刀子か？長さは10.5cmである。26は鉄鏃である。細長く、側縁は直線的である。逆刺と茎の部分は残っていない。長さ6.1cm、幅2.7cmである。27は鎹である。横5.2cm、縦2.0cmである。28は角釘の体部片である。29は細いヘラ状の製品で、一方の先端が湾曲して薄くなり、他方は先細りになる。長さ10.7cmである。30も31とほぼ同形のものと思われる。長さ９cmである。31は角釘の体部である。32、33は薄い板状のもので、同一個体の可能性がある。いずれも幅約１cmである。

**A－2号竪穴住居跡**（第57図）

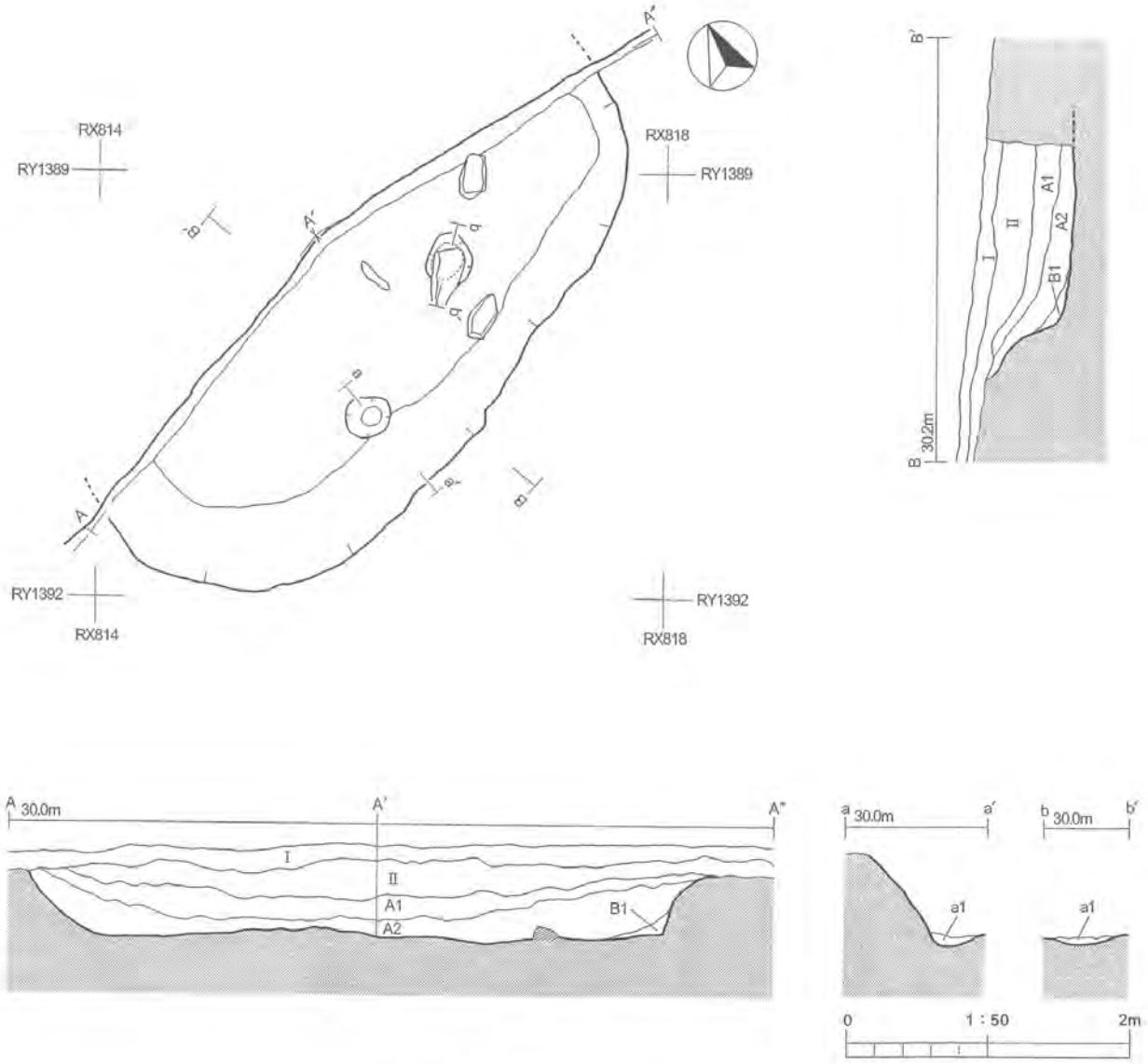
＜検出状況＞　A区西端に位置する。住居跡の東側の一部を地山面からの検出した。

＜形状・規模＞　平面形は隅丸方形をなすものと推定されるが、規模は南北約4.6mである。壁は外形しながら立上がり、壁高は40～60cmである。

床面は平坦である。周溝は検出されなかった。またカマドや炉などの施設も検出されていない。

＜埋土＞　A層の暗褐色土とB層の褐色土に分けられ、いずれも自然堆積層である。

＜柱穴＞　床面から小土坑が２つ検出したが、どちらも浅く柱あたりなどは確認できなかった。




第57図　A－2号竪穴住居跡

(cm)

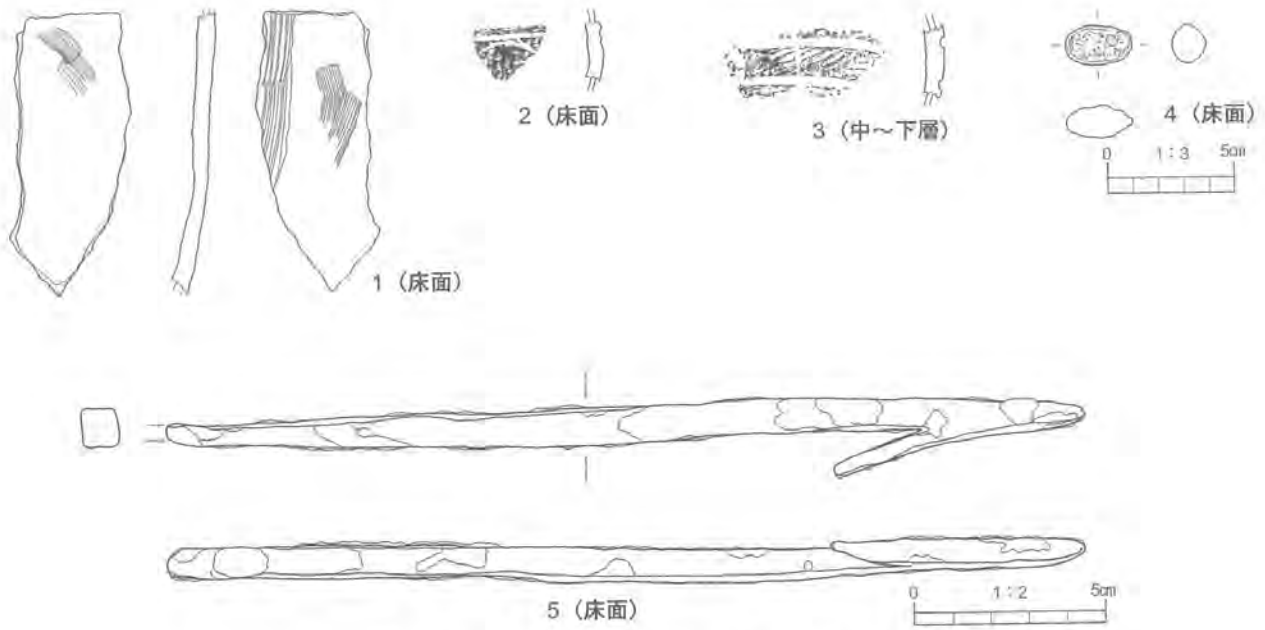
| PIT | P 1 | P 2 |
|---|---|---|
| 径 | 35 | 40 |
| 深 | 8 | 5 |

A－2号住居跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A 1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/6　5%　砂壌土<br>10YR2/2　5%　砂壌土 | 軟、疎 |
| A 2 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 軟、やや密　→　炭多 |
| B 1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 軟、中 |

A－2号住居跡柱穴土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P 1　a 1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6　5%　砂壌土 | 中、中　→　炭、焼土粒少 |
| P 2　a 1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6　5%　砂壌土 | 中、中　→　炭、焼土粒少 |




第58図　A－2号竪穴住居跡出土遺物

**出土遺物**（第58図）

1は床面から出土した土師器甕の体部片である。2，3は縄文土器片で、いずれも沈線による施文である。4は床面から出土した軽石である。とくに加工された痕跡は認められない。5は鉄製品の銛である。カエシは1つで、茎の部分は1.0cm角に面取りしている。ミツマタ銛の一本か。全長は24.1cmである。

**b．炉跡、焼土遺構、焼骨の分布、土坑跡、溝跡**

**A－9号炉跡、A－10号炭、焼骨片の分布**（第59、60図）

＜検出状況＞　A区西端、尾根の北向きの斜面上でA－1号竪穴住居跡を検出したが、その埋土A層上面が検出面である。焼土は北端、炭、焼骨片は中心部に位置する。炭、焼骨片は埋土の西側全体に広がっていたが、図で示した範囲はとくに密な部分である。またA層からは前述したように鉄製品も多く出土している。

＜形状・規模＞　A－9号の平面形は不整円形で、規模は60cm×50cm、深さは15cmである。

＜埋土＞　A－9号のK2層は、焼き締った焼土層であるが、焼骨、貝などは出土していない。

A－10号焼骨層の層厚は、厚いところで2～3cmである。掘り込みは確認していない。

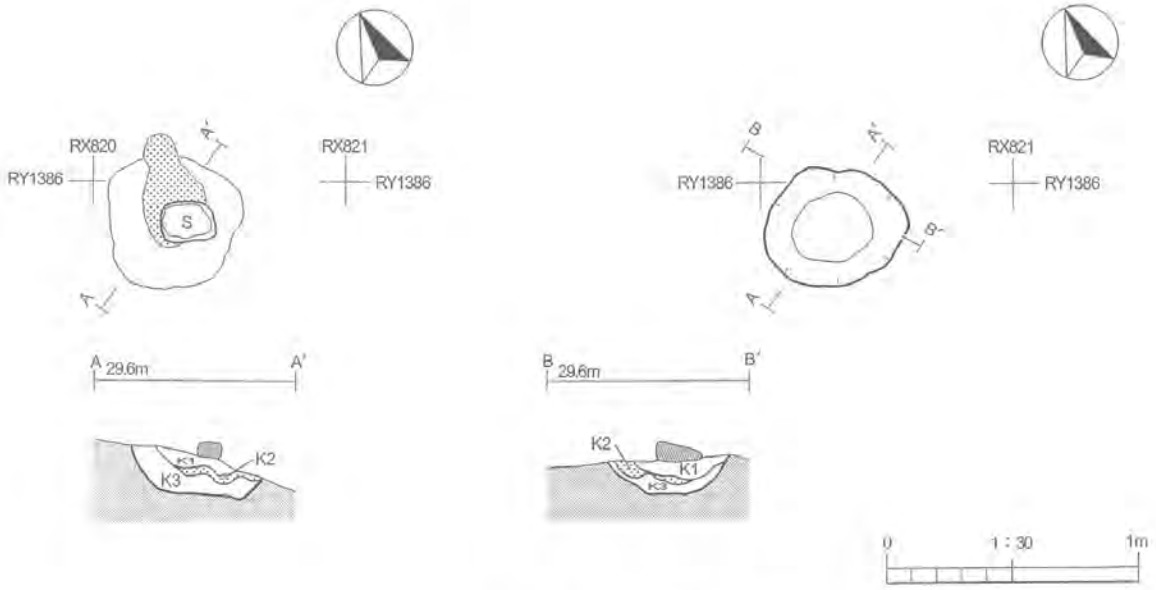
**A－3号、A－4号土坑跡**（第61図）

＜検出状況＞　A区の西、尾根の南斜面に位置する。検出面は地山面である。

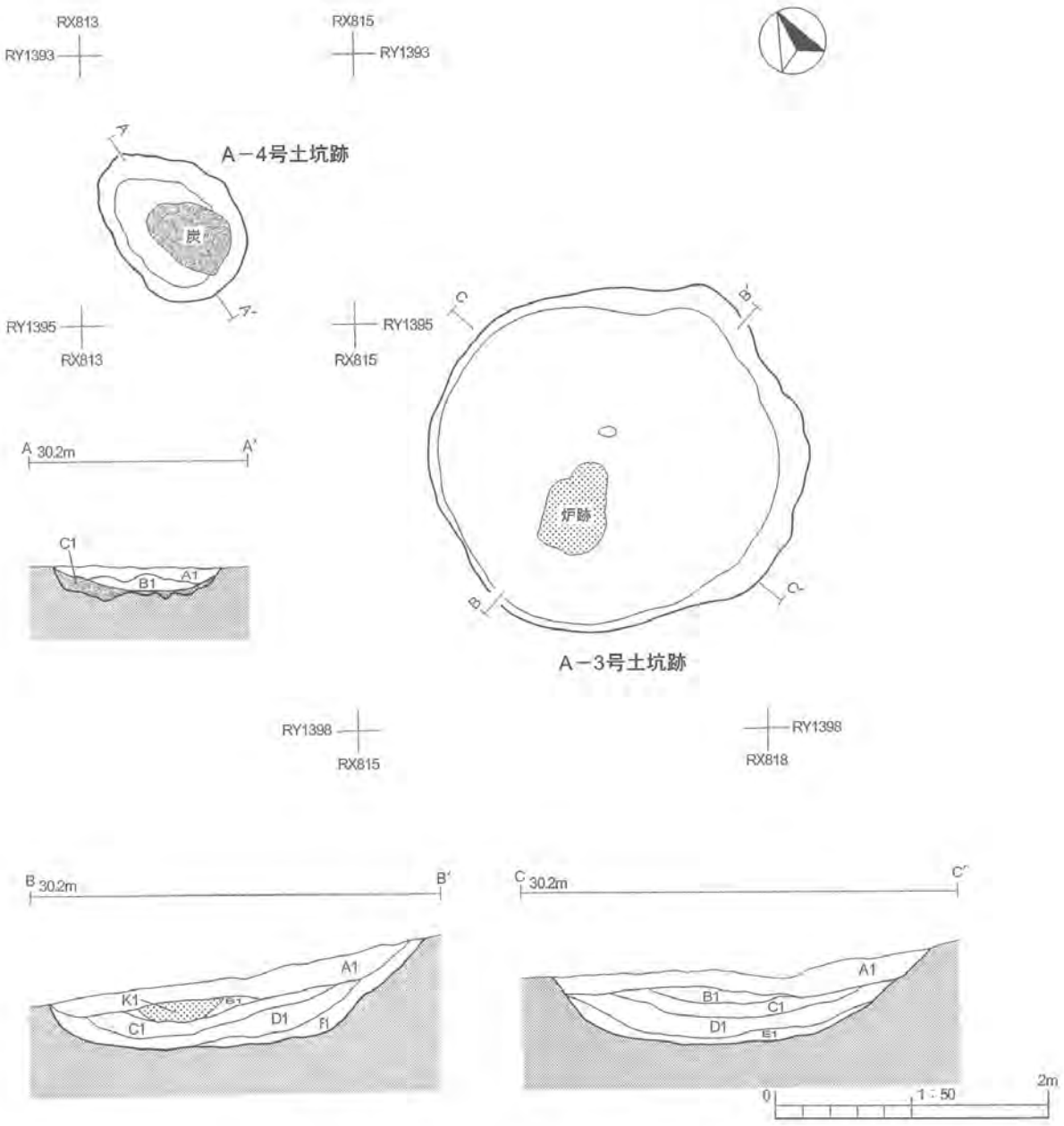
＜形状・規模＞　A－3号の平面形は円形である。規模は径2.8m、深さは最深部で55cmである。

＜埋土＞　A－3号土坑埋土B層上面で炉跡を検出した。C層は炭を多く含み、D～F層からは土器等の遺物は出土していない。D～F層まで埋った時点で炉を作ったと考えられる。炉の埋土については後述する。

第59図　A－9号焼土、A－10号焼骨層の分布




第60図　A－9号炉跡




第61図　A－3号、A－4号土坑跡

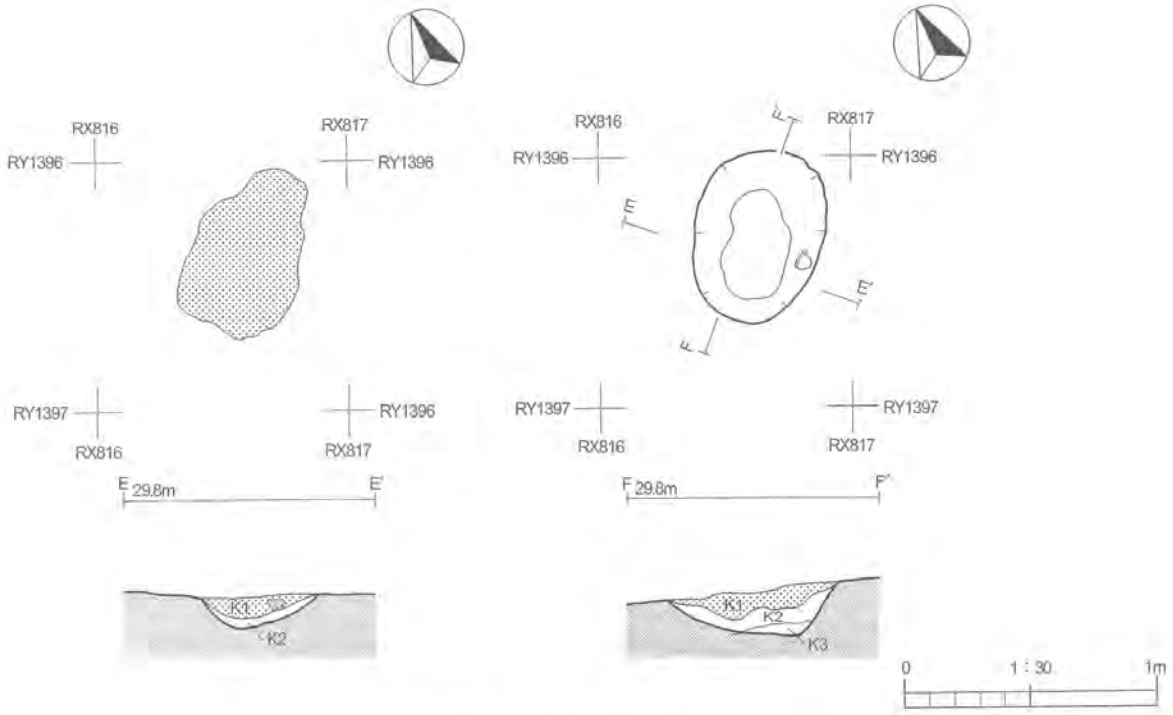
**A－3号土坑炉跡**（第60図）

平面形は不整楕円形で、規模は70cm×45cm、深さは20cmである。

埋土は3層に分れ、K1層がよく焼き締った焼土層である。

**出土遺物**（第63図）

1、2とも炉跡から出土した土師器甕である。1は短い口縁部、2は木葉痕をもち、やや張出した底部である。またK1層からは炭化物が出土しており、その同定を依頼したところオニグルミであるとの結果を得ている（巻末「Ⅳ種実遺体の同定」参照）。




第62図　A－3号土坑内炉跡

A－9号炉跡土層観察表

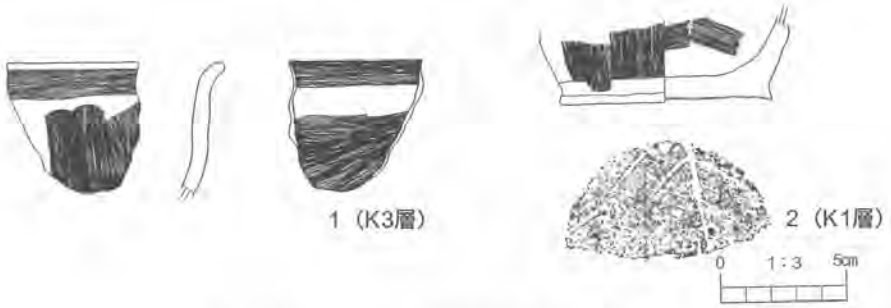
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR2/2　30%　砂壌土 | 中、中 → 炭、焼土粒多 |
| K2焼土 | 5YR5/6　明赤褐　砂壌土 | 5YR4/8　10%　砂壌土<br>7.5YR3/4　15%砂壌土 | 中～固、中～密 |
| K3 | 10YR3/3　暗褐　砂壌土 | 5YR4/6　10%　砂壌土 | 中、中 |
| | | 10YR4/6　5%　砂壌土 | |

A－3号土坑跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/6　20%　砂壌土 | 中、中～疎 → 土器、炭少、焼土塊微 |
| B1 | 7.5YR4/6　褐　砂壌土 | 5YR4/6　20%　砂壌土 | 中～固、中～密 |
| C1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR4/4　15%　砂壌土 | 軟、疎 → 炉床部には焼土塊 |
| D1　炭層 | 10YR2/2　黒褐　砂壌土 | 10YR3/4　10%　砂壌土<br>10YR4/6　5%　砂壌土 | 軟、疎 → 炭多 |
| E1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土<br>10YR4/6　2%　砂壌土 | 軟、疎 |
| F1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 軟、疎 → 炭少 |

A－3号土坑内炉跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K1　焼土 | 5YR5/6　明赤褐　砂壌土 | 5YR4/6　10%　砂壌土 | 中～固、密 → 土器 |
| K2 | 7.5YR3/4　暗褐　砂壌土 | 7.5YR4/4　10%　砂壌土<br>5YR4/6　10%　砂壌土 | 疎、疎 → 上面からクルミ、土器、炭塊 |
| K3 | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR3/4　10%　砂壌土 | 軟、疎 |




第63図　Ａ－３号土坑出土遺物

**Ａ－４号土坑跡**（第61図）

＜形状＞平面形は楕円形で、規模は1.25m×0.9m、深さ20cmである。

＜埋土＞Ａ、Ｂ層とも炭を含むが、Ｃ層は炭層である。土器は出土していない。

Ａ－４号土坑跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ａ１ | 10YR4/6　褐（暗）砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 中、中　→　炭少 |
| Ｂ１ | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 軟、疎　→　炭多 |
| Ｃ１　炭 | 10YR2/1　黒　砂壌土 | | 10YR2/1　黒　砂壌土 |

**Ａ－７号炉跡、Ａ－６号焼土遺構、Ａ－５号溝跡**（第64図）

＜検出状況＞　Ａ２区東の北斜面に位置する。いずれも地山面から検出した。

**Ａ－７号炉跡**

＜形状・規模＞　Ａ－７号は、平面形は不整円形で、浅い掘り方をもつ。規模は60cm×40cm、深さ10cmである。

＜埋土＞　Ｋ１層は、炭、焼土を多く含んだ黒褐色土で、Ｋ４層が固く焼き締った焼土層である。遺物は出土していない。

**Ａ－６号焼土遺構**

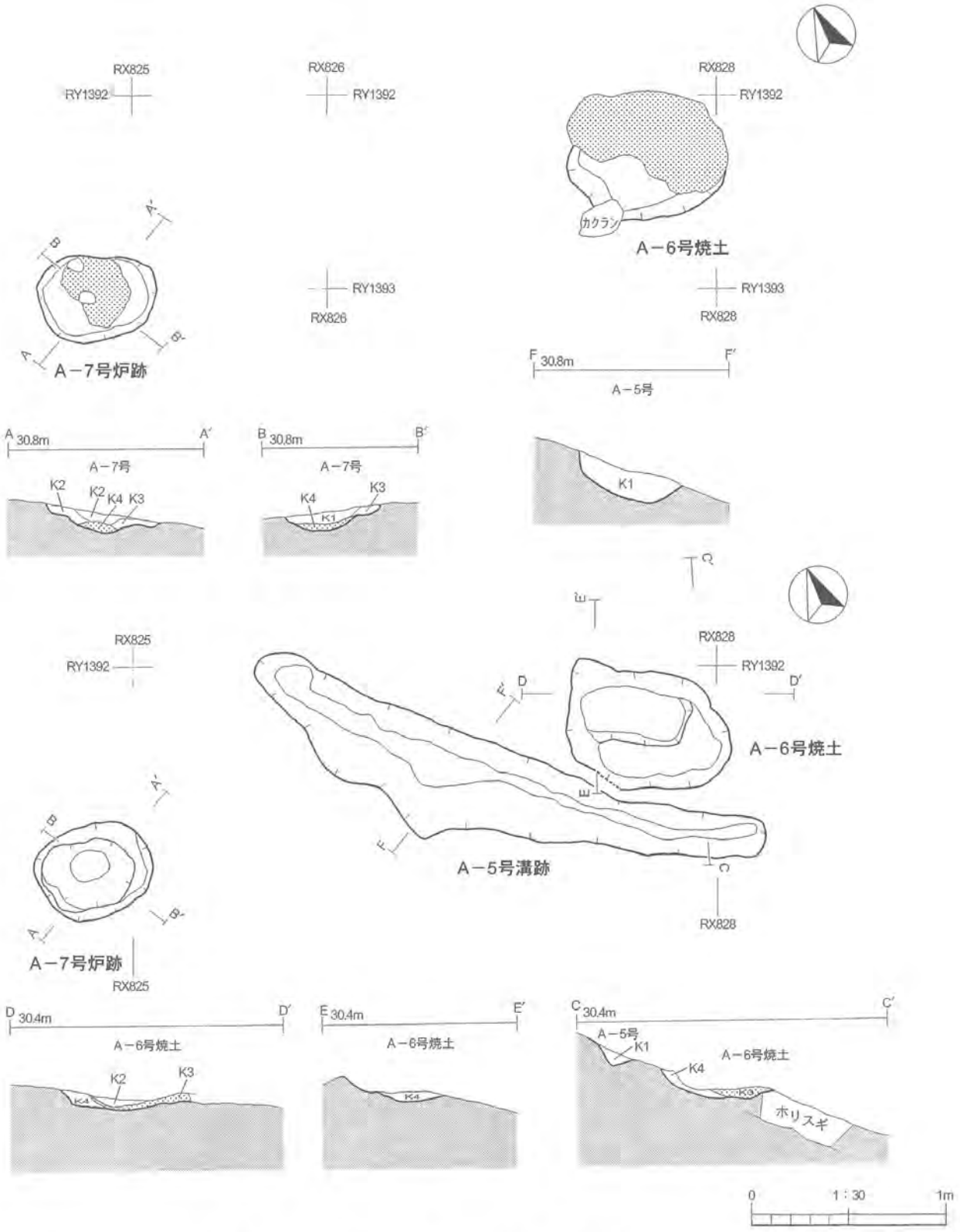
＜形状・規模＞　平面形は不整円形で、規模は80cm×60cm、深さは約10cmである。

＜埋土＞　Ｋ３層が焼土層であるが、固く焼き締ってはいない。Ｋ４層は底面に炭を多く含み、炉の構築土かと考えたたが、構築土にしては軟らかすぎる。遺物は出土していない。

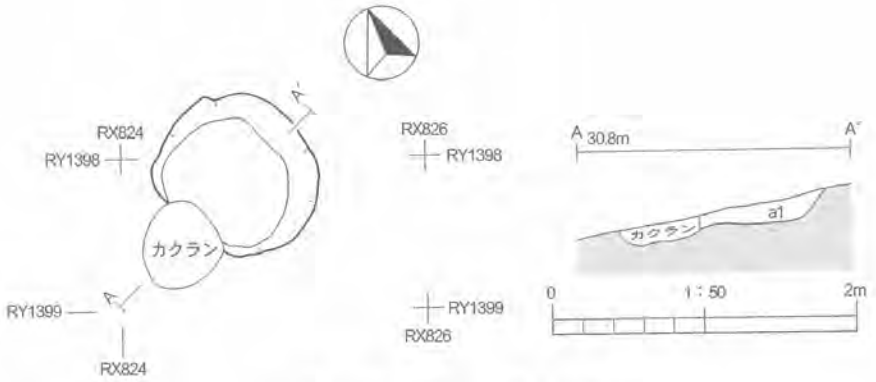
**Ａ－５号溝跡**

＜形状・規模＞　Ａ－６号焼土の南側を等高線に沿う方向で東西にのびる。北にむかってわずかに内湾している。全長2.9m、最大幅約50cm、最深部で15cmである。

＜埋土＞　Ｋ１層は炭を多く含んだ黒褐色土で、遺物は出土していない。




第64図　A－7号炉跡、A－5号溝跡、A－6号焼土




第65図　A－8号土坑跡

A－8号土坑跡（第65図）

＜検出状況＞　A1区の東、尾根の南向きの緩斜面上に位置する。地山面から検出した。

＜形状・規模＞　平面形は円形で、規模は径1.1m、深さ18cmである。

＜埋土＞　a1層は褐色土で、土師器片を含んでいる。

A－7号焼土土層観察表

| 層　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| K1 | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 7.5YR4/4　10%　砂壌土 | 中、中～密　→　炭多、焼土塊 |
| K2 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/6　15%　砂壌土 | 軟、疎　→　炭少 |
| K3 | 10YR5/4　にぶい黄褐　砂壌土 | 7.5YR4/4　10%　砂壌土 | 中、密　→　炭少 |
| K4 | 5YR4/6　赤褐　砂壌土 | 5YR4/8　10%　砂壌土 | 固、密　→　炭微 |

A－5号溝跡、A－6号焼土遺構土層観察表

| 層　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| A-5号　K1 | 10YR3/3　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　15%　砂壌土 | 中、中～疎 |
| A-6号　K2 | 10YR2/3　黒褐　砂壌土 | 10YR4/6　15%　砂壌土 | 軟、中～疎 |
| 〃　K3 | 10YR2/3　暗褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土<br>10YR4/4　10%　砂壌土 | 軟、疎　→　炭多、焼土粒 |
| 〃　K4 | 5YR4/6　赤褐　砂壌土 | 7.5YR4/3　10%　砂壌土<br>10YR2/1　10%　砂壌土 | 中、中～密 |
| 〃　K5 | 10YR4/3　にぶい黄褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 軟、疎　→　底面（床）に炭多 |

A－8号土坑土層観察表

| 層　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| a1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土<br>10YR3/4　10%　砂壌土 | 中、中　→　土師片、炭少 |

c．遺構外出土遺物

**Ａ２区遺構外出土遺物**（第66図）

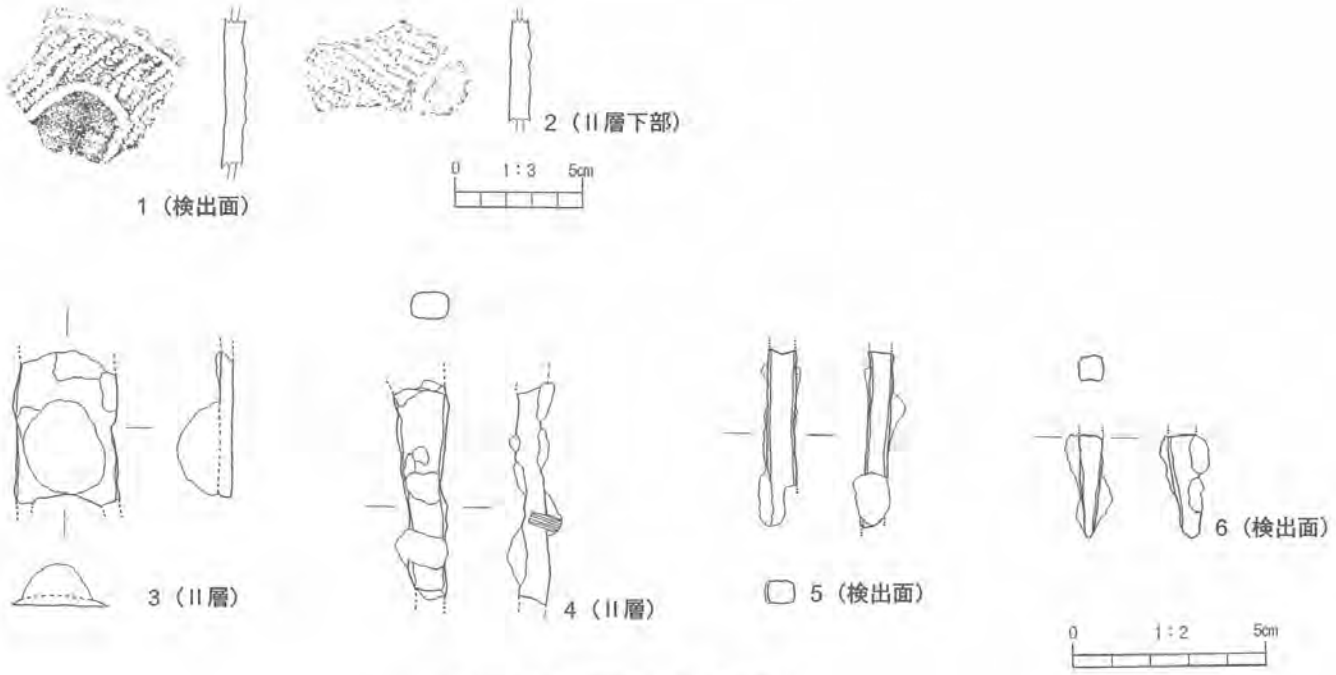
１、２は縄文土器、３～６は鉄製品である。

１、２はいずれも磨消と沈線で施文される。３は逆刺の部分が残っており、鉄鏃と思われる。幅2.5cmである。４～６は角釘である。４は船釘か。長さ5.5cm、幅１cmである。

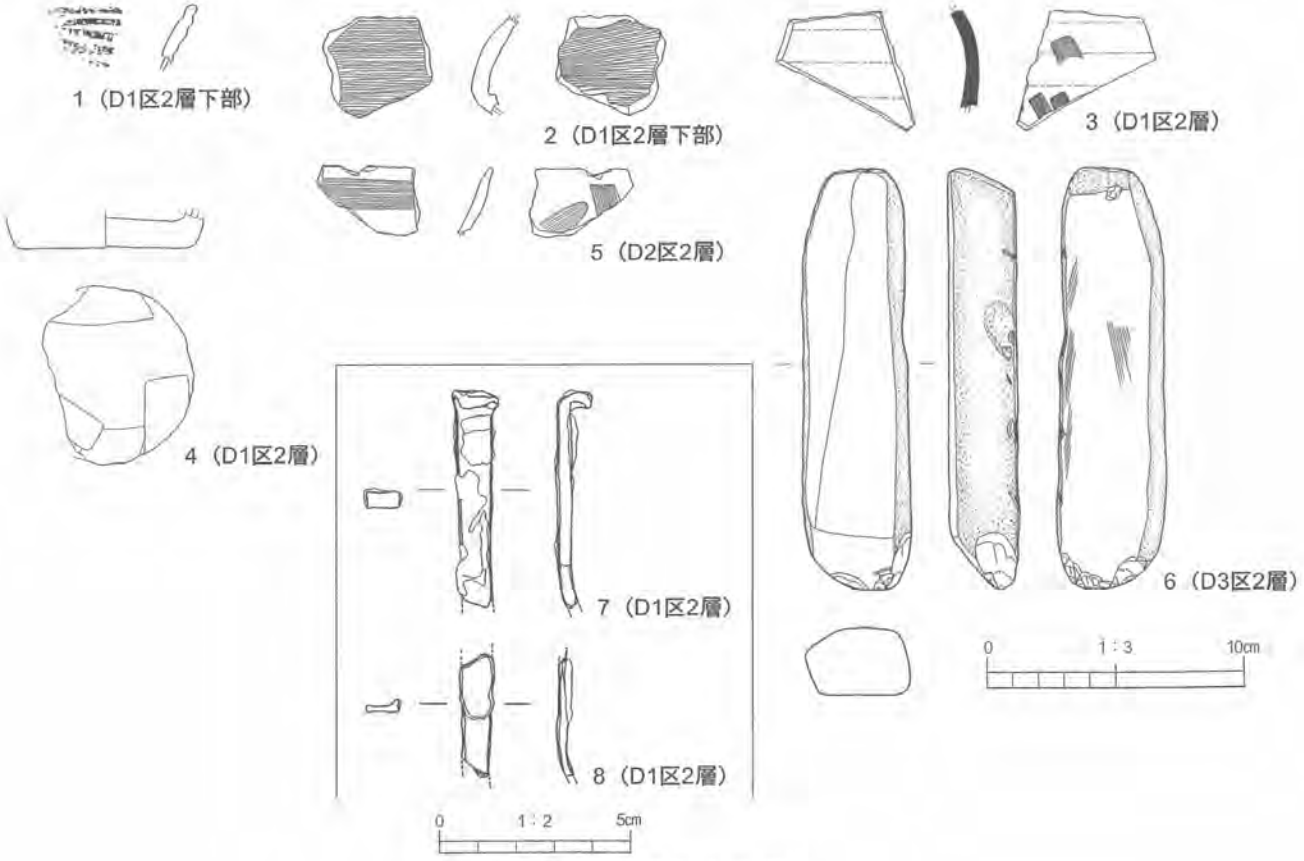
**Ｄ区遺構外出土遺物**（第67図）

１～４、７はＤ１区、５はＤ２区、６はＤ３区からそれぞれ出土したものである。

１は沈線による変形工字文の施文、高坏の口縁部である。２は土師器で球胴甕の口縁部か。３は須恵器の体部片である。４は土師器甕の底部で、張出しをもたない。５は器厚の薄い土師器甕の口縁部である。６は４面の使用痕をもつ砥石である。擦痕を残している。７、８は鉄製品で、船釘の頭部と体部である。７は、長さ5.7cm、幅１cmである。




第66図　A区遺構外出土遺物




第67図　D区遺構外出土遺物

## 3．ま と め

竪穴住居跡３棟、土坑跡４基、焼土遺構４基、溝跡１条を検出した。出土土器については「調査のまとめ」で一括して検討したいので、ここでは住居跡、土坑跡、焼土遺構についてまとめておきたい。

平安時代の住居跡、土坑跡、焼土遺構などは尾根上で検出され、奈良時代の住居跡は谷の緩斜面から出土した。

### a．平安時代の遺構

調査区の埋土層は尾根の北側が南側に比べてかなり厚く堆積しているのが特徴的である。風の強さを物語るものであろうが、完掘できたＡ－１号住居跡は、南斜面を避けるように北側の斜面に位置している。

Ａ－１号住居跡は、平面形は隅丸方形で、規模はやや小さめの竪穴住居跡で、他の竪穴との切り合い関係はない。９世紀前半に伴うものと思われる。Ａ－２号住居跡についてはその全貌は不明であるが、形状については、やはり隅丸方形と推測できる。Ａ－２号を築く際にＡ－１号に排土を棄てた可能性も考えられる（Ａ－１号埋土Ｄ層）。そのばあいでもＡ－１号が廃棄されてからそれ程時間が経過しないうちに棄てられており、大きな時間差はないと思われる。遺物をみてみると、Ａ－１号は埋土上層から刀子、船釘など、Ａ－２号は床面から銛などが出土するなど、鉄製品の出土が目立っているように思われる。鉄製品は出土するけれども、鍛冶炉、鉄滓、フイゴの羽口など「鉄の生産」に関連した施設、遺物はまったく出土していない。

当遺跡の南隣に位置する赤前Ⅳ八枚田遺跡のように、鍛冶炉をもったり、鉄滓やフイゴの羽口などを出土するなど、何らかの形で遺跡全体が「鉄の生産」に関っていることと比べてみるとき、その特徴は更に明瞭になる。当遺跡ではいくつか焼土遺構が検出したが、Ａ－１号のカマド埋土最下層、Ａ－４号土坑から極微量の粒状鉄滓が出土しただけで、そのほかには「鉄の生産」に関連した遺物は出土していない。さらに集落の構成内容を八枚田遺跡と比較した場合、Ａ－３号のような比較的規模の大きい土坑が掘られていることが大きな違いとしてあげられるように思う。市内の調査例からいえば、一般的に集落は、規模の大きな土坑を伴う例が多い。[1] そういう点からみれば、当遺跡は一般的な集落の形態をもち、鉄に関していうなら「消費遺跡」であり、さらに銛などの遺物から強いて推測するなら海に大きく関っている「水産遺跡」ともいうべき性格をもっていたのではないかと考えられる。当遺跡が集落を形成しているとするなら、今回の調査区は集落のはずれの方に当り、集落の性格を云々するには尚早と思われたが、今後の調査の検討課題としてあげておきたい。

焼土遺構については、住居跡（Ａ－１号）埋土上層から焼骨の分布（Ａ－10号）と焼土遺構を検出したほか、周辺部で３基出土している。焼骨の分布については、もっとも近い焼土遺構

**住居跡一覧表**

| 住居番号 | 平面形 | 規模 | 柱穴数 | カマドの位置 | 煙道 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| Ｄ－１ | 隅丸方形 | 4m×　－ | 検出せず | 北壁 | 水平 | 奈良時代 |
| Ａ－１ | 隅丸方形 | 4.3m×4.3m | 7 | 東壁 | 下がり勾配 | 平安時代 |
| Ａ－２ | 炭丸方形 | 4.6m×　－ | 2 | 検出せず | | 平安時代？ |

（A－9号）をはじめ、他の焼土遺構からも焼骨は検出されず、その関係を明確にできなかった。A－3号土坑の焼土遺構から検出した炭化物のはオニグルミと同定されている（巻末「種実遺体の同定」参照）。オニグルミは古くから食用されてきた堅果植物であり、火に投じて核を割れやすくし、その実を取ったあとで焼却した可能性がたかいと結んでいる。市内では磯鶏館山遺跡でオニグルミの出土例が報告されている[2]。

**b．奈良時代の遺構**

D－1号竪穴住居跡は、形状は隅丸方形、中規模の住居跡である。谷の緩斜面に位置する。時期か奈良時代8世紀後半に伴うものである。

時期的には、赤前Ⅳ八枚田遺跡A－8号、B－14号住居跡と平行する遺構である。遺物も少なく、全体を検出していないので、その性格は明瞭ではない。谷の沢を間近にした緩斜面に立地し、製鉄関係の遺物は出土せず、埋土層からロクロ使用の坏などが出土していないことなどは、八枚田B－14号住居跡と共通している。しかし、集落を構成しているのかどうかついてさえ今のところ判断するのは難しく、周辺の資料がさらに集るのを期待したい。

1．鎌田祐二ほか　1992「艇沢遺跡調査報告書」宮古市教育委員会
　近内舘山遺跡（1993、未報告）、神田沢遺跡（1994、未報告）においても住居跡の内外で比較的大規模な土坑跡が出土している。
2．竹下將男　他　1995「磯鶏舘山遺跡発掘調査報告書」宮古市教育委員会

# 4. 赤前Ⅳ八枚田遺跡

## ４－１．調査の概要と基本層序

赤前Ⅳ八枚田遺跡は宮古市の遺跡コードLG54-1008として登録される遺跡である。山麓の尾根、扇状地、低湿地で構成される。今回の調査区は、地形的に北側から尾根の広い平坦部（Ａ区）、南向きの斜面（Ｂ１区）、低地平坦部（Ｂ２区）、低地緩斜面（Ｂ３区、Ｂ４区）、低湿地（Ｃ区）に分れ、調査はその地形によった区分けをして行った。

検出遺構と基本層序

Ａ～Ｂ１区（第68図）

Ａ区は今回調査した尾根のなかでもっとも広い平坦面をもち、Ｂ１区は尾根の南斜面中位に形成された狭い平場である。遺構はとくに南斜面付近に集中する。

Ａ区の北側では平安時代の竪穴住居跡２棟、土坑群、溝跡が出土し、中央部では平安時代の竪穴住居跡、溝跡、などが出土している。Ｂ１区と重複する南斜面付近では、上層から平安時代の竪穴住居跡、製鉄関連遺構（鍛冶炉３、焼土遺構５など）、道状遺構などが出土し、下層からは弥生時代の竪穴住居跡、土坑跡、縄文時代の竪穴住居跡などが出土した。

基本層序（第69図）

Ⅰ層　やや締りのある褐色土層で、平坦部に薄く、斜面で厚く堆積する。

Ⅱ層　黄褐色土を含む締りのある暗褐色土で、Ａ区北側に堆積する。溝を掘削した際に廃棄された土か。

Ⅲ層　炭、焼土を含むやや締りのある暗褐色土である。７８埋土

Ⅳ層　明黄褐色土を含む締りのある褐色土である。７８埋土

Ⅲ、Ⅳ層はＡ３区からＢ１区にかけて堆積する。

Ⅴ槽　旧表土層。

Ⅵ層　焼土、炭を含む締りのない暗褐色土で、Ｂ１区に堆積する。

Ｂ２区～Ｂ４区（第70図）

Ｂ２区は扇状地の平坦部にあたる。中央部から弥生時代（１棟）、奈良時代（１棟）、平安時代（２棟）の竪穴住居跡とあわせて平安時代の製鉄炉が出土している。Ｂ３～Ｂ４区は平坦部の南側の緩斜面で、遺構は出土せず、大小の礫を含んだ層が厚く堆積する。Ｂ４区のあたりから低湿地が始る。

基本層序（第71図）

Ⅰ層　締りのない暗褐色土層である。

Ⅱ層　やや締った黒褐色土層で、土器、鉄製品、鉄滓、焼土塊などを含む。おもにＢ２区平坦部に堆積する。

Ⅲ層　やや締った黒色土で、大小の礫を多量に含む。低地～低湿地に堆積する。

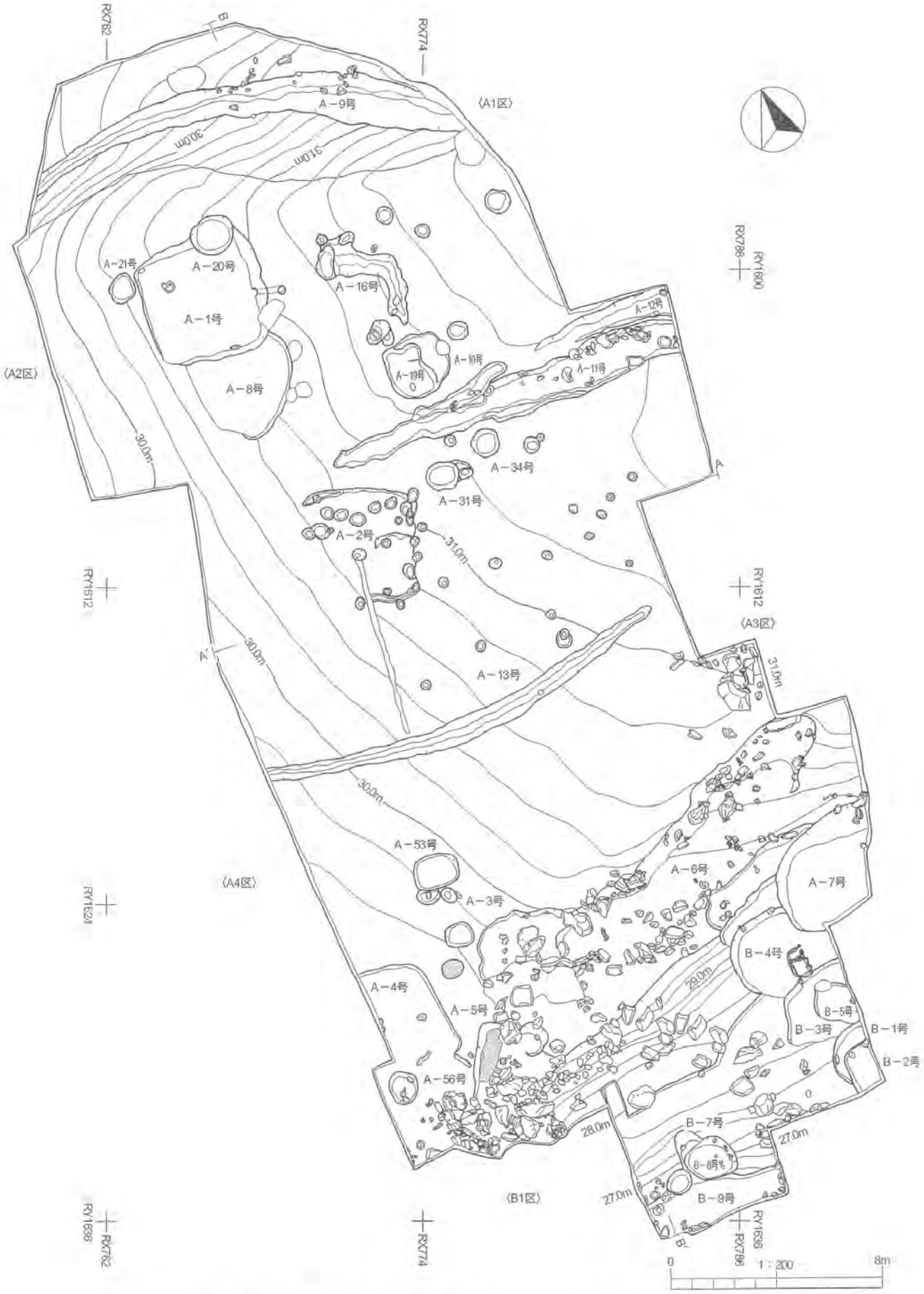
Ｃ区（第72図）

山麓から流れ出した沢がいくつかに分岐する低湿地である。遺構は出土していない。

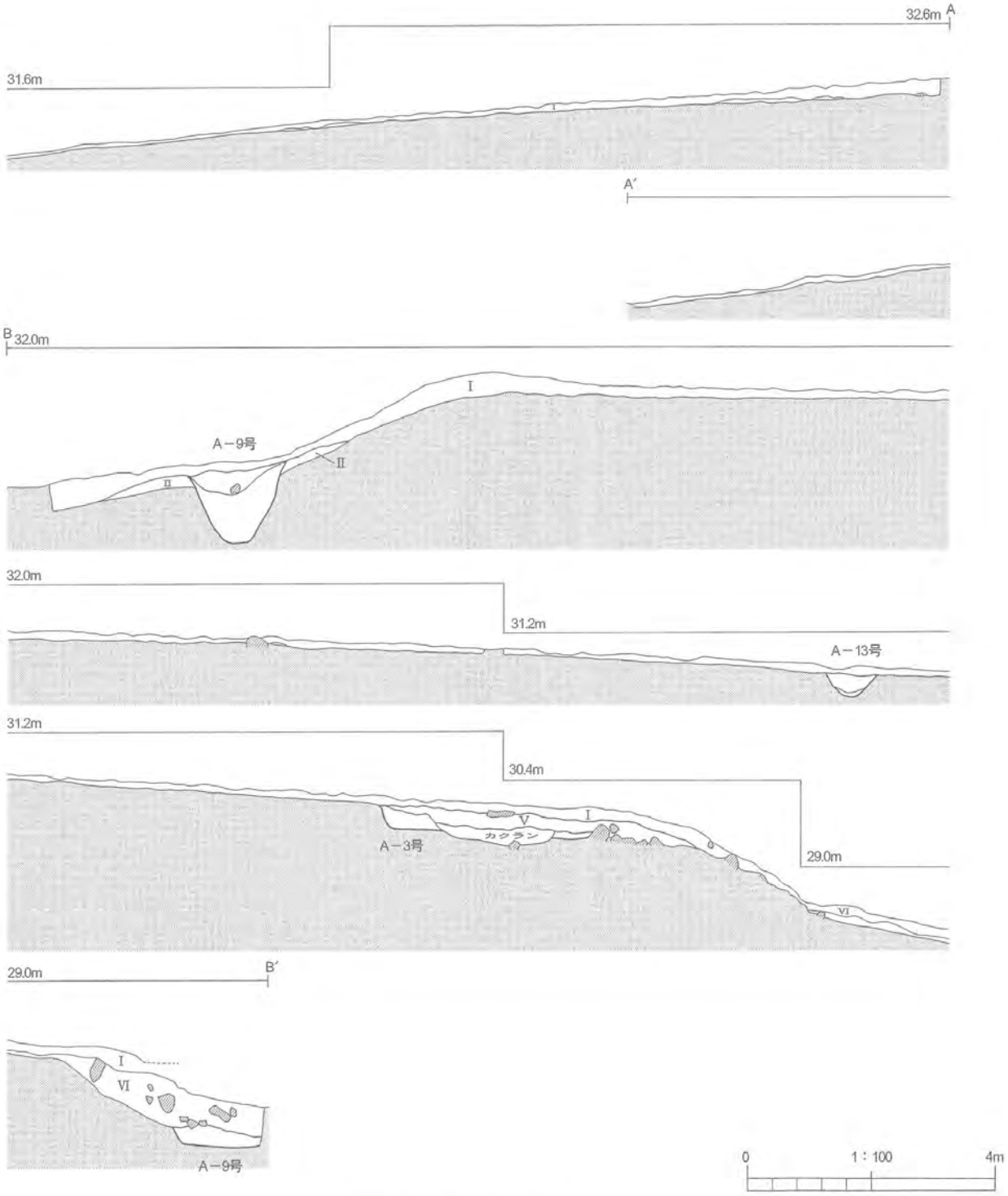
Ⅰ層　締りのない黒褐色土である。Ｂ区Ⅰ層に対応する。

Ⅱ層　軟らかく密な砂質埴壌土で、水性堆積層である。

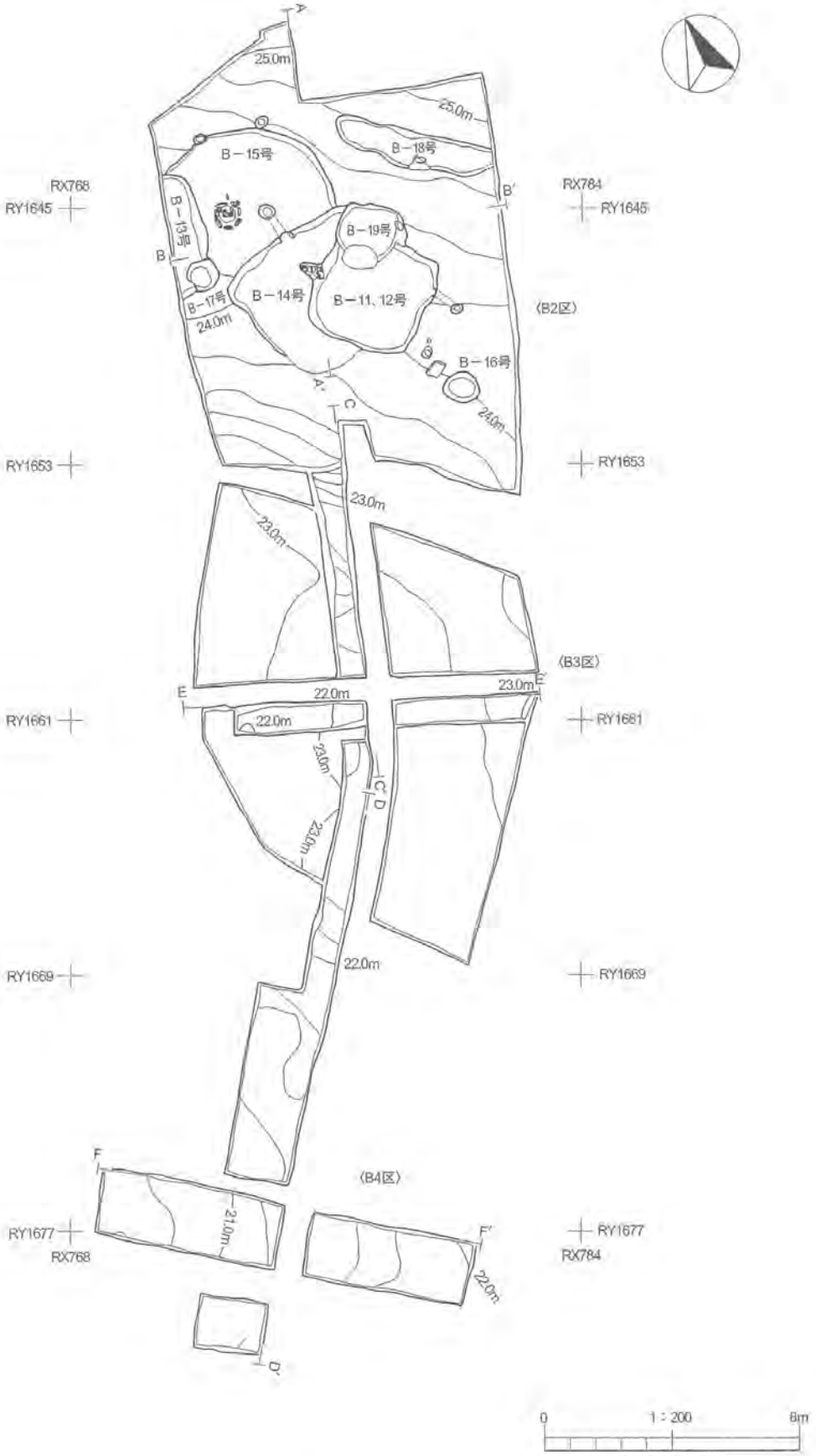
Ⅲ層　締りがあり、密な黒色土である。Ｂ区のⅢ層、赤前Ⅲ遺跡Ａ区のⅢ層にそれぞれ対応する。



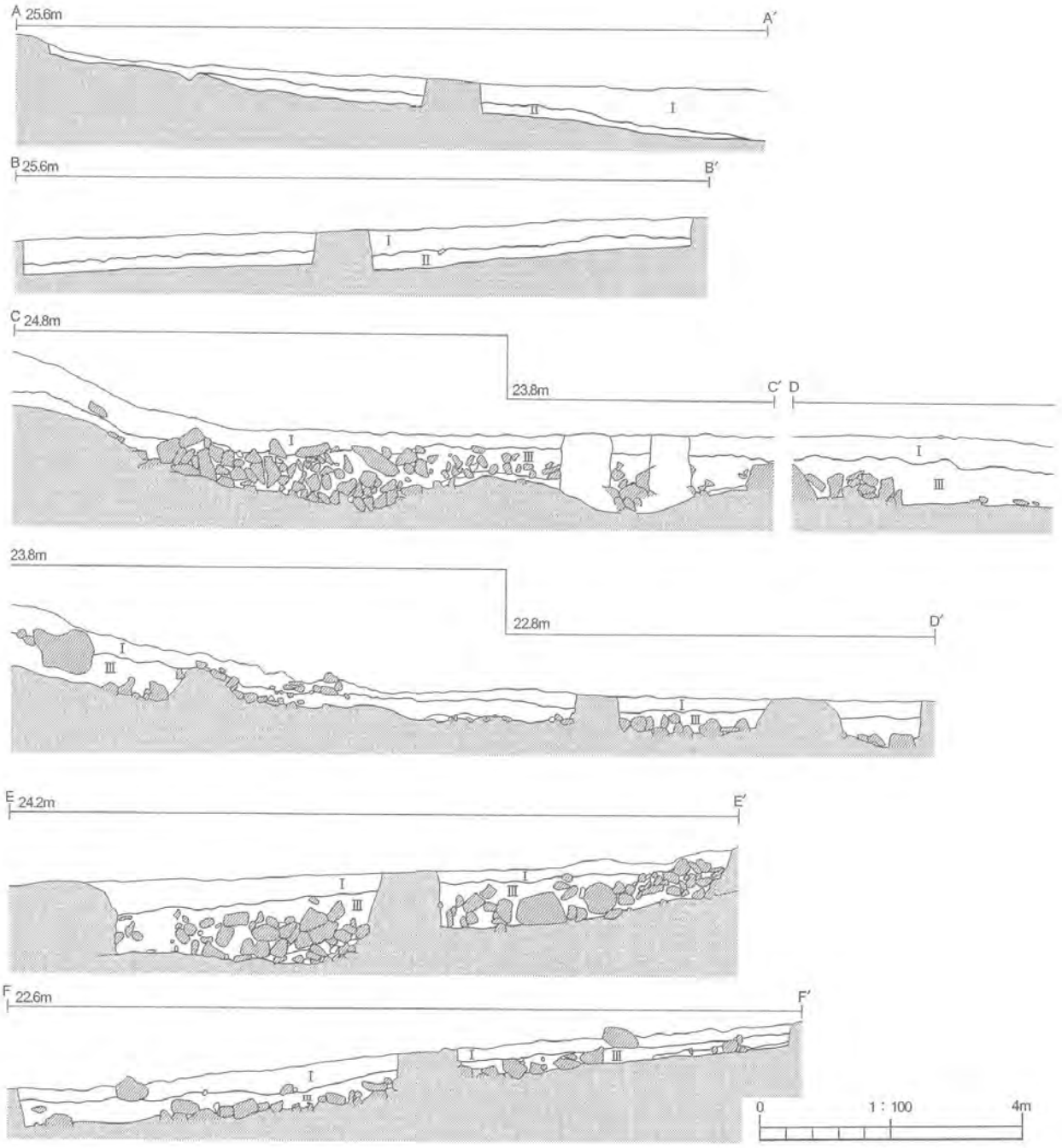

第68図　赤前Ⅳ八枚田遺跡Ａ区遺構配置図




第69図　A、B１区土層断面図




第70図　赤前Ⅳ八枚田遺跡Ｂ２～Ｂ４区遺構配置図




第71図　Ｂ２～Ｂ４区土層断面図

A区～B１区土層観察表

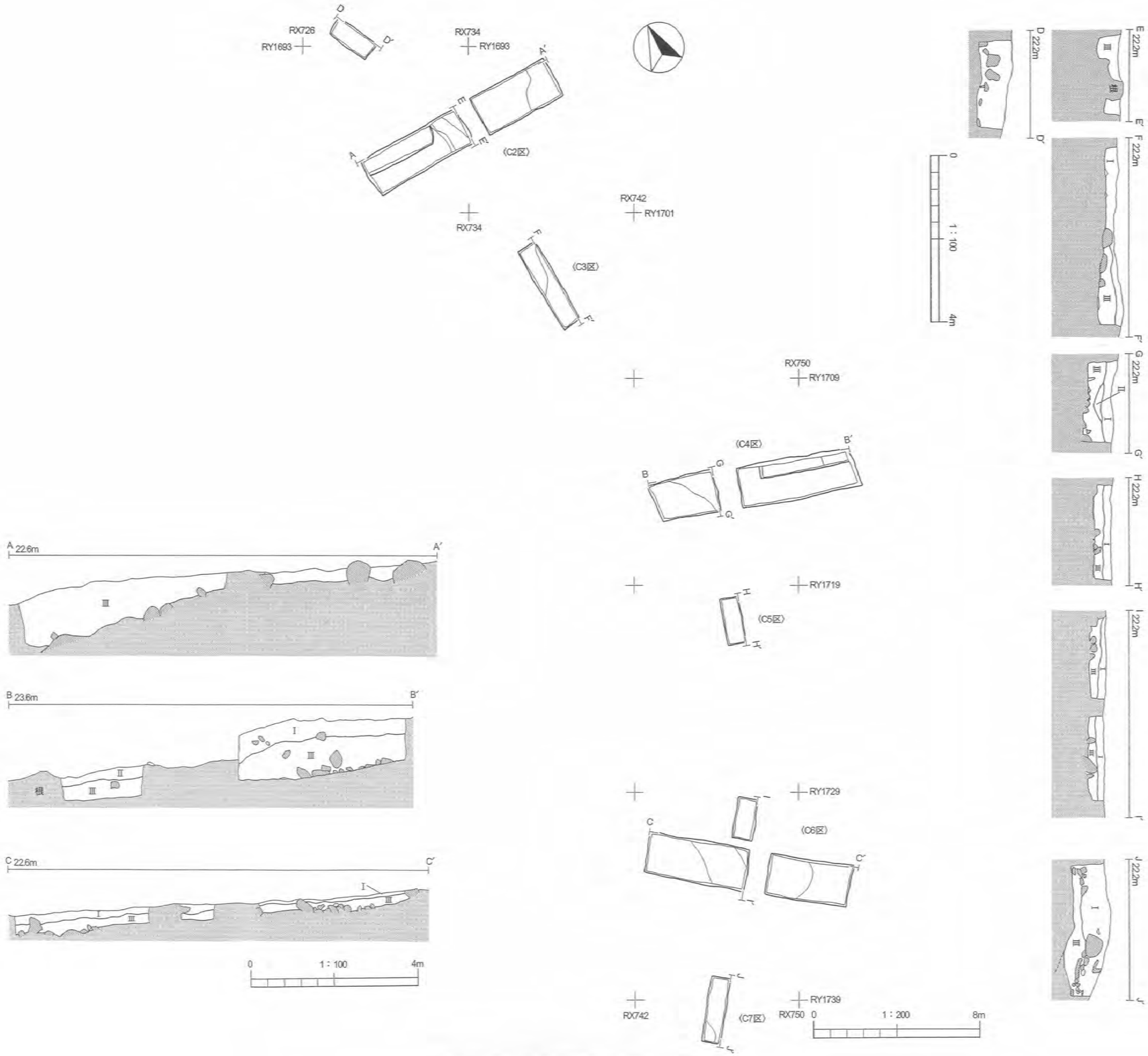
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/6　15%　砂壌土 | 中、中 → 土器多 |
| Ⅱ | 10YR4/4　暗褐　砂壌土 | 10YR5/6　20%　砂壌土 | 中～固、中～密 |
| Ⅲ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 15%　砂壌土 | 中～固、中～疎 → 土器片、炭、焼土多 |
| Ⅳ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR6/6 20%　砂壌土 | 中、中～密 → 土器片、炭少 |
| Ⅴ | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | | 中、疎 → 炭、鉄滓多 |
| Ⅵ | 7.5YR3/3 暗褐　砂壌土 | | 軟、疎 → 焼土塊、炭多 |

B２～B４区土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 20%　砂壌土 | 軟、疎 |
| Ⅱ | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 中、疎 → 土器、鉄製品、鉄滓など多 |
| Ⅲ | 10YR2/1 黒　砂質壌土 | 10YR2/3 10%　砂質壌土 | 中～固、密 |

C区土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| Ⅱ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 軟、密 → 水性堆積層 |
| Ⅲ | 10YR2/1 黒　砂質壌土 | 10YR2/3 10%　砂質壌土 | 中～固、密 |




第72図　C区全体図、土層断面図

## ４－１．検出された遺構と遺物

（１）縄文時代

ａ．住居跡

**Ｂ－４号竪穴住居跡**（第73図）

＜検出状況＞　Ｂ１区の東に位置する。Ａ３区からＢ１区にかけての斜面を削平して構築している。北東の壁をＡ－７号住居跡に切られ、炉跡から南の部分をＢ－３号住居跡によって削られている。

＜形状・規模＞　平面形は円形と推定される。規模は推定で径4.0mである。床面は平坦である。北側の壁高は0.6mである。周溝、貼床は検出していない。

＜埋土＞　Ａ層は炭、焼土を多く含む黒褐色土である。Ａ層上面はＡ－６号竪穴の生活面である。Ｂ１層は土師器を含む褐色土である。Ｃ１層は炉を覆っていた焼土層である。

＜柱穴＞　壁際と炉の周辺から６基の小土坑を検出している。柱あたりを確認したのはＰ１、Ｐ６である。

(cm)

| PIT | Ｐ１ | Ｐ２ | Ｐ３ | Ｐ４ | Ｐ５ | Ｐ６ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 23 | 11 | 22 | 15 | 20 | 20 |
| 深 | 16 | 10 | 20 | 5 | 10 | 10 |

＜炉＞（第74図）　床面中央やや南寄りに位置する。方形の石組み炉を二つ組んだ複式炉である。南西部に残る石は炉石の続きと考えられ、八の字に広がる前庭部が想定される。規模は北側が55cm×35cm、南側が70cm×60cm、深さ20cmを測る。埋土はいずれも固く締った褐～暗褐色土である。Ｋ２層は赤褐色土混じりの焼土層であるが、焼土層厚は薄い。

**出土遺物**（第75図）

１は隆線、２～４はわずかに無文帯を設けて単節縄文で施文される。５～８は隆沈線による施文、９は沈線で、下位に無文帯が設けられている。10は樽形土器で、先端に穴のある突起物を頸部にもつ。突起は橋状の把手になるものと推定される。11は口唇部に隆線を施文、その下に無文帯が続く。12は隆線に横位の付加刺突文を伴う。13、14は撚糸文と沈線、15、16は交互刺突文が施される。17は撚糸文で施文される。

＜時期＞縄文時代中期大木８ｂ式伴うものと思われる。

**Ｂ－５号竪穴住居跡**（第76図）

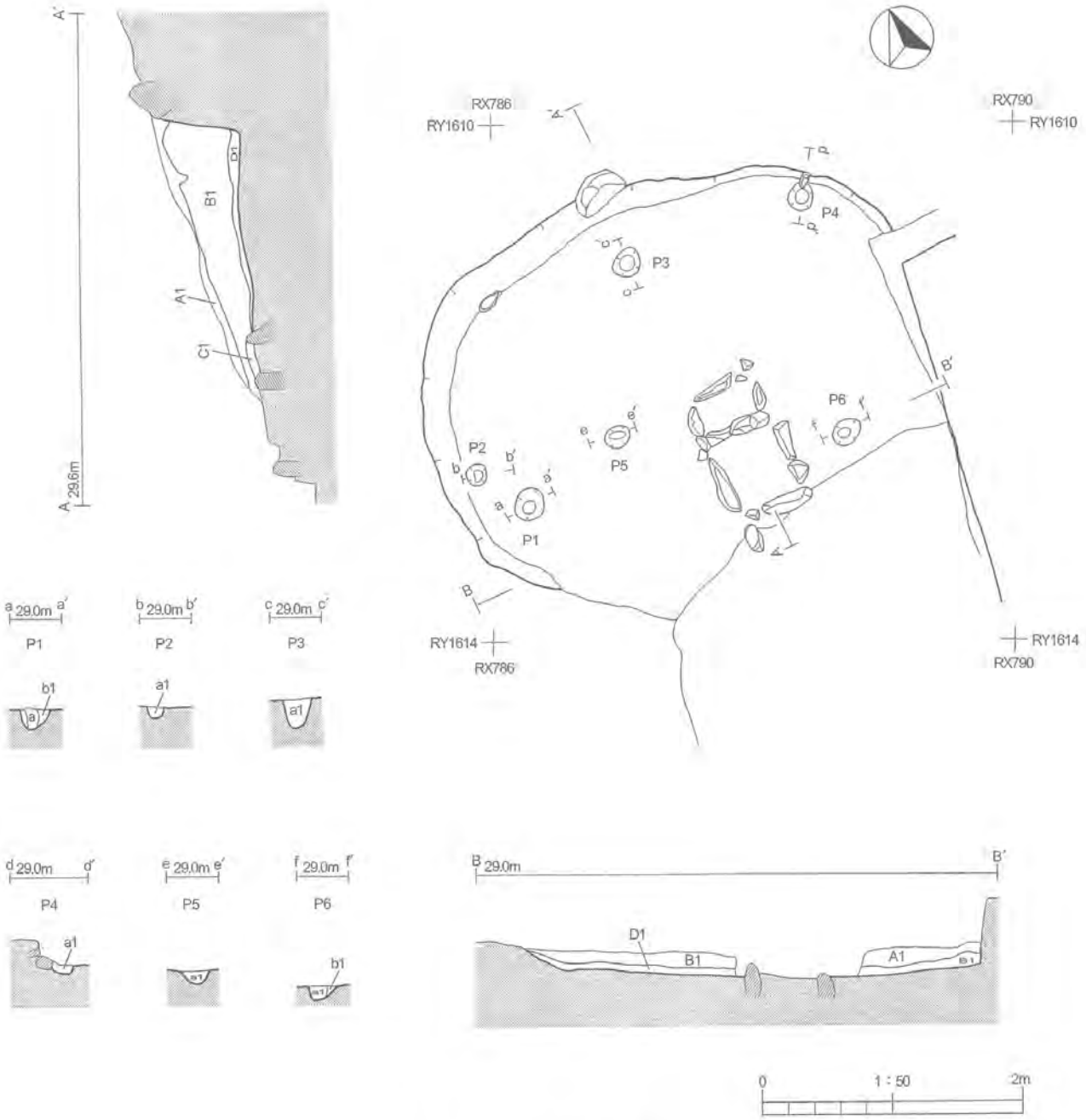
＜検出状況＞　Ｂ－３号に住居跡の大部分を削られており、残された北側の一部を検出した。北と西の壁を確認したが、北西の角は攪乱されている。石囲炉と柱穴を検出している。

＜形状・規模＞　検出面が少なく規模は不明であるが、平面形は円形と推定される。西の壁きわが浅く不整楕円形に掘り込まれており、その中から柱穴が出土している。出入口などの施設が設けられていたのだろうか。

＜埋土＞　Ａ、Ｂ層はＢ－３号の埋土である。Ｃ層は締りのある暗褐色土である。

＜床面＞平坦である。周溝、貼床は検出されていない。

＜柱穴＞　西の壁際で検出している。柱あたりを確認している。規模は、径20cm、深さ30cmである。




第73図　B－4号竪穴住居跡

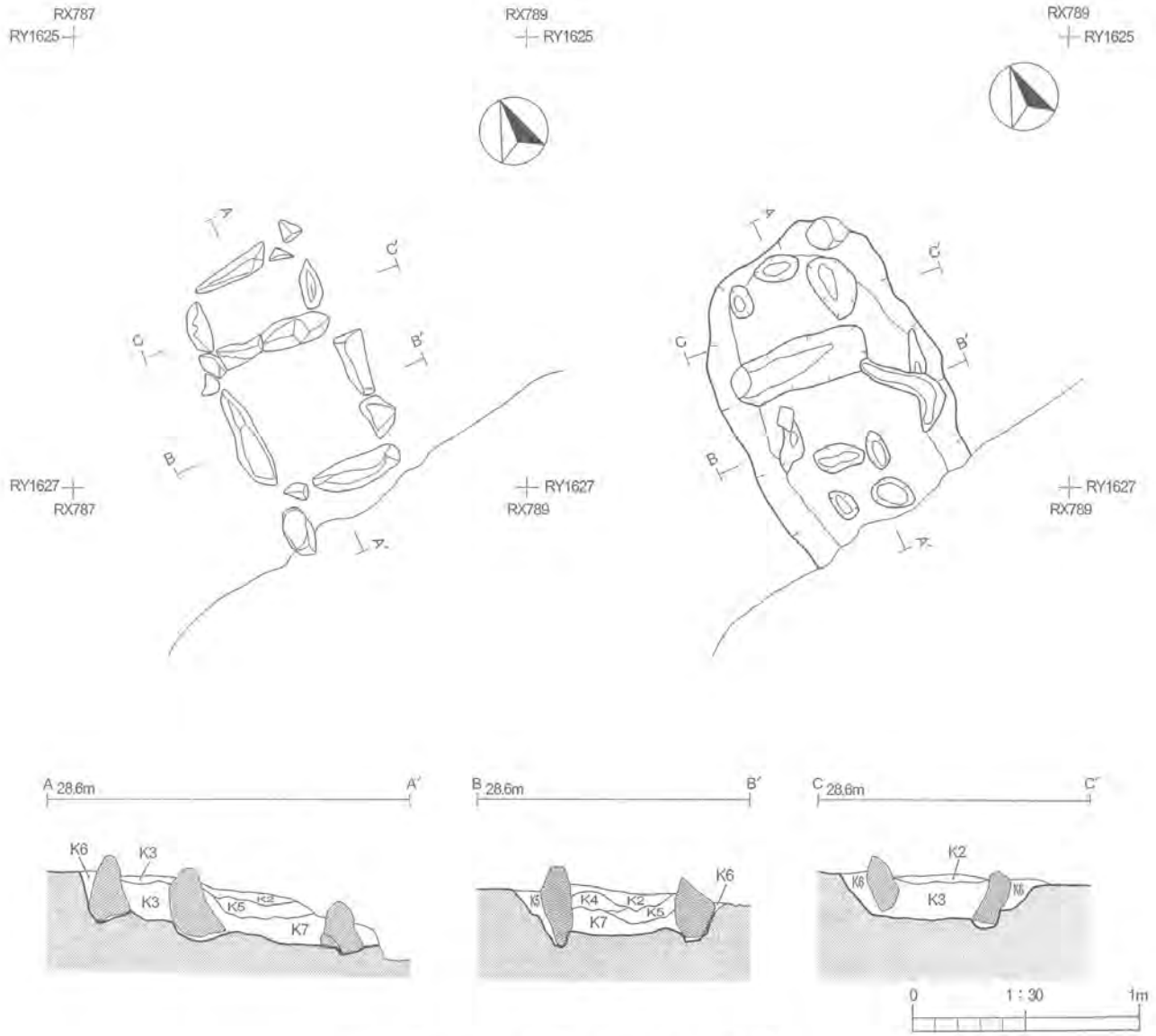
＜炉跡＞（第77図）　焼土の南と北で炉石の埋設穴が出土している。焼土面は円形で、径は約36cmと推定される。K１層が固く焼き締った焼土層で、層厚は４cmである。

**出土遺物**（第78図）

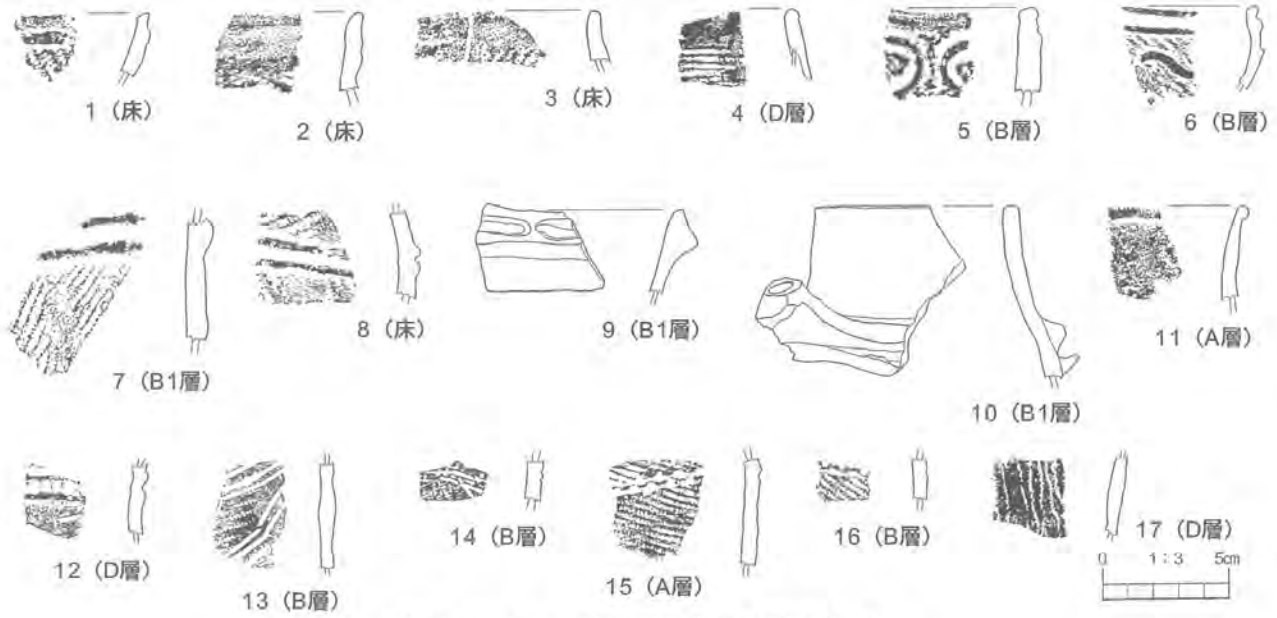
C１層から縄文土器体部片が１点出土したのみである。

１は、縦位に隆沈線を施した深鉢の体部である。２は、沈線のみの施文であるが、器形は不明である。

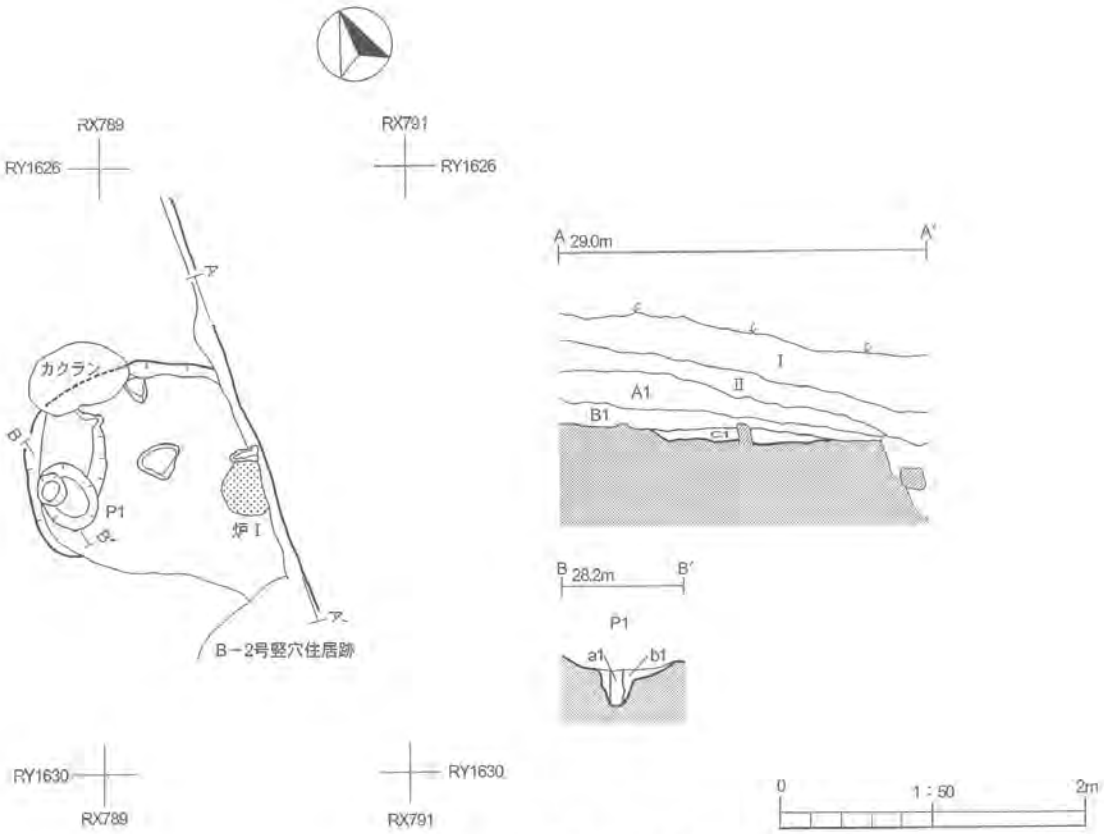
＜時期＞　縄文時代中期中葉に伴うものと思われる。



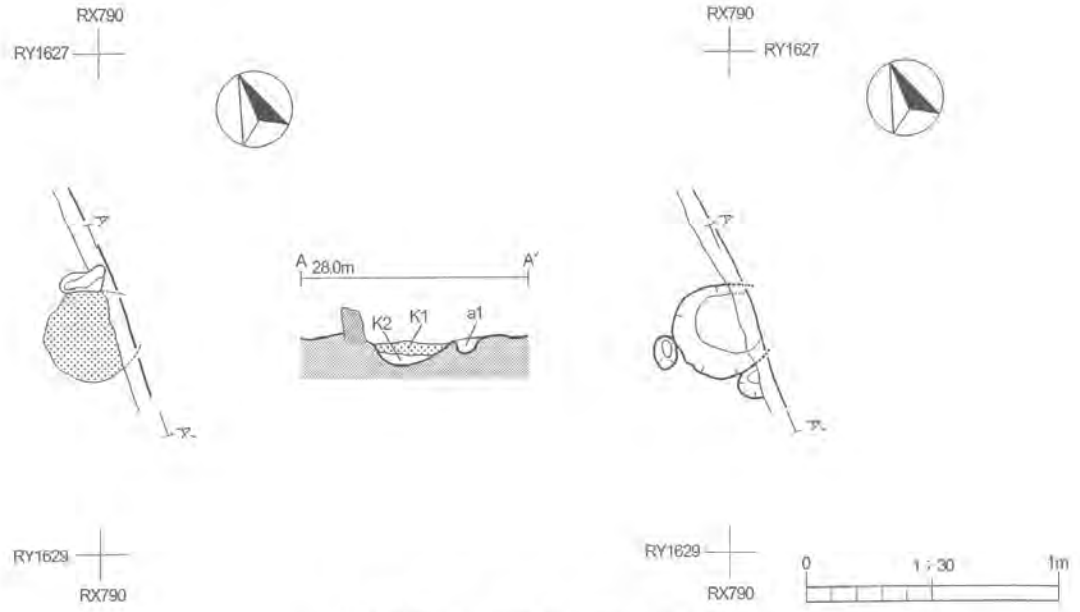

第74図　B－4号竪穴住居跡カマド



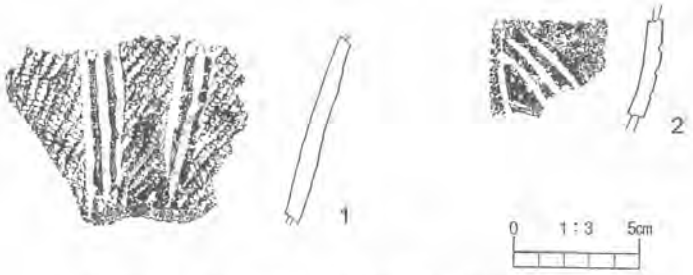

第75図　B－4号竪穴住居跡出土遺物




第76図　Ｂ－５号竪穴住居跡




第77図　Ｂ－５号竪穴住居跡炉跡




第78図　B－5号竪穴住居跡出土遺物

B－4号住居跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR2/2 黒褐　砂壌土 | 10YR2/1 10%　砂壌土 | 中～固、中 → 炭、焼土多 |
| B1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 中、疎 → 土師片 |
| C1 | 5YR4/8 赤褐 砂壌土 | 5YR3/4 10%　砂壌土 | 固、密 |
| D1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR5/6 15%　砂壌土 | 中、疎 → 縄文土器 |

B－4号住居跡柱穴土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P1　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/8 5%　砂壌土 | 中、疎 → 炭少 |
| 〃　b1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 中、中 |
| P2　a1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、中 |
| P3　a1 | 注記なし　砂壌土 | | |
| P4　a1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中～固、中 |
| P5　a1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR5/8 10%　砂壌土 | 中～固、疎 → 土器 |
| P6　a1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 固、密 → 炭微 |
| P7　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 固、疎 |
| 〃　b1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 中～固、中 |

B－4号住居跡炉跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K1 | 7.5YR4/4 褐　砂壌土 | 5YR4/8 5%　砂壌土 | 中～固、中 |
| K2 | 7.5YR4/6 褐　砂壌土 | 5YR5/8 10%　砂壌土 | 固、中 |
| K3 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR6/6 10%　砂壌土 | 中～固、疎 → 炭、焼土少 |
| K4 | 10YR3/3 暗褐　埴壌土 | 7.5YR3/3 10%　砂壌土 | 固、中～密 → 炭、焼土 |
| K5 | 10YR2/1 黒　砂壌土 | 10YR2/3 10%　砂壌土 | 中～固、中 |
| K6 | 注記なし | 注記なし | 注記なし |
| K7 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR6/6 20%　砂壌土 | 中、疎 |

B－5号住居跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| C1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 7.5YR3/4 10%　埴壌土 | 固、中 → 炭多 |

B－5号住居跡柱穴土層観察

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P1　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中～軟、疎 |
| 〃　b1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中～軟、中 |

B－5号住居跡炉跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K1焼土 | 5YR5/8 明赤褐　埴壌土 | 5YR5/6 10%　埴壌土 | 固、密 |
| K2 | 5YR4/6 褐　埴壌土 | 7.5YR5/6 20%　埴壌土 | 固、密 |
| a1炉石跡 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　埴壌土 | 軟、疎 |

（2）弥生時代

a．住居跡

**B－15号竪穴住居跡**（第79図）

＜検出状況＞　B２区の西に位置する。B－13号住居跡に西側を、B－14号住居跡に南側をそれぞれ切られている。南西部は削られ消失している。床面から炉跡を検出した。

＜形状・規模＞　平面形は円形で、規模は径5.5m前後と推定される。壁高は北側で20cmである。周溝は検出していない。

＜埋土＞　締りのある暗褐色土と褐色土の２層に分れる。

＜柱穴＞　床面から土坑が７基検出している。壁にそってほぼ円形に配置されているようにみえる。P２、P７、P８で柱あたりが確認されている。

(cm)

| PIT | P１ | P２ | P３ | P４ | P５ | P６ | P７ | P８ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 35 | 30 | 30 | 25 | 30 | 20 | 18 | 30 |
| 深 | 7 | 60 | 40 | 35 | 30 | 12 | 44 | 35 |

＜炉跡＞（第80図）

炉は住居の中央部、やや西寄りに位置する。円形に掘り窪め、円形に石を組んでいる。規模は径80cm、深さ15cmである。K２層が固く焼き締った焼土層で、層厚は５cmである。

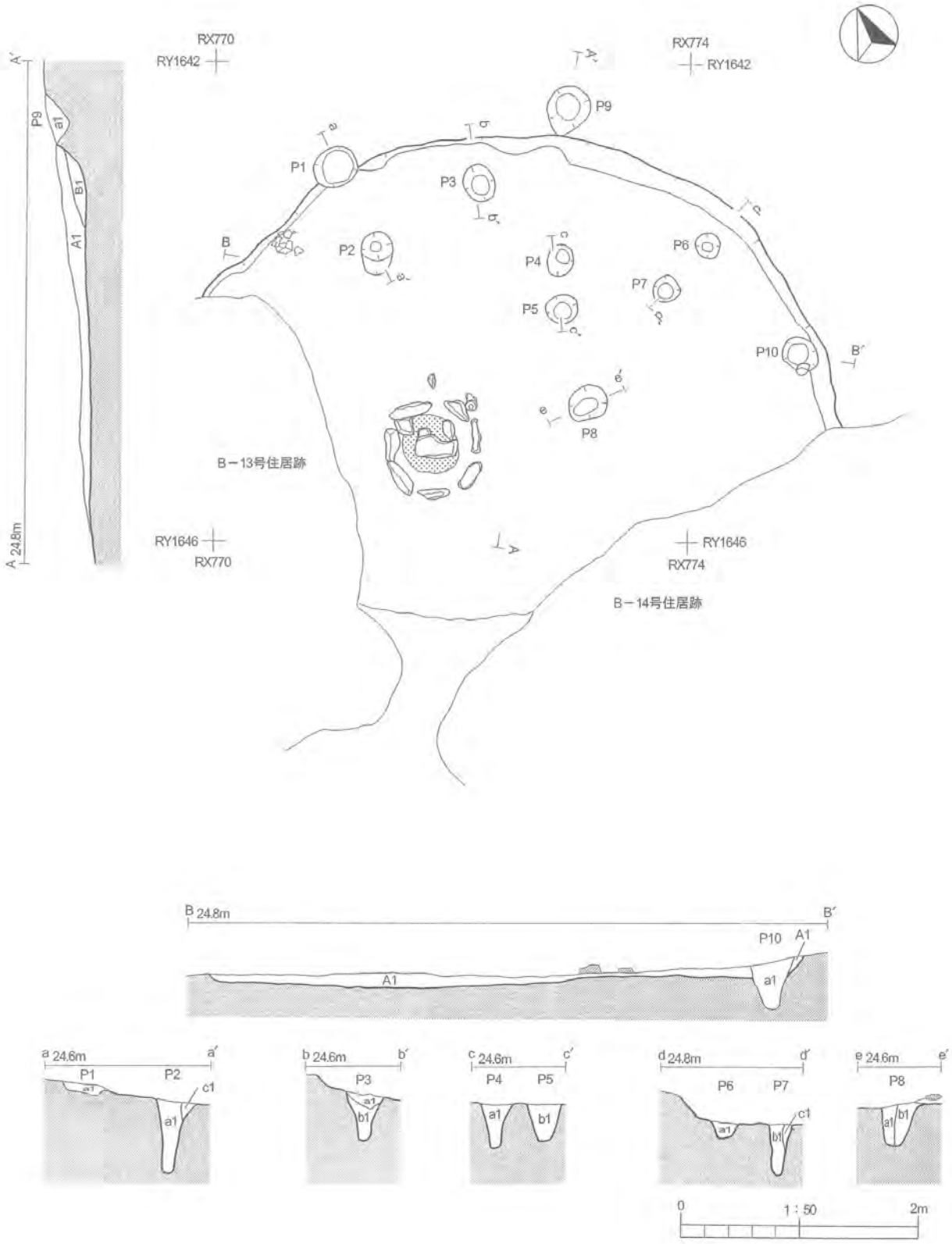
**出土遺物**（第81図）

１～10は炉に伴い、11～14は炉跡周辺の焼土に伴って出土したものである。１は小形の壷である。口縁部には、帯状の隆帯に沈線をめぐらし、４箇所に楕円状の切れ込みをいれる。その切れ込みの間に貼瘤をもつ。２は壷の体部であるが、１より大形である。３口縁部の内反する甕である。地文はLR単節で横走し、口縁部に細く磨消がはいる。４は口縁部が外反する甕である。口縁部はヨコナデ調整され、口唇部には側面圧痕を施す。地文はLR単節を横走させる。５～９、11、13は浅鉢あるいは高坏である。５、６は沈線と縄文で施文される。７～９、11、13は変形工字文で施文される。10は高坏の脚部である。底部に平行沈線をめぐらす。12は４と同じく口縁部の外反する甕である。波状口縁で、口縁部は無文である。地文はLR単節を横走させる。15は平行沈線をめぐらす甕の頸部とおもわれる。地文はLRを横走させる。14、16は縄文は細かく、胎土は密である。壷の底部の可能性がある。

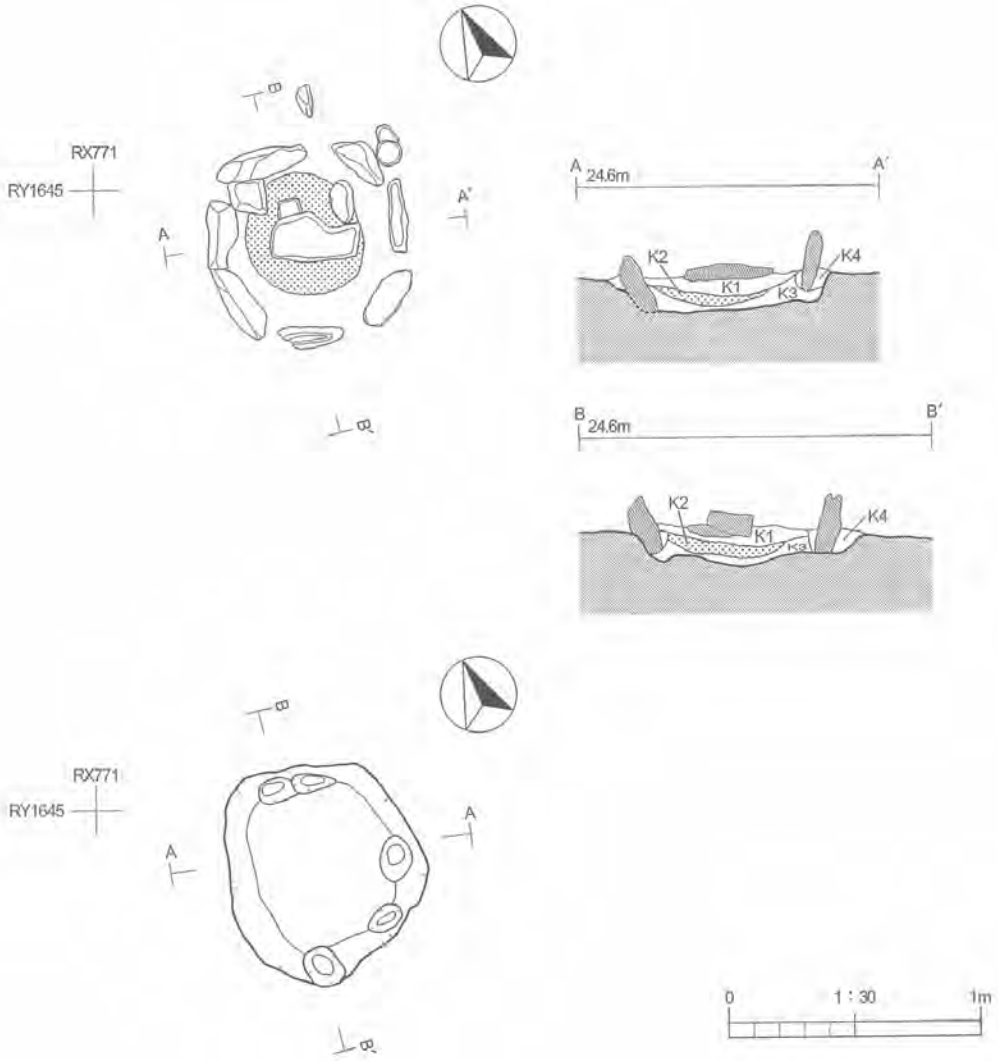
＜時期＞　弥生時代初頭に伴う。

B－１５号住居跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、疎 → 炭、焼土、土器、貝 |
| B１ | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中、中 → 炭微 |
| P９　a１ | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P10　a１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR5/8 10%　砂壌土 | 中、疎 |



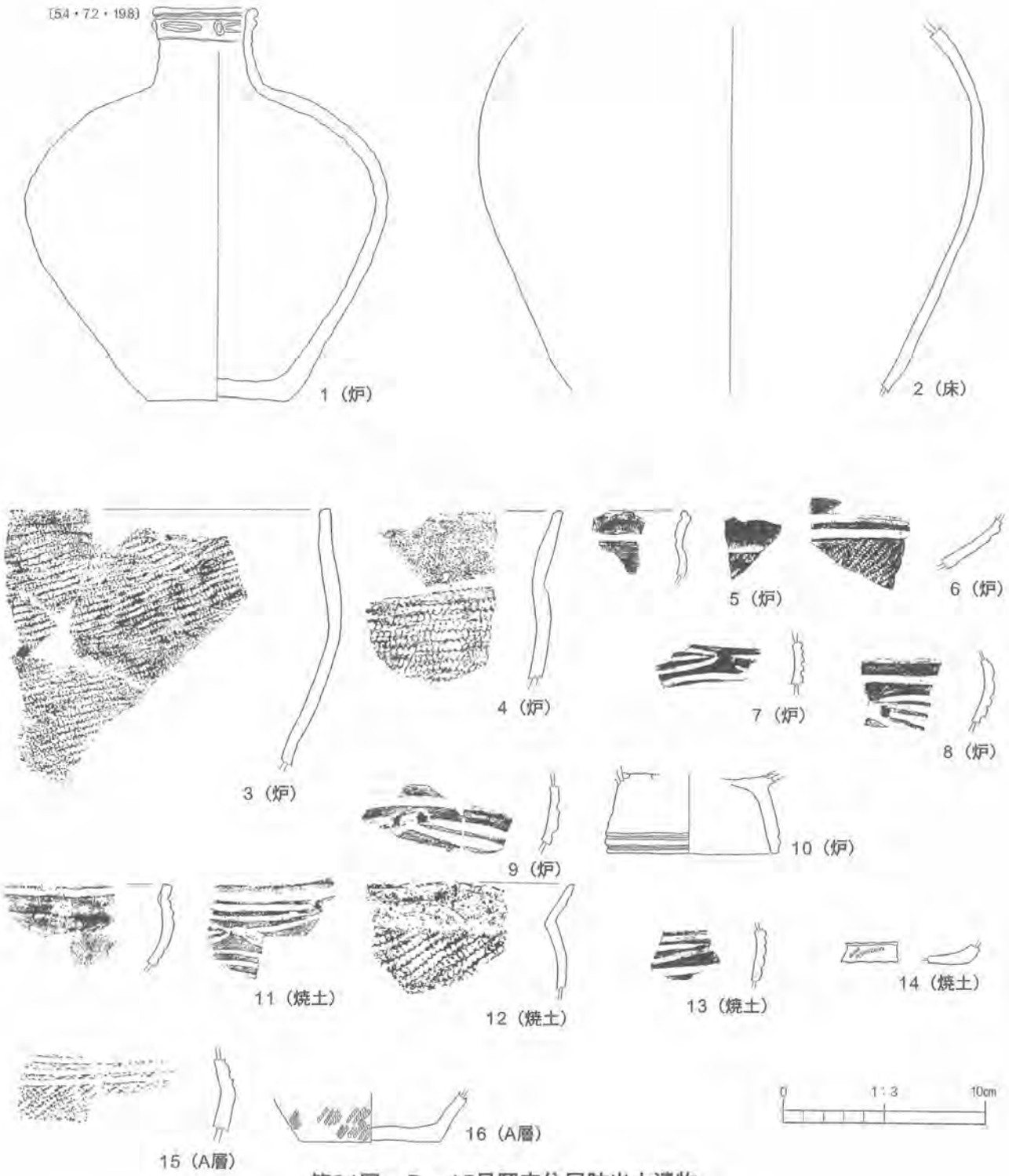

第79図　B－15号竪穴住居跡




第80図　Ｂ－15号竪穴住居炉跡

Ｂ－１５号柱穴土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P１　a１ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/8 10%　砂壌土 | 中、疎 |
| P２　b１ | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P２　c１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P３　a１ | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| 〃　b１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P４　a１ | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P５　b１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 軟、疎 → 炭少 |
| P６　a１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 5%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P７　b１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P７　c１ | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P８　a１ | 10YR3/3 暗褐　砂壌土 | | 軟、疎 → 炭微 |
| P８　b１ | 10YR4/6 褐　砂壌土 | | 軟、疎 |




第81図　B－15号竪穴住居跡出土遺物

B－15号炉跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K1 | 7.5YR3/4 暗褐　砂壌土 | 7.5YR4/6 15%　砂壌土 | 軟，疎 → 土器，礫 |
| K2 | 5YR4/8 明赤褐　埴壌土 | 5YR5/8 10%　砂壌土 | 固，密 |
| K3 | 7.5YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中，中 |
| K4 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中～軟，疎 |

**Ｂ－３号竪穴住居跡**（第82図）

＜検出状況＞　Ｂ１区の東端に位置する。Ｂ－４号を切り、Ｂ－１号に切られている。北と西の壁を確認し、床面から焼土と炭の広がり、焼土遺構を検出した。

＜形状・規模＞　平面形は円形と思われるが、規模は不明である。床面は平坦である。周溝は検出していない。

＜埋土＞　３層に大別される。締りのない暗褐、黒褐色土と締りのある褐色土である。

＜柱穴＞　検出していない。

＜焼土遺構＞（第83図）　焼土Ａ、Ｂは大きな炭塊を含んだ焼土であるが、軟らかく床面も焼けておらず、廃棄されたものと考えられる。焼土Ｃは、やや軟らかめの焼土層（Ｋ３）が確認され、炉跡と考えられるが、炉石などは検出されなかった。焼土Ｃは平面形は楕円形で，規模は55cm×65cm、焼土層厚は４cmである。

**出土遺物**（第84図）

１は波状口縁の甕である。波頂部には丸い切れ込みが入り、横位、斜位の単節斜縄文で施文され、縄文は口唇部にも施される。２～４は沈線と交互刺突文、５は撚糸文で施文される。６、７は沈線と縄文される。８は口縁部が無文の甕の頸部である。９は横位の斜縄文による施文で、１と同一個体と思われる。10は壷の頸部である。11は沈線と交互刺突文、12、13は沈線と縄文による施文である。14、15は１と同種のものと考えられる。14は一部磨消される。16は土師器甕の底部である。底部の強く張出し、胎土は密な精製土器である。17は底面に刻線の施された底部であるが器種、器形は不明である。

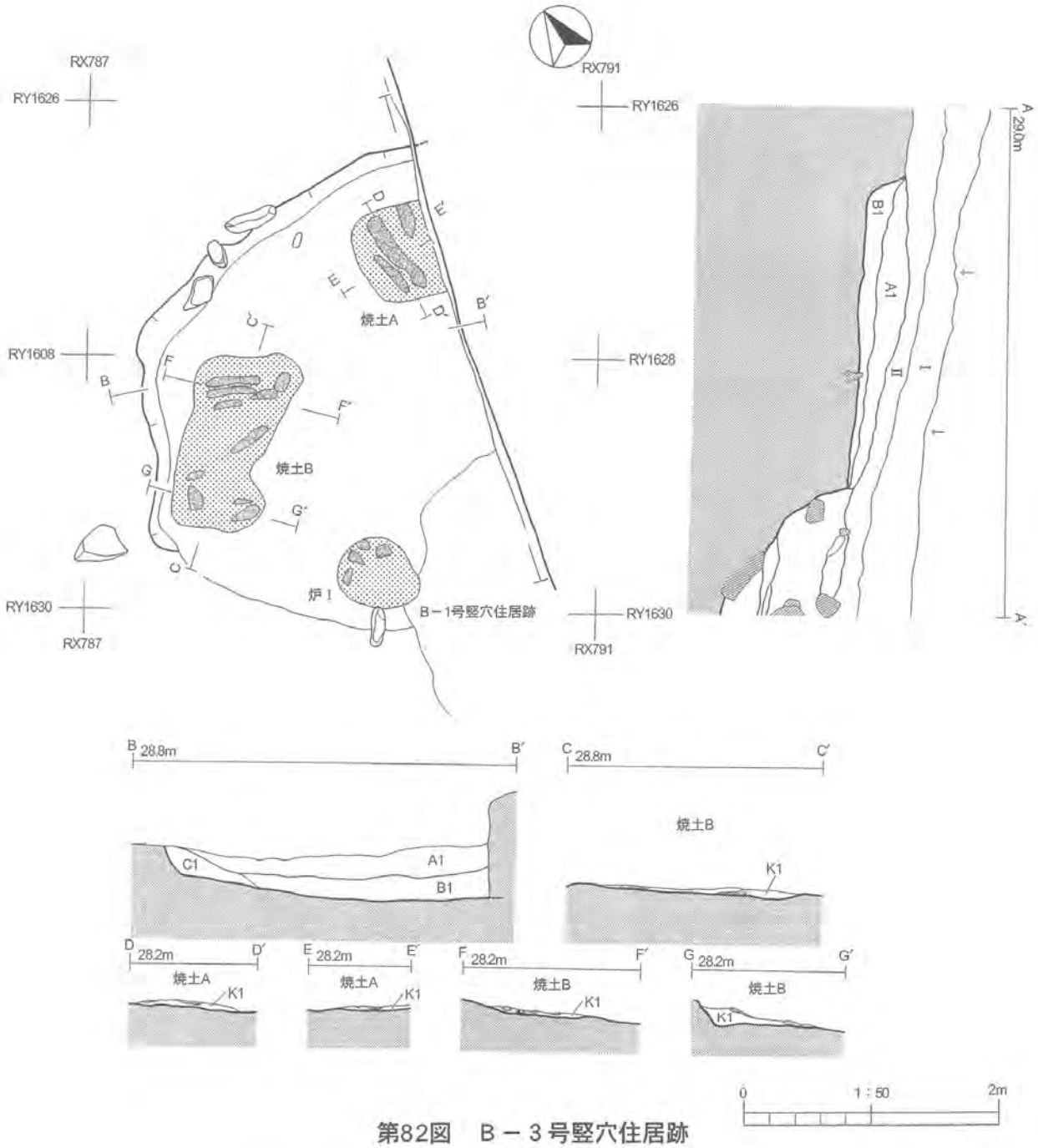
＜時期＞　弥生時代後期に伴う。

**Ｂ－３号住居跡土層観察表**

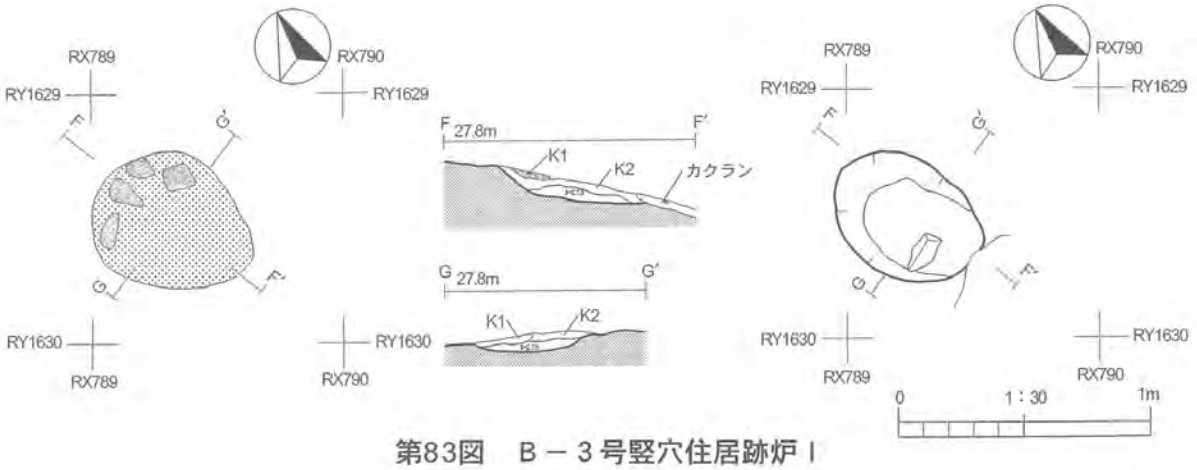
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ａ１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 軟、疎　→　土器片、鉄滓 |
| Ｂ１ | 10YR2/2 黒褐　砂壌土 | 10YR4/4 15%　砂壌土 | 軟、疎　→　土器片、焼土、炭多 |
| Ｃ１ | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 中、中　→　土器、炭少 |

**Ｂ－３号住居跡焼土土層観察表**

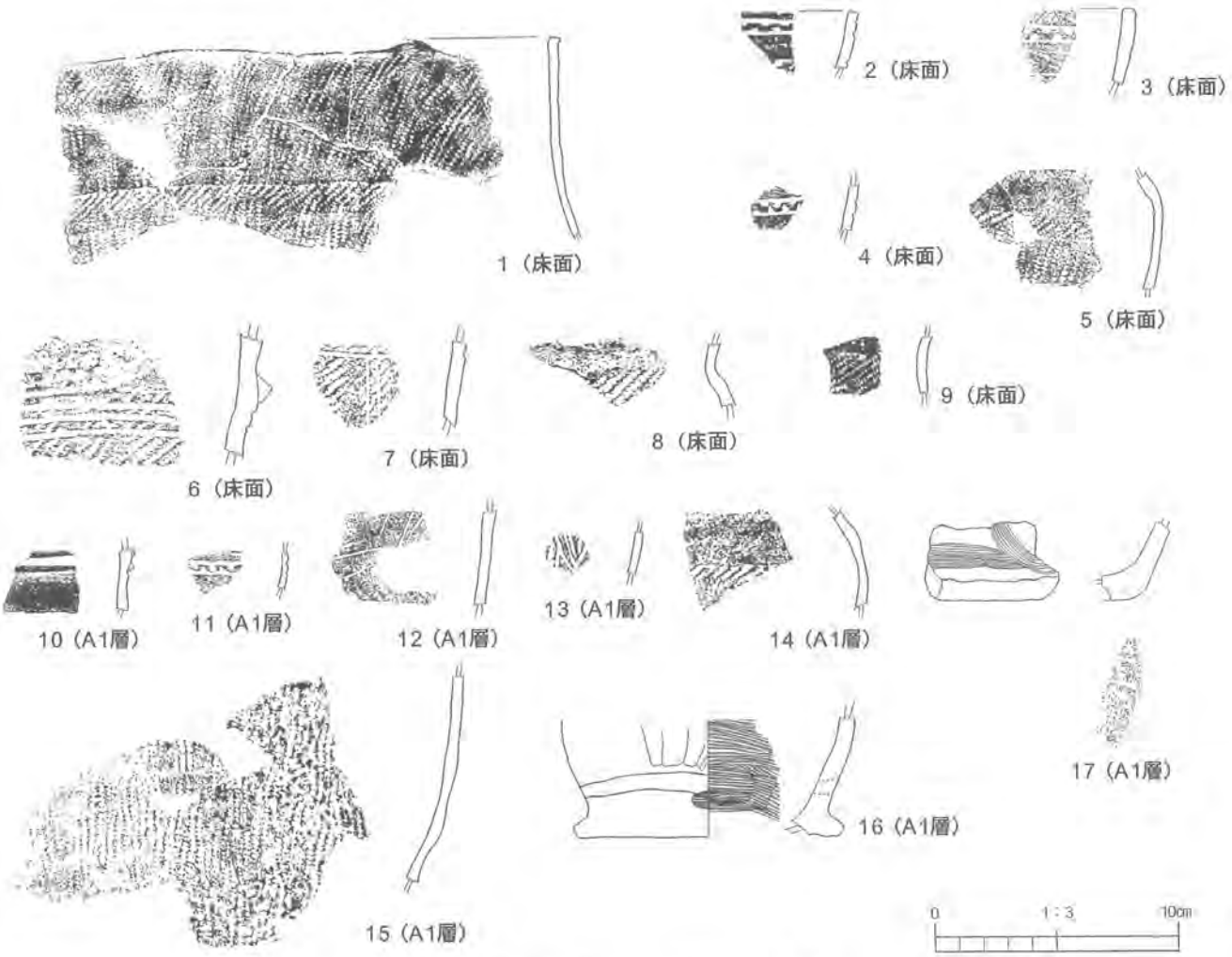
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 焼土Ａ　Ｋ１ | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 軟、疎　→　焼土、炭多 |
| 焼土Ｂ　Ｋ１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 軟、中　→　焼土、炭多 |
| 炉Ｉ　Ｋ１ | 10YR3/3 暗褐　砂壌土 | 10YR2/1 40%　砂壌土 | 軟、疎　→　炭多 |
| 〃　Ｋ２ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR5/4 10%　砂壌土 | 中、疎　→　炭、焼土少 |
| 〃　Ｋ３ | 5YR5/8 赤褐　砂壌土 | 5YR4/6 10%　砂壌土 | 中～軟、中～疎 |




第82図　B－3号竪穴住居跡




第83図　B－3号竪穴住居跡炉Ⅰ




第84図　Ｂ－３号竪穴住居跡出土遺物

ｂ．土坑跡

Ｂ－７号、Ｂ－８号土坑跡（第85図）

＜検出状況＞　Ｂ１区南西部に位置する。Ｂ１区からＢ２区へむかって下る斜面の上部を掘り込んでいる。Ｂ－７号はＢ－８号を切る。

Ｂ－７号土坑跡

＜形状・規模＞　北側の半分のみの検出であるが、平面形は楕円形と推定される。規模は1.1m×1.6m前後で、深さ80cmである。

＜埋土＞　締りのある暗褐色土で、黄褐色土がまじる。

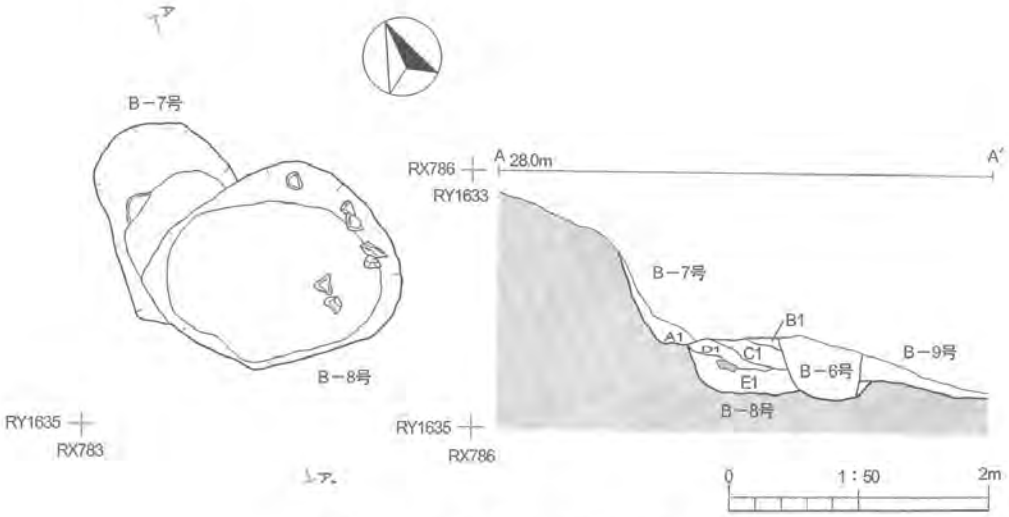
出土遺物（第86図　１～15）

１～14は、甕の体部片で、すべて撚糸文で施文されている。同一個体と思われるが接合しなかったものである。いずれも赤穴式に伴う。15は単節斜縄文が横位に施された底部である。

＜時期＞　弥生時代後期に伴う。

Ｂ－８号土坑跡

＜検出状況＞　Ｂ－６号土坑とＢ－９号道状遺構に南側を切られている。




**第85図　B－7号、B－8号土坑跡**

＜形状・規模＞　平面形は楕円形で、規模は2.0m×1.5m、深さは検出面から40cmである。

＜埋土＞　4層に大別され、C層の暗褐色土、D層の褐色土から土器が多数出土する。

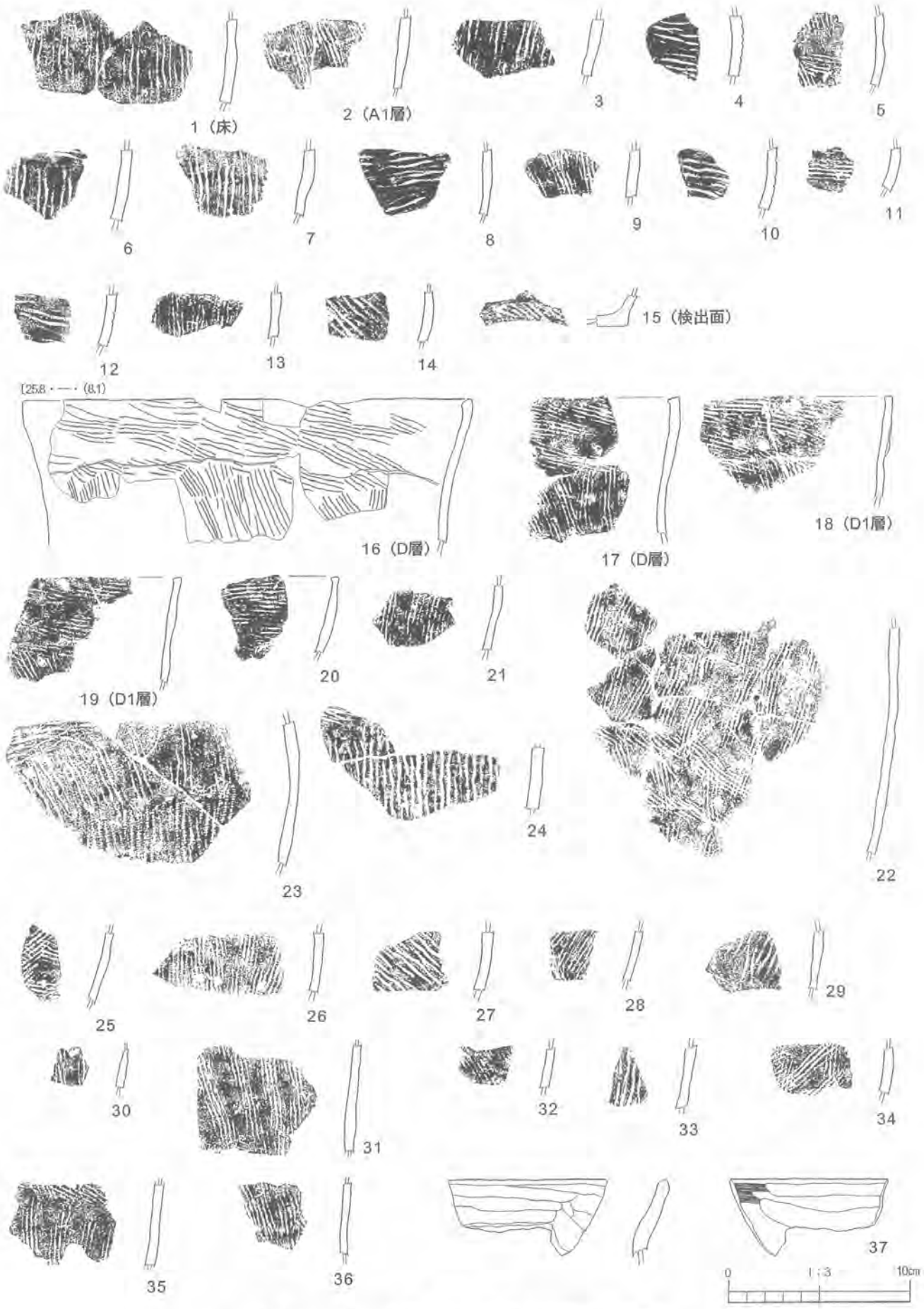
**出土遺物**（第86図　16～37）

16～36は撚糸文で施文されている。16～20は複合口縁をもつ甕の口縁部、21～36は体部片である。同一個体と考えられる。いずれも赤穴式に伴う。37は甕？の口縁部である。外反気味に立上がり、口唇部を玉縁状に成形する。器厚は厚く、内外面にケズリ調整痕を残し、胎土は密で、焼成もよい。

＜時期＞　弥生時代後期に伴う。

**B－7号、B－8号土坑跡土層観察表**

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR5/8 黄褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中、疎 |
| B1 | 10YR6/8 明黄褐　砂壌土 | 10YR3/4 20%　砂壌土 | 軟、疎 |
| C1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR5/8 3%　砂壌土 | 中、疎 |
| D1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/8 20%　砂壌土 | 中、疎 |
| E1 | 10YR5/6 黄褐　砂壌土 | 10YR4/4 20%　砂壌土 | 中、疎 |




第86図　B－7号，B－8号土坑跡出土遺物

（3）奈良時代

a．住居跡

**B－14号竪穴住居跡**（第87図）

<検出状況>　B２区中央部に位置する。B－15号住居跡を切り、B－12号住居跡とB－19号土坑に切られている。北と西の壁を検出したが、南の壁は確認できなかった。カマドは北壁の中央部から出土している。西壁際で溝状の掘り込み（周溝？）を検出したが、貼床は検出していない。

<形状・規模>　平面形は隅丸方形と推定される。規模は東西約5.0m、南北は不明である。壁高は北で40cm、西で20cmである。溝は最大幅20cm、深さ10cmである。

<埋土>　A、B層とも軟らかく締りのない土層である。B層は多くの焼土を含み、その範囲を網点で示した。

<柱穴>　床面から小土坑が６基検出している。柱あたりを確認できたのはP２、P４である。P２、P４、P６が主柱穴にあたるとおもわれる。

(cm)

| PIT | P１ | P２ | P３ | P４ | P５ | P６ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 50 | 25 | 25 | 25 | 30 | 25 |
| 深 | 20 | 30 | 10 | 8 | 5 | 32 |

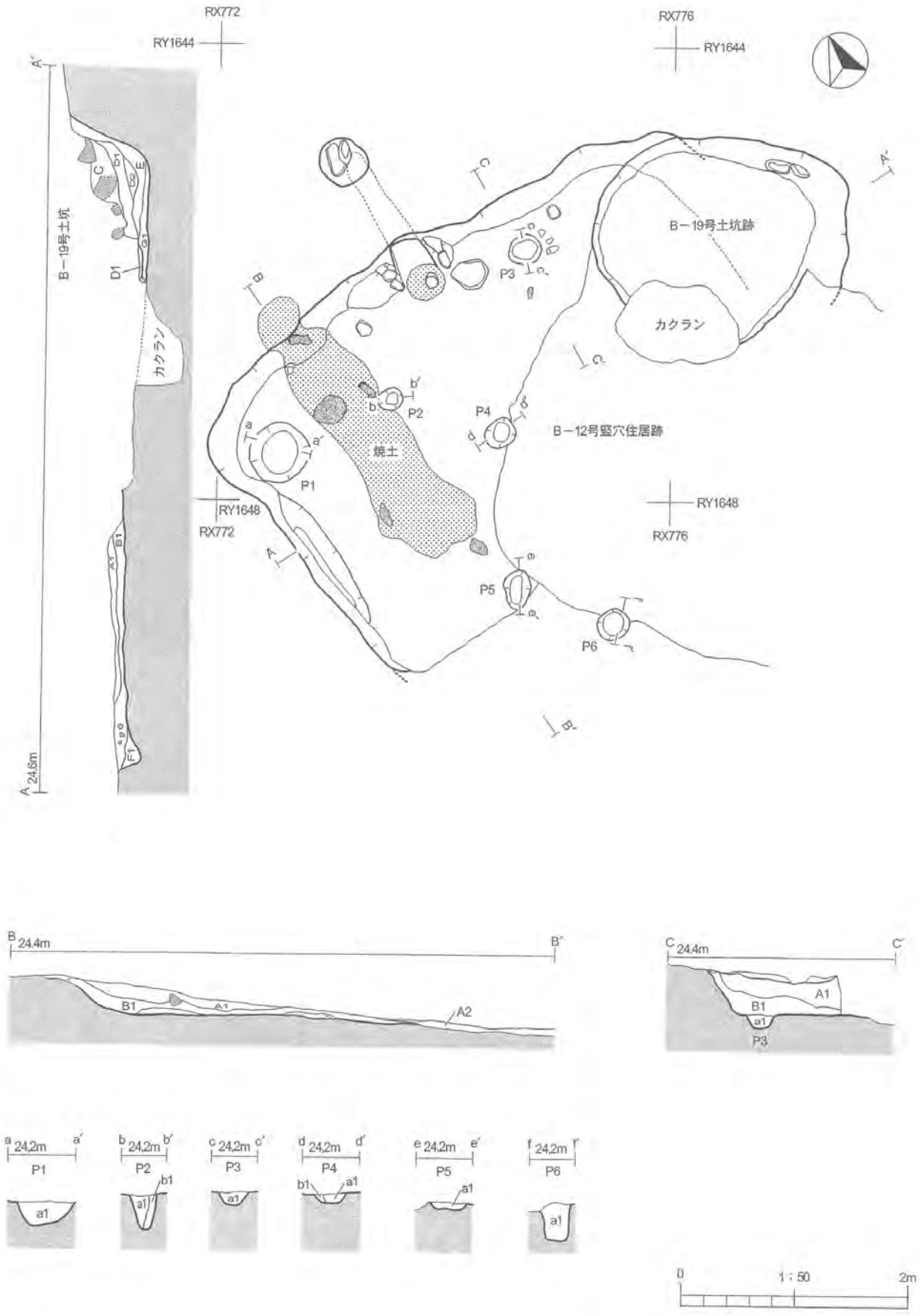
<カマド>（第88図）

北側壁の中央部に設けられている。くり貫き式である。火床部は掘り窪め、両側に袖石を埋設している。煙道は煙出しにむかって水平に掘られ、煙出しはやや外反して立上がっている。規模は火床部が75cm×70cm、煙道の径は20cm、煙出しは上部が40cm、下部が20cmである。K１層の上層には大礫が出土したが、カマドを廃棄する際に埋められたものと思われる。K４、K５層が焼土層であるが、いずれも軟らかく締りがない土層である。

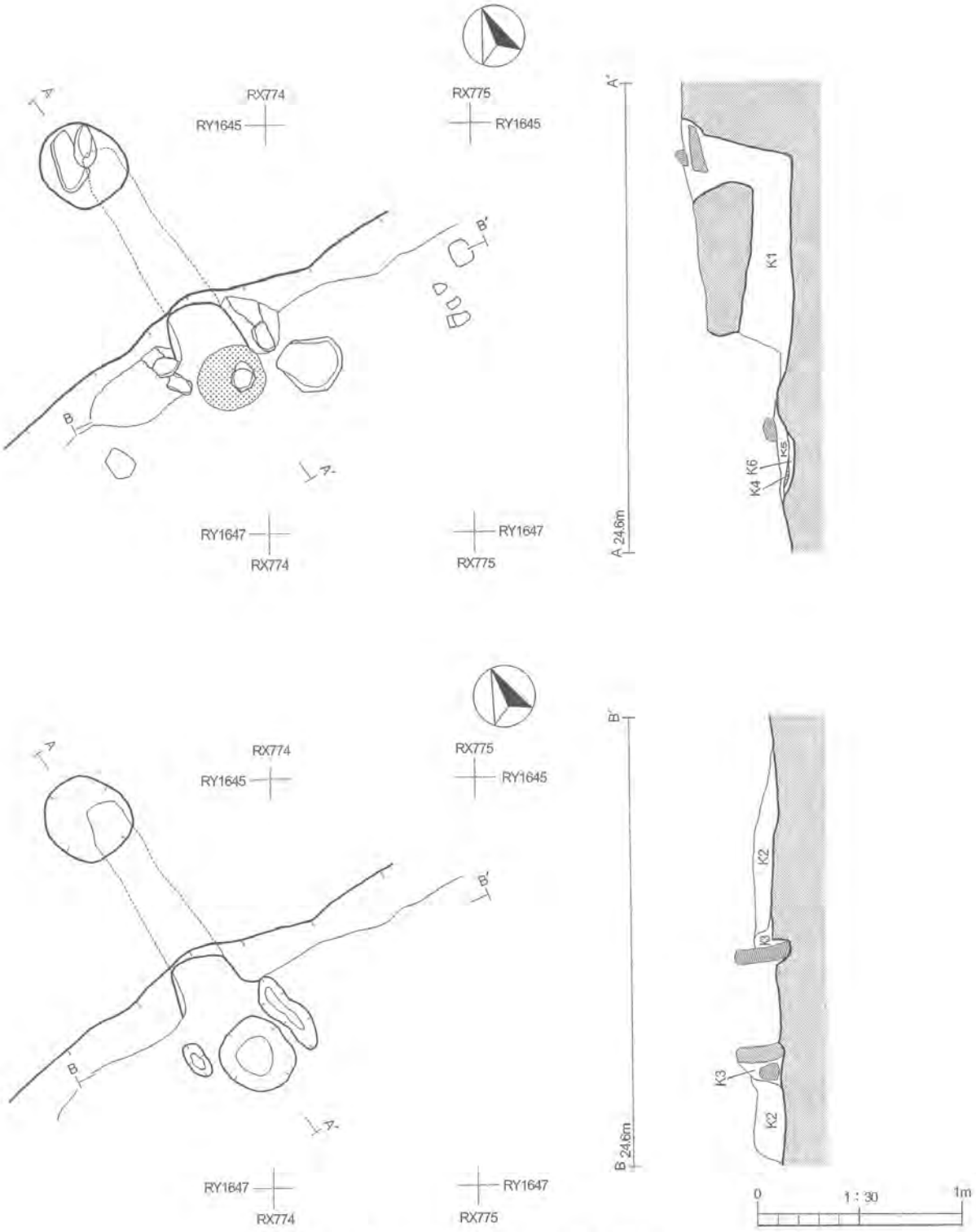
**出土遺物**（第89、90図）

１～11は土師器の坏である。１は丸底風の平底で、底部から膨らみをもって立上がる。体部半ばに沈線をもち、黒色処理される。２は丸底、底部から膨らみをもってたちあがり、口縁部はわずかに内反する。体部下半に段をもち黒色処理される。３は丸底、底部からわずかに内湾しながら立上がる。体部下半に段をもち、黒色処理される。４は丸底風の平底で、体部の段を境にして直線的に立上がる。黒色処理される。５は丸底、底部から丸みをもって立上がる。体部に段をもち、黒色処理される。６は丸底、底部からわずかに膨らみをもって立上がる。体部に段をもち、黒色処理される。７は丸底風の平底で、底部から直線的に立上がり、口縁部は明瞭に内反する。無段、黒色処理される。８～10はいずれも黒色処理された坏の口縁部である。11はあかやき土器である。内面はナデ調整される。12は高台をつけた手づくね？の小皿である。部分的にナデ調整されている。

13～15は土師器の甕である。13は胴部に最大径をもつ長胴甕、頸部に明瞭な段をもつ。14は口縁部と胴部がほぼ同径の小形の甕である。15は底面に木葉痕もつ底部、張出しはない。16は波状口縁の甕、口縁部は磨消、口唇部には側面圧痕が施される。頸部に明瞭な段をもち、地文はLR単節を縦走させる。17～19は浅鉢あるいは高坏である。沈線と変形工字文による施文で

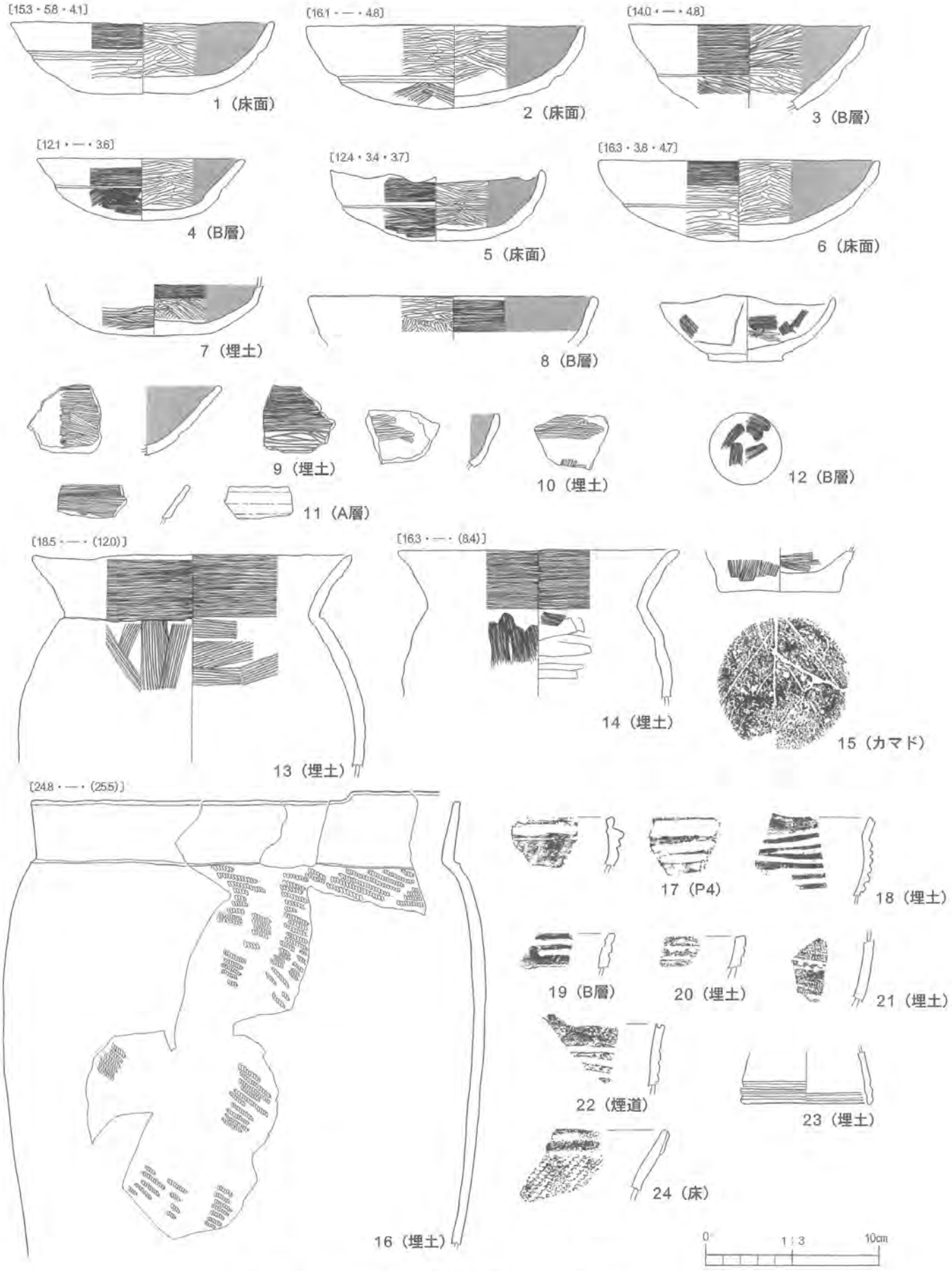



第87図　B－14号竪穴住居跡、B－19号土坑跡

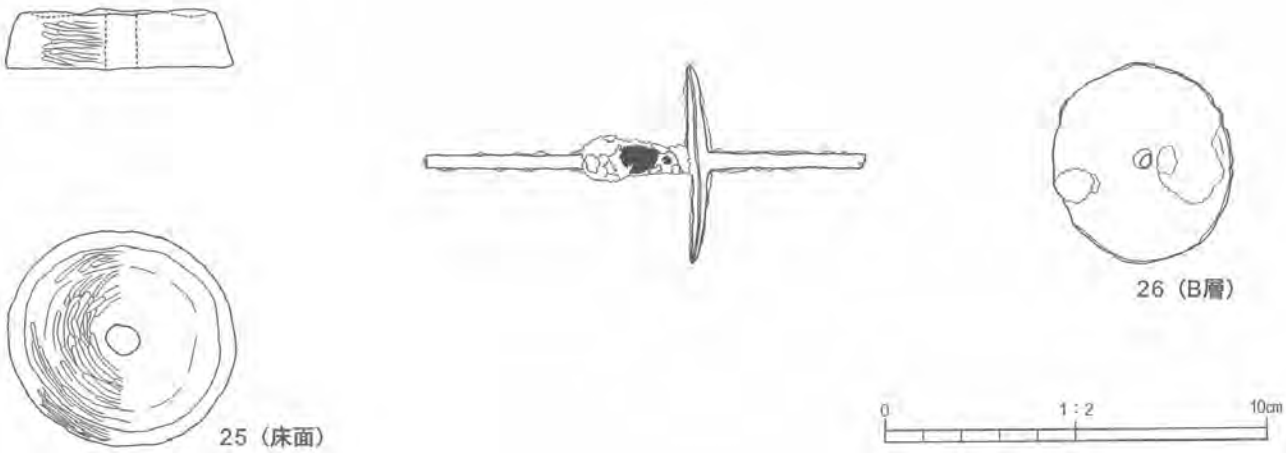



第88図　B－14号竪穴住居カマド

ある。20、21は沈線と交互刺突文で施文される。22は波状の口縁部、口唇部、口縁部を沈線で施文される。23は高坏の脚部である。底部の内外面に沈線をめぐらす。24は複合口縁に沈線を施している。




第89図　B－14号竪穴住居跡出土遺物（1）




第90図　B－14号竪穴住居跡出土遺物（2）

B－14号住居跡、B－19号土坑跡土層観察表

| 層名 | 基本土 | 混入土 | 備考 |
|---|---|---|---|
| A1　B－14号埋土 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR2/2 10%　砂壌土 | 軟、中 → 焼土、炭少 |
| A2　B－14号埋土 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| B1　B－14号埋土 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 15%　砂壌土 | 軟、疎 → 焼土、炭多 |
| C1　B－19号埋土 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 → 大礫多 |
| D1　B－19号埋土 | 10YR4/3 褐　砂壌土 | 10YR5/8 20%　砂壌土 | 中、中 |
| D2　B－19号埋土 | 10YR4/3 褐　砂壌土 | 10YR5/8 10%　砂壌土 | 中、中 |
| E1　B－19号埋土 | 7.5YR3/3 暗褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 → 炭少 |
| F1　B－14号埋土 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR5/8 15%　砂壌土 | 中、中 → 粘土、炭少 |
| G1　B－19号埋土 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR5/8 15%　砂壌土 | 固、中～密 |

B－14号住居跡柱穴土層観察表

| 層名 | 基本土 | 混入土 | 備考 |
|---|---|---|---|
| P1　a1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 15%　砂壌土 | 中～軟、疎 → 炭少 |
| P2　a1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P3　a1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中～固、密 → 炭微 |
| P4　a1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P4　b1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、中 |
| P5　a1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR5/8 10%　砂壌土 | 中、中 → 炭、焼土少 |
| P6　a1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR2/3 10%　砂壌土 | 軟、疎 |

B－14号住居跡カマド土層観察表

| 層名 | 基本土 | 混入土 | 備考 |
|---|---|---|---|
| K1 | 7.5YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 → 礫、焼土、炭多 |
| K2 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 5YR4/8 20%　砂壌土 | 軟、疎 → 土器多 |
| K3 | 7.5YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/8 20%　砂壌土 | 軟、疎 |
| K4 | 7.5YR4/6 褐　砂壌土 | 7.5YR3/4 20%　砂壌土 | 軟、疎 |
| K5 | 5YR5/8 明赤褐　砂壌土 | 5YR4/6 10%　砂壌土 | 軟、中 |
| K6 | 7.5YR4/4 褐　砂壌土 | 7.5YR3/4 10%　砂壌土 | 軟、中 → 上面炭塊 |

25は土製品で、紡錘車である。器面は、ミガキ調整を施されかなり平滑である。[上径5.0cm、下径6.0cm、高さ1.5cm、孔径８mm]。26は鉄製の紡錘車である。円盤は径が5.2cm×4.7cmとやや歪んでいる。

**Ｂ－19号土坑跡**（第87図）

＜検出状況＞　Ｂ２区の中央部に位置する。Ｂ－14号住居跡を切っている。南側の壁は撹乱を受けていた。

＜形状＞　平面形は円形である。規模は径約2.0mと推定する。

＜埋土＞上層は大礫を含んだ黒色土層で、中層は褐色土、下層が固い暗褐色土層である。遺物は出土していない。

**Ａ－８号竪穴住居跡**（第91図）

＜検出状況＞　Ａ－１号住居跡の南に位置し、Ａ－１号住居跡に北側を切られている。検出面は地山面である。

＜形状・規模＞　平面形は隅丸方形と推定され、残存床面の規模は東西方向で3.6mである。床面は平坦である。カマド、周溝、貼床は、検出されていない。

＜埋土＞　全体に締りのない軟らかい層が堆積し、Ｃ層からはイガイ、ウバガイなどが出土している。

＜柱穴＞　小土坑は７基検出されたが、柱あたりが確認されたのはＰ１、Ｐ２である。

(cm)

| PIT | Ｐ１ | Ｐ２ | Ｐ３ | Ｐ４ | Ｐ５ | Ｐ６ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 30 | 20 | 25 | 25 | 15 | 18 |
| 深 | 10 | 5 | 4 | 5 | 5 | 4 |

**焼土遺構**（第92図）

焼土Ⅰ　床面のほぼ中央部に位置する。Ａ－１号住居跡に北半分を切られている。平面形は円形と推定する。浅い掘り方をもつ。規模は80cm×（30cm）、深さ10cmである。Ｋ２層は固く焼き締った焼土層である。遺物は出土していない。

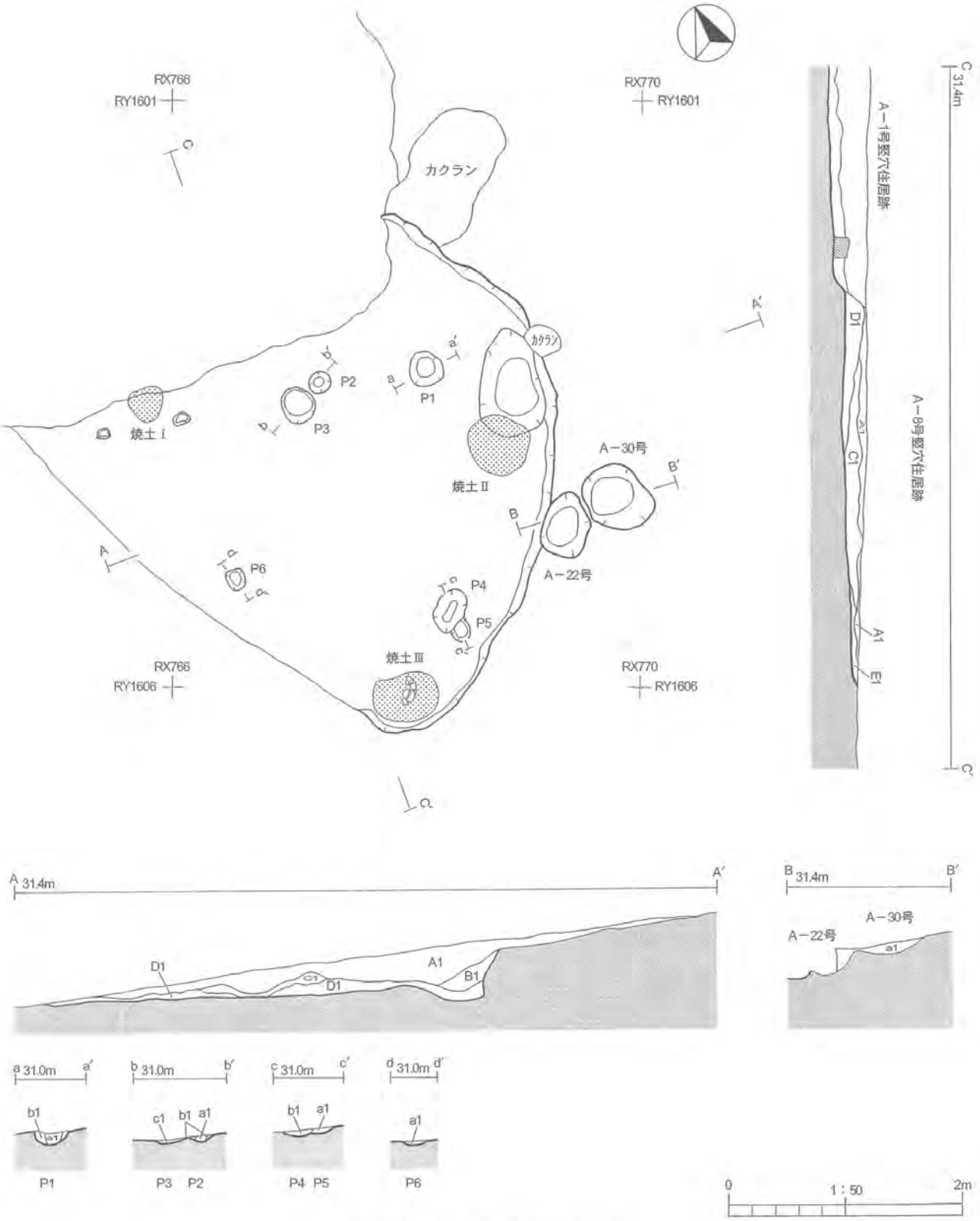
焼土Ⅱ　東の壁際から出土した。平面形は円形である。明瞭な掘り方をもたない。規模は径50cm、焼土層厚は８cmである。Ｋ１層は焼土層であるが、焼き締ってはいない。遺物は出土していない。

焼土Ⅲ　床面の南西端に位置する。平面形は不整円形である。掘り方をもつ。規模は55cm×45cm、深さ11cmである。Ｋ１層は焼土、炭を多く含むやや締った層である。上面から坏片が出土している。

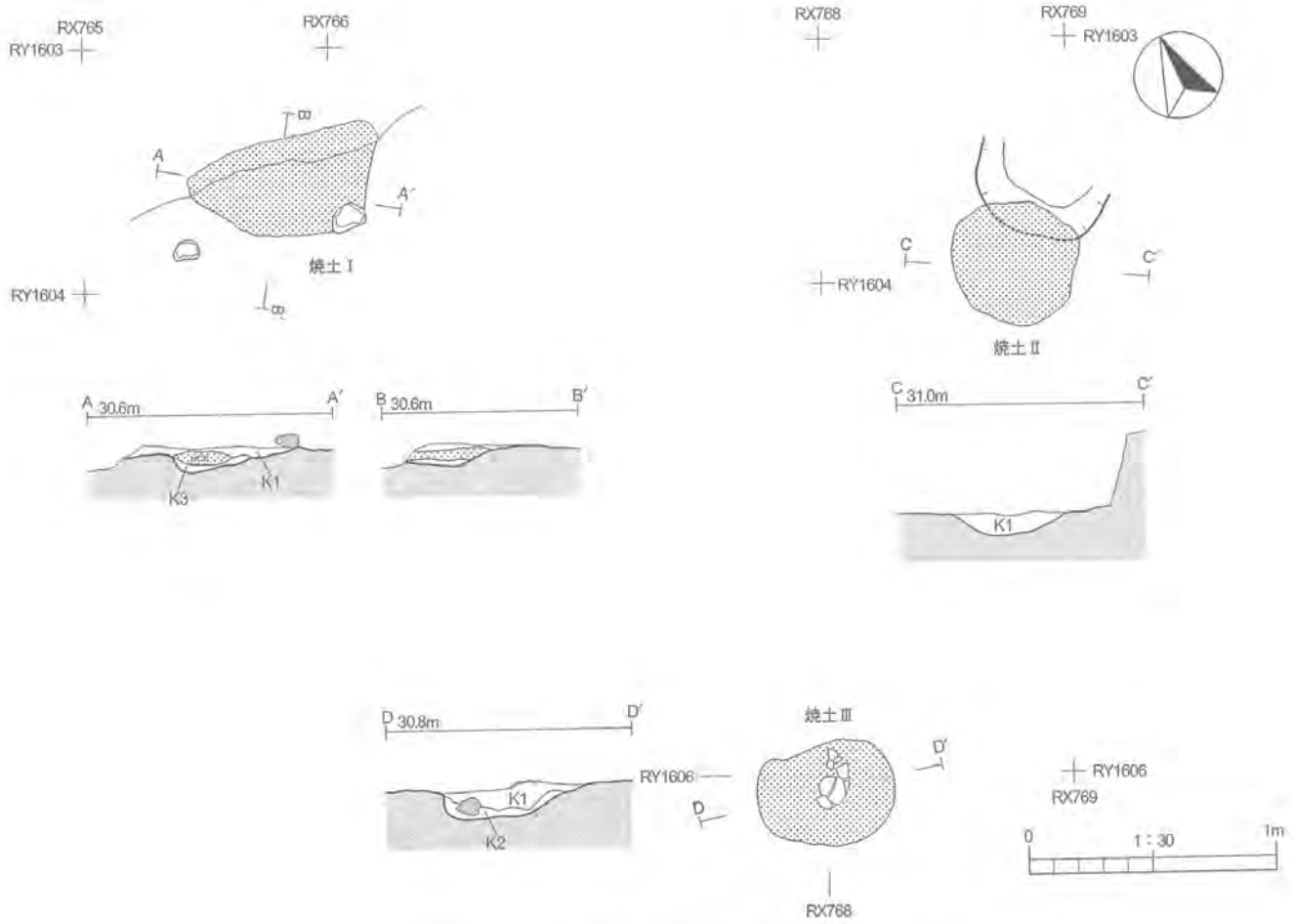
**出土遺物**（第93図）

１～７は土師器の坏である。１は焼土Ⅲから出土した丸底の坏である。無段で黒色処理が施してある。２は体部下半、３は体部上半にそれぞれ段をもち、３は黒色処理されている。４は内面体部下半に明瞭な稜線をもち、黒色処理されている。５は体部で、黒色処理されていない。６は黒色処理された口縁部である。７は平底で、黒色処理されている。

８～12は土師器甕である。８、９は口縁部で、９は先端が内反する。10は頸部で、口縁部は




第91図　A－8号竪穴住居跡、




第92図　A－8号竪穴住居跡焼土Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ

膨らみをもつ。10、11は体部である。

13は交互刺突文、14は刻線を施された土器片である。

15は鉄製品で、刀子の刃先と考えられる。

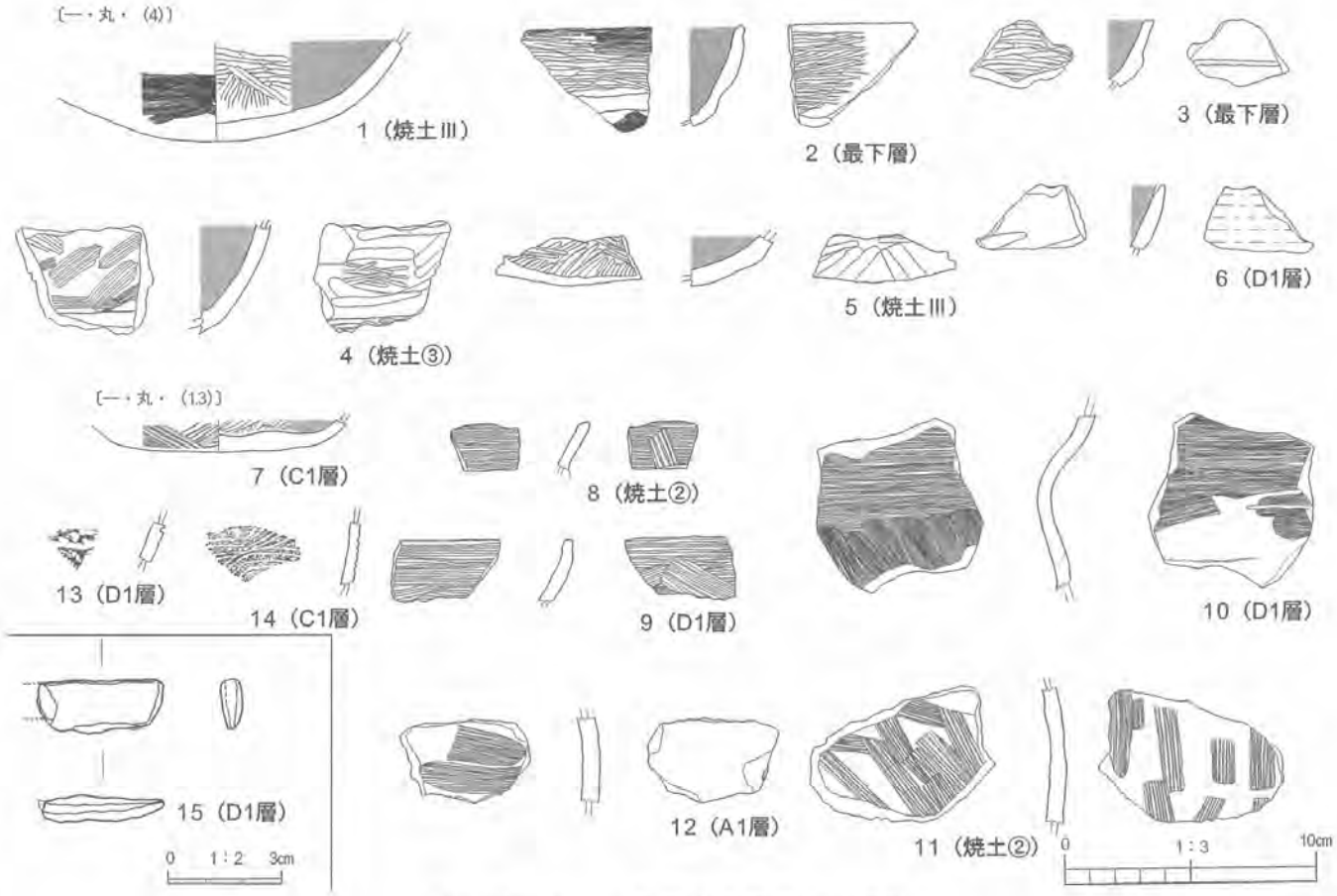
＜時期＞　焼土Ⅲの遺物から奈良時代と思われる。

A－8号住居跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR5/6 3%、　砂壌土 | 軟、疎 → 土器、陶磁器など |
| A2 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 20%　砂壌土 | 軟、疎 |
| B1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 15%　砂壌土 | 軟、疎 |
| C1 | 10YR2/2 黒褐　砂壌土 | 10YR3/3 10%　砂壌土 | 軟、疎 → 貝、土器、炭多 |
| D1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| E1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中～固、中 |

A－8号住居跡焼土土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 焼土Ⅰ　K1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 2.5YR4/6 10%　砂壌土 | 中、中～疎 → 炭、焼土塊多 |
| 〃　K2焼土 | 2.5YR4/8 赤褐　砂壌土 | 5YR4/8 5%　砂壌土 | 中～固、中～密 |
| 〃　K3 | 10YR5/6 黄褐　埴壌土 | 7.5YR4/6 5%　砂壌土 | 中～固、中～密 |
| 焼土Ⅱ　K1 | 5YR5/4 にぶい赤褐　砂壌土 | 5YR5/8 20%　砂壌土 | 中、疎 |
| 焼土Ⅲ　K1 | 5YR3/4 暗赤褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中　中～疎 → 土師、炭、焼土塊多 |
| 〃　K2 | 10YR5/6 黄褐　埴壌土 | 5YR3/4 5%　砂壌土 | 中～固、中～密 → 炭、焼土塊少 |




第93図　A－8号竪穴住居跡出土遺物

A－8号住居跡柱穴土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P1　a1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、中～密　→　炭少 |
| P1　b1 | 10YR5/6 黄褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、中～密　→　炭多 |
| P2　a1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 固、密　→　炭、焼土塊多 |
| P2　b1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 固、密　→　炭、焼土塊多 |
| P3　c1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR3/4 5%　砂壌土 | 軟、疎　→　炭少 |
| P4　b1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR6/6 10%　砂壌土 | 中～固、中～密　→　炭少 |
| P5　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR6/6 2%　砂壌土 | 固、密 |
| P6　a1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 軟、中～密　→　炭多 |

（4）平安時代

a．住居跡と製鉄遺構

**A－1号竪穴住居跡**（第94図）

＜検出状況＞　A2区の中央部に位置する。地山面からの検出である。北東部をA－20号土坑跡に切られている。

＜形状・規模＞　平面形は隅丸の正方形で、一辺が4.5mである。壁高は東側で45cm、西側で10cmである。床面は平坦である。周溝は北東の隅で確認された。規模は幅8cm、深さ4cmである。

＜埋土＞　A層は陶磁器、ガラスなどを含む。C層から焼土、炭が混じってきて、D層はとくに焼土、炭を多く含む。E層はわずかな焼土、炭を含む暗褐色土である。

＜柱穴＞　床面から9基の小土坑が出土している。いずれも浅い掘り方で、柱痕は確認していない。

（cm）

| PIT | P1 | P2 | P3 | P4 | P5 | P6 | P7 | P8 | P9 | P10 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 5×30 | 18 | 25×30 | 18 | 15 | 20 | 15 | 25 | 60 | 30 |
| 深 | 20 | 5 | 5 | 17 | 5 | 5 | 8 | 26 | 6 | 10 |

＜カマド＞（第95図）　カマドは東壁の中央に設けられている。くり貫式である。火床部は掘り窪めており、両脇に袖石を据えた小土坑が検出している。煙道は上り気味に掘られ、煙出しは垂直に立上がっている。規模は、火床部が50cm×45cm、煙道の径は、20cm、煙出しの径は25cmである。K2層は固く焼き締った焼土層である。

＜焼土I＞（第95図）　カマドの北に位置する。平面形は不整円形である。浅い掘り方をもつ。規模は、55cm×45cm、深さ5cmである。K3層が固く焼き締った焼土層である。同窓から出土した炭化物は、イネと同定された（巻末「種実遺体の同定」参照）。

**鍛冶炉I**（第96図）

＜検出状況＞　床面の中央部、やや西よりに位置する。小土坑の底部に構築され、円形の黒色土の周囲を赤褐色土が輪になって囲む形で出土している。

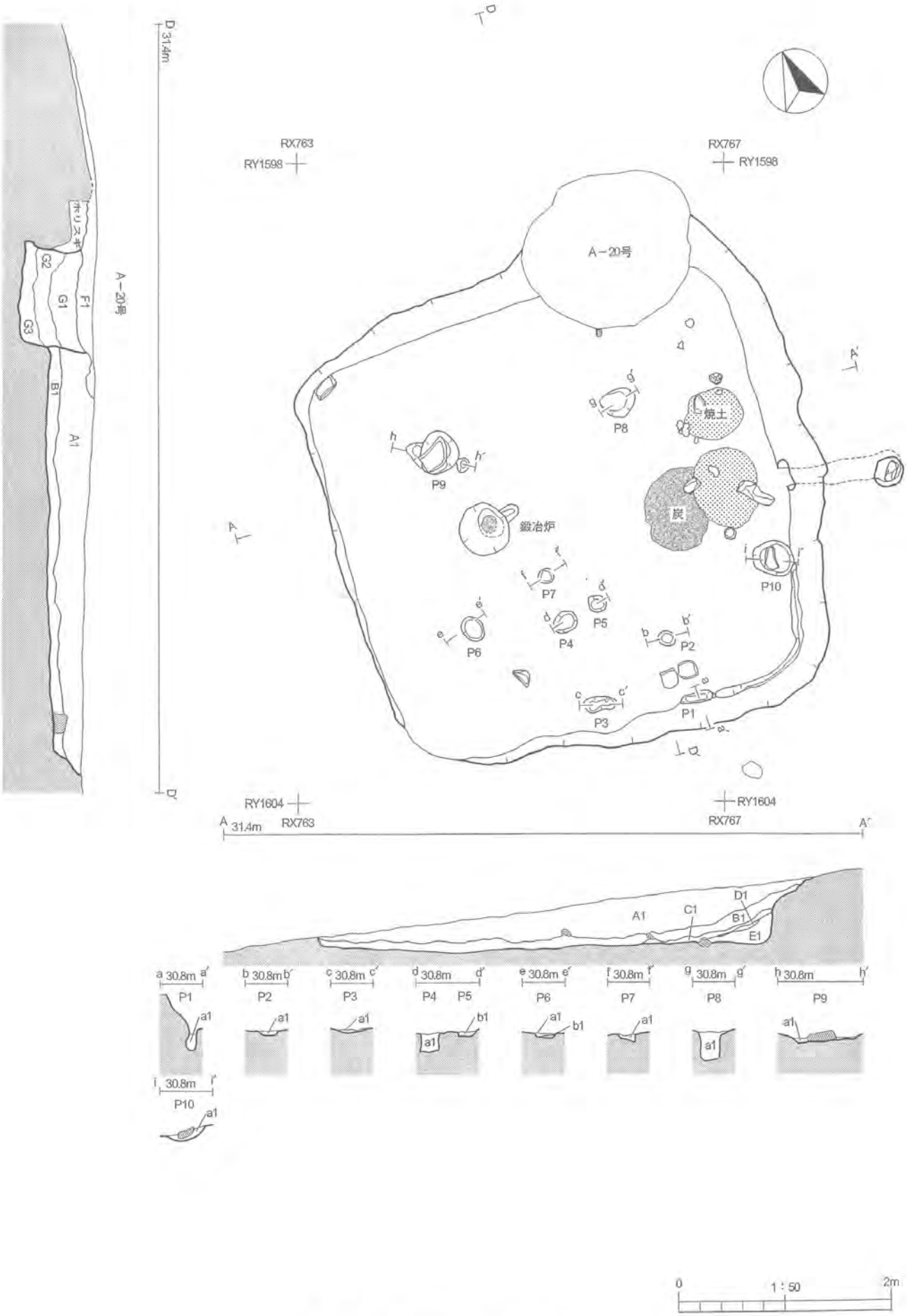
＜形状・規模＞　小土坑の平面形は、不整円形である。規模は、50cm×45cm、深さ10cmである。炉はやはり不整円形である。規模は25cm×20cmである。K2～K4層の層厚は4cmである。

＜埋土＞　K2層が炭層、K3層は固く焼き締った還元焔焼成層、K4層は固く焼き締った酸化焔焼成層である。K2、K3層からは鍛造剥片が出土している。

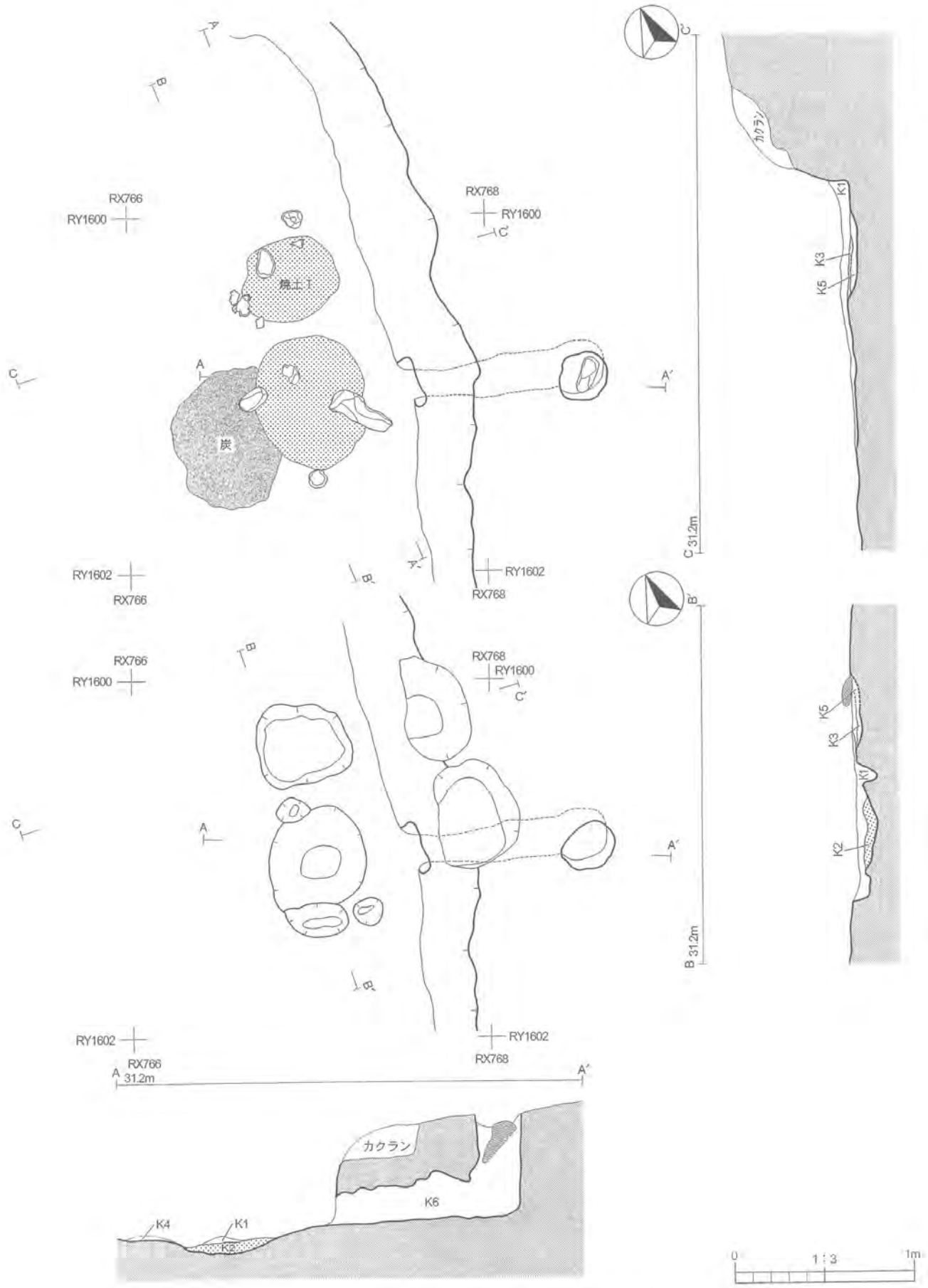
**出土遺物**（第97図）

1～10は土師器である。1、2は坏である。1は体部に段をもち、黒色処理されている。2も体部に段をもつ。3～7は土師器甕の口縁部である。3は小形の長胴甕である。4は口縁部が内反している。5は球胴甕で、6は口縁部の短い小形の長胴甕と推定される。7の口縁部は短く外反する。8～10は底部である。8は底部の張出しをもつが、9、10は張出しをもたない。

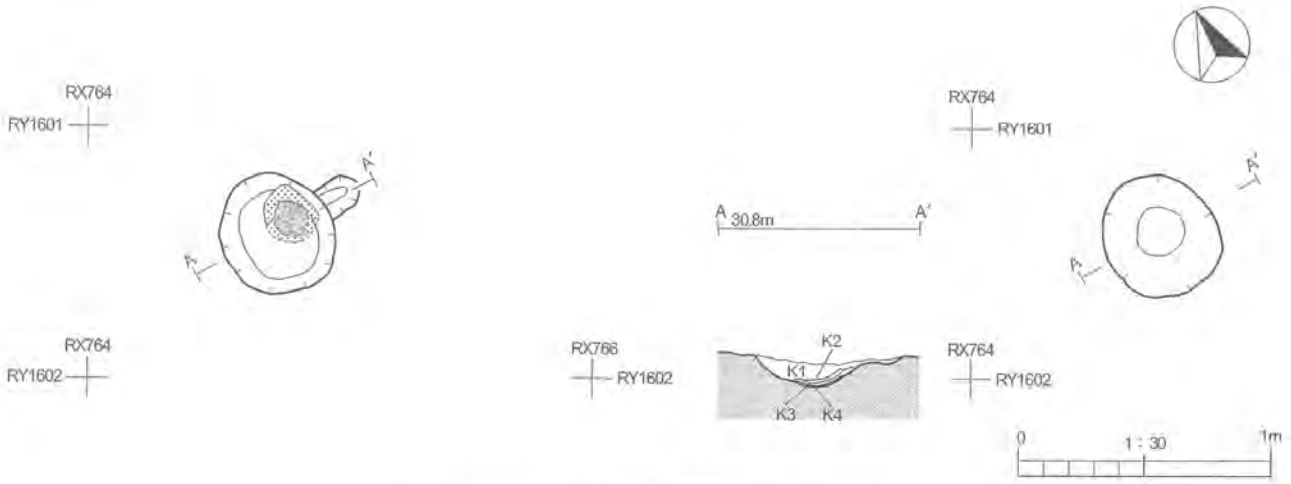
11は縄文土器である。11は隆沈線による施文で、深鉢の口縁部である。12、13は交互刺突文、14～16は沈線、17～19は撚糸文によってそれぞれ施文される。20～22は底部である。21は底面も沈線で施文されている。22は小形鉢の底部である。12～21は弥生土器である。23は焼土Iの周辺で出土した軽石である。




第94図　A－1号竪穴住居跡




第95図　A－1号竪穴住居跡カマド




第96図　A－1号竪穴住居跡鍛冶炉Ⅰ

24～28は鉄製品である。24は鉄斧の完形品である。長さ5cm、刃部幅2.5cmである。25～27は角釘の体部、28は捩じれた棒状の製品である。

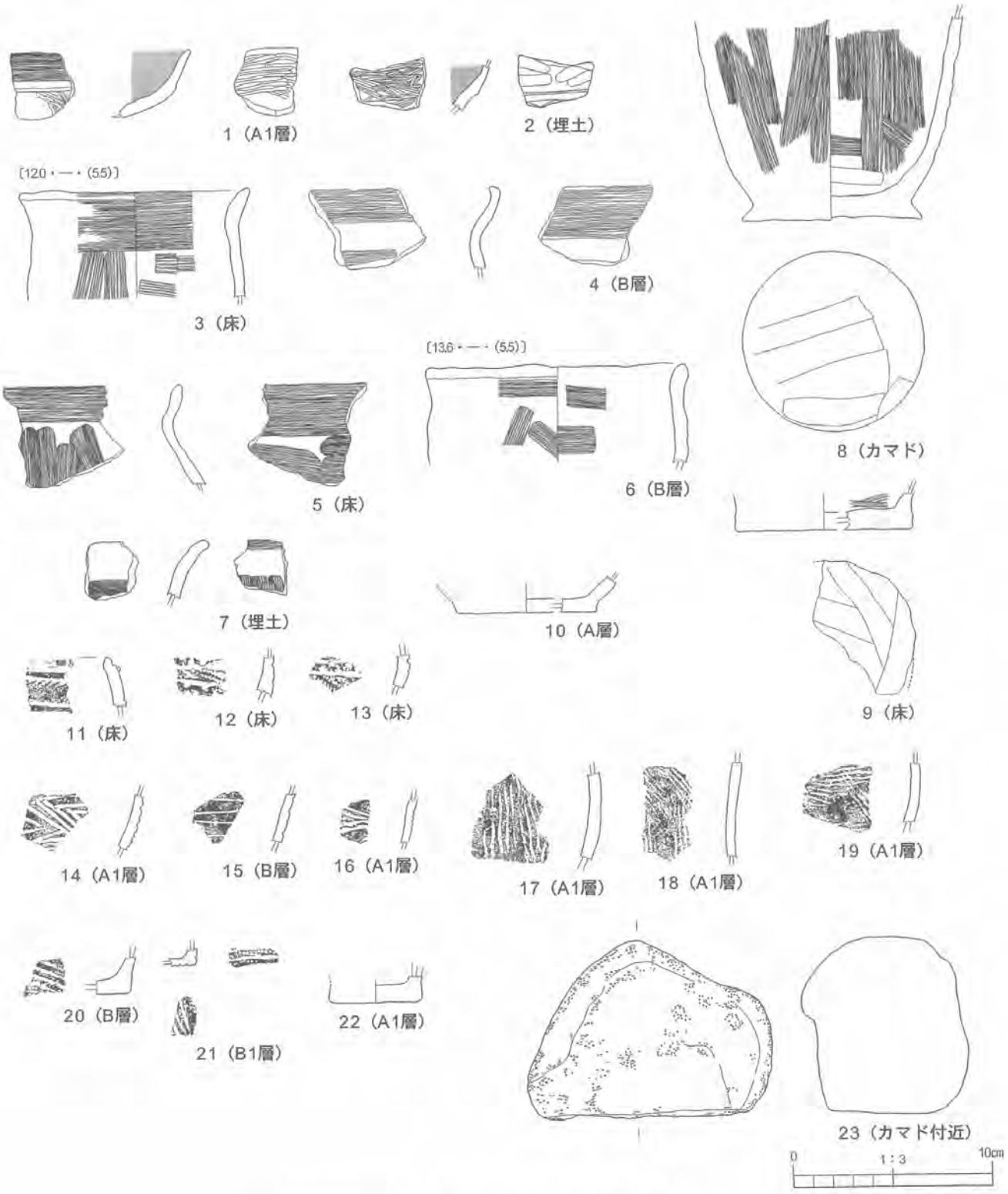
29～32は土製品である。30は丸い棒状で、器形不明である、31、32は支脚片と考えられる。29はふいごの羽口片である。トーンで示したのは灰色に変色した部分である。

A－1号住居跡土層観察表

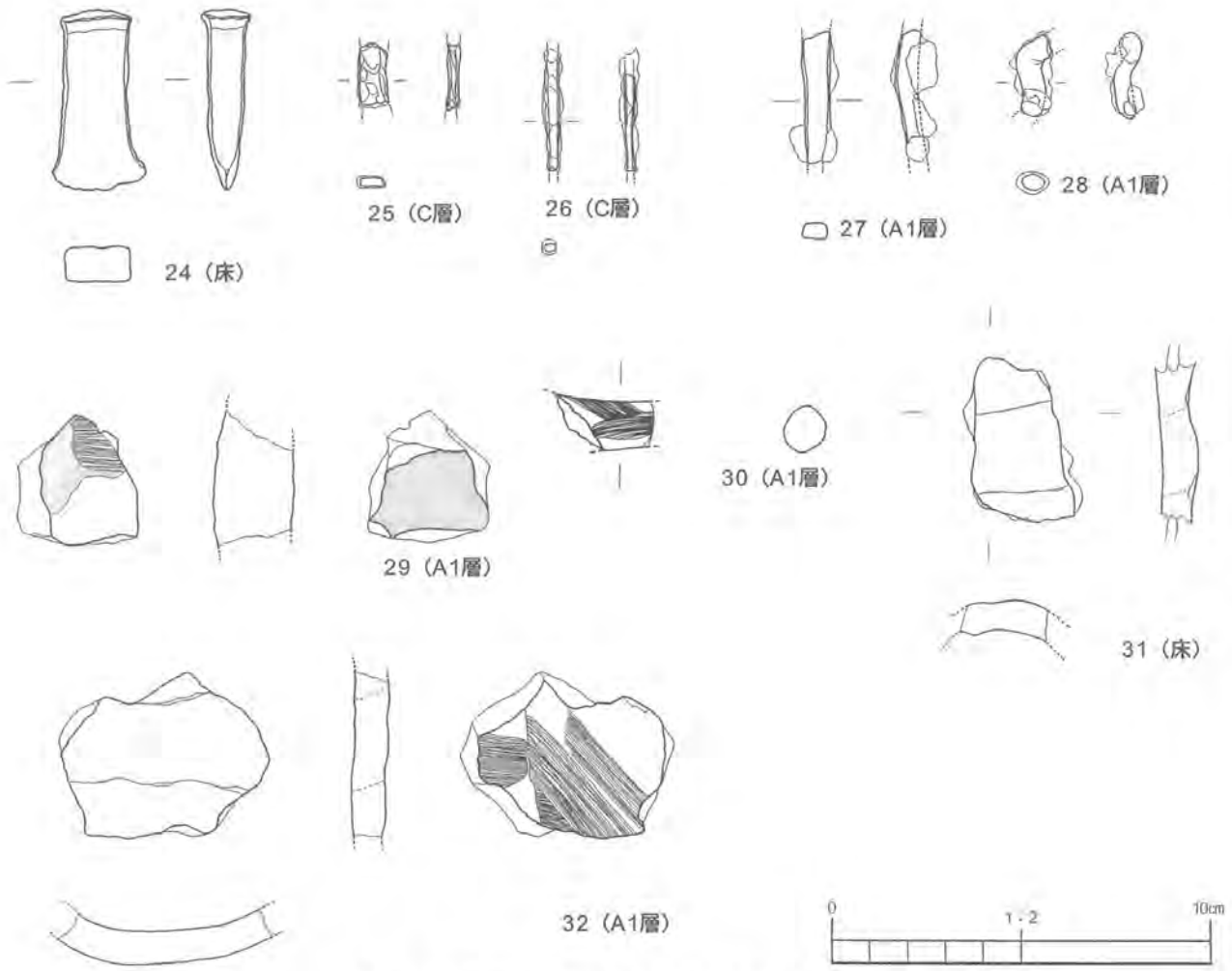
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR3/3 10%　砂壌土 | 軟、疎 → 陶磁器、土師、ガラス |
| B1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 15%　砂壌土 | 中、中 → 土師片、鉄製品 |
| C1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 20%　砂壌土 | 軟、中 → 焼土塊 |
| D1 | 7.5YR3/3 暗褐　砂壌土 | 5YR4/6 10%　砂壌土 | 軟、疎 → 焼土、炭多 |
| E1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 軟、疎 → 焼土、炭少 |

A－1号住居土坑跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P1（周溝？）a1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P2　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 15%　砂壌土 | 中、中 → 炭少 |
| P3　a1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中、中 → 炭少、焼土粒微 |
| P4　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中、中 → 炭少 |
| P5　b1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中、中 → 炭微 |
| P6　a1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 30%　砂壌土 | 軟、中 → 炭多 |
| P6　b1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 5%　砂壌土 | 中、中 → 炭少 |
| P7　a1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/6 5%　砂壌土 | 中、中 → 炭多 |
| P8　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 5%　砂壌土 | 軟、疎 → 炭多 |
| P9　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | | |




第97図　A－1号竪穴住居跡出土遺物（1）




第98図　A－1号竪穴住居跡出土遺物（2）

A－1号住居跡カマド、焼土ｉ土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K 1 | 7.5YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中、中 → 炭、焼土塊少 |
| K 2　焼土 | 2.5YR4/8 赤褐　埴壌土 | 5YR5/8 15%　砂壌土 | 固、密 |
| K 3 | 7.5YR3/4 暗褐　埴壌土 | 5YR4/6 15%　砂壌土 | 固、中～密 |
| K 4　炭層 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 5YR4/6 10%　砂壌土 | 中、中 → 炭多 |
| K 5 | 7.5YR5/6 明褐　砂壌土 | 5YR5/6 20%　砂壌土 | 中、中 |
| K 6 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 20%　砂壌土 | 軟、疎 → 大礫多、炭多 |

A－1号住居跡鍛冶炉土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K 1 | 10YR3/3 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中、中～疎 → 鉄滓、炭多 |
| K 2 炭層 | 10YR2/1 黒　砂質埴土 | 10YR4/6 10%　砂質埴土 | 軟、疎 → 炭多 |
| K 3 還元炎焼成 | 2.5Y4/2 暗灰黄　砂質埴土 | 2.5Y3/2 10%　砂質埴土 | 固、疎 |
| K 4 酸化炎焼成 | 5YR4/6 赤褐　砂質埴土 | 5YR3/4 20%　砂質埴土 | 固、中～密 |

### Ａ－２号竪穴住居跡（第99図）

＜検出状況＞　Ａ２区の北東、尾根の中央部に位置する。検出面は地山面である。

北側と東側の壁を確認したが、西側はすでに削られており、南側は周溝のみの検出である。

カマド、焼土は検出していない。

＜形状・規模＞　平面形は、隅丸方形である。規模は、南北4.2mで、東西方向も4.2mぐらいかと想定される。

床面は南西に傾斜し　やや凹凸をもつ。貼床は検出していない。

＜埋土＞　やや締った褐～暗褐色土である。

＜柱穴＞　深く掘られた土坑は東壁沿いと床面中央部から出土している。P4、P7、P1、P11などが主柱穴になるものと思われる。

(cm)

| PIT | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 | P 7 | P 8 | P 9 | P 10 | P 11 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 23 | 20 | 24 | 25 | 18 | 35 | 25 | 25 | 30 | (25) | 40 |
| 深 | 50 | 15 | 35 | 45 | 20 | 10 | 50 | 5 | 5 | 18 | 50 |

### 出土遺物（第100図）

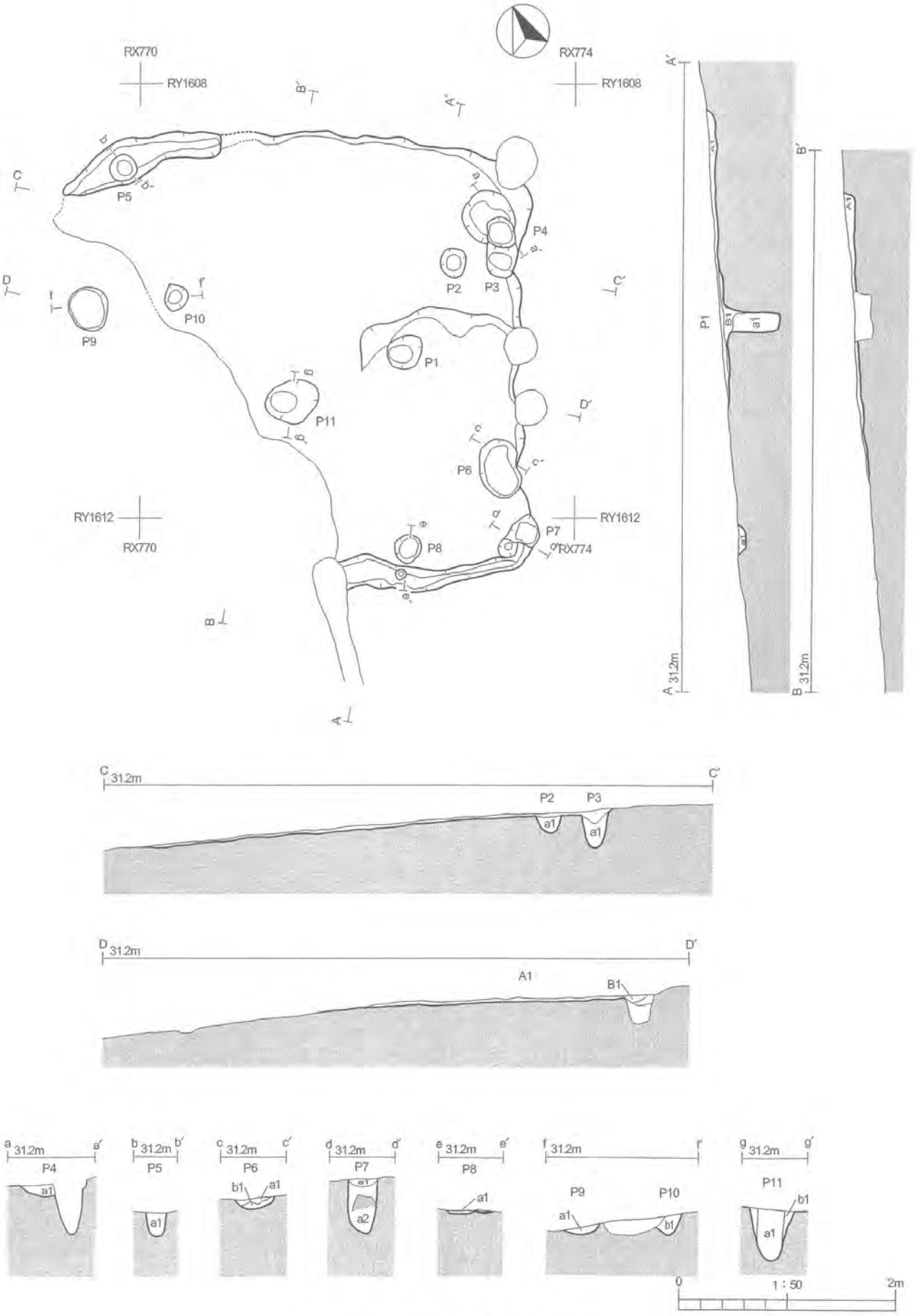
１は須恵器の長頸壺の口縁部で、外反する。胎土は密であるが、焼成はよくない。２、３は土師器甕である。２はわずかに外反する口縁部で、体部は張出している。球胴甕か。３は張出しをもたない底部である。４～６は縄文土器で、いずれも沈線、磨消で施文されている。

Ａ－２号住居跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A 1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 5%　砂壌土 | 中、中　→　土師片、炭 |
| B 1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR5/6 15%　砂壌土 | 中～固、中～密　→　縄文、炭 |
| 周溝　a 1 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 固、中　→　炭少 |

Ａ－２号住居土坑跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P 1　a 1 | 10YR3/3 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、疎　→　焼土粒微 |
| P 2 | 注記なし | 注記なし | 注記なし |
| P 3 | 注記なし | 注記なし | 注記なし |
| P 4　a 1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中、中～疎 |
| P 5　a 1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/6　5%　砂壌土 | 中、中　→　炭多 |
| P 6　a 1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 5%　砂壌土 | 中、密　→　炭微 |
| 〃　b 1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 15%　砂壌土 | 中、中～密　→　炭少 |
| P 7　a 1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、中 |
| 〃　a 2 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、中　→　土器片 |
| P 8　a 1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、中　→　焼土粒、炭微 |
| P 9　a 1 | 10YR3/3 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中、中　→　炭少 |
| P 10　c 1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/6　5%　砂壌土 | 中、中～疎 |
| P 11　a 1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR2/3 10%　砂壌土 | 中、疎　→　土器 |
| 〃　b 1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中～固、中 |




第99図　A－2号竪穴住居跡

第100図　A－2号竪穴住居跡出土遺物

**A－3号竪穴住居跡**（第101図）

＜検出状況＞　A4区中央東寄りに位置する。検出面は地山面である。斜面の北側を削平して構築されている。東側のA－6号住居跡との切り合い関係は明瞭ではないが、埋土からみてA－6号に切られていると思われる。中央部は撹乱を受けている。壁は北側と西側の一部を確認できたが、南側は残っておらず床面の平坦な部分を確認するに止まった。

床面の西端で焼土を検出したが、柱穴は検出していない。

＜形状・規模＞　平面形は隅丸方形と推定される。規模は南北方向で4.7mである。

床面は地山に含まれている大小の礫が露出したままになっており、平坦ではない。周溝、貼床は検出されていない。

＜埋土＞　A層は炭、焼土を含む褐色土で、B層は撹乱で大小の礫を多く含む。

焼土Ⅰ（第102図）

北側床面の西端に位置する。平面形は不整円形で、規模は50cm×40cmである。K2層が固く焼き締った焼土層で、層厚は5cmを測る。

**出土遺物**（第103図）

1、2は土師器の甕である。1はわずかに外反しながら立上がる口縁部である。2は明瞭な張出しをもち、膨らみをもって立上がる底部である。3は土製品である。支脚と思われる。4、5は鉄製品である。4は角釘の体部片。5は、ハサミ状の製品で、頭部右側にも丸い輪が付けられていたと推定される。下に先細りになっている。用途不明である。長さ13cm、上部幅4cm、下部幅1cm、厚さ5mmである。

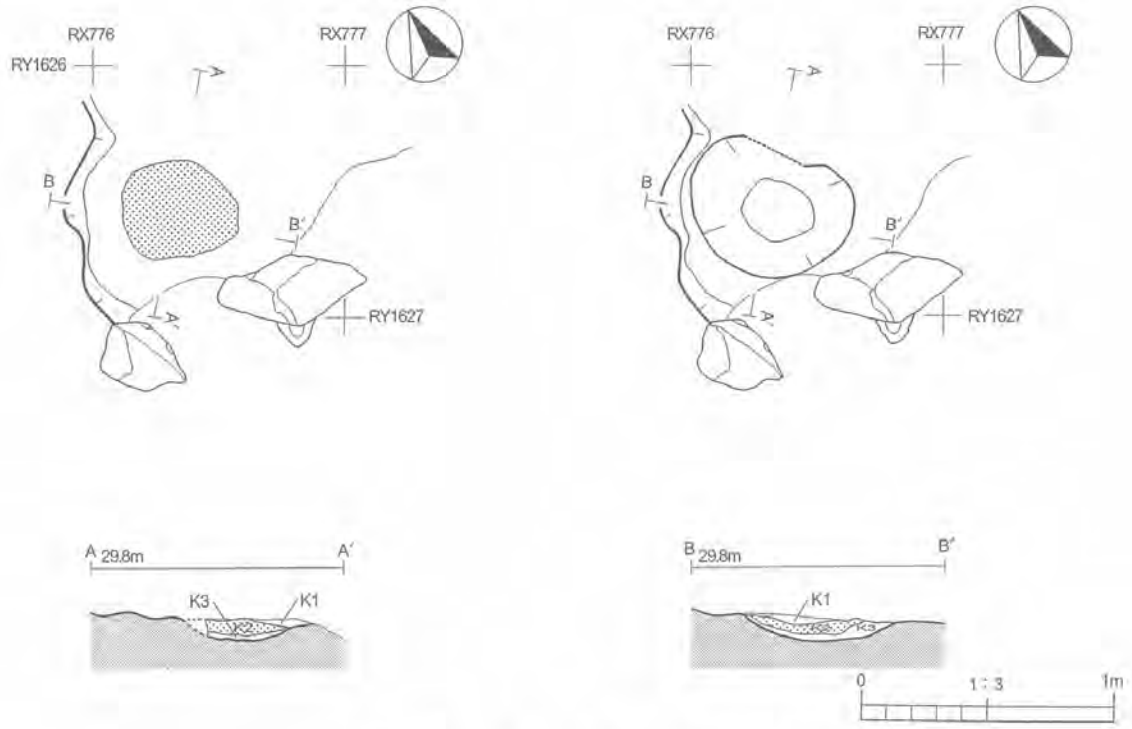
A－3号竪穴住居跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 10YR5/4 にぶい黄褐 砂壌土 | 10YR4/4 10% 砂壌土 | 中、疎 |
| A1 | 10YR4/4 褐 砂壌土 | 10YR5/6 10% 砂壌土 | 中、中 → 炭、焼土粒多 |
| B1 | 10YR3/4 暗褐 砂壌土 | 10YR4/6 10% 砂壌土 | 中、疎 → 砂多 |

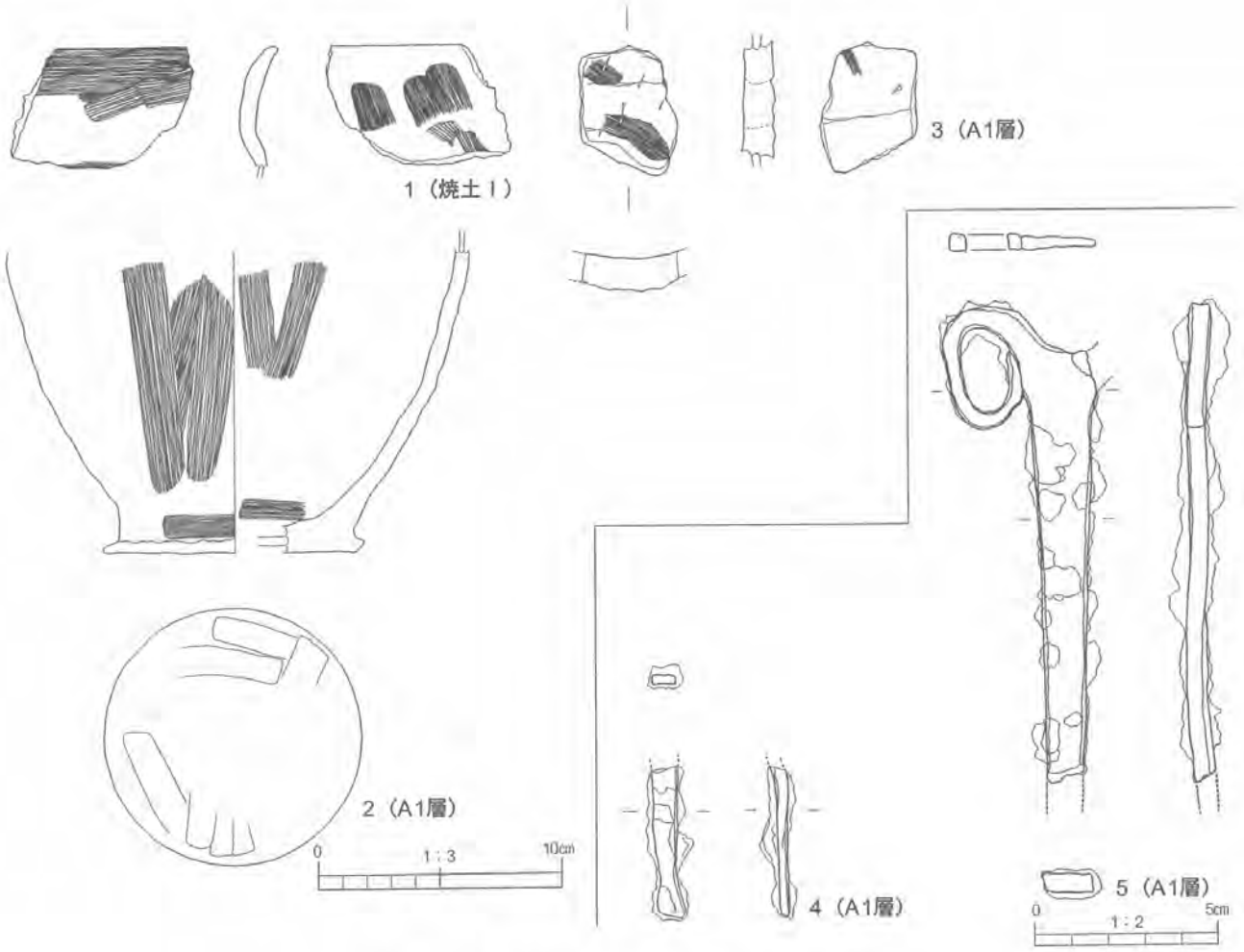
A－3号竪穴住居跡焼土Ⅰ土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K1 | 7.5YR5/4 にぶい褐 砂壌土 | 7.5YR5/6 10% 砂壌土 | 注記なし |
| K2焼土 | 2.5YR5/8 明赤褐 砂壌土 | 5YR4/8 10% 砂壌土 | 固、密 |
| K3 | 7.5YR3/4 暗褐 砂壌土 | 10YR5/8 10% 砂壌土<br>5YR3/6 10% 砂壌土 | 軟、疎 |

第101図　A－3号竪穴住居跡




第102図　A－3号竪穴住居跡焼土Ⅰ




第103図　A－3号竪穴住居跡出土遺物

**Ａ－４号竪穴住居跡**（第104図）

＜検出状況＞　Ａ４区平坦部の西端に位置する。検出面は地山面である。壁は北側と東側で検出したが、南側は消失している。住居全体のおよそ半分の検出である。南側をＡ－１号７土坑跡に切られている。カマドは検出されなかったが、南西部で鍛冶炉跡が出土している。

＜形状・規模＞　平面形は、隅丸方形と推定される。規模は南北で約4.2mである。壁高は、北側で10cmである。床面は平坦であるが、地山に含まれる大礫が露出している。周溝、貼床は検出していない。

＜埋土＞　竪穴埋土はＡ層で、Ｂ層は遺構周辺部に広がっていた焼土、粘土混じりの堆積層である。

＜柱穴＞　床面から小土坑を11基検出した。Ｐ５、Ｐ６、Ｐ９、Ｐ10で柱あたりを確認しており、それらが主柱穴にあたると考える。

(cm)

| PIT | Ｐ１ | Ｐ２ | Ｐ３ | Ｐ４ | Ｐ５ | Ｐ６ | Ｐ７ | Ｐ８ | Ｐ９ | Ｐ10 | Ｐ11 | Ｐ12 | Ｐ13 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 15 | 30 | 15 | 14 | 15 | 35 | 15 | 15 | 25 | 25 | (15) | 35 | 25 |
| 深 | 5 | 8 | 10 | 5 | 30 | 30 | 30 | 5 | 8 | 10 | 13 | 20 | 6 |

**鍛冶炉Ｉ**（第105図）

床面の南側、西よりに位置しているが、住居全体の中では東西の中央に位置するものと推定される。形状は不整円形で、浅い掘り方をもつ。規模は40cm×30cm、深さは９cmる。Ｋ１層は細かい鉄滓を含む固い還元焔焼成層、Ｋ２層は固く焼き締った酸化焔焼成層である。Ｋ１層からは椀形滓、粒状の鉄滓や微量の鍛造剥片が出土している。Ｋ３層は底面に貼られた薄い粘土層である。

**出土遺物**（第106図）

１は土師器甕の底部である。張出しをもち、膨らみをもって立上がる。この他に床面から内黒坏の体部片が出土している。

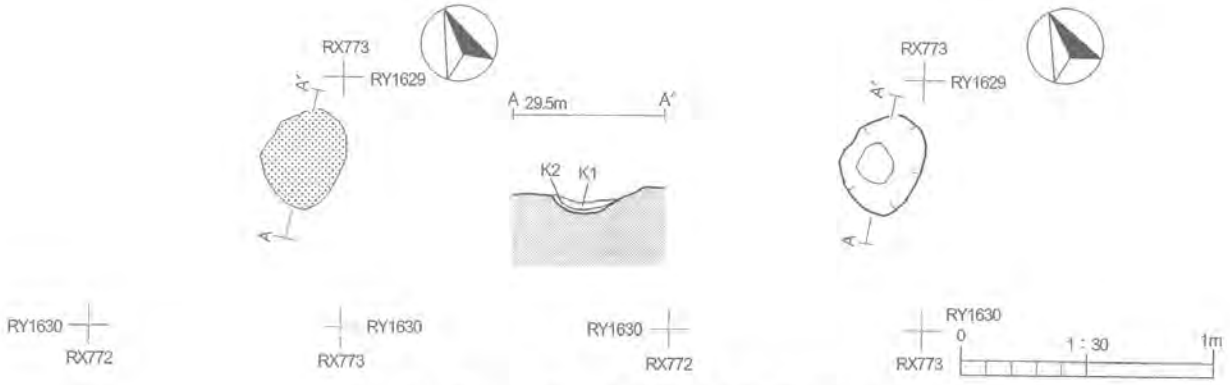
**Ａ－４号住居跡土層観察表**

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR6/6 30%　砂壌土 | 中、疎 → 土師片 |
| A2 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR6/6 15%　砂壌土 | 中、中 |
| B1 | 10YR4/4 褐（暗）砂壌土 | 5YR5/6 10%　砂壌土 | 中、中 → 焼土塊少 |
| P14　a1 | 10YR5/4 にぶい黄褐　砂壌土 | 10YR6/6 15%　砂壌土 | 中～固、疎 |

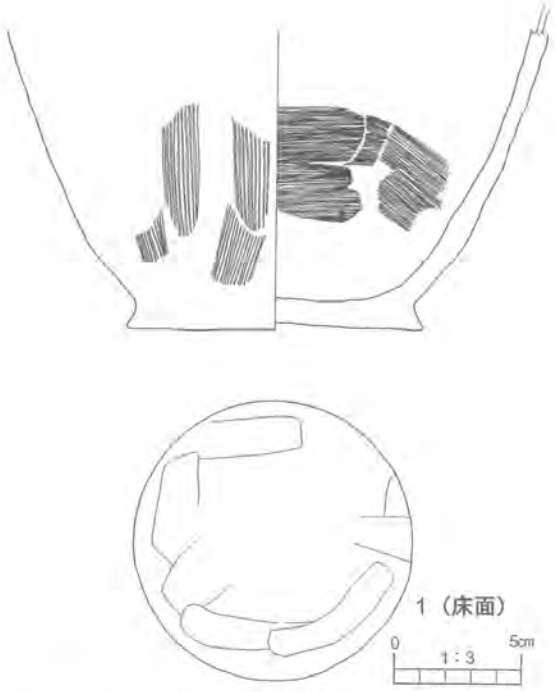
**Ａ－４号住居跡柱穴土層観察表**

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P1　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 20%　砂壌土 | 中、中 |
| P2　a1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土土 | 中、中 |
| 〃　b1 | 10YR4/4 褐 砂壌土 | 10YR4/6 20%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P3　a1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中、中 |
| P4　a1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中～固、疎 |
| P5　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 5%　砂壌土 | 中、疎 → 炭少 |
| 〃　b1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、疎 → 炭少 |
| P6　a1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 固、疎 |
| 〃　b1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 固、疎 |
| P7　a1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 5%　砂壌土 | 軟、疎 → 炭、焼土粒多 |
| 〃　b1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P8　a1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR6/6 10%　砂壌土 | 中～固、中 → 炭微 |
| P9　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中～固、中 → 炭微 |

第104図　A－4号竪穴住居跡




第105図　A－4号竪穴住居鍛冶炉跡




第106図　A－4号竪穴住居跡出土遺物

A－4号住居跡柱穴土層観察表（続き）

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P10　a 1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6　5%　砂壌土 | 軟、中 → 焼土塊少 |
| P11　c 1 | 10YR4/4 褐（明）砂壌土 | 10YR6/4 10%　砂壌土 | 中、中 |
| P12　a 1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中～固、中～疎 |
| P13　a 1 | 10YR5/4 褐　砂壌土 | 10YR6/6 10%　砂壌土 | 固、疎 |
| 〃　b 1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中、中 |

A－4号住居跡鍛冶炉土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K 1 | 2.5Y5/4 黄褐　砂質壌土 | 2.5Y3/3 15%砂質壌土 | 固、密 → 還元炎焼成 |
| K 2 | 5YR4/8 赤褐　砂質壌土 | 5YR5/6 10%　砂質壌土 | 固、密 → 酸化炎焼成 |

**Ａ－５号焼土遺構**（第107図）

＜検出状況＞　Ａ－４号住居跡の南、斜面際に位置する。検出面は地山面である。Ａ４区の斜面は大小の礫がことさら露出しているところである。Ａ－５号は礫と礫の間のわずかなスペースを利用して掘り込まれている。北端の大礫を境にして西半分の壁の明瞭な立上がりは確認できたが、東側では、壁の立上がりは不明瞭で、床面も礫が露出し平坦ではない。西側の床面では壁に沿って細長く広がる焼土面を検出した。検出状況から炭窯である可能性が高いが、片面だけの掘込という形状の点で類例もなく焼土遺構とした。

＜形状・規模＞　北西の角はほぼ直角に掘り込まれ、壁にそって長方形に焼土面が広がる。東側は、壁の立上がりは明瞭ではないが、南東方向への延長を確認できた。削平面は北の角を頂点とする三角形をなす。規模は、北西方向3.0m、北東方向3.5m、斜面際の底辺3.5mである。床面は平坦であるが、地山に含まれる大小の礫が露出している。周溝、貼床は検出されていない。

＜埋土＞　Ｂ１層は炭を多量に含んだ黒褐色層である。Ｂ１層からは多量の炭塊のほかに微量の鍛造剥片と粒状鉄滓が出土している。

＜柱穴＞　床面から小土坑が２基検出している。Ｐ２では柱あたりが確認された。

焼土Ⅰ、Ⅱ（第108図）

焼土Ⅰ－西側の壁のそって広がる。平面形は不整方形で、掘り方はない。規模は2.05m×0.6m、層厚は約３cmである。Ｋ１、Ｋ２層は炭を多量に含んだ黄褐色土層で、Ｋ４層は固く焼き締った焼土層である。焼土面の下からは小土坑群が検出しているが、意図的に掘られたものではないように思えた。

焼土Ⅱ－東の斜面際に位置する。平面形は半円形で、規模は55cm×15cm、層厚は約4.0cmである。Ｋ５層は固く焼き締った明赤褐色土である。

**出土遺物**（第109図）

遺物はいずれもＡ１層のもので床面からは出土していない。

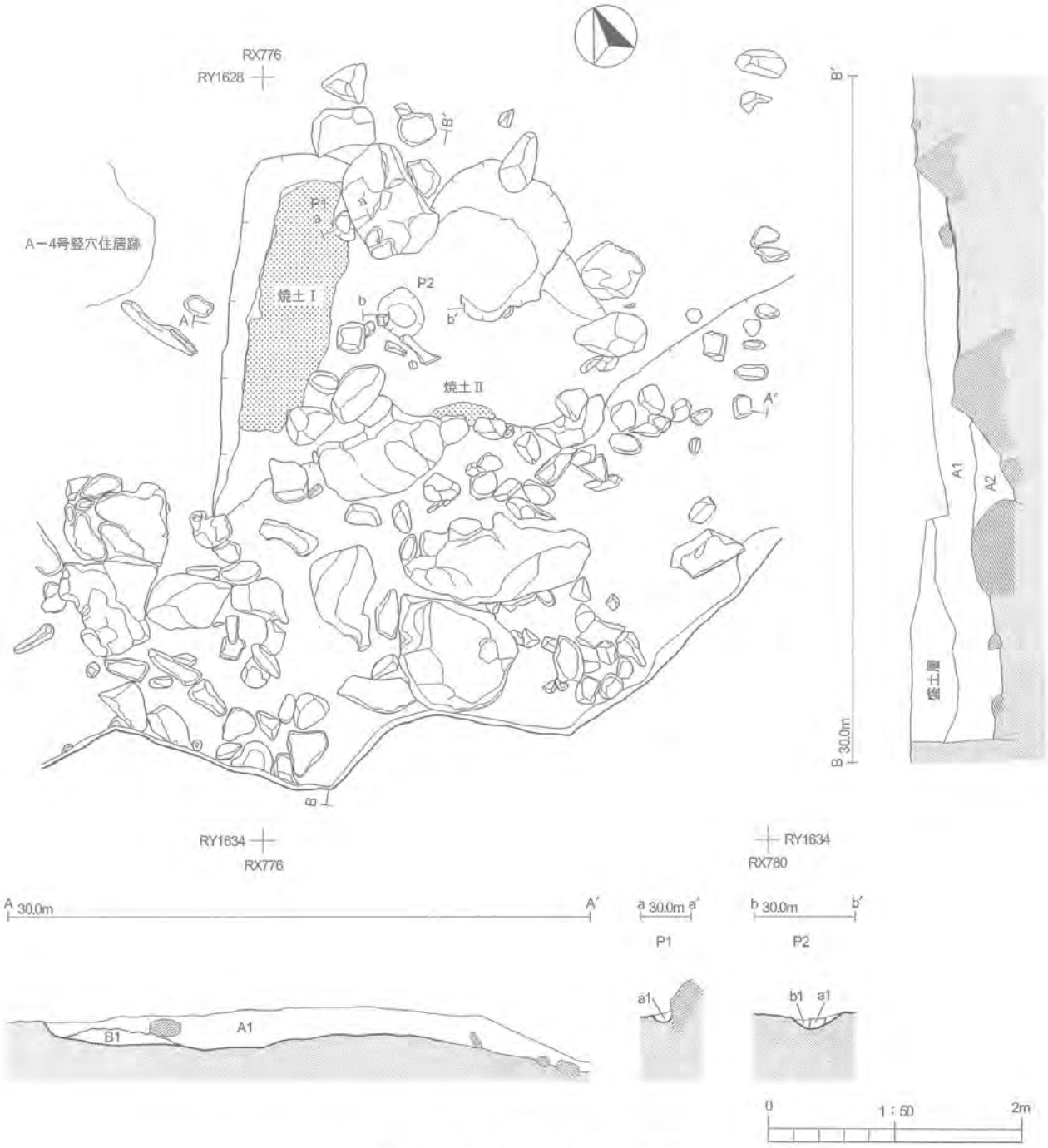
１は須恵器片、器形は不明である。２は沈線で施文された縄文土器、甕の頸部か。３は鉄製品である。細長い板を環状に巻いたものである。

**Ａ－５号焼土遺構土層観察表**

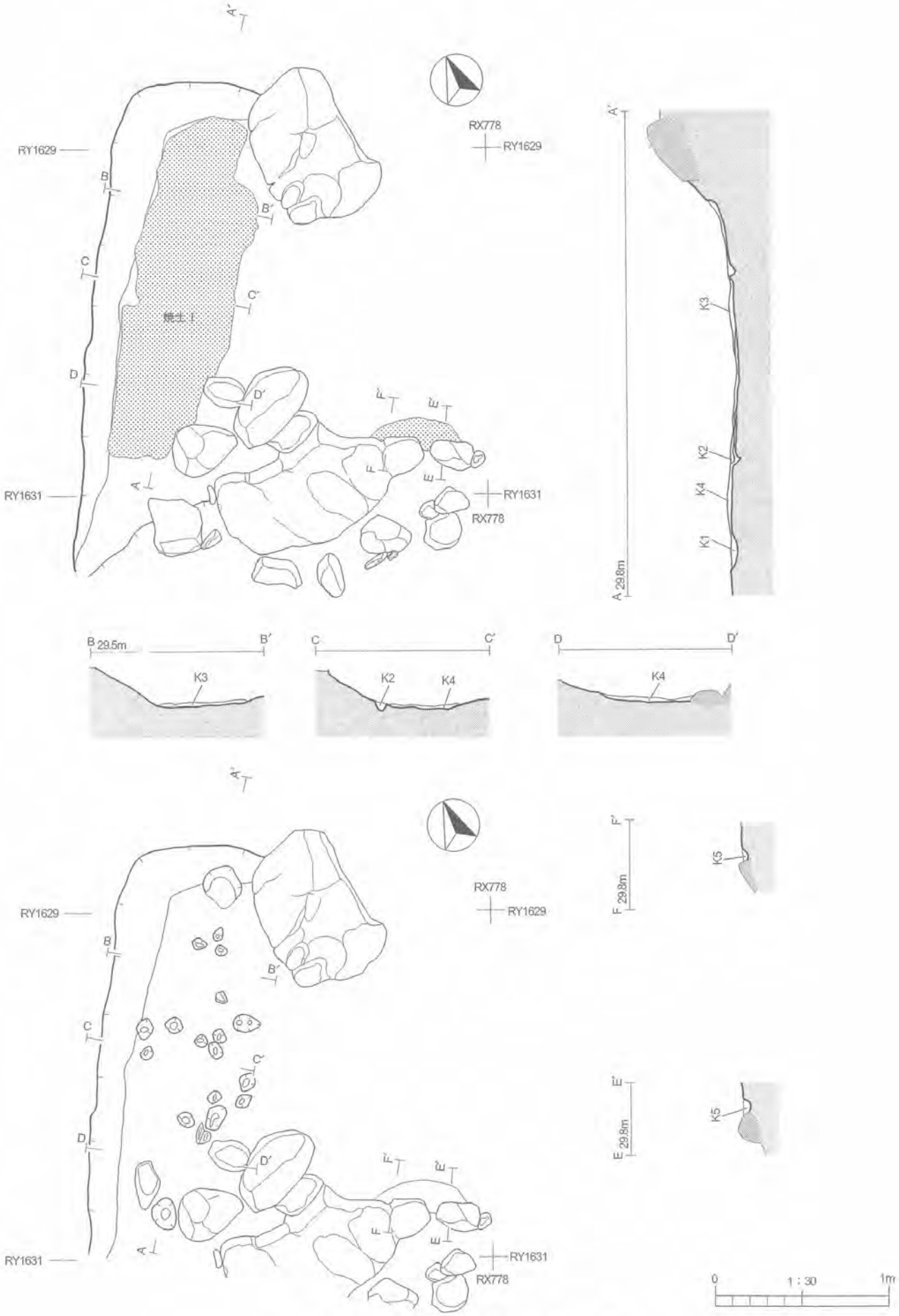
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ａ1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 固、中 → 炭少 |
| Ａ2 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中～固、中 → 炭多、鉄滓 |
| Ｂ1　炭 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR6/6 3%　砂壌土 | 中、疎 → 炭多 |

**Ａ－５号焼土Ⅰ、Ⅱ土層観察表**

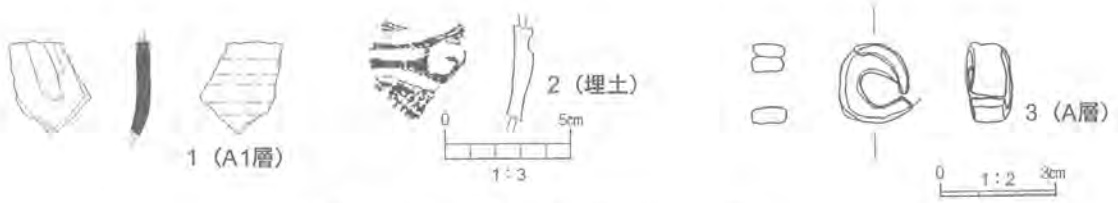
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ｋ1 | 10YR5/4 にぶい黄褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土<br>10YR4/6 5%　砂壌土 | 固、密 → 炭粒多 |
| Ｋ2 | 10YR5/4 にぶい黄褐　砂壌土 | | 炭→上面に層状をなす |
| Ｋ3 | 10YR5/6　黄褐　砂壌土 | 10YR5/4 10%　砂壌土 | 固、密 |
| Ｋ4 | 2.5YR4/6 赤褐　砂壌土 | 2.5YR3/6 10%　砂壌土<br>10YR4/4 2%　砂壌土 | 固、密 |
| Ｋ5 | 5YR5/8 明赤褐　砂壌土 | 7.5YR5/8 10%　砂壌土 | 固、密 |




第107図　A－5号焼土遺構




第108図　A－5号焼土遺構Ⅰ、Ⅱ




第109図　A－5焼土遺構出土遺物

**A－6号製鉄遺構**（第110～113図）

＜検出状況＞　A3区の南に位置する。検出面は地山面である。南向きの斜面を大きく削平して構築されている。南側では明瞭な壁の立上がりが検出されたが、東側では確認できなかった。南東の斜面際で段を設けた平場が2基検出され、その中から4基の炉が出土している。以下竪穴住居跡と炉跡を分けて説明する。

竪穴住居跡（第110図）

＜形状・規模＞　東西の壁が確認できず形状は明らかではないが、隅丸の方形で、規模は東西6.0m、南北2.0m～2.5mと推定する。床面、壁とも地山に含まれる大小の礫が露出したままになっており、平坦ではない。柱穴、周溝などは検出していない。貼床と呼べるほどしっかりしたものではないが、凹凸の激しい床面を埋めて踏み固めたような土層を確認している。以上のことから、この竪穴は住居跡というよりは「作業場」あるいは「工房」としてわりと雑に作られたのではないかと思われる。

＜埋土＞　3層に大別される。Ⅱ層は炭、廃棄された焼土塊などを多く含み、Ⅲ層は黄褐色どを多く含む。A1層は締りのない黒褐色土層である。Ⅱ、Ⅲ層は人為堆積層、A層は旧表土層と考えられる。

**炉跡**（第111図）

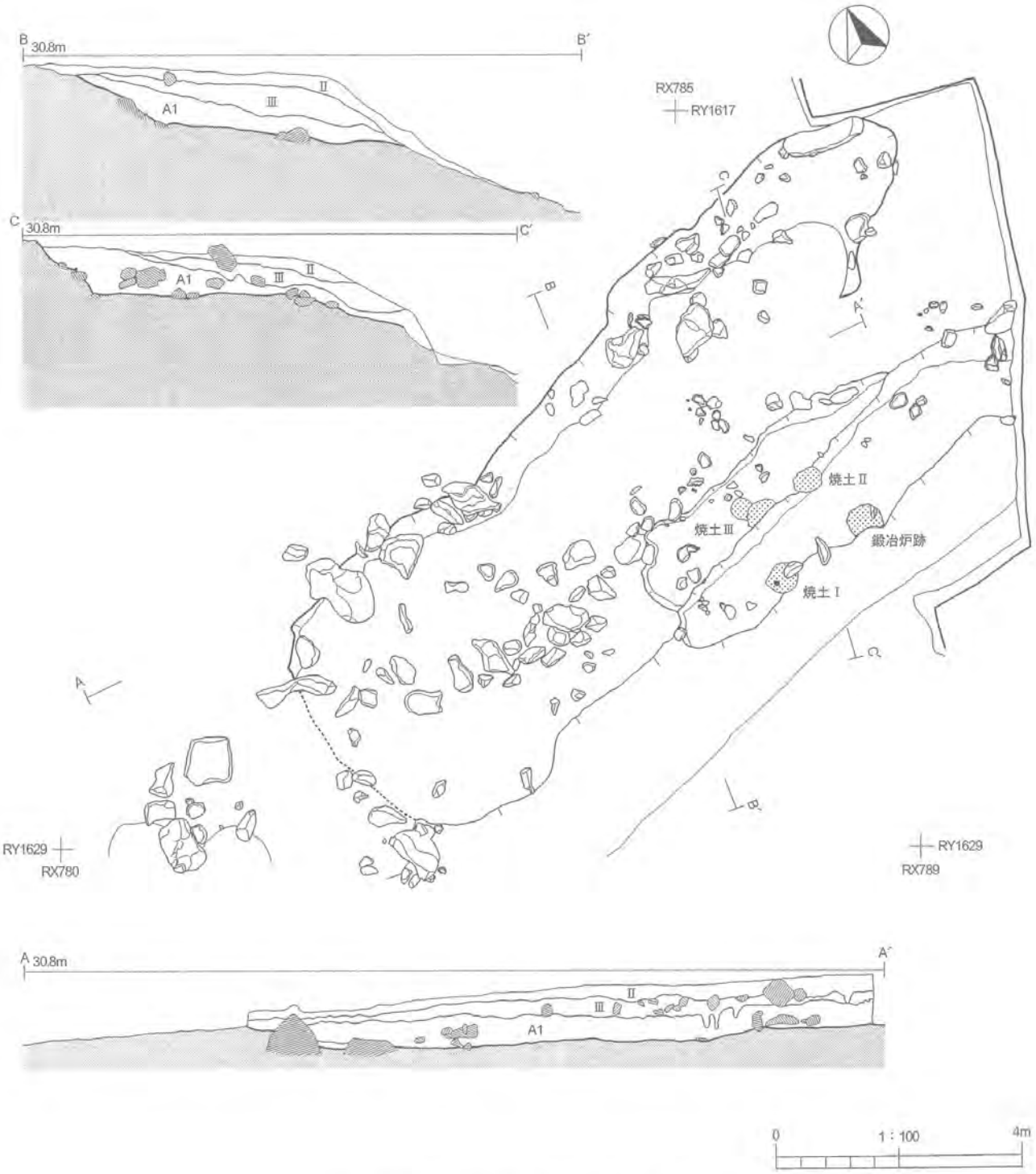
＜検出状況＞　竪穴の平場南東部の斜面際をさらに浅く掘り込んで作った新、旧2時期の平場に位置する。南の平場が北側を切っており、北側の平場をⅠ期、南側をⅡ期とする。Ⅱ期の平場はさらに東の調査区外へ続いている。

＜形状・規模＞　斜面際を帯状に掘り込んでいる。東西の長さは不明であるが、南北の幅はⅡ期面で1.3m～1.7m、深さ20cm～10cmを測る。

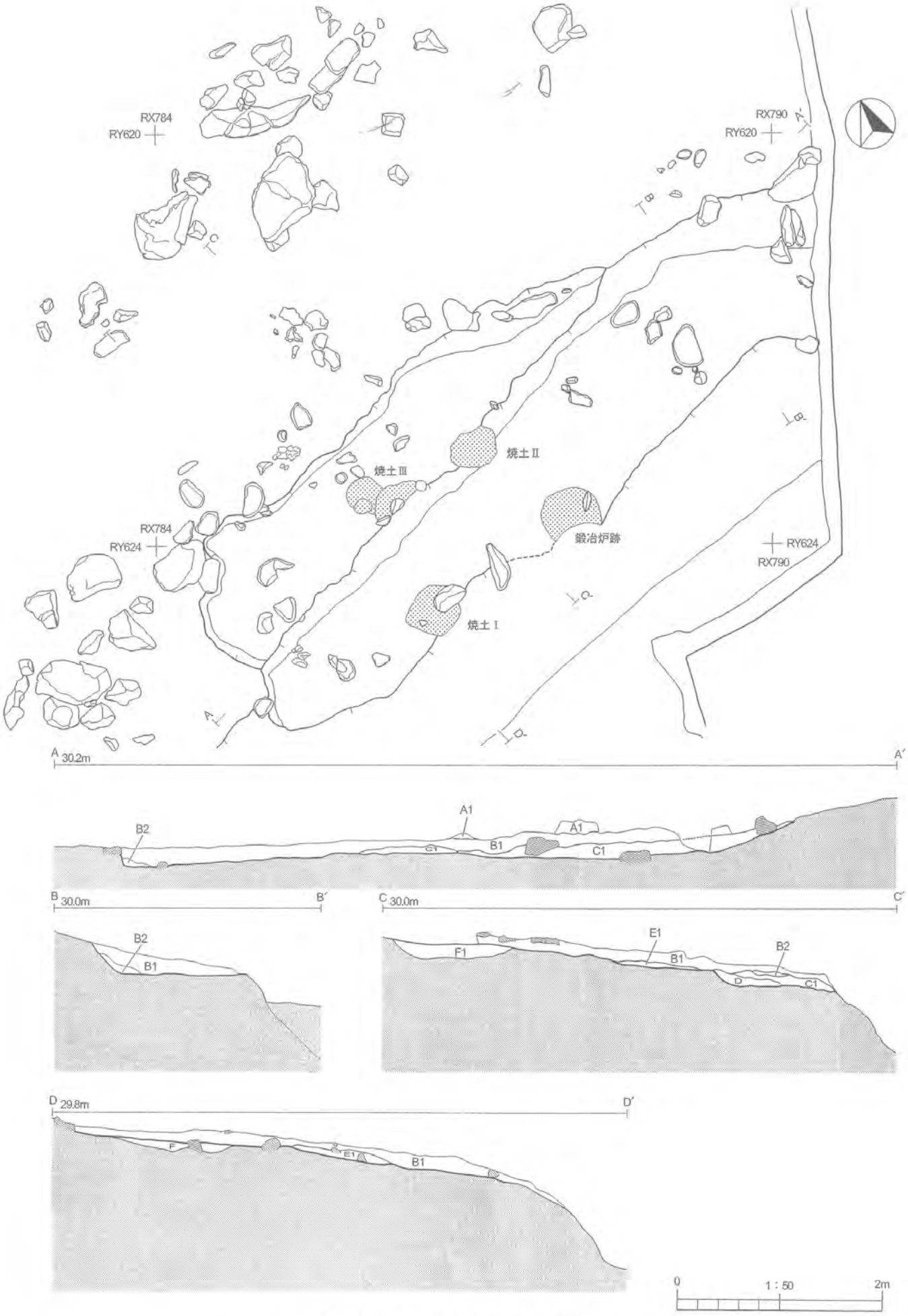
＜埋土＞　Ⅰ期の埋土F層である。Ⅱ期の埋土E層の上面、下面ともに鉄錆、焼土で覆われており、2時期の作業が確認された。G層が締りのない貼床層である。

A－6号製鉄遺構土層観察表

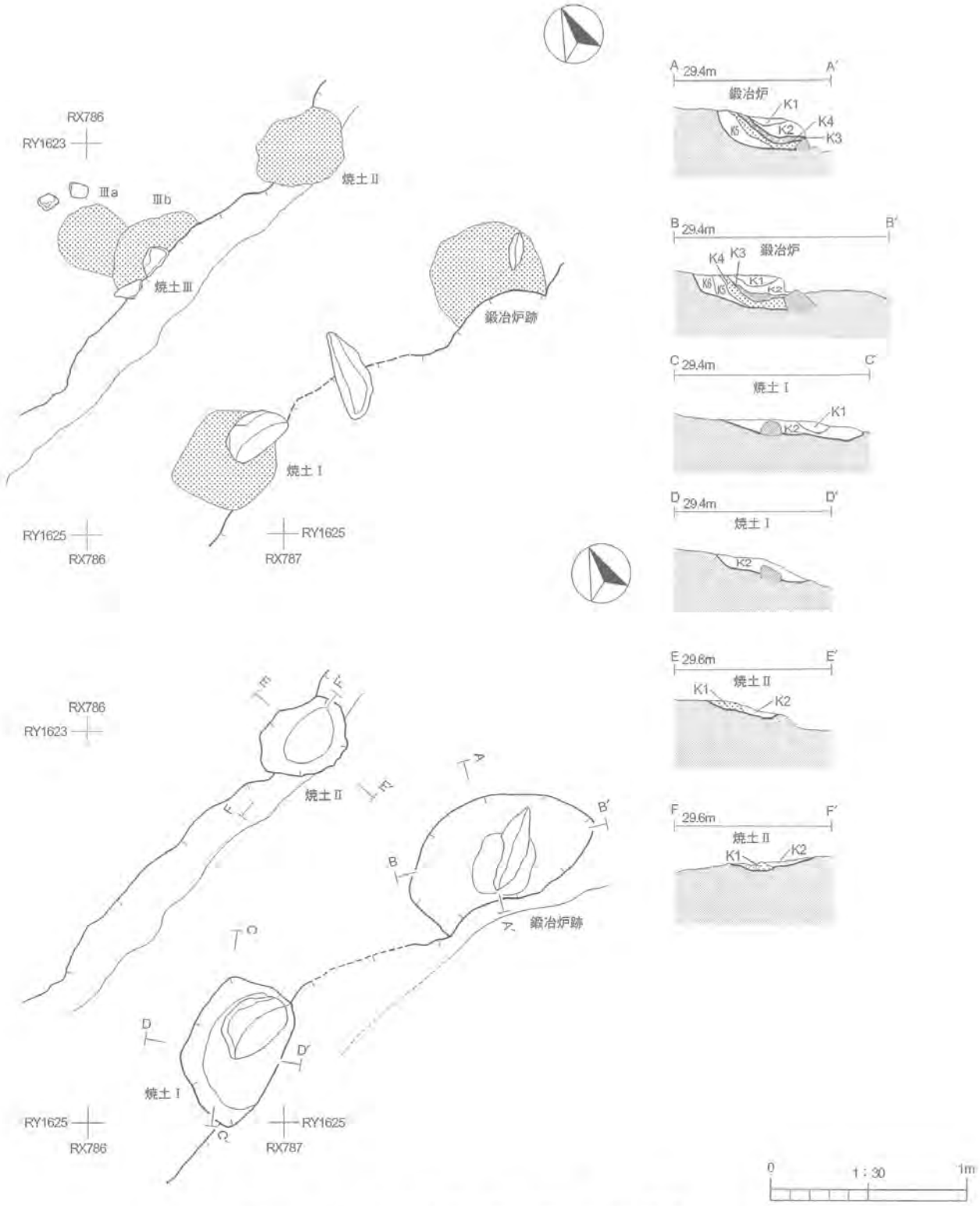
| 層　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR5/6 黄褐　砂壌土 | 10YR6/6 10%　砂壌土<br>10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、疎 |
| B1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR5/6 20%　砂壌土<br>10YR2/1 10%　砂壌土 | 固、密　→　鉄製品、羽口、鉄滓 |
| B2 | 10YR4/3 褐　砂壌土 | 10YR6/6 10%　砂壌土 | 固、疎　→　鉄滓など |
| C1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | | 固、やや疎 |
| D2 | 10YR3/2 黒褐　砂壌土 | 10YR6/6 20%　砂壌土 | 中～固、中　→　羽口、鉄滓 |
| E1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中～固、疎 |
| F1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中、疎　→　貝、鉄滓少 |




第110図　A－6号製鉄遺構（1）



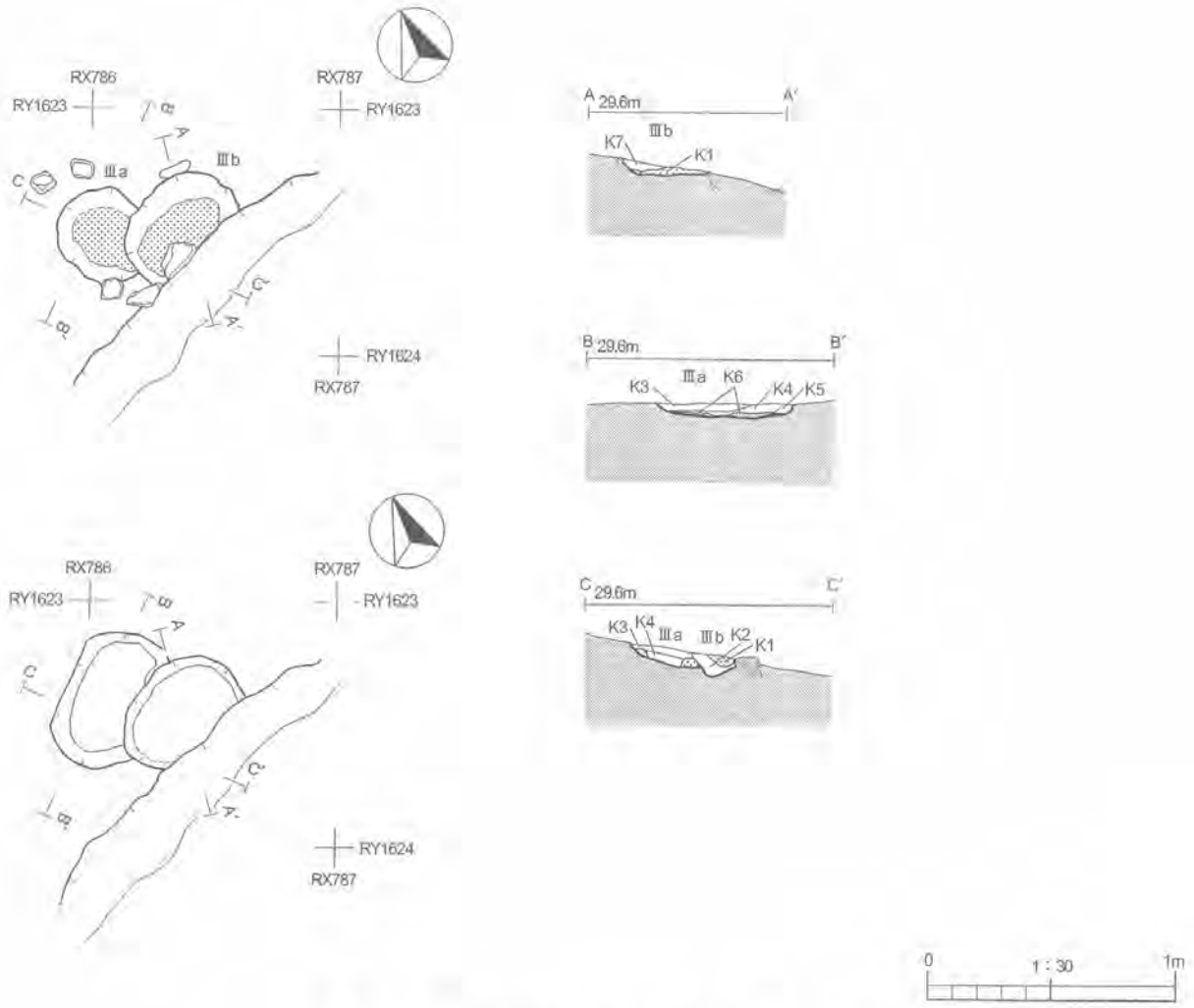

第111図　A－6号製鉄遺構（2）




**第112図　A－6号製鉄遺構、鍛冶炉跡、焼土遺構Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ**

**鍛冶炉跡**（第112図）

Ⅰ期平場の東に位置する。南側を削られているが、平面形は円形と推定される。規模は径約50cm c m、深さは17cm掘り込まれている。埋土層は6層観察された。K2層は黒色土、K3層




第113図　Ａ－６号製鉄遺構、焼土遺構Ⅲ

は明黄褐色の粘土層であるが、上面は還元焼成を受けている。Ｋ４～Ｋ６層は固く締った暗褐土である。Ｋ２層からは、鍛造剥片、粒状鉄滓などが出土している。

**焼土Ⅰ**（第112図）

鍛冶炉の西に位置する。平面形は不整円形、規模は径約50cm、深さは６cmを測る。Ｋ１層は締った焼土層であるが、平面規模は小さい。

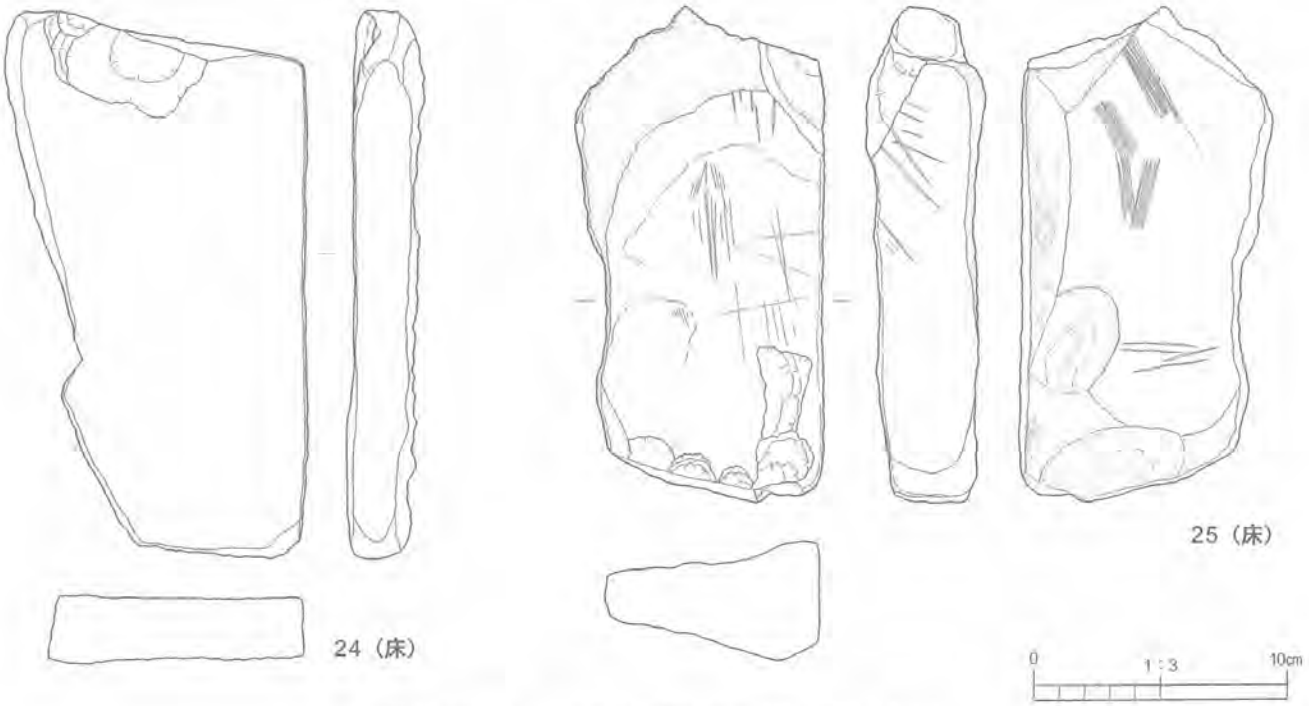
**焼土Ⅱ**（第112図）

鍛冶炉の北に位置する。平面形は不整円形、規模は約40cm、深さは４cmを測る。Ｋ１層は一部撹乱を受けてはいるが、全面に広がる固く締った焼土層である。

**焼土Ⅲ**（第113図）

Ⅰ期平場の中央に位置する。焼土Ⅲａ、焼土Ⅲｂの新旧２基の焼土遺構が検出されている。焼土Ⅲａは焼土Ⅲｂに切られる。焼土Ⅲｂは Ⅱ基平場に切られている。平面形はいずれも楕円形で、長軸55cm、短軸は40cm前後と推定される。深さは焼土Ⅲａが７cm、焼土Ⅲｂが10cm掘り込まれている。埋土は、焼土Ⅲａでは最下層のＫ６層が固く焼き締った焼土層であるが、焼土Ⅲｂでは焼土層であるＫ１層の下に、粘土粒を多く含んだ極暗褐色土Ｋ２層が炉の西側で観察された。

第114図　A－6号製鉄遺構出土遺物（1）




第115図　A－6号製鉄遺構出土遺物（2）

**出土遺物**（第114～116図）

1～8は土師器である。1はの坏の黒色処理された口縁部である。2～8は甕である。2は口縁部に最大径をもつ長胴甕で、頸部に明瞭な段をもつ。3～5は口縁部である。3はやや外反しながら立上がり、口唇部が内反する。4、5は口縁部が短く、外反し、胴部に最大径をもつ。6～8は底部である。6は弱い張出しをもつが、7、8は張出しをもたない。9～11は須恵器である。9は底面が剥離しているが、甕の底部と思われる。器面は粗く、調整痕は土師器のものであるが、還元焼成されており須恵器とした。10、11は体部片で、10はタタキメを残す。

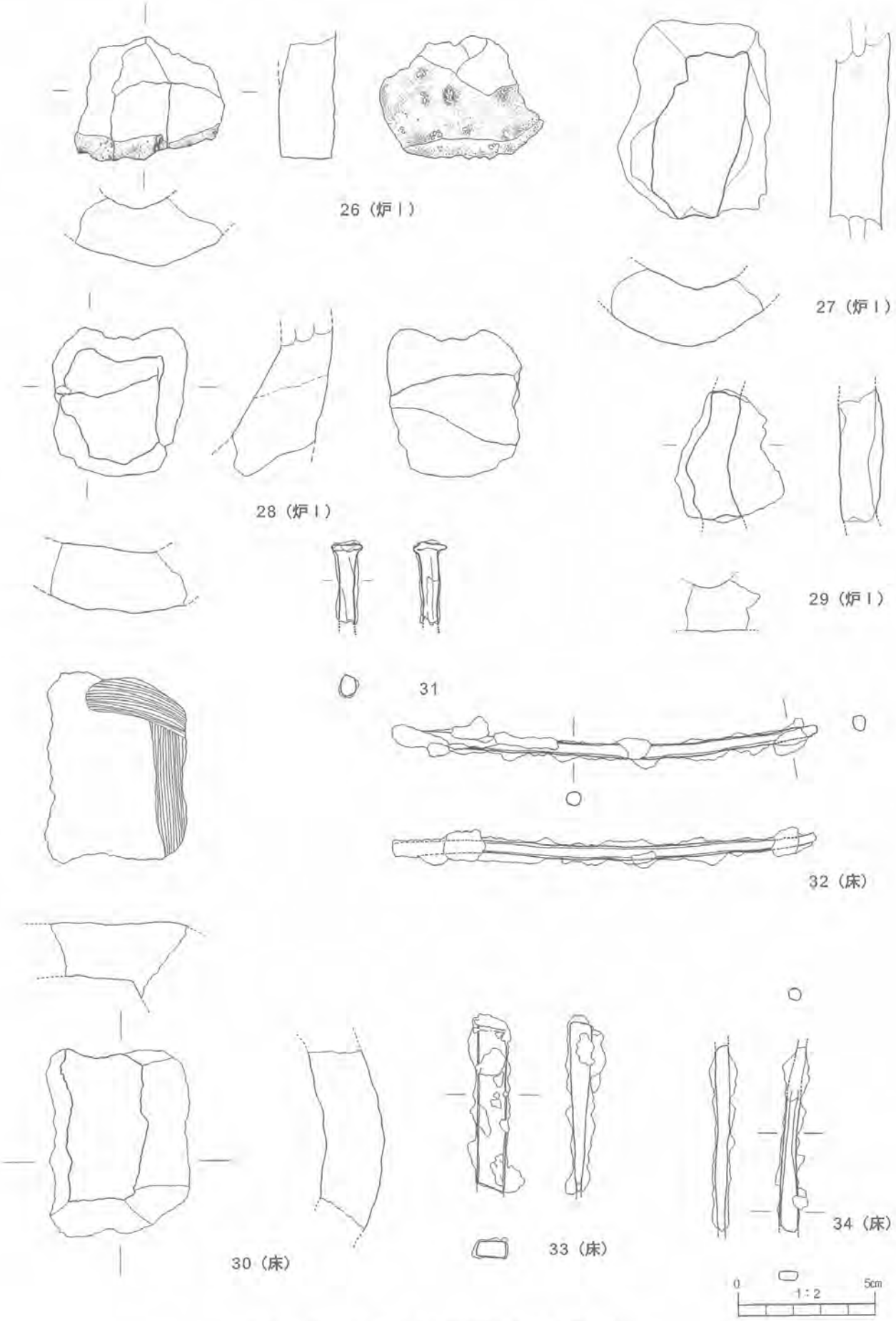
12～21は弥生土器である。12は器厚の薄い波状の口縁部。波頂部に半円形の口を切り、全面に横位の単節縄文を施す。13～15は沈線に交互刺突文、16～18は沈線と撚糸文、19～20は撚糸文で施文される。21は細かい縄文を施された底部である。

22、23は隆沈線で施文された深鉢の頸部である。いずれも縄文中期に伴う。

24、25は石器で、いずれも砥石である。15は2面を使用している。16は3面を使用して、各面に擦痕が観察された。

26～30は土製品である。26、27、29はふいごの羽口片である。28、30は支脚と考えられる。

31～34は鉄製品である。31は釘の頭部である。32、33は棒状の製品である。32は丸く細い棒状である。径5㎜、長さ15.5㎝である。34は一方の端がヘラ状に成形される。長さ7㎝である。33は船釘と思われる。長さ6.5㎝、幅1㎝である。




第116図　A－6号製鉄遺構出土遺物（3）

鍛冶炉土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K 1 | 10YR3/3　暗褐　砂壌土 | 7.5YR3/3 10%　砂壌土 | 中、疎　→　焼土粒少 |
| K 2 | 10YR2/1　黒　砂壌土 | 10YR2/3　10%　砂壌土<br>10YR3/4 10%　砂壌土 | 中～固、疎 |
| K 3 a | 2.5Y6/3 にぶい橙　砂壌土 | 2.5Y6/4 10%　砂壌土 | 固、密　→　還元炎焼成 |
| K 3 b | 10YR6/8 明黄褐　砂壌土 | 10YR5/8 10%　砂壌土 | 固、密 |
| K 4 | 7.5YR3/4 暗褐　砂壌土 | 7.5YR4/4 10%　砂壌土 | 固、密 |
| K 5 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 7.5YR3/4 10%　砂壌土 | 固、中～疎 |
| K 6 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土<br>7.5YR4/6 5%　砂壌土 | 中～固、中 |

焼土Ⅰ土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K 1 | 5YR4/6 赤褐　砂壌土 | 5YR4/4 10%　砂壌土 | 中、中～密 |
| K 2 | 7.5YR4/3 褐　砂壌土 | 7.5YR4/6 20%　砂壌土<br>10YR3/3 10%　砂壌土 | 中～固、中　→　土器 |

焼土Ⅱ土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K 1 | 5YR4/4 にぶい赤褐　砂壌土 | 2.5YR4/4 10%　砂壌土 | 固、密　→　土器 |
| K 2 | 7.5YR3/3 暗褐　砂壌土 | 7.5YR4/4 10%　砂壌土 | 中～固、中　→　焼土粒少 |

焼土Ⅲ土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K 1 | 5YR4/8 赤褐　砂壌土 | 5YR4/6 10%　砂壌土 | 固、密　→　羽口片 |
| K 2 | 7.5YR2/3 極暗褐　砂壌土 | 7.5YR4/4 10%　砂壌土 | 中、中　→　粘土粒多 |
| K 3 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 中、疎 |
| K 4 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中～固、疎　→　焼土塊 |
| K 5 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　5%　砂壌土 | 軟、疎 |
| K 6 | 2.5YR5/8 明赤褐　砂壌土 | 5YR4/8 10%　砂壌土 | 固、密 |
| K 7 | 7.5YR4/6 褐　砂壌土 | 7.5YR4/4 10%　砂壌土 | 中、疎　→　焼土粒多 |

**Ａ－７号竪穴住居跡**（第117図）

＜検出状況＞　Ａ３区南東の隅に位置する。Ａ－６号住居跡の下から出土する。Ｂ－４号の東側の壁を切る。Ａ３区の南斜面を削平して構築している。北側と西側の壁を検出した。住居跡全体の約１/２の検出である。

＜形状・規模＞　床面の北西の隅が角をなしており、平面形は隅丸方形と推定される。北の壁高は80cmである。床面はわずかに起伏があり、南へ傾斜する。周溝は検出されていない。貼床は南の床面の断面で確認している。

＜埋土＞　Ａ層上面はＡ－６号住居跡の生活面である。Ａ～Ｃ層は黒～褐色土、Ｄ層は黄褐色土である。

＜柱穴＞　床面から５基の小土坑が検出している。柱あたりが確認されたのはＰ１、Ｐ３である。

(cm)

| PIT | Ｐ１ | Ｐ２ | Ｐ３ | Ｐ４ | Ｐ５ |
|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 35 | 12 | 25 | 16 | 25 |
| 深 | 7 | 11 | 10 | 11 | 7 |

＜カマド＞（第118図）　北側の壁に位置する。くり貫式である。火床部は掘り窪めているが、袖石や袖石を据えた跡などは検出されなかった。煙道は水平に煙出しに向かい、煙出しはやや外傾して立上がる。煙道は煙出しを過ぎて掘られている。規模は、火床部は径約55cm、煙道の径26～16cm、煙出しの径25～20cmである。Ｋ４層が固く焼き締った焼土層である。

**出土遺物**（第119図）

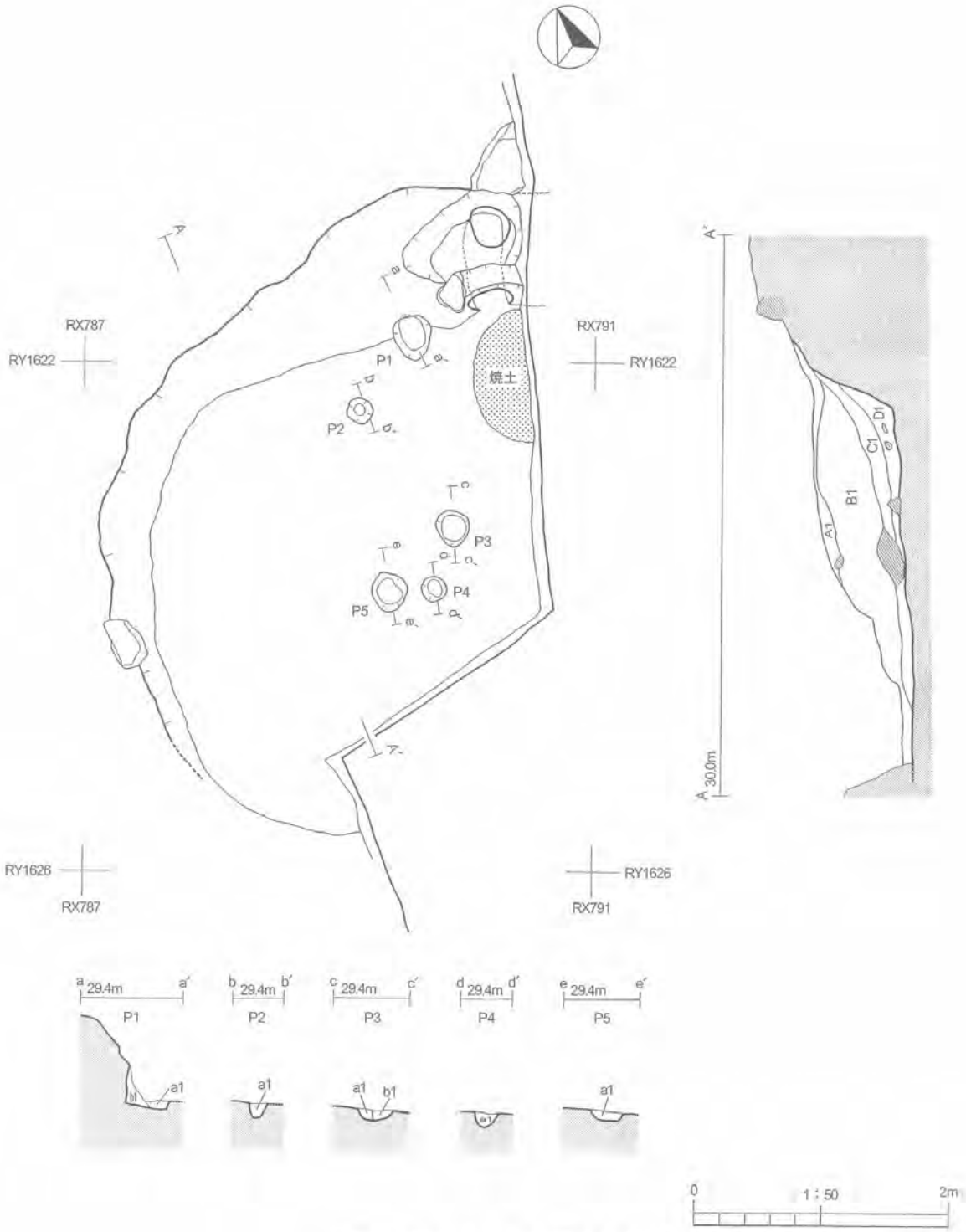
１～４は土師器である。１は坏の体部、丸底の坏と推定される。２～４は土師器甕の口縁部である。２、３は外反して立上がり、２は口唇部が玉縁状に成形される。４はわずかに内反して立上がっている。５は須恵器の体部片、器形は不明。外面にタタキメを残している。６～８は撚糸文と沈線、９は交互刺突文を施されている。10は隆線に横位の付加刺突文、11は縦位と斜位の単節縄文を施文する。12、13は底部である。12は沈線と縄文で施文され、13は底面に縄文が施されている。

**Ａ－７号竪穴住居跡土層観察表**

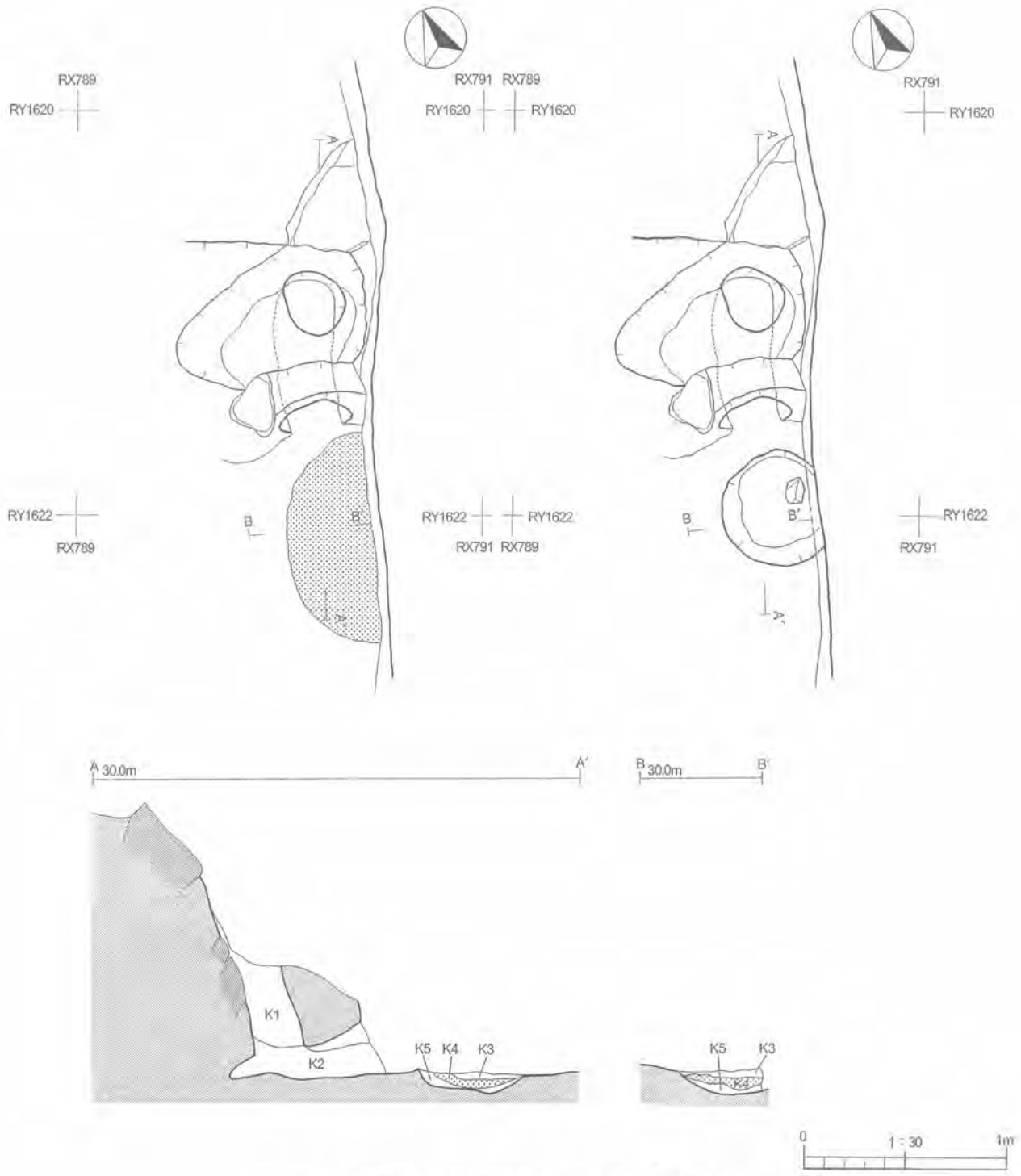
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ａ１ | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中～固、中 → 炭、粘土 |
| Ｂ１ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR2/3 10%　砂壌土 | 中、中 → 土器 |
| Ｃ１ | 10YR4/6 褐（暗）砂壌土 | 10YR4/4 20%　砂壌土 | 中～軟、疎 → 炭少、土器 |
| Ｄ１ | 10YR5/6 黄褐　砂壌土 | 10YR6/6 10%　砂壌土 | 中、疎 → 土器多 |

**Ａ－７号竪穴住居跡柱穴土層観察表**

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ｐ１　ａ１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中、疎 |
| 〃　ｂ１ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| Ｐ２　ａ１ | 注記なし | 注記なし | 注記なし |
| Ｐ３　ａ１ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/8 20%　砂壌土 | 固、疎 → 炭少 |
| 〃　ｂ１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR2/3 10%　砂壌土 | 中～固、疎 → 炭少 |
| Ｐ４　ａ１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 5%　砂壌土 | 中、中～疎 → 炭微 |
| Ｐ５　ａ１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、中 → 焼土少 |



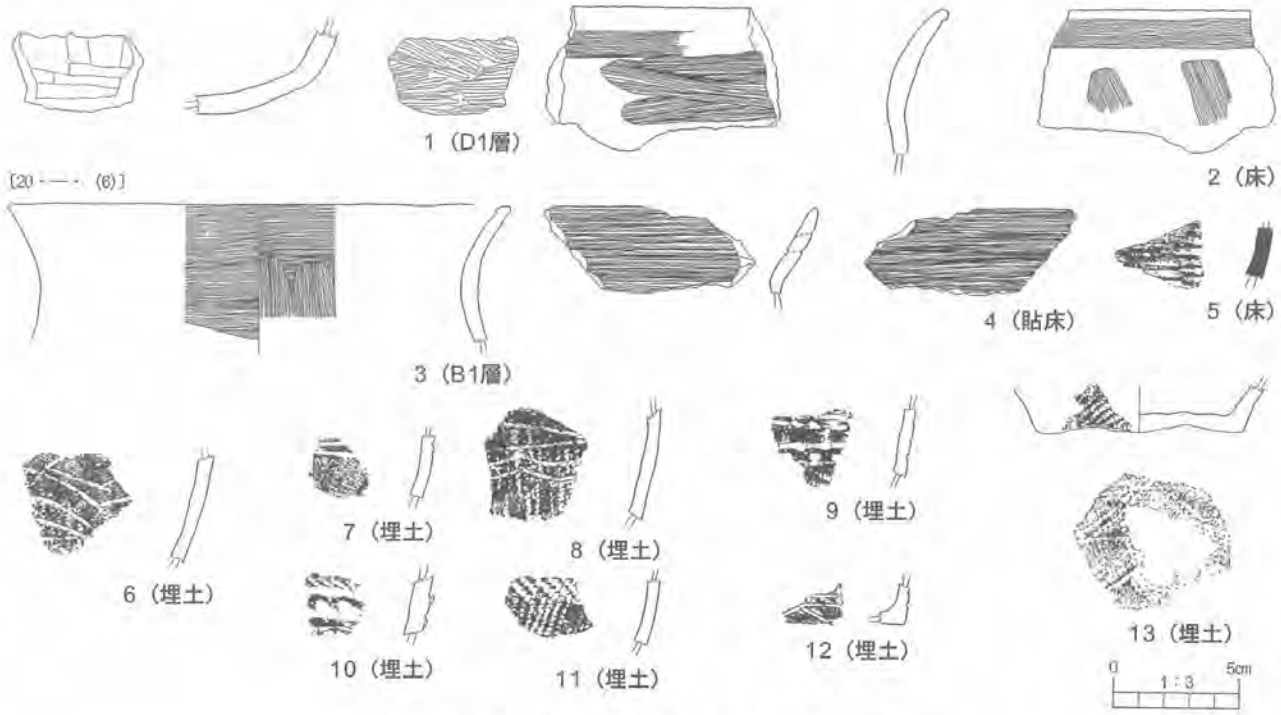

第117図　A－7号竪穴住居跡




第118図　A－７号竪穴住居跡カマド

A－７号住居跡カマド土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR7/6 20%　砂壌土 | 軟、疎 |
| K２ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 20%　砂壌土 | 軟、疎 |
| K３ | 7.5YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 中～固、中 |
| K４焼土 | 5YR4/8 明赤褐　砂壌土 | 5YR4/6 10%　砂壌土 | 固、密 |
| K５ | 7.5YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中、疎 |




第119図　Ａ－７号竪穴住居跡出土遺物

**Ｂ－１号、Ｂ－２号竪穴住居跡**（第120図）

＜検出状況＞　Ｂ１区の北東の隅から検出している。Ｂ－３号住居跡を切っている。新旧の住居跡であり、新をＢ－１号、旧をＢ－２号とする。いずれも住居の北西部の角を検出したのみである。

**Ｂ－１号住居跡**

＜検出状況＞　床面が焼土や炭で覆われていたが、炉跡などは出土していない。また柱穴、周溝なども検出していない。調査区外に炉跡などの施設がある可能性が大きい。

＜形状・規模＞　平面形は隅丸方形と推定されるが、規模は不明である。

＜埋土＞　Ｄ層が炭の層で、Ｆ層が炭と焼土の混じった暗褐色土層である。いずれも粗く、締りのない層である。

**出土遺物**（第121図　１～４）

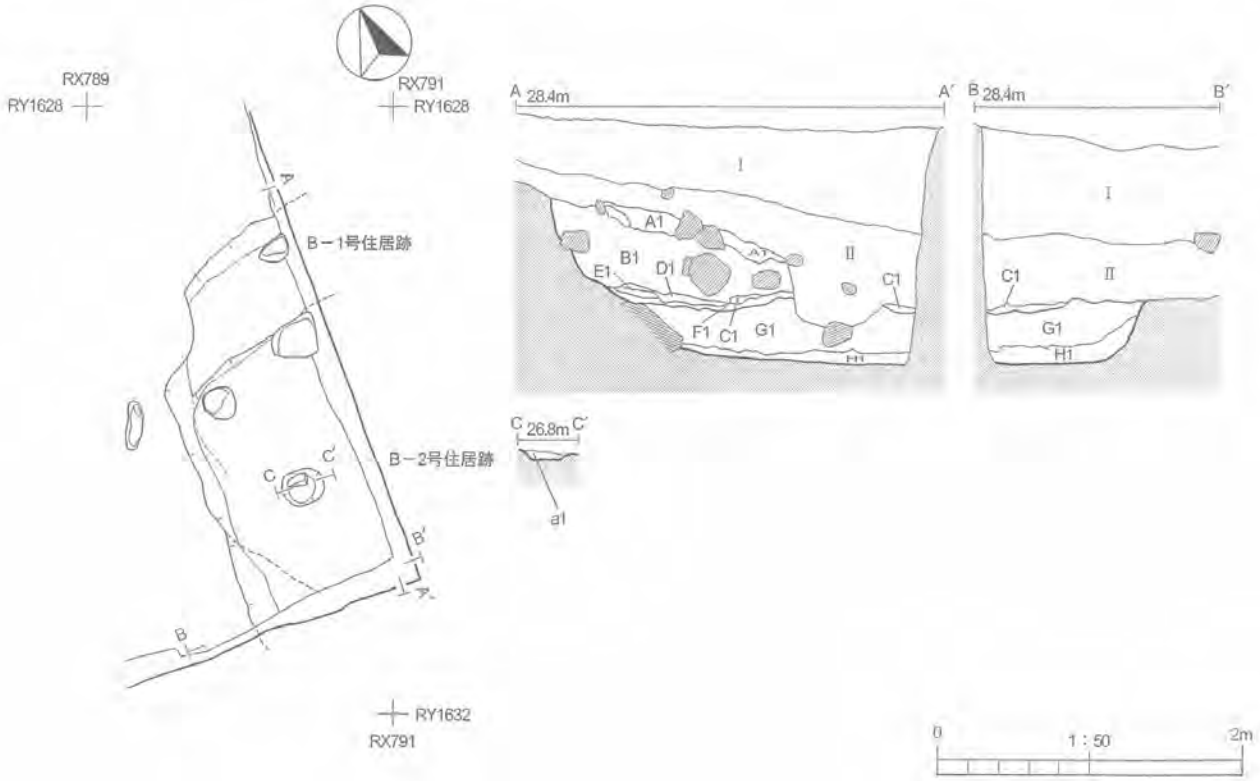
１～３は土師器甕の口縁部である。１は内反しながら立上がり先端部が外反する。２は外反して直線的に立上がり、先端部がさらに外反する。３は外反して立上がる短い口縁部。４は沈線により施文された縄文土器である。この他にＢ層からふいごの羽口片が出土している。

**Ｂ－２号住居跡**

＜検出状況＞　Ｂ－１号に上部を切られている。床面から小土坑が１基検出しているが、周溝、貼床は検出していない。

＜形状・規模＞　平面形は隅丸の方形と推定されるが、規模は不明である。

＜埋土＞　２層に分れるが、いずれも焼土、炭を多く含む締りのある層である。




第120図　B－1号、B－2号竪穴住居跡

<柱穴>　P1は柱あたりは確認されていない。埋土は焼土を多く含んでいた。径25cm、深さ5cmである。

**出土遺物**（第121図　5～12）

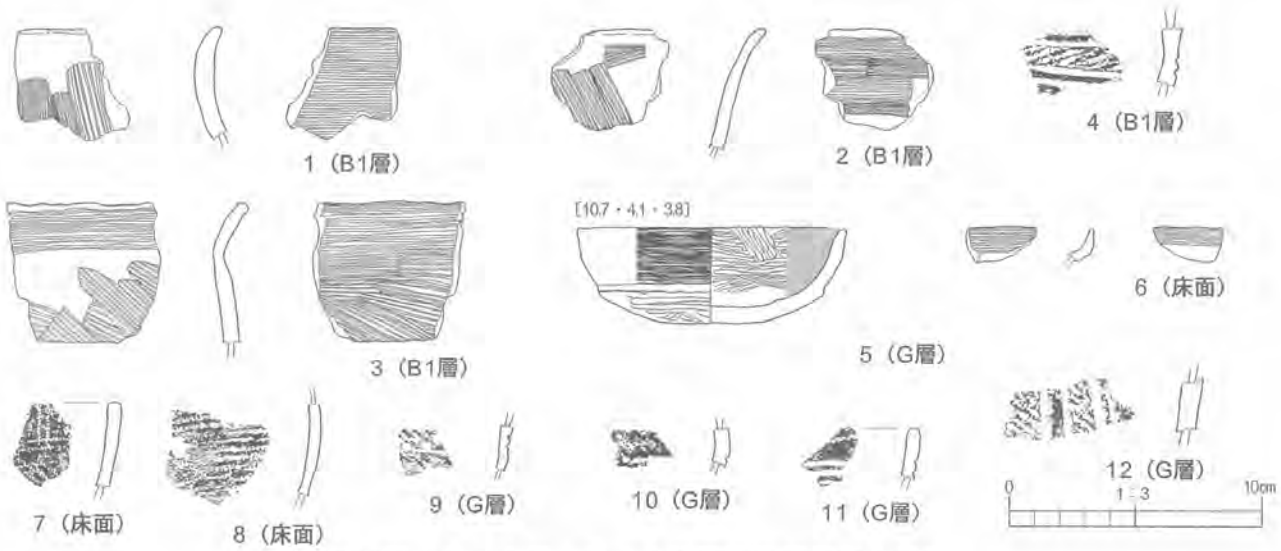
5は土師器の坏である。丸底で、体部下半に段をもち、黒色処理を施されている。6は土師器甕の口縁部。口唇部が直立して、尖り、須恵器甕の成形と類似する。7、8は撚糸文、9、10は沈線に交互刺突文で施文される。11は縄文の側面圧痕と沈線、12は隆沈線による施文である。この他H層からふいごの羽口片が出土している。

B－1号、B－2号竪穴住居跡土層観察表

| 層名 | 基本土 | 混入土 | 備考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR4/4 褐 砂壌土 | 10YR6/6 15% 砂壌土 | 中～固、疎 → 焼土塊多 |
| B1 | 10YR3/4 暗褐 砂壌土 | 10YR4/6 5% 砂壌土 | 中～軟、疎 → 焼土、炭少 |
| C1 | 7.5YR4/4 褐 砂壌土 | 10YR4/4 10% 砂壌土<br>10YR5/6 5% 砂壌土 | 中、疎 → 炭微 |
| D1炭層 | 10YR2/1 黒 砂壌土 | 7.5YR2/2 15% 砂壌土 | 軟、疎 → 焼土多 |
| E1 | 7.5YR4/4 褐 砂壌土 | 10YR4/6 10% 砂壌土 | 中～軟、疎 → 焼土少 |
| F1炭、焼土 | 7.5YR3/4 暗褐 砂壌土 | 10YR2/1 10% 砂壌土<br>5YR4/8 3% 砂壌土 | 軟、疎 |
| G1 | 7.5YR3/4 暗褐 砂壌土 | 10YR5/8 10% 砂壌土 | 中、疎 → 炭、焼土多 |
| H1 | 10YR4/4 褐 砂壌土 | 10YR3/4 15% 砂壌土 | 中～固、中 → 焼土、炭多、羽口 |

B－2号住居跡土坑土層観察表

| 層名 | 基本土 | 混入土 | 備考 |
|---|---|---|---|
| a1 | 7.5YR4/6 褐 砂壌土 | 5YR5/8 20% 砂壌土<br>10YR2/3 5% 砂壌土 | 中～固、密 |




第121図　B－1号、B－2号竪穴住居跡出土遺物

**B－11号製鉄遺構**（第122、123図）

＜検出状況＞　B２区の中央部に位置する。B－12号住居跡と重複し、B－14号住居跡を切る。B－12号住居跡が廃棄された後に大小の礫を含んだ流れ込み、北側の壁を破壊している。その後で製鉄炉は西側の壁の中央部を利用して築かれている。製鉄炉の東側の床面から焼土（炉Ⅱ）が出土している。また製鉄炉の北側からは粘土混じりの焼土が出土しているほかに周辺からは鉄滓、焼土、炭、ふいごの羽口片などが多量に出土している。

＜形状・規模＞　竪穴の平面形は、前述したようにB－11号ｂ住居跡をほぼそのまま利用しており、隅丸方形である。規模は3.5m×3.5mである。

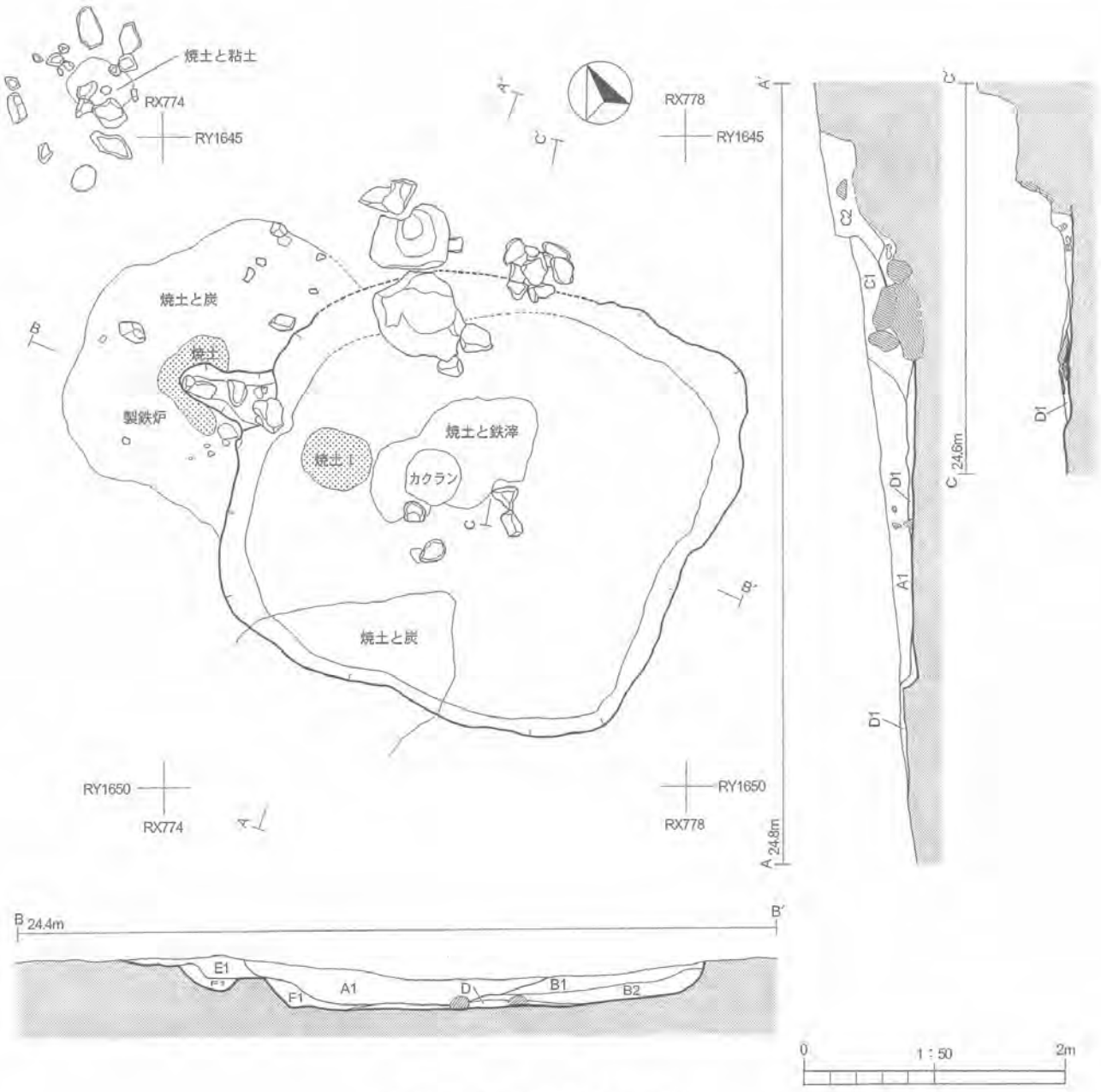
＜埋土＞　A、B層は竪穴の中心部に堆積し、C層は鉄滓、焼土、炭などを含み、北側の礫群に堆積する層である。D層は床面の焼土層、E，F層はは炉周辺の堆積層である。

**B－11号製鉄炉跡**（第122図）

＜検出状況＞　西側の壁の中央部に構築されている。検出段階で馬蹄形の焼土と中心部の窪みを出土した。焼土の北西端に位置する石の上からはふいごの羽口が出土している。窪みには焼土塊、粘土塊が堆積し、その下から椀形滓出土し、それを囲んで円形に石が組まれていた。焼土の北側と南側には石が埋設され、石は粘土層の上に置かれていた。床面はさらに長軸方向には細長く一段掘下げられていた。炉の周辺で柱穴などの土坑は検出されていない。

＜形状・規模＞　平面形は楕円形で、規模は1.75m×1.0m、深さは最深部で40cmである。

＜埋土＞　K１層は、炉の周辺の堆積土。K２層は馬蹄形の固いが粗い焼土層、K３層は粘土塊、炭塊などを含む軟らかい黒褐色土層である。K３ａ層からは西側で大礫が積重ねられた状態で出土し，その直下のK３ｂ層は粘土塊である。K４層は炉底部に形成された鉄滓の層である。K５層は、焼けた粘土を多く含む固く締った層である。K６層は床面の溝に堆積していた極暗褐色土で、多量の焼土粒、ふいごの羽口片などを含む。K７層は焼土層の上に堆積した炭を多量に含む黒色土層で、上面に鉄滓が形成される。K８層は黄褐色の粘土層である。K５層とともに石を組む際に使われたものと思われる。K３層の石と粘土は、焼けた痕を残しておら




第122図　Ｂ－11号製鉄炉跡

ず、炉の構築を途中でやめて、そのまま残したとも考えられる。

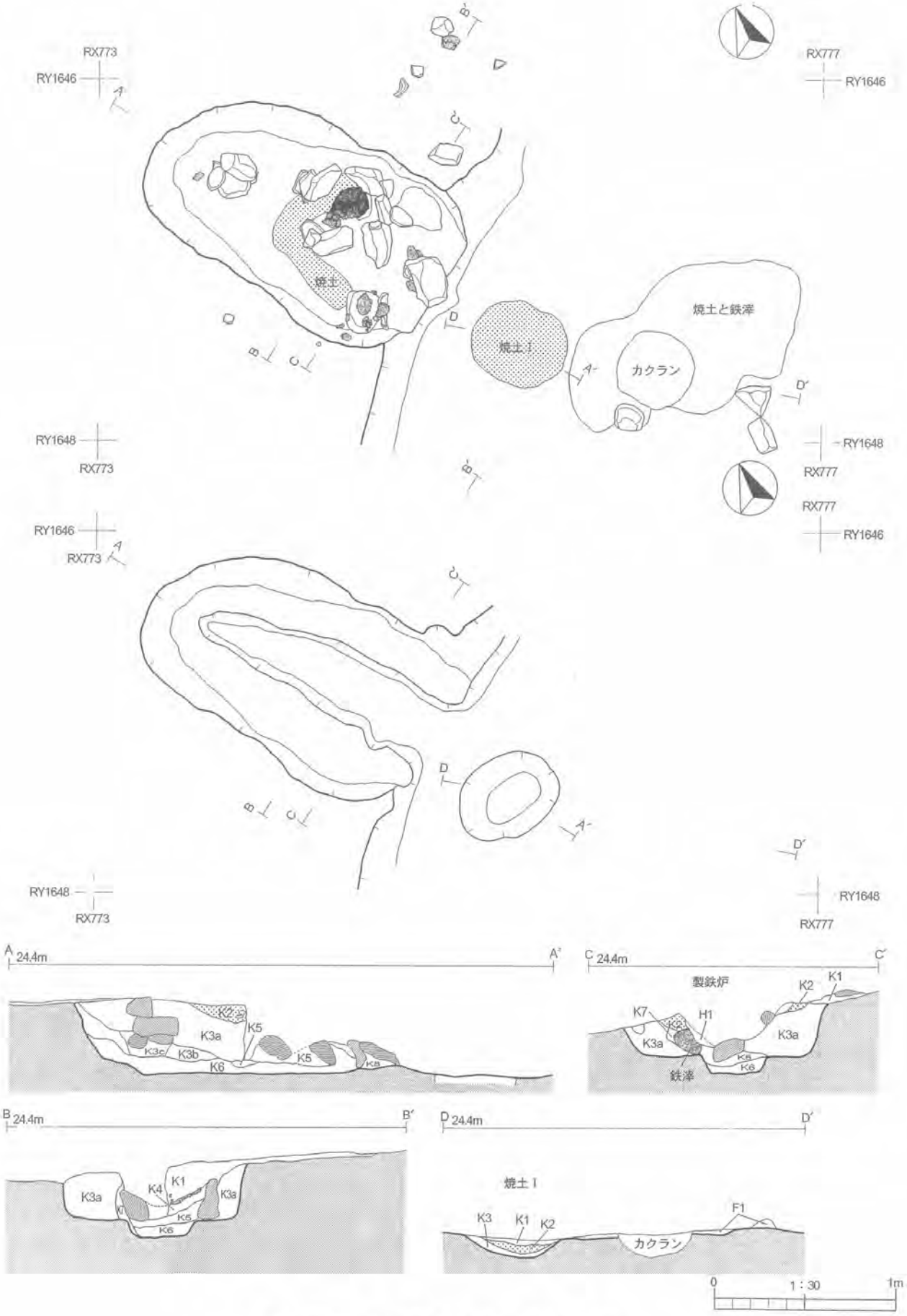
**焼土Ⅰ**（第123図）

製鉄炉の南の床面に位置する。

＜形状・規模＞　平面形は、不整円形で、浅い掘り方をもつ。規模は55cm×45cm、深さは10cmである。

＜埋土＞　Ｋ２層が固く焼き締った焼土層である。

出土遺物　Ｋ２層から貝殻片、粒状鉄滓が出土している。




第123図　B－11号製鉄炉跡、焼土Ⅰ

**Ｂ－12号竪穴住居跡**（第124図）

＜検出状況＞　Ｂ－11号製鉄炉と重複する。カマドは東側の壁から検出したが、周溝、貼床は出土していない。

＜形状・規模＞　平面形は正方形である。規模は一辺3.5m、壁高は北側で40cm、南側で10cmをはかる。

＜埋土＞　前述したようにＢ－12号を廃棄された直後に北側から大小の礫が流れ込み、その後すぐにＢ－11号の製鉄炉が構築されたと考えられる。Ｆ層の上面が製鉄炉の操業面、Ｆ層の下面がＢ－12号住居跡の床面と考えられる。

＜柱穴＞　床面の焼土混じり堆積層（Ｄ層）を剥いだところで６基の土坑が検出している。柱あたりが確認できたのはＰ１だけである。Ｐ６は不整円形の土坑で、埋土上層は大小の礫を含むＣ層である。

(cm)

| PIT | Ｐ１ | Ｐ２ | Ｐ３ | Ｐ４ | Ｐ５ | Ｐ６ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 33 | 20 | 30 | 22 | 25 | 110×70 |
| 深 | 22 | 25 | 10 | 22 | 20 | 40 |

＜カマド＞（第125図）

東側の壁の北寄りに設けられている。くり貫き式である。火床部は掘り窪められ、袖石を埋設している。煙道は煙出しにむかって下降して掘られ、煙出しは垂直に立上がる。規模は、火床部50cm×40cm、煙道径は15cm～20cm、煙出し径は20cmを測る。Ｋ４層が固く焼き締った焼土層である。

**出土遺物**（第126図）

Ｂ－11号製鉄炉跡とＢ－12号竪穴住居跡の遺物をあわせて載せた。Ｂ－12号の遺物は、カマドに伴うもの、Ｄ層を剥いだ時点で出土したものである。１～３は坏である。１はあかやき土器である。２は平底で、大きく外傾して立上がる。黒色処理されている。３は丸底と推定されるが、器厚が厚く、内外面を強いナデだけで調整されている。作りがやや粗い。

４～６は土師器甕である。４、５は口縁部に最大径をもつ長胴甕で、口縁部は長く、外反して直線的に立上がる。６の口縁部は先端がわずかに内反する。

７～15は弥生土器である。７は頸部と口唇部に沈線を施し、口縁部は無文である。８は波状口縁で、口縁部は磨消は施される。９は撚糸文、10～12は沈線と縄文で施文される。

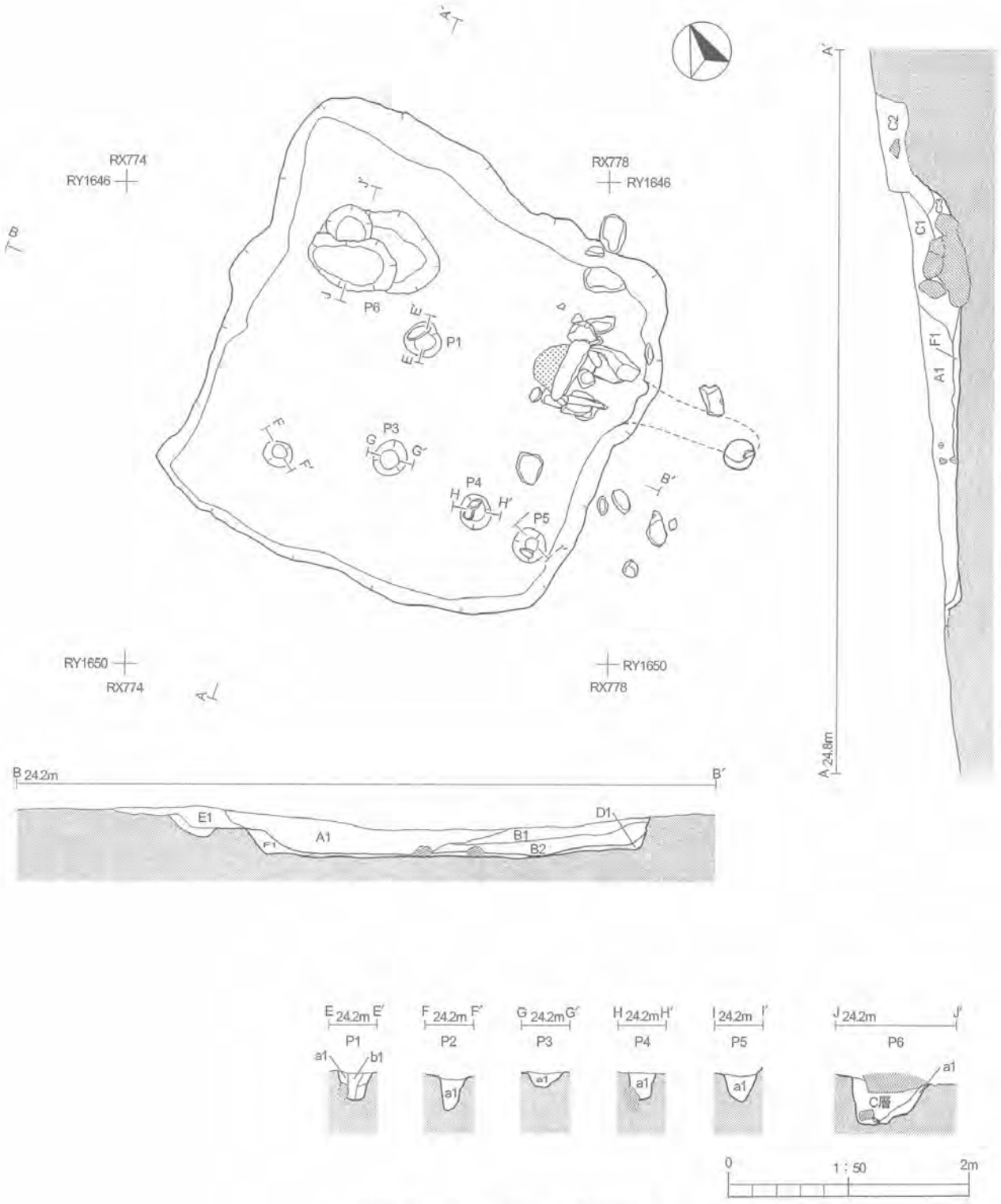
13は高坏の台である。14、15は平行沈線、変形工字文で施文され、浅鉢あるいは高坏の体部と口縁部である。

16、17は縄文土器である。16、17は口唇部を玉縁状に成形し、胎土は繊維を含む。

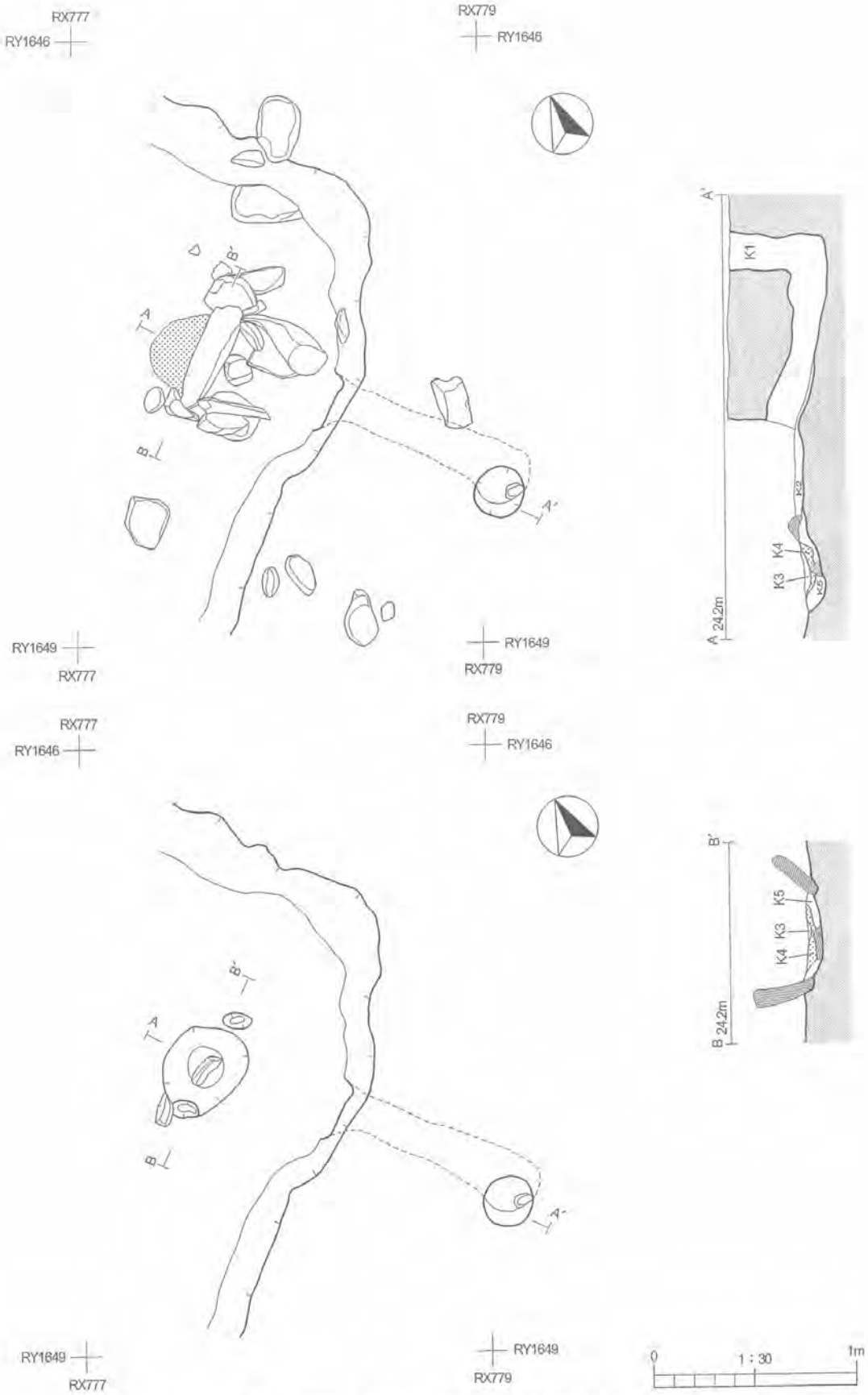
18～24は土製品である。18～23は内湾しており、大きめの筒状の製品と考えられる。網点で示した部分は赤黒く変色している。また22の内面は鉄滓で覆われている。24はふいごの羽口である。孔径は2.5cmである。

25、26は鉄製品である。25は紡錘車である。長さ17.5cm、円盤径4.8cmである。26は釣針である。２個体で、１つはカエシをもつ。長さ4.7ｃｍである。

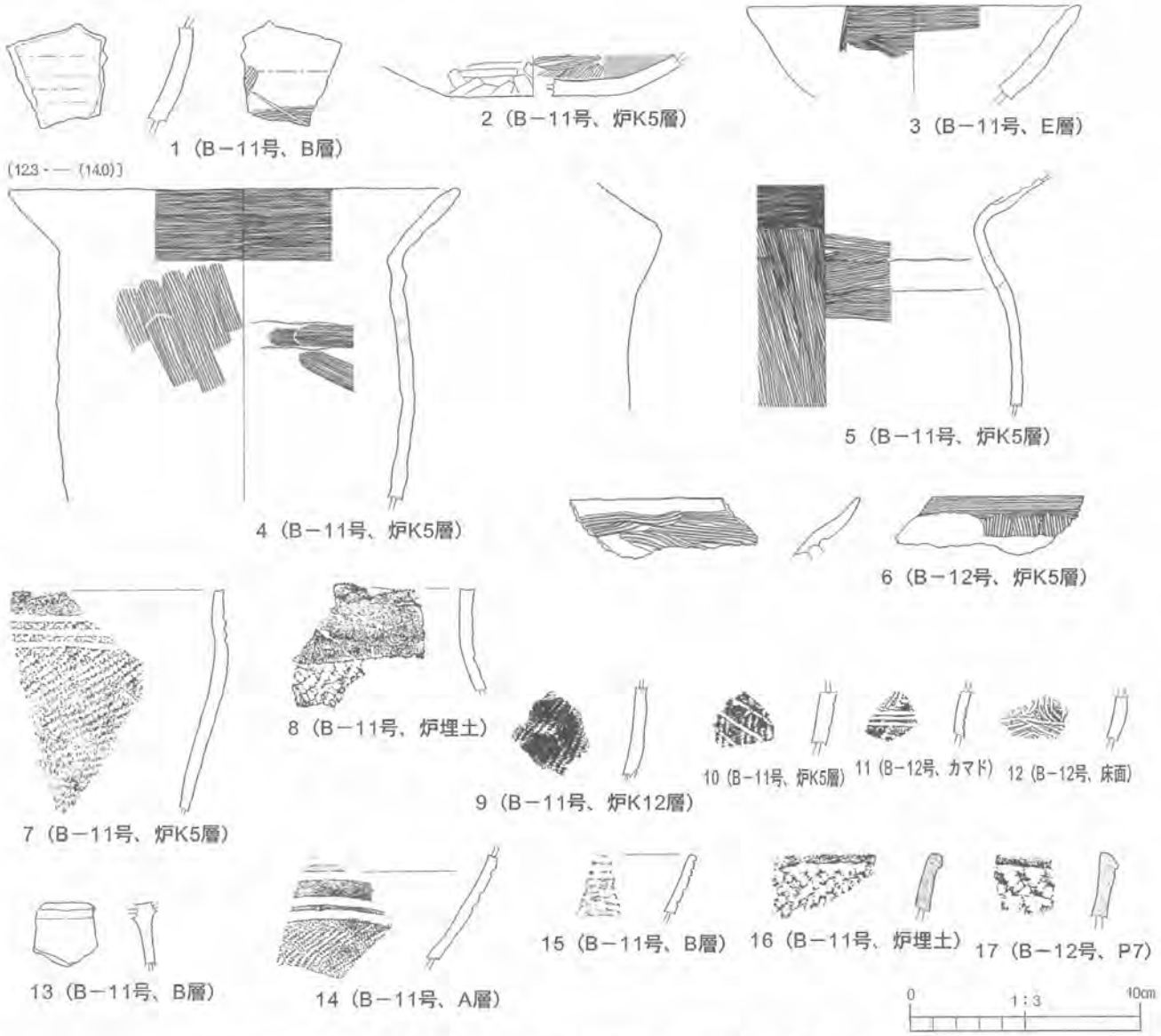
27は土製品である。18～23と同形のものと考えられる。




第124図　B－12号竪穴住居跡



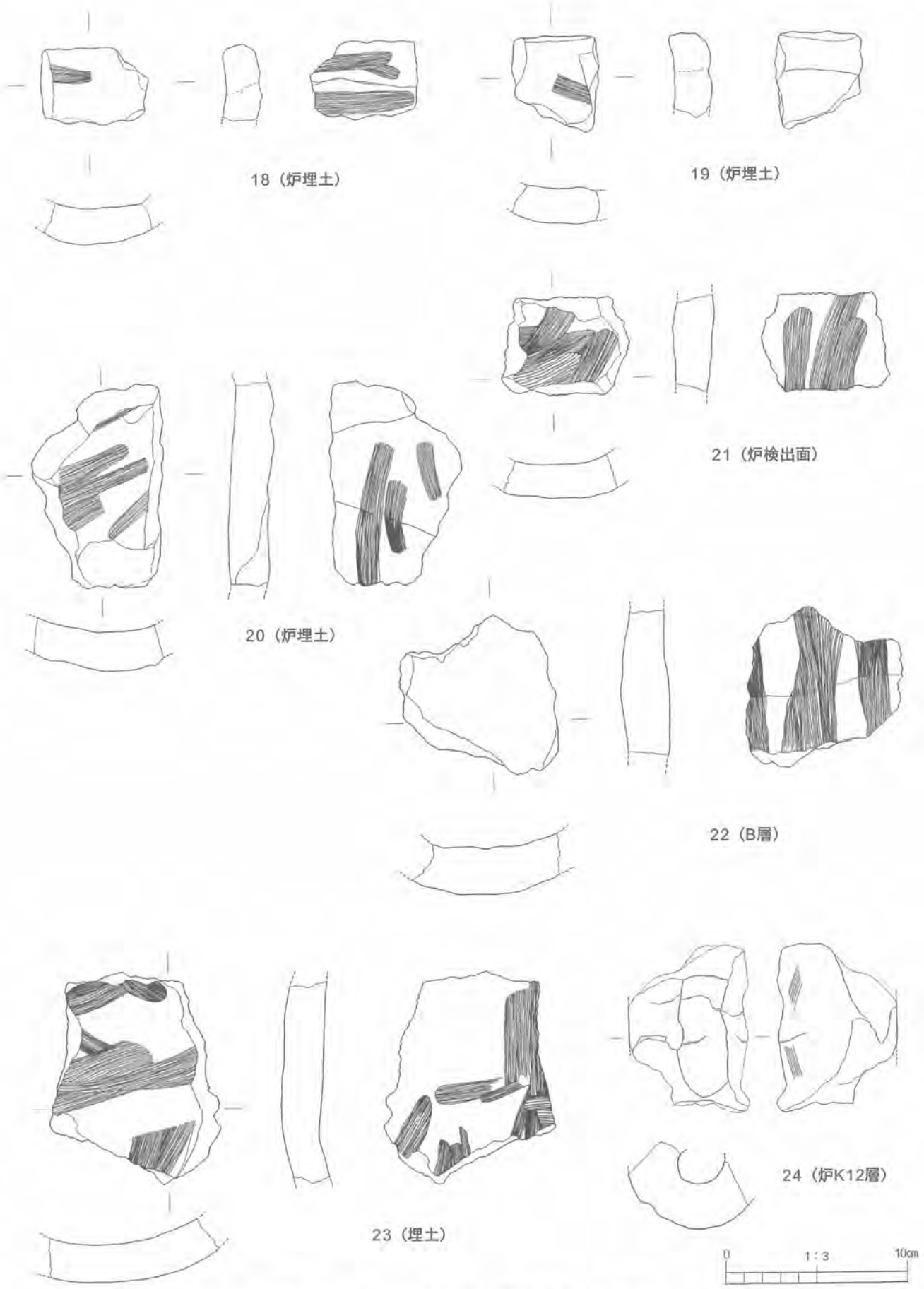

第125図　B－12号B竪穴住居跡カマド



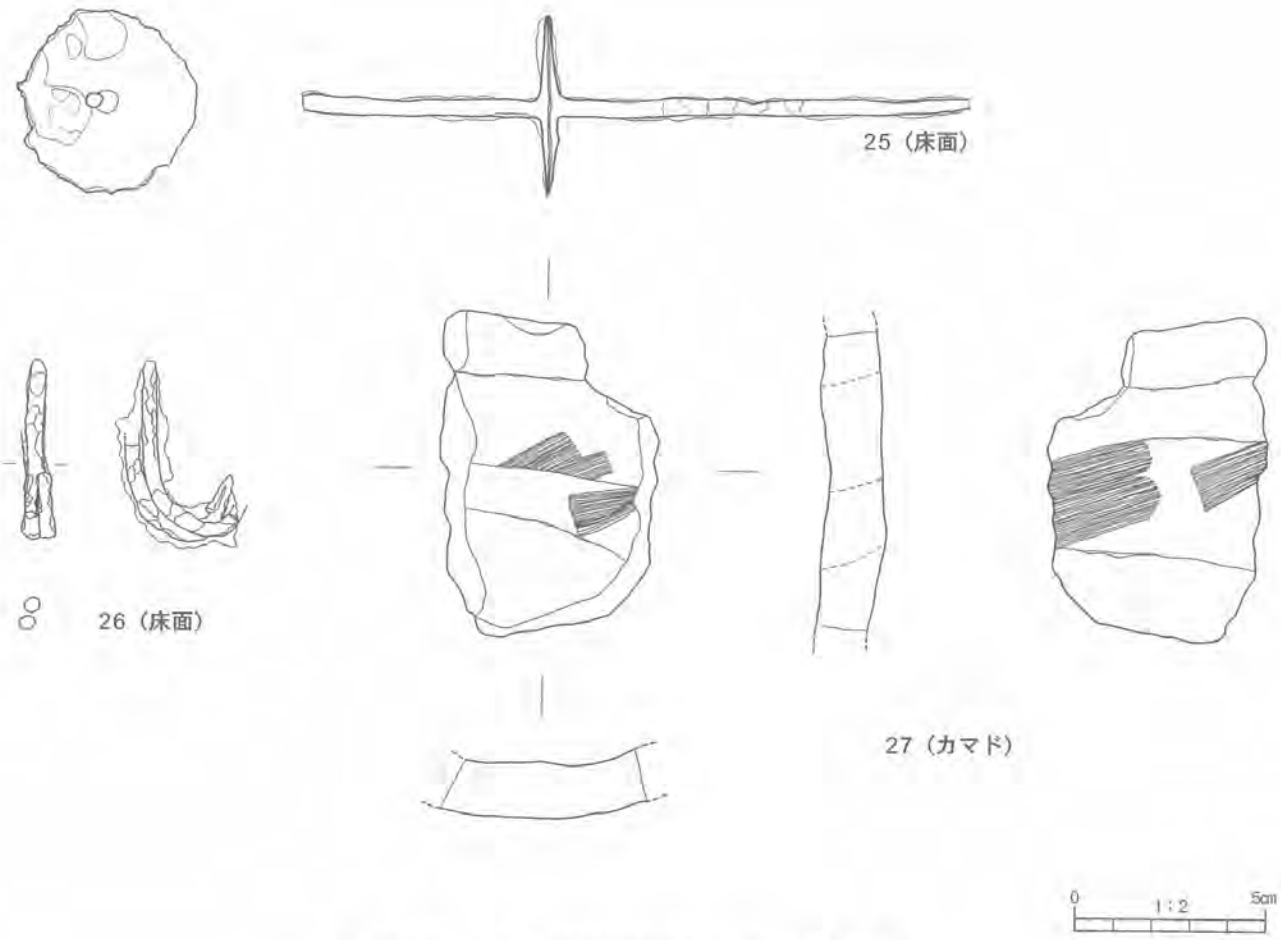

第126図　B－11号製鉄炉跡、B－12号竪穴住居跡出土遺物（1）

B－11号製鉄遺構土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 2%　砂壌土 | 中、中 → 土器、鉄滓多 |
| B1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR2/2 10%　砂壌土<br>10YR5/6 2%　砂壌土 | 中、中 → 炭、焼土塊少 |
| B2 | 10YR2/2 黒褐　砂壌土 | 10YR2/3 10%　砂壌土 | 中、中 → 炭、焼土塊B1より多 |
| C1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 20%　砂壌土 | 中~固、中 →大礫多、炭少 |
| C2 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、中 → 炭、焼土、鉄滓多 |
| C3 | 10YR3/3 暗褐　砂壌土 | 10YR2/2 20%　砂壌土<br>10YR4/6 5%　砂壌土 | 軟、疎 → 炭多 |
| D1 焼土と炭 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 5YR4/8 20%　砂壌土 | 中、疎 → 炭多 |
| E1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 7.5YR3/4 20%　砂壌土 | 中、疎 → 焼土塊多 |
| F1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 5YR4/8 20%　砂壌土 | 中、中 → 焼土、鉄滓G1より多 |
| G1 | 5YR4/6 赤褐　砂壌土 | 5YR3/6 10%　砂壌土 | 中~軟、中 → 鉄滓少 |




第127図　B－11号製鉄炉跡出土遺物（2）




第128図　B－12号竪穴住居跡出土遺物（3）

B－12号住居跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P1　a1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 軟、疎　→　焼土多 |
| 〃　b1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/8 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P2　a1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR2/3 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P3　a1 | 7.5YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 軟、疎　→　焼土粒多 |
| P4　a1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR2/3 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P5　a1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR2/1 5%　砂壌土 | 中～固、中 |
| P6　a1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR2/1 10%　砂壌土 | 軟、疎　→　焼土塊 |

B－11号製鉄炉跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 中～固、中　→　焼土粒、炭多 |
| K2 | 5YR4/8 赤褐　砂壌土 | 5YR5/6 10%　砂壌土 | 固、疎　→　鉄滓少 |
| K3a | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/3 10%　砂壌土 | 中、疎　→　炭、焼土多 |
| K3b | | | |
| K3c　粘土 | 10YR5/8 黄褐　重埴土 | 10YR4/4 20%　砂壌土 | 中～固、中 |
| K4 | 10YR2/1 黒　砂壌土 | 7.5YR2/3 10%　砂壌土 | 中～軟、疎　→　上面に鉄滓 |
| K5 | 7.5YR2/3 黒褐　砂壌土 | 7.5YR4/6 5%　砂壌土 | 中、疎　→　焼土粒多 |
| K6 | 7.5YR3/3 暗褐　砂壌土 | 7.5YR4/4 10%　砂壌土 | 中、中　→　粘土粒 |
| K7 | 10YR2/1 黒　砂壌土 | 7.5YR2/3 10%　砂壌 | 中～軟、疎。炭、焼土多 |

B－11号製鉄遺構焼土Ⅰ土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K1 | 5YR3/2 暗赤褐　砂壌土 | 7.5YR3/2 10%　砂壌土 | 軟、疎　→　焼土粒多 |
| K2焼土 | 2.5YR4/8 赤褐　砂壌土 | 5YR4/8 10%　砂壌土 | 中～固、中～密　→　貝、鉄滓 |
| K3 | 5YR2/4 極暗赤褐　砂壌土 | 7.5YR3/3 10%　砂壌土 | 中、中 |

### Ｂ－13号竪穴住居跡（第129図）

＜検出状況＞　Ｂ２区の西端に位置する。検出面は地山面である。Ｂ－15号住居跡を切りＢ－17号土坑に切られる。住居の東側のみの検出である。周溝は検出したが、カマドは出土していない。南の壁際から溝状の遺構を検出したが、幅からみて周溝とは別の遺構と考えられる。

＜形状・規模＞　平面形は隅丸方形と推定される。規模は南北3.8m、東西は不明である。壁高は、北側50cm、南側10cmを測る。南壁際の溝の規模は、幅50cm、深さは35cmである。周溝の規模は、幅５cm～20cm、深さ５cm～20cmである。

＜埋土＞　Ａ層は炭、焼土などを含む黒褐色土である。　Ｂ１層は軟らかい暗褐色土である。

＜柱穴＞　床面から土坑を６基検出しているが、いずれも浅く柱あたりは確認されていない。

(cm)

| PIT | Ｐ１ | Ｐ２ | Ｐ３ | Ｐ４ | Ｐ５ | Ｐ６ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 30 | 30 | 15 | 20 | 20 | 18 |
| 深 | 5 | 10 | 5 | 25 | 13 | 15 |

### 出土遺物（第130、131図）

床面から出土した遺物はなく、Ⅱ層下部からＡ層上面にかけて出土したものである。

１～３は縄文土器である。１、２は深鉢の口縁部で、単節斜縄文（ＲＬ）よって施文される。３は口縁部に磨消を施す。４は工字文、５、６は沈線と縄文による施文である。７は壷の口、頚部である。８は浅鉢の底部と推定される。４～８は弥生時代に伴う。

９は土師器の小形甕である。口縁部は短く、外反する。10は石斧である。胴部はわずかにふくらみ、刃縁は丸みをもつ。側縁に敲打痕を残す。

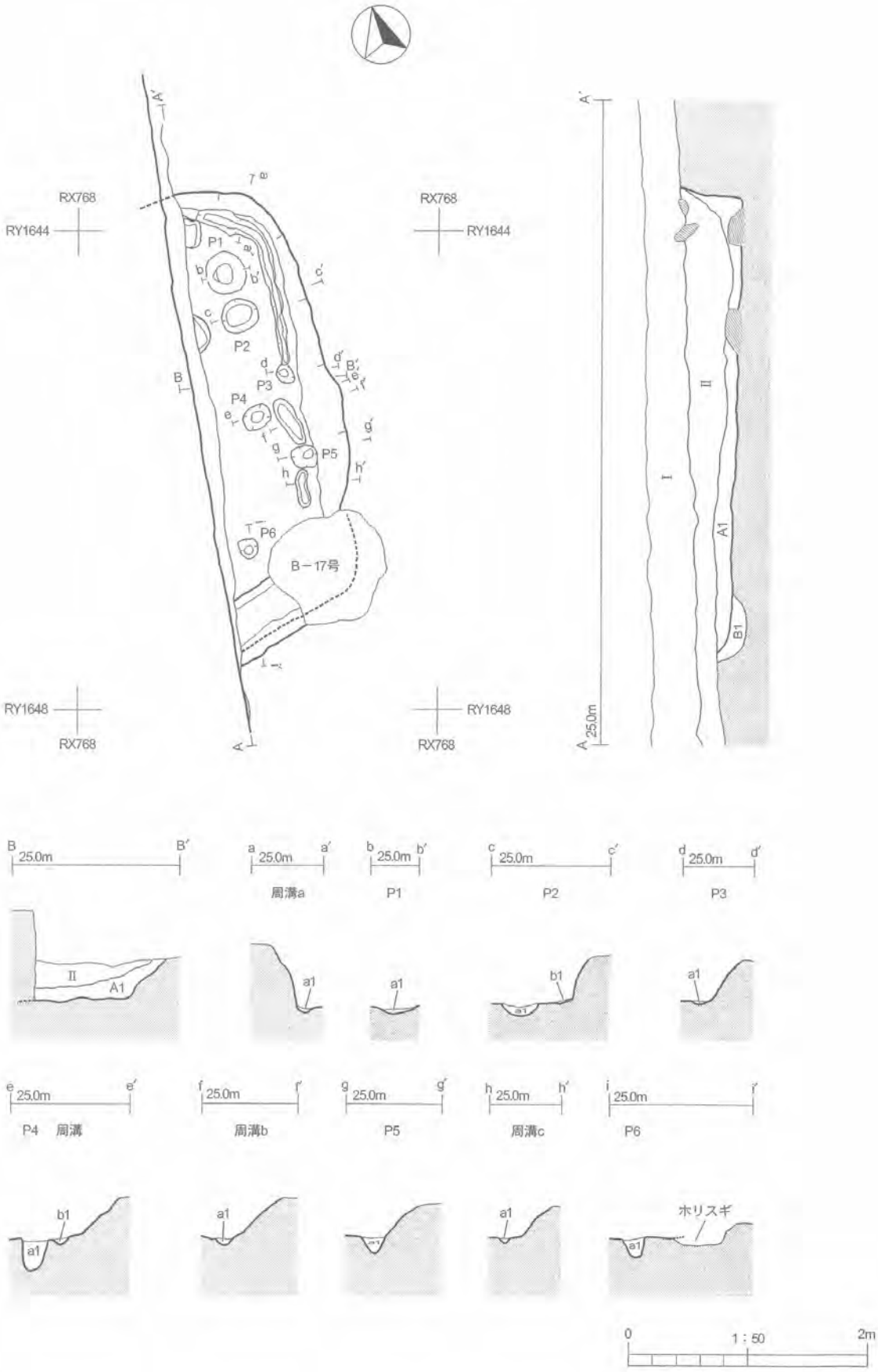
11～13は鉄製品の刀子である。11は木質を残す茎である。長さ9.5cmである。12は刃部と茎の一部である。長さ13.0cm、身幅1.5cmを測る。13は刃部片である。長さ５cm、身幅１cmを測る。

Ｂ－13号住居跡土層観察表

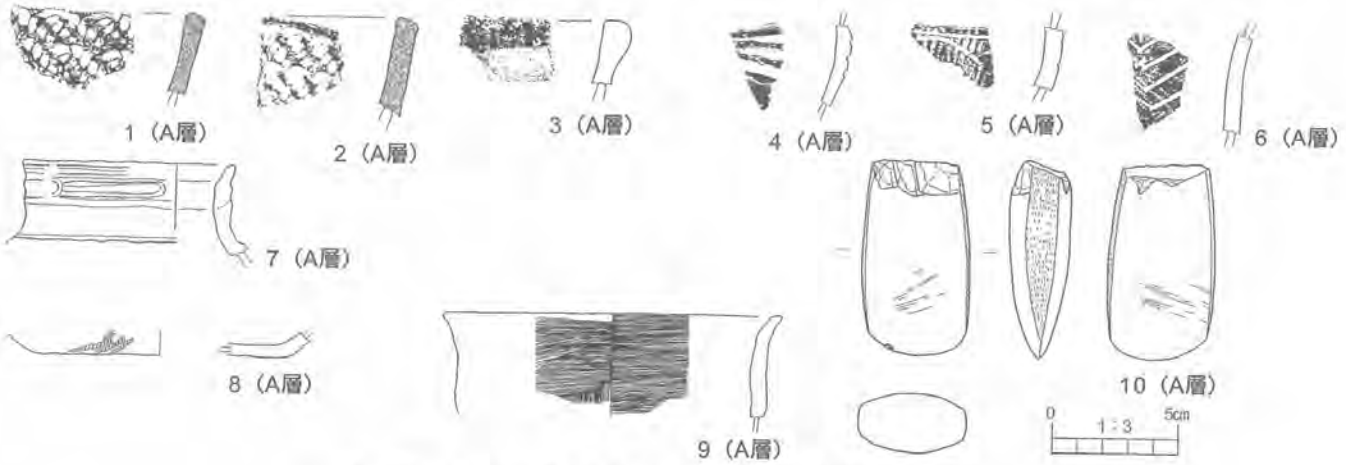
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | | | |
| Ⅱ | | | |
| Ａ１ | 7.5YR2/2 黒褐　砂壌土 | 10YR4/6 5%　砂壌土 | 中，疎　→　炭，焼土，土器少 |
| Ｂ１ | 7.5YR3/4 暗褐　砂壌土 | 7.5YR4/4 10%砂壌土 | 軟，疎 |

Ｂ－13号住居跡柱穴、周溝土層観察表

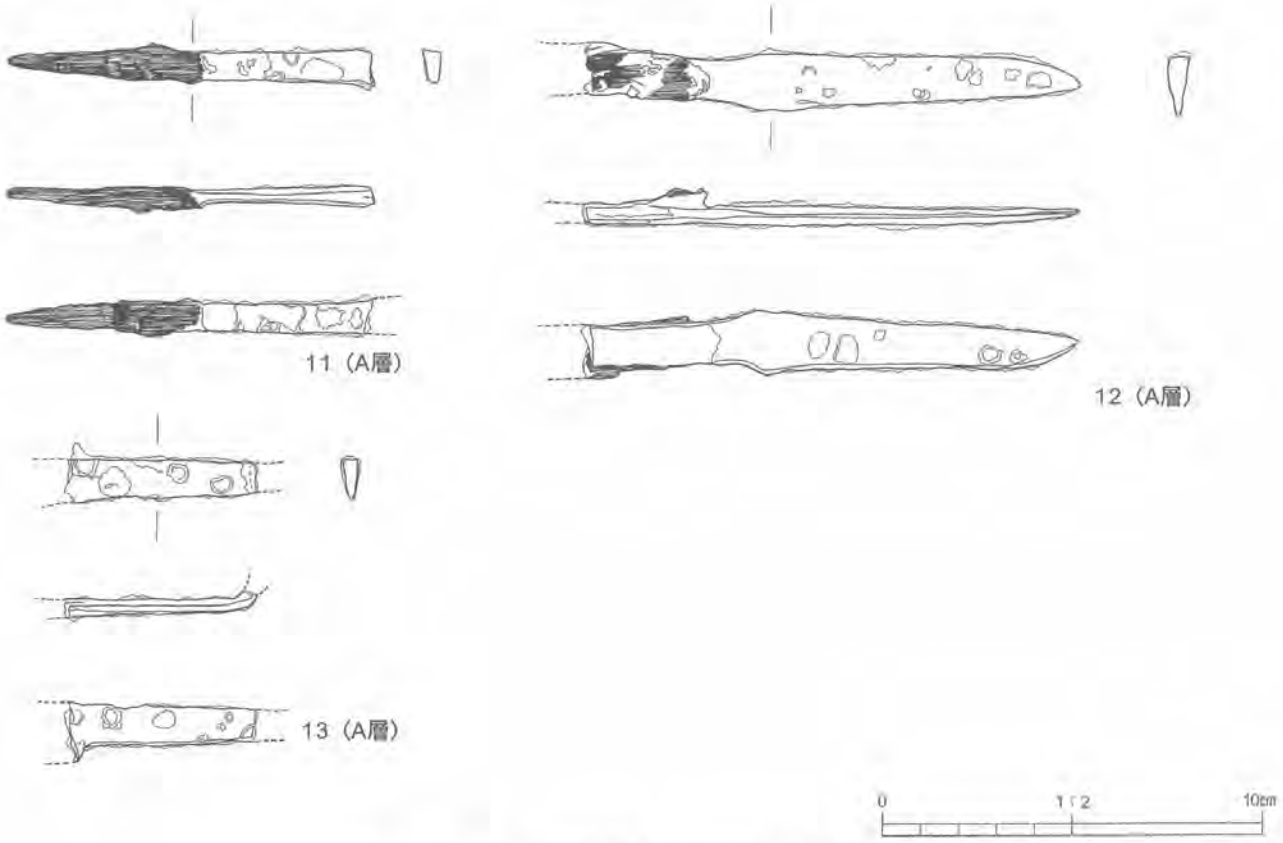
| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| Ｐ１　ａ１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR5/6 5%　砂壌土 | 中，中 |
| Ｐ２　ａ１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 15%　砂壌土 | 中，中 |
| 〃　ｂ１ | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 軟，疎 |
| Ｐ３　ａ１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中，中 |
| Ｐ４　ａ１ | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/6 20%　砂壌土 | 軟，中　→　炭少 |
| 〃　ｂ１ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 軟，疎　→　小礫 |
| Ｐ５　ａ１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR2/3 5%　砂壌土 | 中，中　→　炭少 |
| Ｐ６　ａ１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 5%　砂壌土 | 中，中 |
| 周溝ａ　ａ１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中，中　→　炭少 |
| 周溝ｂ　ａ１ | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 15%　砂壌土 | 中～固，中　→　炭少 |
| 周溝ｃ　ａ１ | 10YR4/6 褐　砂壌土 | | 中～固，中 |




第129図　B－13号竪穴住居跡




第130図　B－13号竪穴住居跡出土遺物（1）

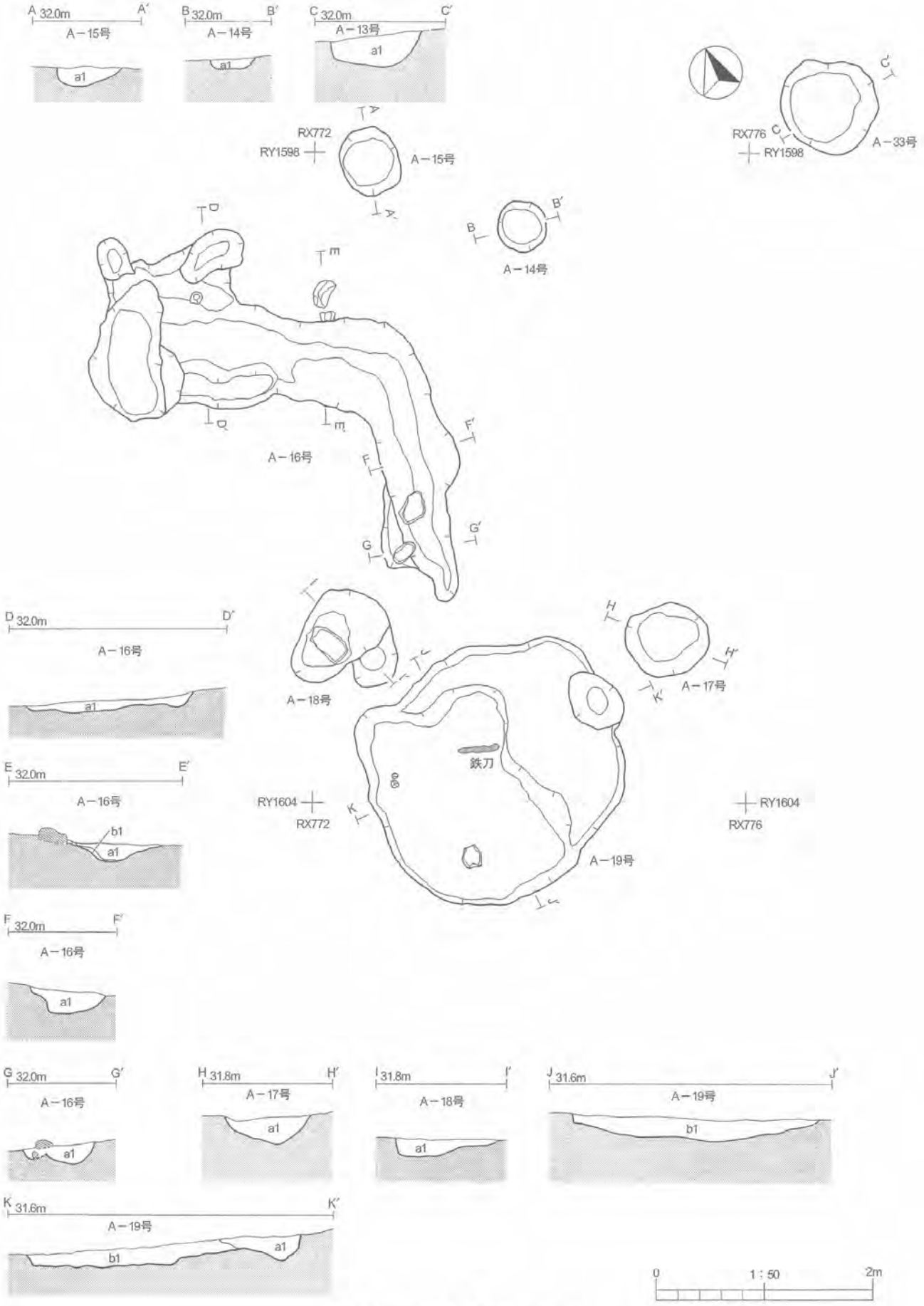



第131図　B－13号竪穴住居跡出土遺物（2）

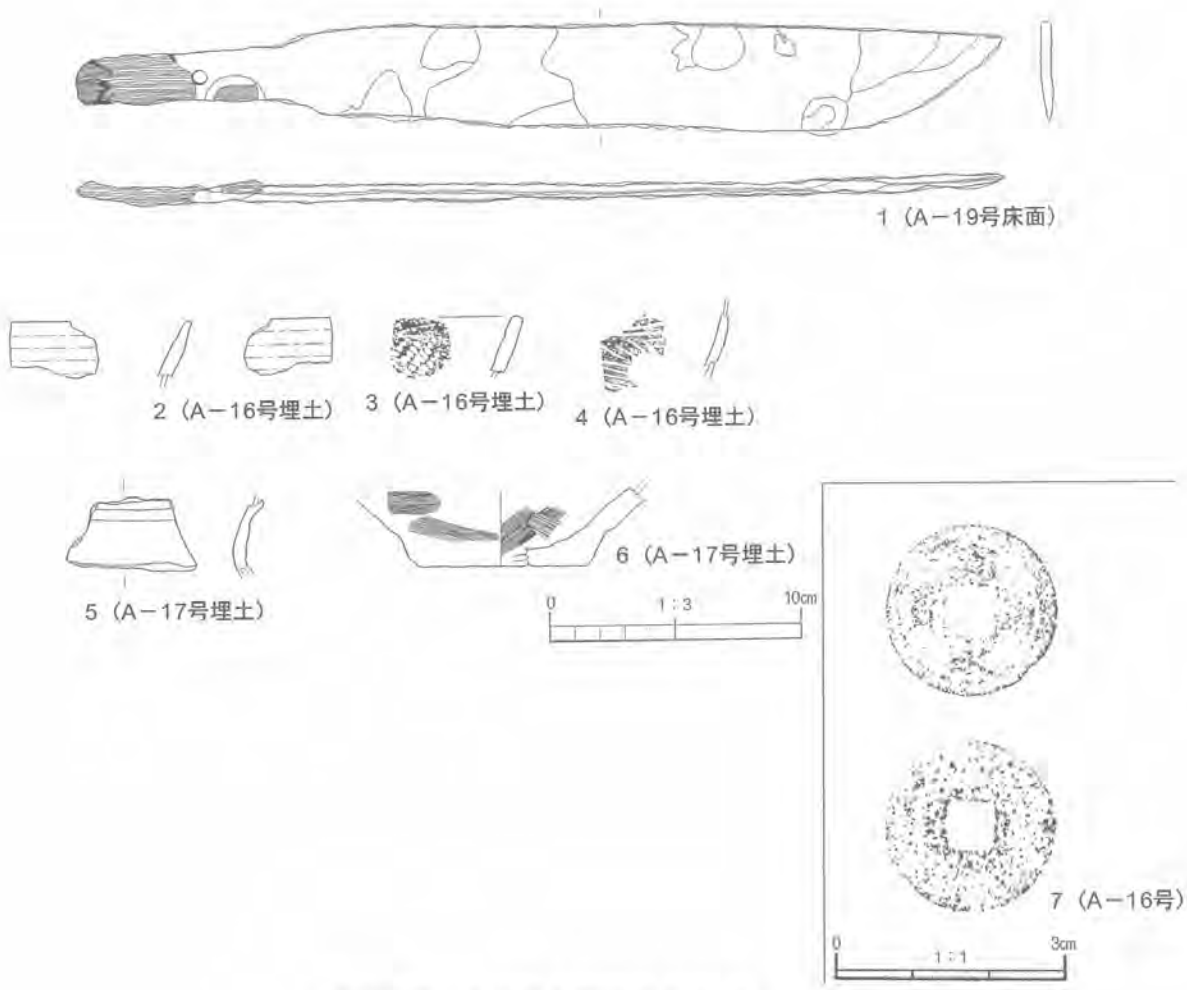
b．土坑跡

A１区土坑跡跡（第132図）

A－11号溝跡の北側で出土した土坑跡である。検出面はすべて地山面である。A－13号土坑跡は、平面形は円形である。遺物は出土していない。A－14号土坑跡は、平面形は円形である。遺物は出土していない。A－15号土坑跡は、平面形は円形である。遺物は出土していないA－16号土坑跡は、L字状の土坑跡である。南側は浅く、撹乱されているが、北側はやや深くなっている。埋土から土器，カクラン部分から銭貨が出土している。幅60cm～1.5m、深さは10cm～20cmである。 A－17号土坑跡は平面形は円形である。埋土から弥生土器、土師器が出土している。




第132図　Ａ１区土坑跡




第133図　A１区土坑跡出土遺物

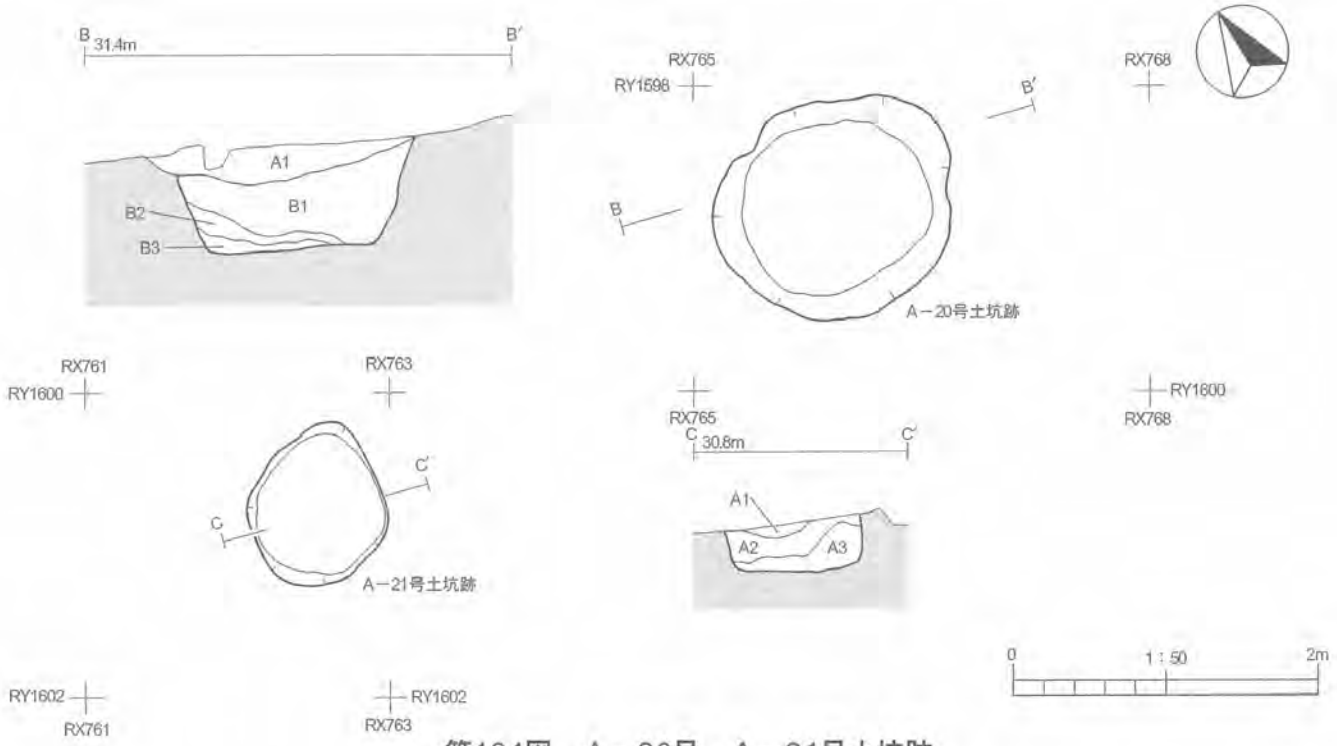
A－18号土坑跡は平面形は不整楕円形である。
遺物は出土していない。A－19号土坑跡は平面形は不整円形である。南側が半分一段深く掘られている。中央部床面から小刀が出土している。

(cm)

| PIT | A－13 | A－14 | A－15 | A－17 | A－18 | A－19 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 90 | 50 | 60×50 | 65 | 100×60 | 225×250 |
| 深 | 30 | 10 | 17 | 25 | 15 | 18 |

**A１区土坑跡出土遺物**（第133図）

１はA－19号土坑から出土した鉄製の小刀である。刃先の部分で身幅が最も広くなる。茎は目釘孔をもち、木部を残している。長さ27.4cm、身幅は4.0cm、茎の長さ9.7cmである。２～４はA－16号から出土した土器である。２はロクロを使用した土師器坏の口縁部、３は縄文を施文した鉢の口縁部、４は刻線と刺突で施文された土器である。５，６はA－17号から出土した土器である。５は弥生の壺型土器の頸部である。６は土師器甕の張出しのない底部である。７はA－16号の撹乱された部分から出土した銅銭「寛永通宝」である。




第134図　A－20号、A－21号土坑跡

A１区土坑跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A－13　a1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中，中 → 炭微 |
| A－14　a1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中，疎 |
| A－15　a1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/6　20%　砂壌土 | 中，疎 → 炭微 |
| A－16　a1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 軟，疎 |
| 〃　b1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 中～固，中 |
| A－17　a1 | 注記なし | 注記なし | 注記なし |
| A－18　a1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/6　5%　砂壌土 | 中，中 → 炭，焼土塊少 |
| A－19　a1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 中，疎 |
| 〃　b1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/6　20%　砂壌土 | 中，中 |

## A２区土坑跡

### A－20号土坑跡（第134図）

＜検出状況＞　A２区の北、斜面際に位置する。検出面は地山面で、A－１号住居跡を切る。

＜形状・規模＞　平面形は円形、規模は1.7m×1.5m、深さ70cmである。

＜埋土＞　あまり締りのない黒褐～褐色土層である。

**出土遺物**（第135図）

１、２は縄文土器である。１は隆線と磨消、２は撚糸文が施されている。３は竹管？のみによる施文で、横方向に沈線をめぐらし、その下に横、斜めに刺突を加えている。６は銅銭で、銭銘は「永楽通宝」である。

第135図　A－20号、A－21号土坑跡出土遺物

**A－21号土坑跡**（第134図）

＜検出状況＞　A－1号住居跡の西側に位置する。検出面は地山面である。

＜形状・規模＞　平面形は不整円形、規模は1.1m×1.0m、深さは30cmである。

＜埋土＞　締りのない暗褐色土である。

**出土遺物**（第135図）

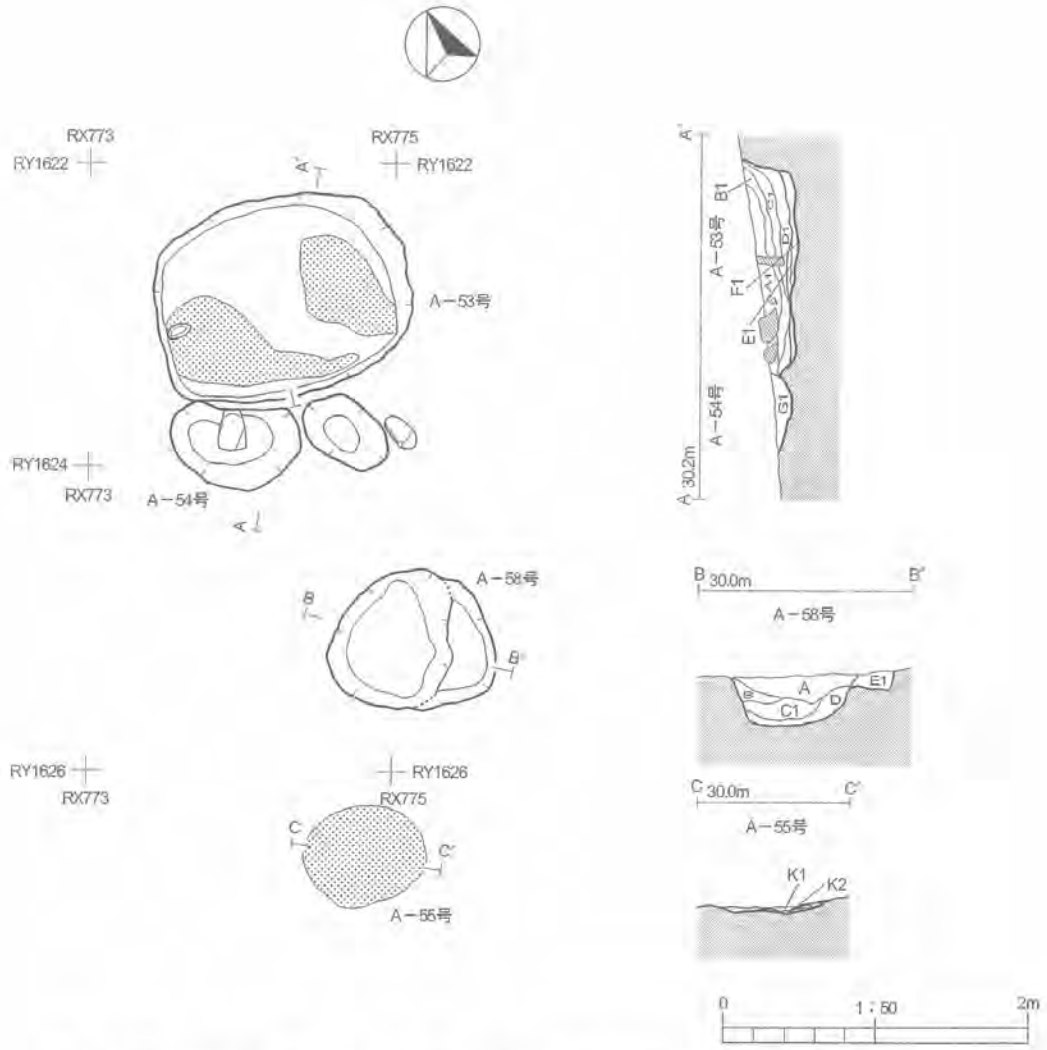
4は土師器甕の外反する口縁部である。5は沈線で施文された縄文土器である。7は上層から出土した板状の鉄製品である。

A－20号土坑跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR4/6 褐（暗）　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土<br>10YR5/6 10%　砂壌土 | 軟、中 → 炭粒少 |
| B1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/4 20%　砂壌土<br>10YR5/6 20%　砂壌土 | 中、疎 |
| B2 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/4 20%　砂壌土<br>10YR5/6 5%　砂壌土 | 中、疎 |
| B3 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/4 5%　砂壌土<br>10YR5/6 20%　砂壌土 | 中、疎 |

A－21号土坑跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR3/3　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、疎 → 土器 |
| A2 | 10YR3/3　暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 15%　砂壌土 | 中、疎 |
| A3 | 10YR3/3　暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 20%　砂壌土 | 中、疎 → 炭少 |




**第136図　A－53号、A－54号、A－58号土坑跡、A－55号焼土遺構**

**A－53号土坑跡**（第136図）

＜検出状況＞　A４の中央部に位置する。地山面からの検出である。南側に２つの小土坑をともなっている。

＜形状・規模＞　平面形は隅丸方形で、規模は長軸1.7m、短軸1.3m、最深部で30cmである。

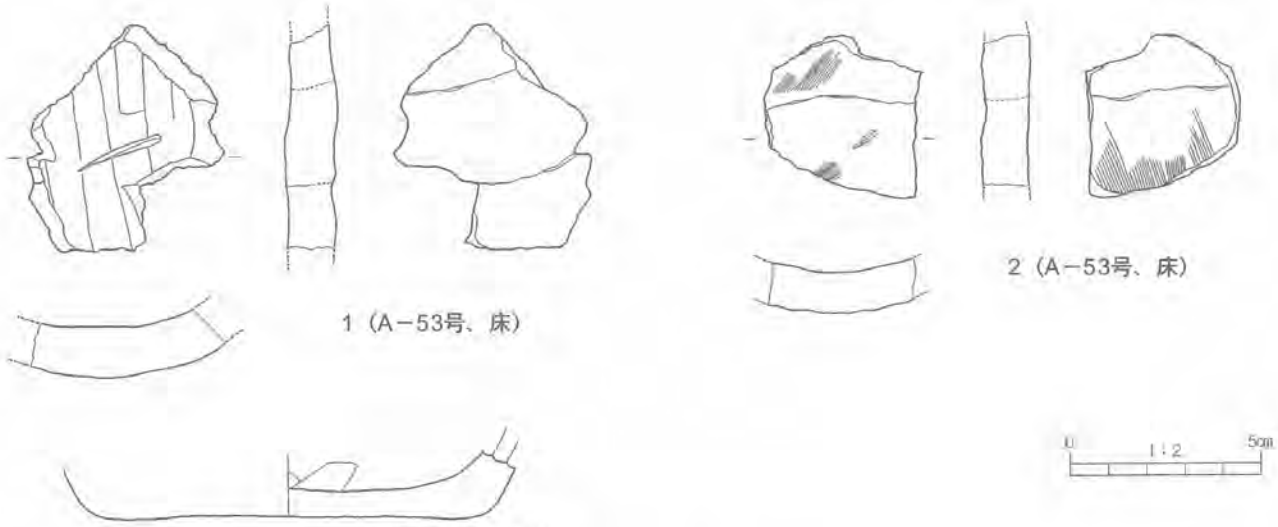
＜埋土＞　褐色土と黄褐色土が交互に堆積し、床面には炭の多く混じった焼土層が広がっていた。焼土層は締りがなく、床も焼けていないので廃棄されたものと考えられる。焼土層からはイネが出土している（巻末「種実遺体の同定」参照）。

**出土遺物**（第137図）

１．２とも焼土層から出土した土製品である。どちらも湾曲しており、筒状の製品とすれば支脚であろうか。

**A－58号土坑跡**（第136図）

＜検出状況＞　A－53号土坑の南に位置する。２つの小土坑の切りあいである。




第137図　A－53号，A－58号土坑跡出土遺物

＜形状・規模＞　新土坑の平面形は不整円形で，規模は約0.9m、深さ0.3mである。

＜埋土＞　A、B層ともやや締りのある黄褐と褐色土である。

出土遺物（第137図）

3はA層から出土した土器の底部である。壷の底部か。

**A－55号焼土遺構**（第136図）

A－3号住居跡とA－4号住居跡の間に位置する。

＜形状・規模＞平面形は楕円形で、規模は80cm×65cm、層厚は2cmと薄い。

＜埋土＞　K1層は下部に炭を多く含み、K2層はやや固めの焼き締った焼土層である。

遺物は出土していない。

**A－56号土坑跡**（第138図）

＜検出状況＞　A－4号住居跡の南に位置し、A－4号住居跡を切っている。検出面は地山面である。

＜形状、規模＞　平面形は不整円形である。規模は径1.1m、深さは30cmを測る。

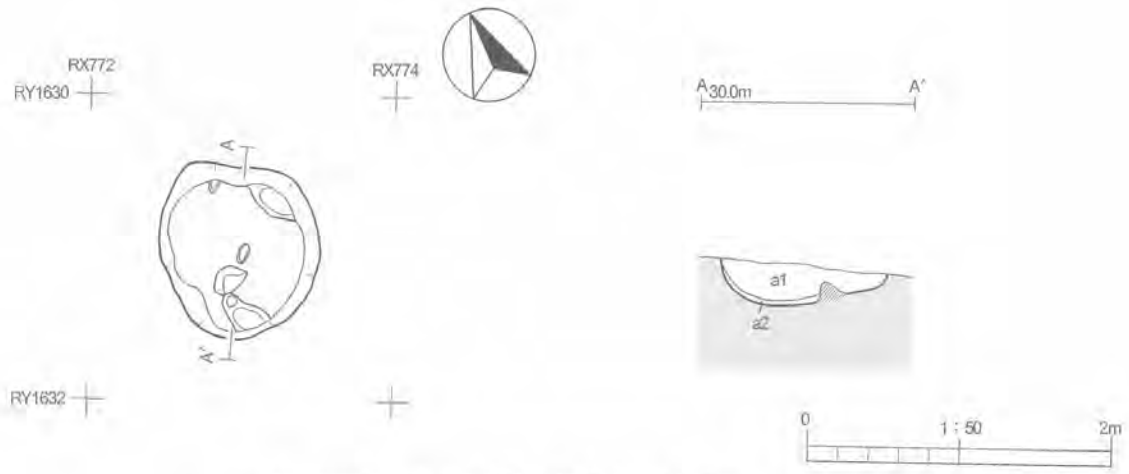
＜埋土＞　炭、焼土粒を多く含んだ暗褐色土である。

**出土遺物**（第139図）

1は土師器甕の口縁部である。2は交互刺突文で施文された甕？の口縁部である。3、4は縦位、横位の沈線のみで施文されたやや厚手の土器である。

**A－21号土坑跡土層観察表**

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| a 1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 → 炭、焼土微 |
| b 1 | 10YR5/8 黄褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| c 1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 → 炭微 |
| d 1 | 10YR5/8 黄褐　砂質埴土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| e 1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土<br>10YR2/3 5%　砂壌土 | 軟、疎 → 焼土粒、炭多 |
| f 1炭層 | 7.5YR2/3 極暗褐　砂壌土 | 7.5YR2/1 20%　砂壌土 | 軟、疎 → 炭、焼土粒多 |




第138図　A－56号土坑跡出土遺物

第139図　A－56号土坑跡出土遺物

A－53号土坑跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土<br>10YR5/6 3%　砂壌土 | 中、中 → 焼土粒少 |
| B1 | 10YR5/8 黄褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中、中 |
| C1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR3/4　10%　砂壌土<br>10YR5/8　2%　　砂壌土 | 中～軟、中 → 炭多 |
| D1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中～固、疎 |
| E1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR5/8 20%　砂壌土 | 中～固、中 |

A－55号焼土遺構土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| K1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 → 下部に炭層 |
| K2 | 5YR4/6 赤褐　砂壌土 | 5YR5/6 10%　砂壌土 | やや固、密 |

A－58号土坑跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土<br>10YR5/6 3%　砂壌土 | 中、中 → 焼土粒少 |
| B1 | 10YR5/8 黄褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中、中 |
| C1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR3/4　10%　砂壌土<br>10YR5/8　2%　　砂壌土 | 中～軟、中 → 炭多 |
| D1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中～固、疎 |
| E1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR5/8 20%　砂壌土 | 中～固、中 |

## B１区土坑跡

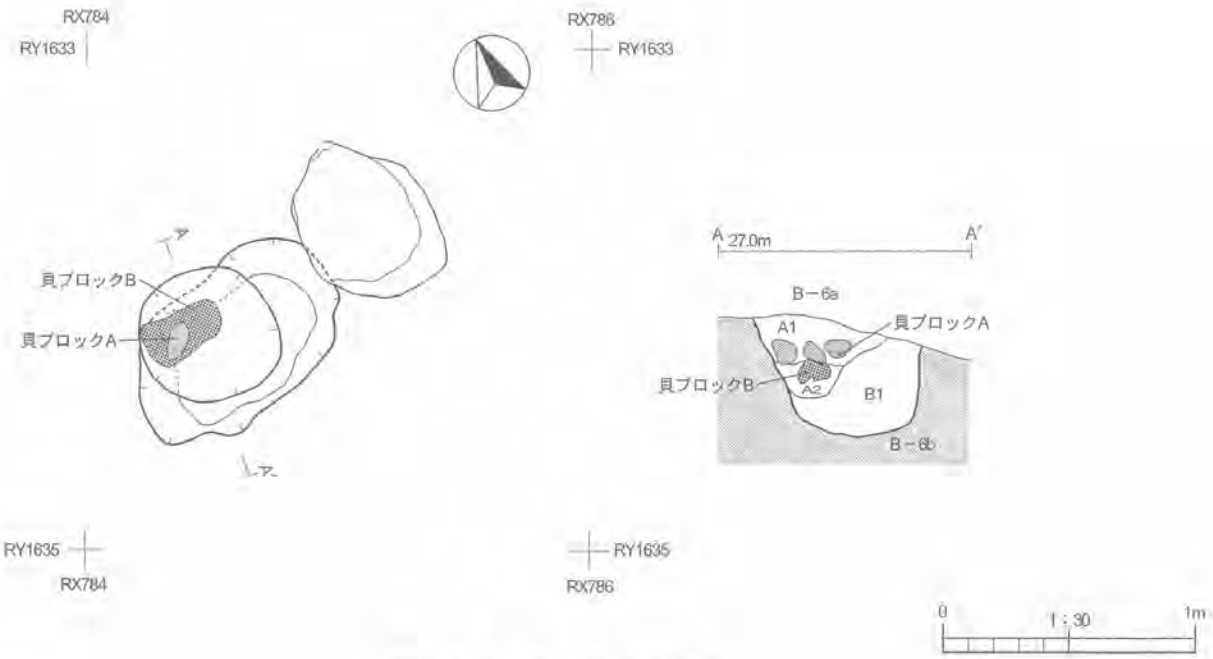
### B－６号土坑跡（第140図）

＜検出状況＞　Ｂ１区の南に位置する。Ｂ－９号道路跡の壁を切る。新旧の土坑が重なっており、新をＢ－６号ａ、旧をＢ－６ｂとする。Ｂ－６号ａからは貝ブロックが出土している。

Ｂ－６号ａ土坑跡

＜形状・規模＞　平面形は不整円形で、径55cm、深さ32cmである。

＜埋土＞　締りのある暗褐色土である。




第140図　B－6号土坑跡

**出土遺物**（第2表）

B－6ａ土坑跡からイガイ、ウバガイ、オオノガイ、チシマフジツボが出土している。

**第2表　B－6号土坑跡出土動物遺存体**

| | イガイ | | ウバガイ | | オオノガイ | | チシマフジツボ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | L | R | L | R | L | R | 殻板 |
| B－6号土坑貝ブロックA | | 1 | | | | | 1 |
| B－6号土坑貝ブロックB | 4 | 5 | 7 | 6 | | 2 | 2 |
| B－6号土坑最下層 | | | | | | | 5 |

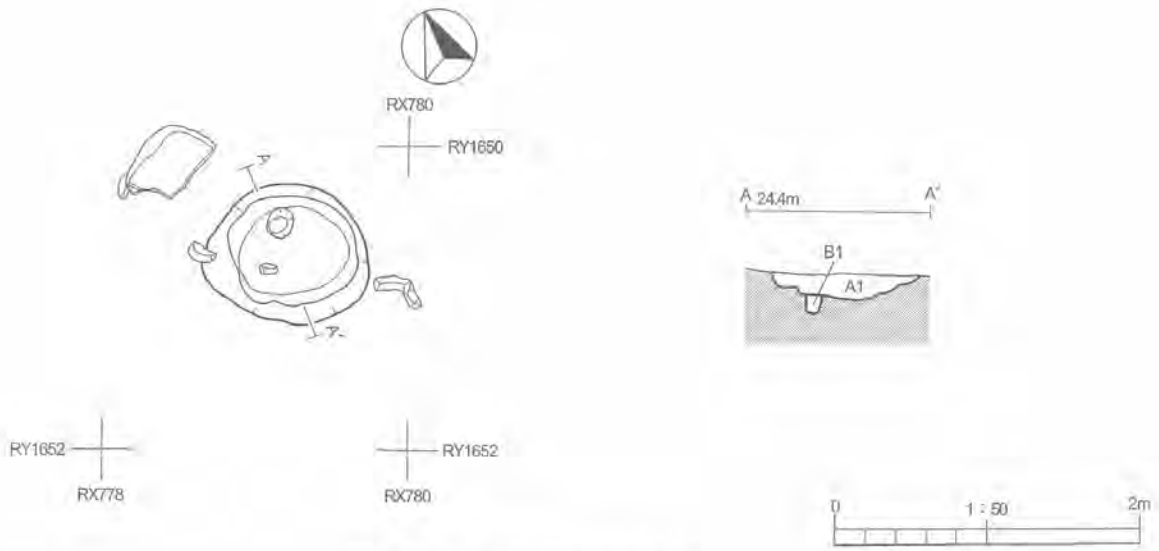
**B２区土坑跡**

**B－16号土坑跡**（第141図）

＜検出状況＞　B２区の南東部に位置する。検出面はⅡ層下面である。

＜形状・規模＞　平面形は不整円形、規模は径1.0m、深さ18cmである。

＜埋土＞　A層は、焼土、炭を多く含む暗褐色土、B層は小土坑の埋土で、黒褐色土である。




第141図　Ｂ－16号土坑跡

第142図　Ｂ－16号土坑跡出土遺物

**出土遺物**（第142図）

１は土師器甕の底部、張出しはなく、木葉痕をもつ。２は平行沈線と縄文で施文された甕の体部片である。

**Ｂ－17号土坑跡**（第143図）

＜検出状況＞　Ｂ２区の西、中央部に位置する。Ｂ－13号住居跡を切る。床面から焼土遺構を検出する。

＜形状・規模＞　平面形は不整円形、規模は径約1.0m、深さ30cmである。

＜埋土＞　Ａ、Ｂ層は軟らかく締りのない堆積層で、Ｃ層が固く焼き締った焼土層である。焼土層の厚さは4.0cmである。

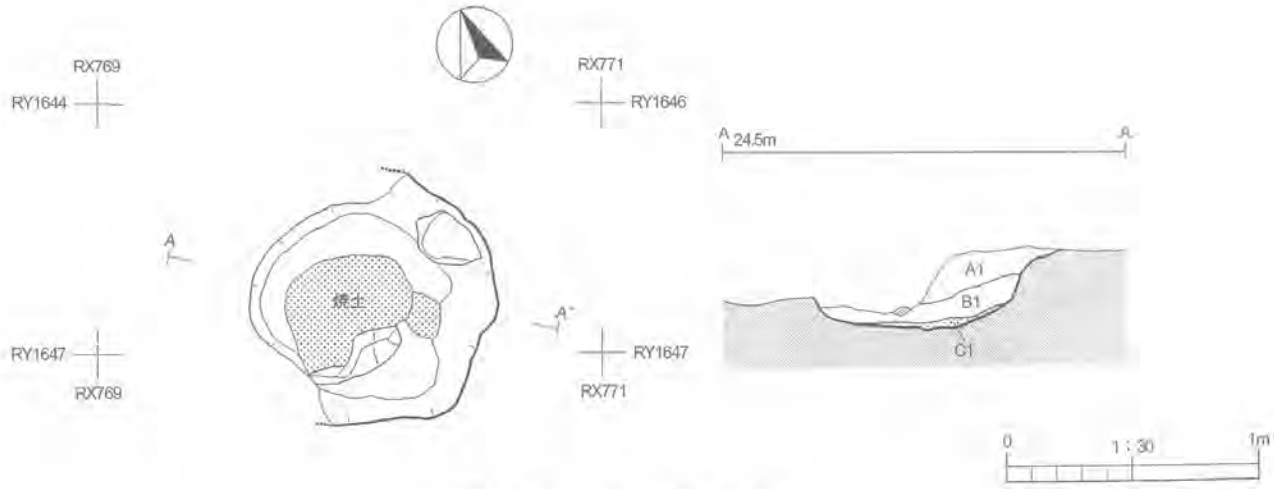
遺物は出土していない。

Ｂ－16号土坑跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A 1 | 10YR2/1 黒　砂壌土 | 5YR3/4 20%　砂壌土<br>7.5YR2/3 5%　砂壌土 | 軟、中 → 焼土、炭多 |
| B 1 | 7.5YR2/2 黒褐　砂壌土 | 7.5YR2/1 5%　砂壌土 | 軟、中 → 炭多 |

Ｂ－17号土坑跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A 1 | 7.5YR2/3 極暗褐　砂壌土 | 10YR2/3 10%　砂壌土 | 中、疎 → 焼土粒微 |
| B 1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 7.5YR3/4 20%　砂壌土 | 軟、疎 → 焼土多、炭少 |
| C 1 | 2.5YR4/8 赤褐　砂壌土 | 5YR4/6 10%　砂壌土<br>10YR7/6 5%　砂壌土 | 固、密 |




第143図　B－17号土坑跡

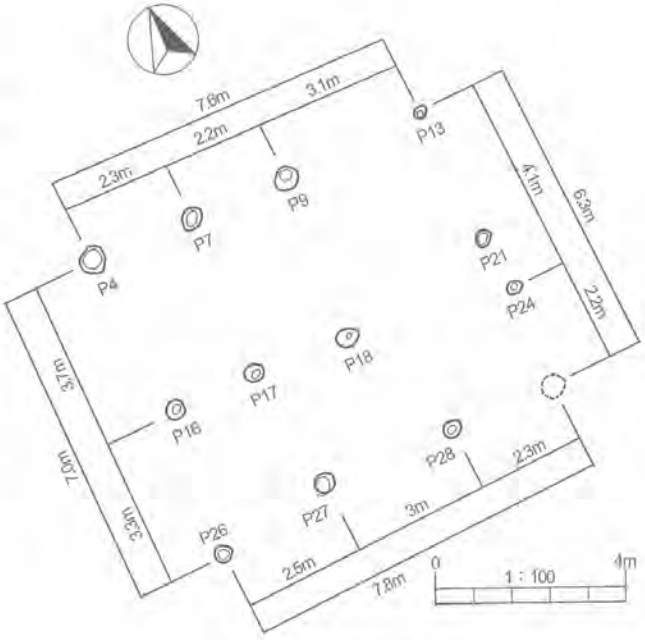
c．掘立柱建物跡

A区掘立柱建物跡（第144図）

＜検出状況＞　A区では、中央部を東西方向に延びる４本の溝が検出されているが、その溝の間に20基の土坑と１基の焼土遺構が検出している。北側の溝跡から南の一部が削平されていて、建物跡の位置するところは平坦面をなしている。土坑はいずれも地山面からの検出である。

A－２号住居跡を切っている。

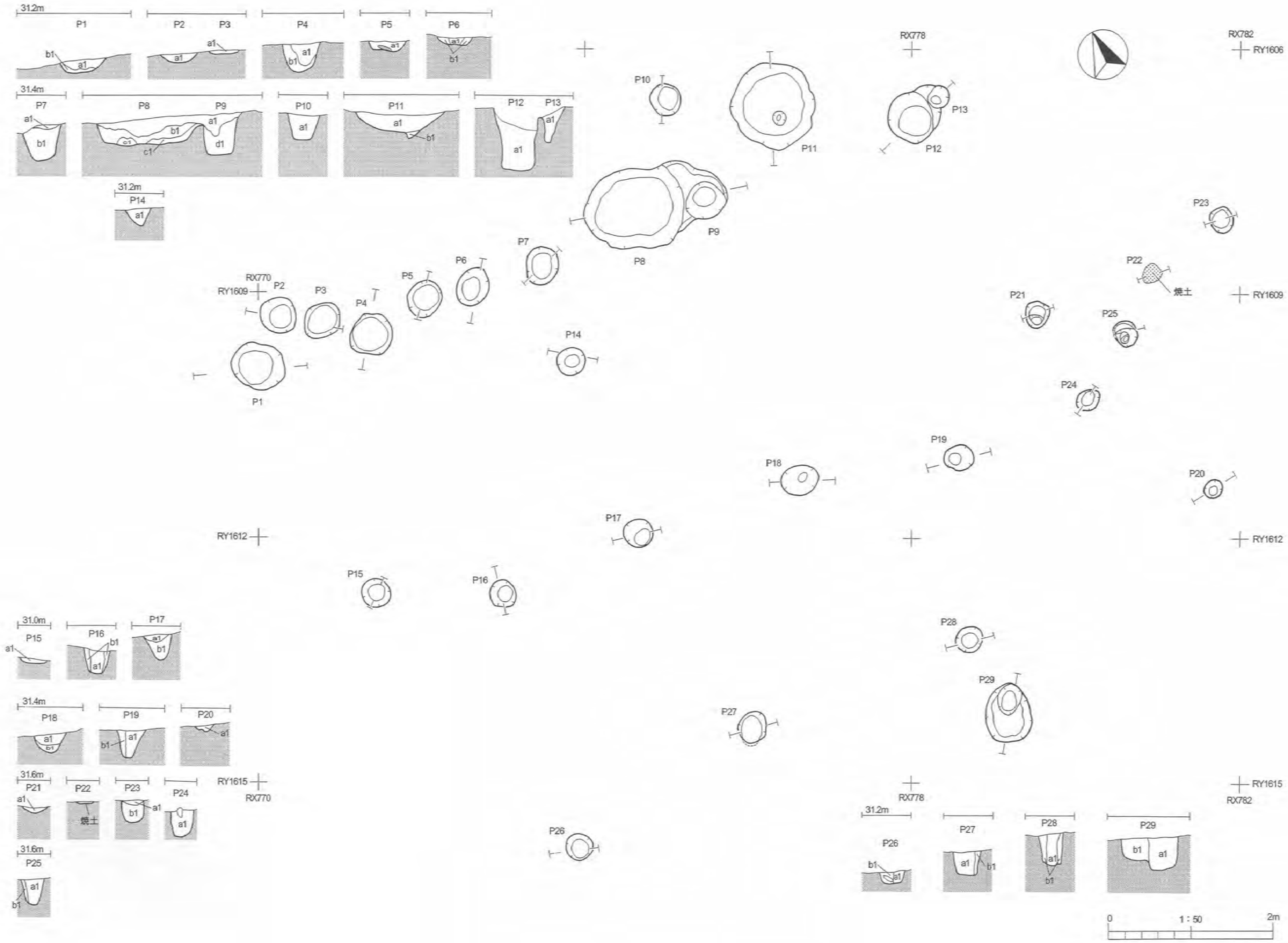
＜形状・規模＞（挿図１）　建物は、南北の溝に平行して立つ。東西桁行7.6m（25.3尺）３間、南北梁行7.0m（23.3尺）２間の規模をもつ方形の建物である。



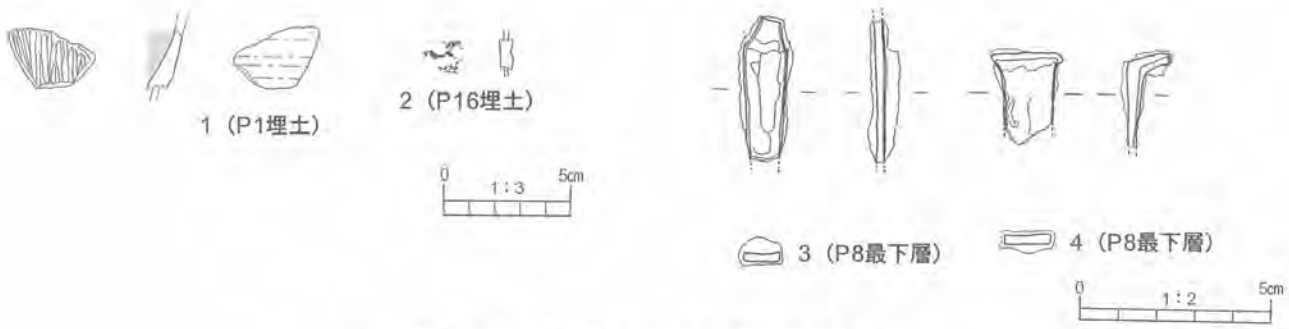

挿図１　建物跡

桁行柱間は、北側柱（Ｐ４～Ｐ13）では西から2.3m（Ｐ４～Ｐ７）、2.2m（Ｐ７～Ｐ９）、3.1m（Ｐ９～Ｐ13）を測り、それぞれ7.6尺、7.3尺、10.3尺を示す。南側柱（Ｐ26～Ｐ28）では西から2.5m（Ｐ26～Ｐ27）、３m（Ｐ27～Ｐ28）を測り、それぞれ8.3尺、10尺を示す。

梁行柱間は、西側柱（Ｐ14～Ｐ26）では北から3.7m、3.3mを測り、それぞれ12.3尺、11尺を示す。東側柱（Ｐ13～Ｐ24）では、4.1mを測り、13.6尺を示す。




第144図　A区中央部土坑群




第145図　A区中央部土坑群出土遺物

建物跡の東に位置する焼土遺構は、平面形は不整円形で、規模は27cm×22cmである。K１層は焼土層で、層厚は約２cmである。K１層からは微量の粒状鉄滓が出土している。

**A区掘立柱建物跡出土遺物**（第145図）

１はP１から出土したロクロ使用の土師器の坏である。内黒処理されている。２はP16から出土した土器で、交互刺突と縄文で施文される。３、４はP８から出土した鉄製品である。３は薄い板状の製品である。刀子の茎か。４は船釘の頭部と思われるが、やや薄い。

(cm)

| PIT | P１ | P２ | P３ | P４ | P５ | P６ | P７ | P８ | P９ | P10 | P11 | P12 | P13 | P14 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 55 | 45 | 35 | 45 | 45 | 42 | 45 | 125×105 | 40 | 40 | 105 | 50 | 25 | 30 |
| 深 | 15 | 10 | 5 | 35 | 12 | 10 | 45 | 35 | 50 | 30 | 20 | 75 | 45 | 20 |

(cm)

| PIT | P15 | P16 | P17 | P18 | P19 | P20 | P21 | P22 | P24 | P25 | P26 | P27 | P28 | P29 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 径 | 30 | 30 | 35 | 40 | 35 | 20 | 30 | 25 | 28 | 30 | 30 | 35 | 30 | (31) |
| 深 | 5 | 30 | 30 | 23 | 35 | 5 | 6 | 28 | 34 | 30 | 15 | 30 | 40 | 27 |

**A区中央部土坑群土層観察表**

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P１　a１ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6　5%　砂壌土 | 中、中　→　土器片、炭微 |
| P１　b１ | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR5/6 15%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P２　a１ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 5%　砂壌土 | 中~固、中 |
| P３　a１ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6　5%　砂壌土 | 中、中 |
| P４　a１ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6　3%　砂壌土 | 中、疎 |
| P４　b１ | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、疎 |
| P５　a１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6　5%　砂壌土 | 中、中　→　炭少 |
| P６　a１ | 10YR3/3 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| P６　b１ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中、中　→　炭少 |
| P７　a１ | 19YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 固、中　→　炭微 |
| P７　b１ | 10YR5/8　黄褐　埴壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 固、中　→　炭微 |
| P８　a１ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 15%　砂壌土 | 固、密　→　炭多 |
| P８　a２ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中、疎　→　炭少 |
| P８　b１ | 10YR5/6 黄褐　埴壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、中　→　炭微 |
| P８　c１ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 5%　砂壌土<br>10YR3/4 5%　砂壌土 | 中、疎　→　鉄製品？炭少 |
| P９　d１ | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6　5%　砂壌 | 中、疎　→　炭多 |
| P11　a１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 固、中 |
| P11　a１ | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR5/6 5%　砂壌土 | 中、疎　→　炭少 |

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| P11　b1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/4 10%　砂壌土 | 中、密 |
| P12 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR5/8 10%　砂壌土 | 中、密　→　炭多 |
| P13 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中、疎　→　土師器片カメ |
| P14　a1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/3 5%　砂壌土 | 固、中 |
| P15　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 15%　砂壌土 | 中～固、中～密　→　炭少 |
| P16　a1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR6/4 20%　砂壌土<br>10YR5/6 10%　砂壌土 | 軟、疎　→　縄文土器 |
| P16　b1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 中、疎 |
| P16　c1（周溝） | 10YR4/4 褐（明）砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中～固、中　→土師片 |
| P17　a1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 固、中～密　→　炭微 |
| P17　b1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中、疎　→　炭少 |
| P18　a1 | 10YR5/6 黄褐　埴壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中～固、密　→　炭微 |
| P18　b1 | 10YR4/6 褐（明）砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、疎　→　炭微 |
| P19　b1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 中、中 |
| P19　a1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中～固、中 |
| P20　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中、中 |
| P21　a1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 固、密　→　炭、焼土微 |
| P22　焼土　K1 | 5YR4/8 赤褐　砂壌土 | 5YR3/6 10%　砂壌土 | 固、密 |
| P22　K2 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10％　砂壌土 | 中、中 |
| P23　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 5%　砂壌土 | 固、中～密 |
| P23　b1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 5YR4/6 20%　砂壌土 | 固、疎　→　炭少 |
| P24　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 20%　砂壌土 | 固、中～疎　→　礫 |
| P25　a1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 固、密　→　焼土粒多 |
| P25　b1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中、密 |
| P26　a1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR4/6 5%　砂壌土 | 中～軟、疎 |
| P26　b1 | 10YR4/4 褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土<br>10YR5/6 3%　砂壌土 | 中、中　→　礫 |
| P27　a1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 10%　砂壌土 | 中、中～密　→　炭小 |
| P27　b1 | 10YR5/6 黄褐　埴壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 中、中～密 |
| P28　a1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR3/4 5%　砂壌土 | 中～固、中　→　焼土、炭微 |
| P28　b1 | 10YR4/6 褐（明）砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 中、中 |
| P29　a1 | 10YR4/6 褐（暗）砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土 | 固、中～密　→　炭微 |
| P29　b1 | 10YR4/6 褐（明）砂壌土 | 10YR5/6 20%　砂壌土 | 中～固、中　→　炭微 |

### d．溝跡

**A－9号溝跡**（第146図）

＜検出状況＞　A区の北端に位置する規模の大きな溝である。A1区からA2区へ東西方向に延びる。北側の急斜面と南側の平坦部を区画している。

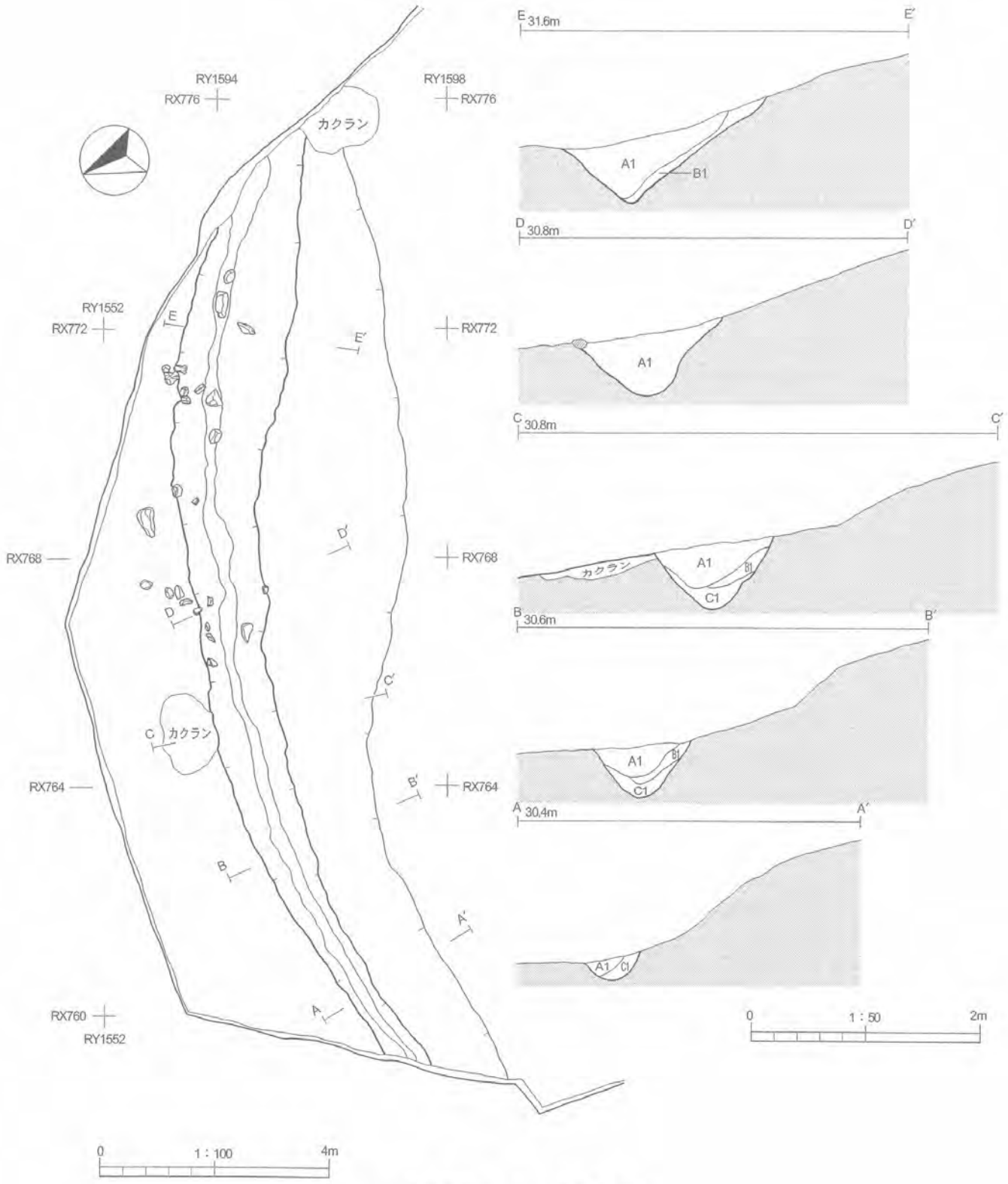
＜形状・規模＞　東の勾配の高いほうにむかって幅広く、深くなるように掘られている。北側内湾して北側に張出す。掘り方は、一部V字状に掘り込んでいるが、全体的にはそれほど鋭角的ではない。規模は、幅は西側で50cm、東側で1.5mである。深さは検出面から東側で50cm、西側で20cmであるが、南の平坦面からの落差は1.3m前後とほぼ一定している。

＜埋土＞　3層に分れる。A層は黒褐色土、B層が黄褐色土、C層は褐色土で、B，C層は締りのある土層である。

**出土遺物**（第147図）

図化できたのは3点だけであったが、土師器の破片が中～下層から22点出土している。1は縄文と沈線、2は沈線に交互刺突文、3は撚糸文による施文である。

＜時期＞　平安時代


RY1594
RX776
RY1598
RX776
カクラン
RY1552
RX772
RX772
RX768
RX768
カクラン
RX764
RX764
RX760
RY1552
E
E′
D
D′
C
C′
B
B′
A
A′
E 31.6m E′
A1
B1
D 30.8m D′
A1
C 30.8m C′
カクラン
A1
B1
C1
B 30.6m B′
A1
B1
C1
A 30.4m A′
A1
C1
0 1：100 4m
0 1：50 2m

第146図　A－9号溝跡

第147図　A－9号溝跡出土遺物

A－9号溝跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR2/3 黒褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 軟、疎　→　土器片 |
| B1 | 10YR5/8 黄褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 軟、疎 |
| C1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土<br>10YR2/3 3%　砂壌土 | 軟、疎 |

**A－10号溝跡**（第148図）

＜検出状況＞　A－10号溝跡は、A1区の南に位置し、検出面は地山面である。点線で示したのは、A－10号の溝の周辺部の鉄錆を含んだ土層の広がりである。一部後述するA－11号溝跡と重複している。延長方向は、東側に位置するA－12号溝跡の方向に向いており、確認できなかったが、同一の溝である可能性は大きい。

＜形状・規模＞　東西に直線的に延びている。全長4.0m、最大幅60cm、深さ10cmである。

＜埋土＞　A，B層は、焼土、炭、鉄錆など含む。C，D層は、上、下面に鉄錆を多量に含み、点線で示した範囲に分布する。C，D層はA－11号溝跡の埋土である。この堆積状況から、点線の範囲にもう一つの浅い溝があったことが推定される。

**出土遺物**（第153図）

遺物は、A－11号溝跡出土遺物と一括して載せた1点だけである。13が床面から出土した砥石である。6面を使用して、擦痕、刻線を残す。

**A－11号溝跡**（第149図）

＜検出状況＞　A1区の南に位置し、検出面は地山面である。A－10号溝跡と一部重複する。

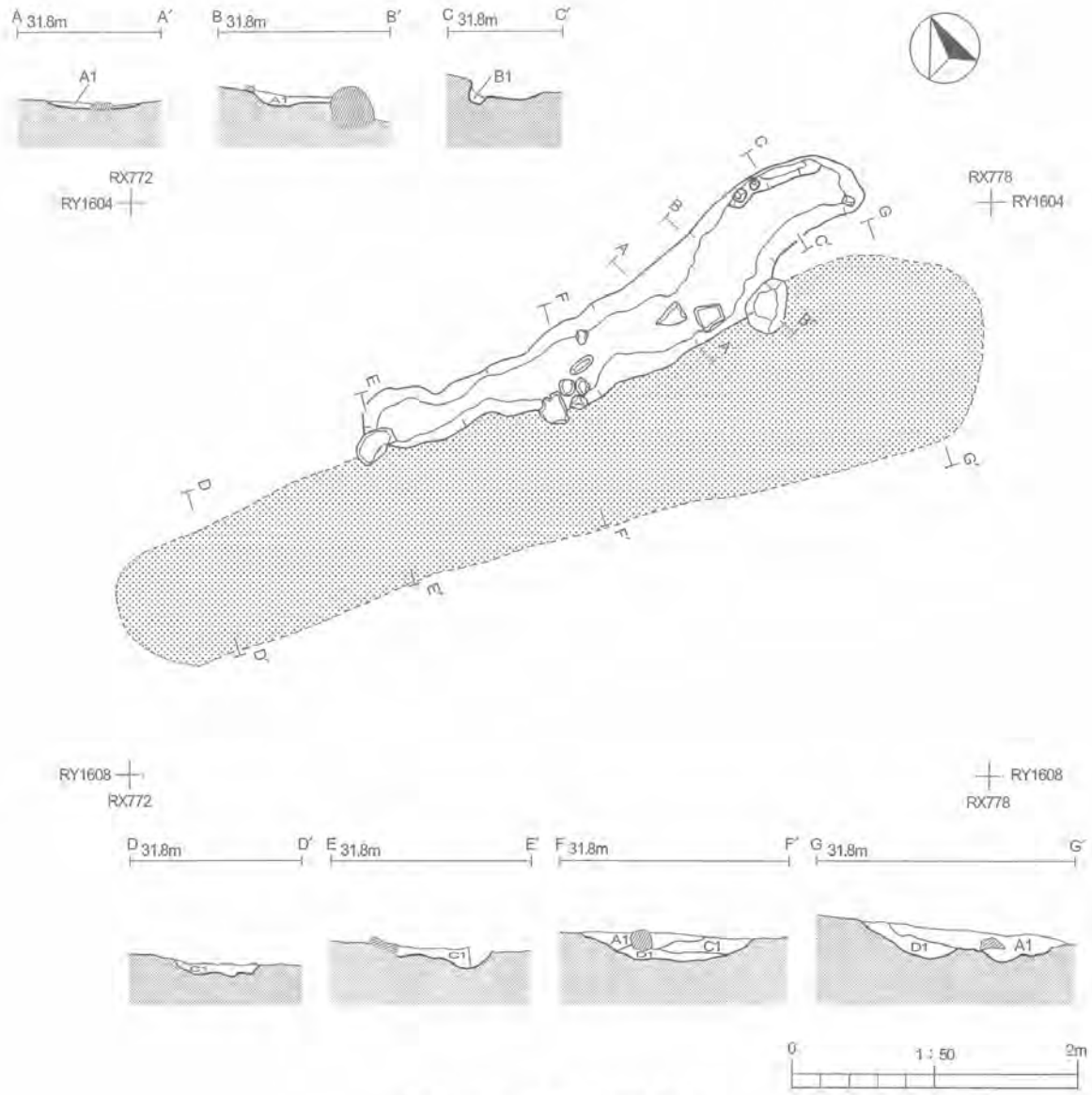
＜形状・規模＞　わずかに北側に張出して、内湾しながら東西にのびる。尾根の勾配を下るにつれて浅く、狭くなり、尾根の中央部で切れる。検出延長14m、最大幅1.8m、最深部約40cmである。

＜埋土＞　埋土は大きく2つに大別される。前述した鉄錆を多量に含むC、D層とF～H層である。F～H層が埋った段階で浅い溝として使用されていたと思われる。それはC，D層の堆積範囲ににあたり、第148図の点線で示した形状の溝と想定される。

床面から出土した炭塊には微量の鍛造剥片と粒状鉄滓が含まれていた。

**出土遺物**（第151～153図）

1～4は土師器の甕である。1～3はいずれも短い口縁部である。4は張出しのない底部である。5～7は縄文土器である。隆沈線で施文された鉢の口縁部である。8は交互刺突文を施された弥生土器である。10は鉄製品で、刀子の切っ先である。12は石皿である。14は砥石である。4面を使用し、擦痕を残している。



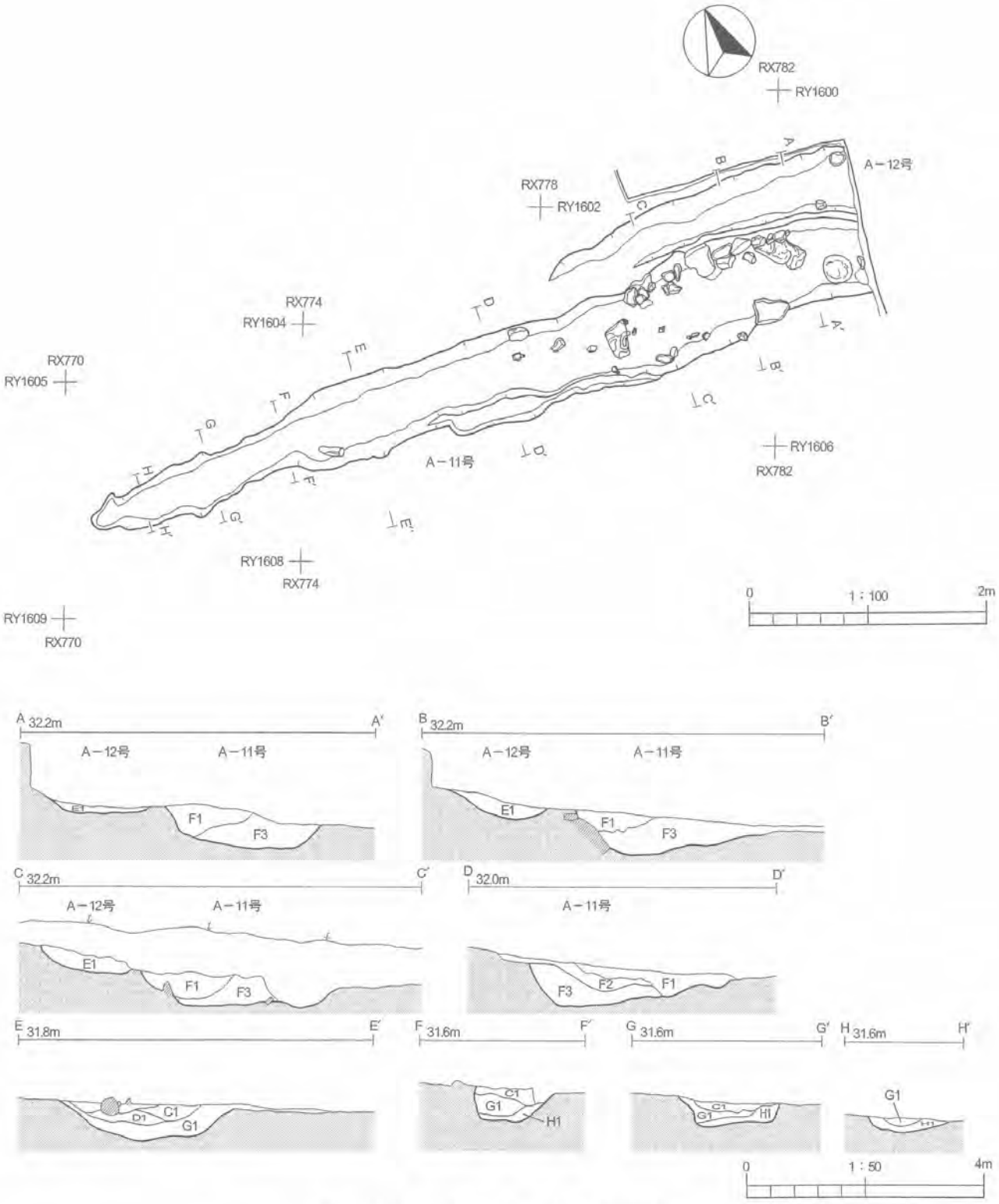

第148図　A－10号溝跡

**A－12号溝跡**（第149図）

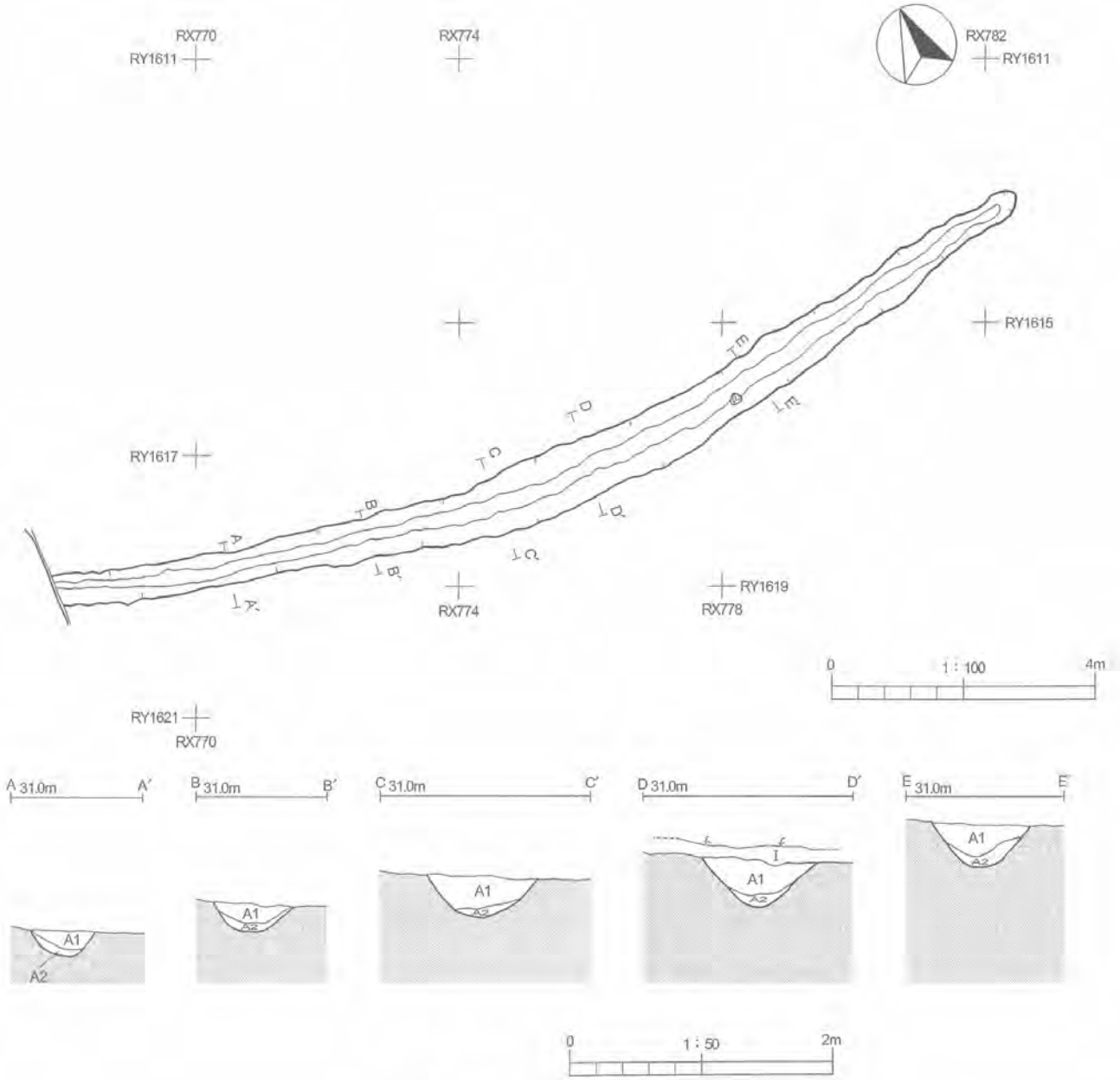
＜検出状況＞　A－11号溝の北側に位置し、検出面は地山面である。A－11号との新旧関係は明確にできなかったが、前述したA－10号溝へ続く可能性は大きい。

＜形状・規模＞　北側にわずかに張出し、東にむかって広く、深くなっていく。検出延長5.3m、最大幅1.0m、最深部15cmである。

＜埋土＞　暗褐色土層である。




第149図　A－11号、A－12号溝跡




第150図　Ａ－13号溝跡

**出土遺物**（第151図）

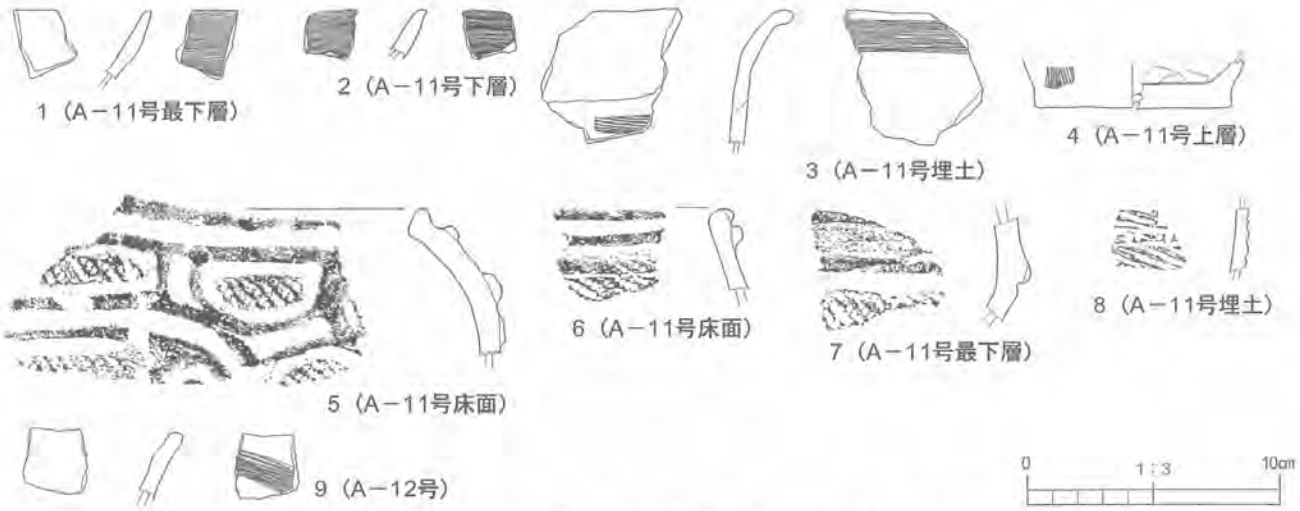
土器が１点出土している。９は土師器甕の口縁部である。

**Ａ－13号溝跡**（第150図）

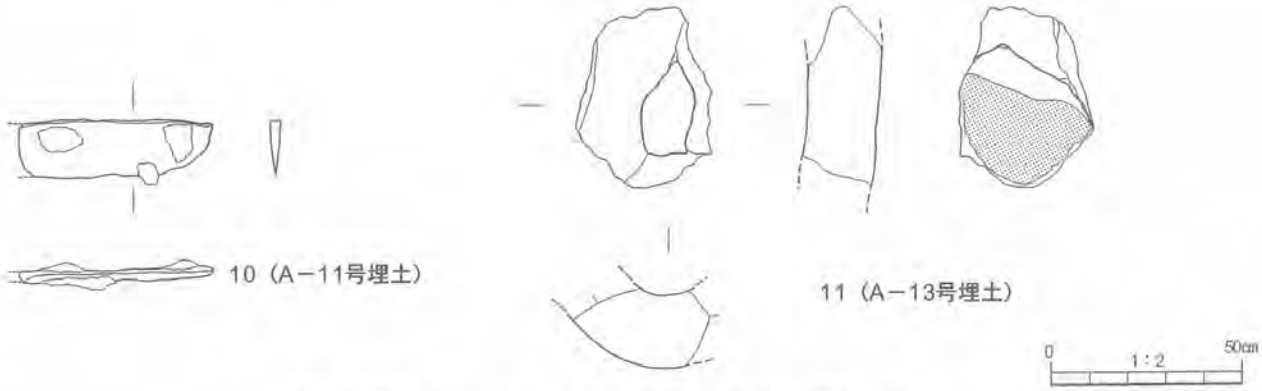
＜検出状況＞　Ａ区の中央部をＡ４区からＡ３区にのびる。検出面は地山面である。

＜形状・規模＞　北側に弓状に張出して東西にのびる。掘り方は、張出した部分が最も広く深くなり、両端で狭く浅くなる。検出延長16m、最大幅1.0m、最深部35cmである。

＜埋土＞　締った褐～黄褐色土である。




第151図　A－11号、A－12号溝跡出土遺物（1）




第152図　A－11号、A－13号溝跡出土遺物（2）

**出土遺物**（第152図）

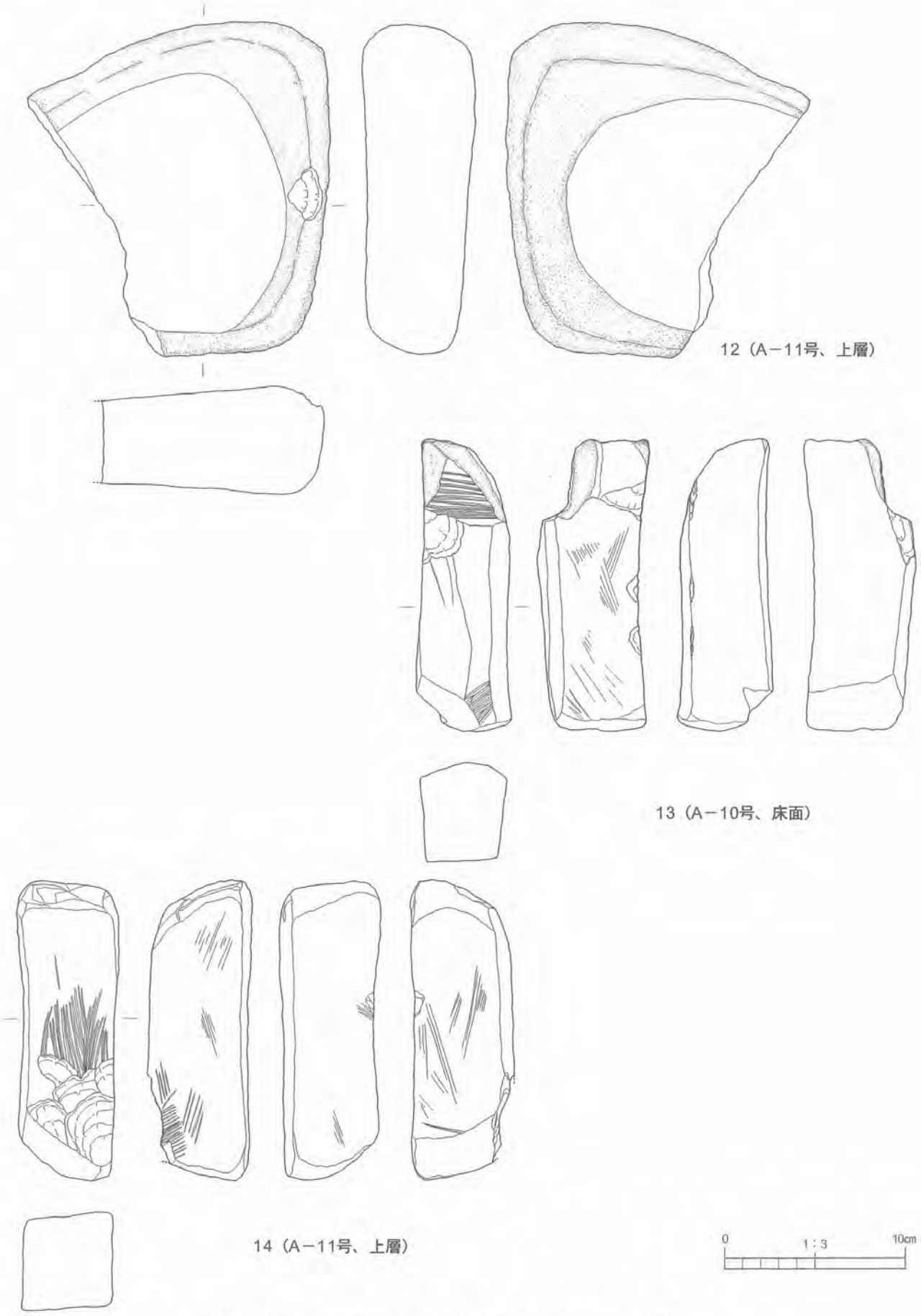
土製品が1点出土している。11はフイゴの羽口である。灰色に変色した部分を網点で示した。

A－10号、A－11号、A－12号溝跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　5%　砂壌土 | 中～固、中 → 炭、焼土粒少 |
| B1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中、中 →床面に錆、炭、焼土塊少 |
| C1 | 10YR3/4　暗褐（明）砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中、中 → 錆、土器片、礫 |
| D1 | 10YR4/4　褐（明）砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中～固、疎 →上下面に錆、錆を含む |
| F1 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR4/6　10%　砂壌土 | 中、中 |
| F2 | 10YR4/6　褐　砂壌土 | 10YR5/6　10%　砂壌土 | 中、中 → 炭少 |
| F3 | 10YR4/4　褐　砂壌土 | 10YR2/3　10%　砂壌土 | 軟、疎 → 土器片 |
| G1 | 10YR5/6　黄褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 中、中 |
| H1 | 10YR3/4　暗褐　砂壌土 | 10YR4/4　10%　砂壌土 | 中～軟、中 → 炭少 |

A－13号溝跡土層観察表

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 表土 | 10YR5/4 にぶい黄褐 砂壌土 | 10YR4/4 10%　砂壌土 | 中、疎 |
| A1 | 10YR4/6 褐　砂壌土 | 10YR5/8 5%　砂壌土 | 中、疎 |
| A2 | 10YR5/8 黄褐　砂壌土 | 10YR4/6 10%　砂壌土 | 固、疎 |




第153図　A－10号、A－11号溝跡出土遺物（3）

**Ｂ－18号溝跡**（第154図）

＜検出状況＞　Ｂ２区の北に位置する。検出面は地山面である。東西に延びる浅い溝で中央に小土坑をもつ。

＜形状・規模＞　直線的に東西にのびている。掘り方は、浅く、幅は一定していない。最大幅1.2m、深さ10cm、延長は不明である。土坑は円形で、径60cm、深さ20cmを測る。

＜埋土＞　埋土は、暗褐色土と褐色土の２層に分れる。

**出土遺物**（第155図）

１はあかやき土器の坏である。胎土はやや粗く、焼成は普通である。２は隆沈線で施文された縄文土器の口縁部である。口縁部は無文である。

**ｅ．道状遺構と土坑跡**

**Ｂ－９号道状遺構**（第156図）

＜検出状況＞　Ｂ１区の南端に位置する。　Ｂ－６号、土坑に切られて、Ｂ－10号土坑跡を切っている。北側の壁と壁沿いに作られた平坦面を検出したが、全掘できなかった。

＜形状・規模＞　斜面の中腹を東西に延びるやや広めの平坦面である。壁高は、20cm～40cmである。幅、総延長は不明である。

＜埋土＞　埋土は１層で、締りのある暗褐色土である。

**出土遺物**（第157図）

１、２は土師器甕である。１は外反しながら立上がり、口唇部でわずかに内反する口縁部。２は大きく外反しながら立上がり、張出しを持たない底部である。球胴甕のものと考えられる。３は沈線に交互刺突、４は撚糸文により施文された弥生土器である。

５は鉄製品である。角の細長い棒状の製品で、両端が細く、薄くなる。長さ18.5ｃｍ、幅は中心部で、1.2cm×0.7cmである。

**Ｂ－10号土坑跡**（第156図）

Ｂ１区の斜面に位置する。Ｂ－９号道状遺構に切られている。壁の一部と底部を検出している。

＜形状・規模＞　形状は円形である。規模は、壁高45cm、底面の径は60cmである。

＜埋土＞　埋土は１層で、あまり締りのない黒褐色土である。

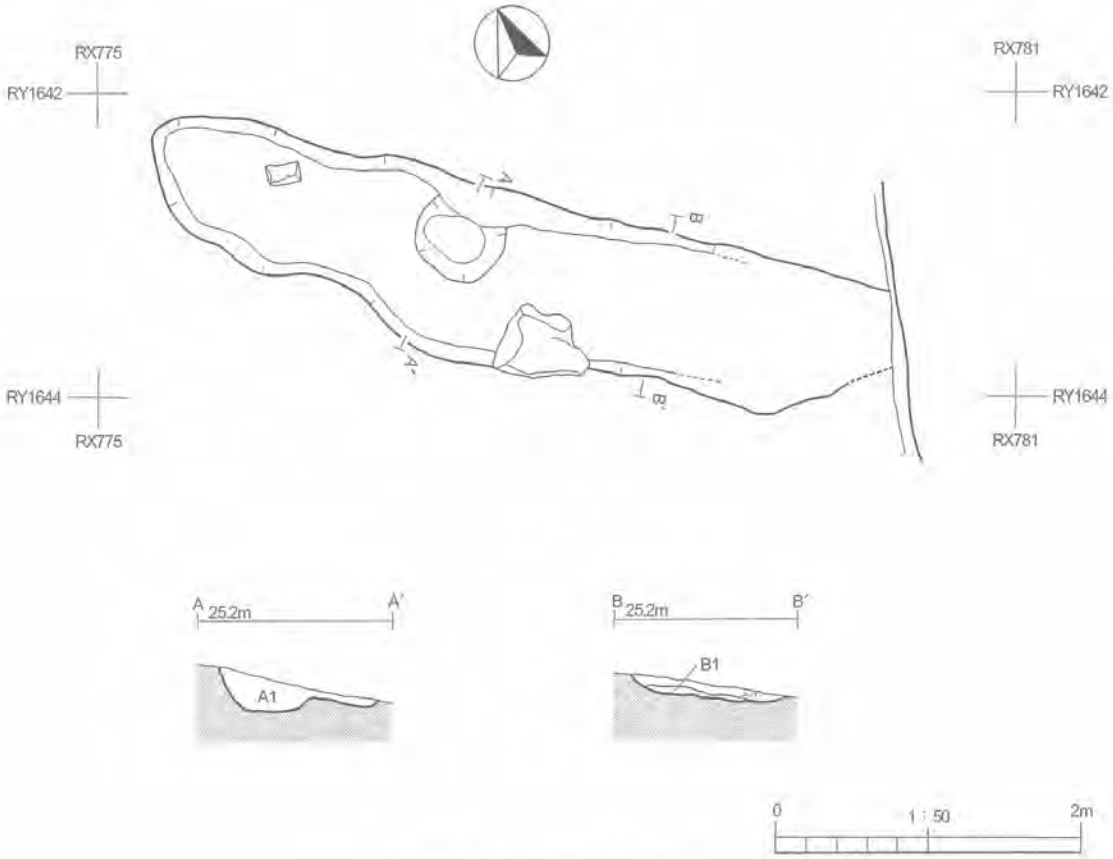
遺物は貝殻片が出土しただけである。

**Ｂ－９号道状遺構土層観察表**

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR5/8 10%　砂壌土 | 中～固、疎　→　土器、鉄製品、貝 |

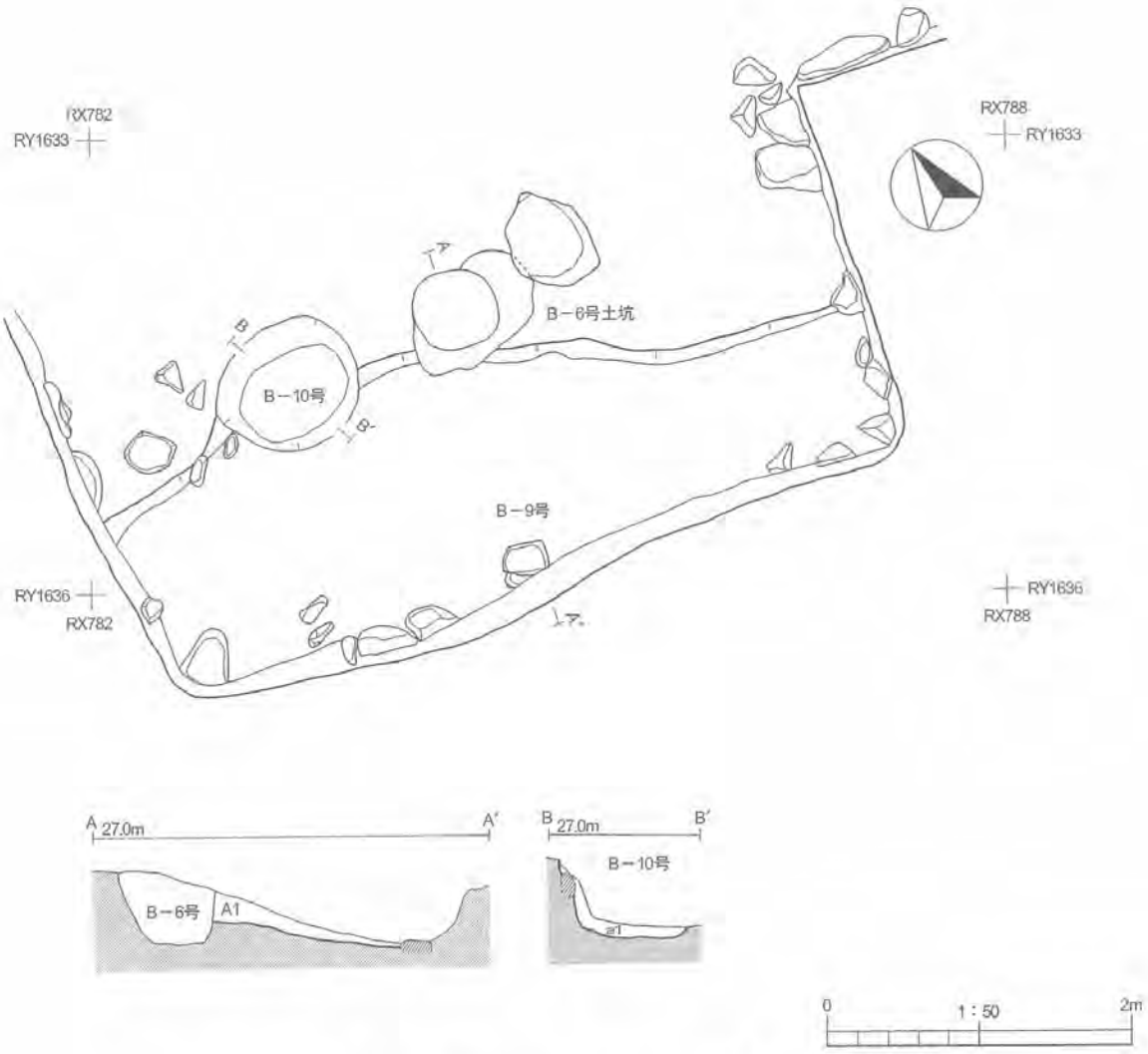
**Ｂ－10号土坑跡土層観察表**

| 層　　名 | 基　本　土 | 混　入　土 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| A1 | 10YR3/4 暗褐　砂壌土 | 10YR5/6 10%　砂壌土<br>10YR3/2 5%　砂壌土 | やや固、疎 |

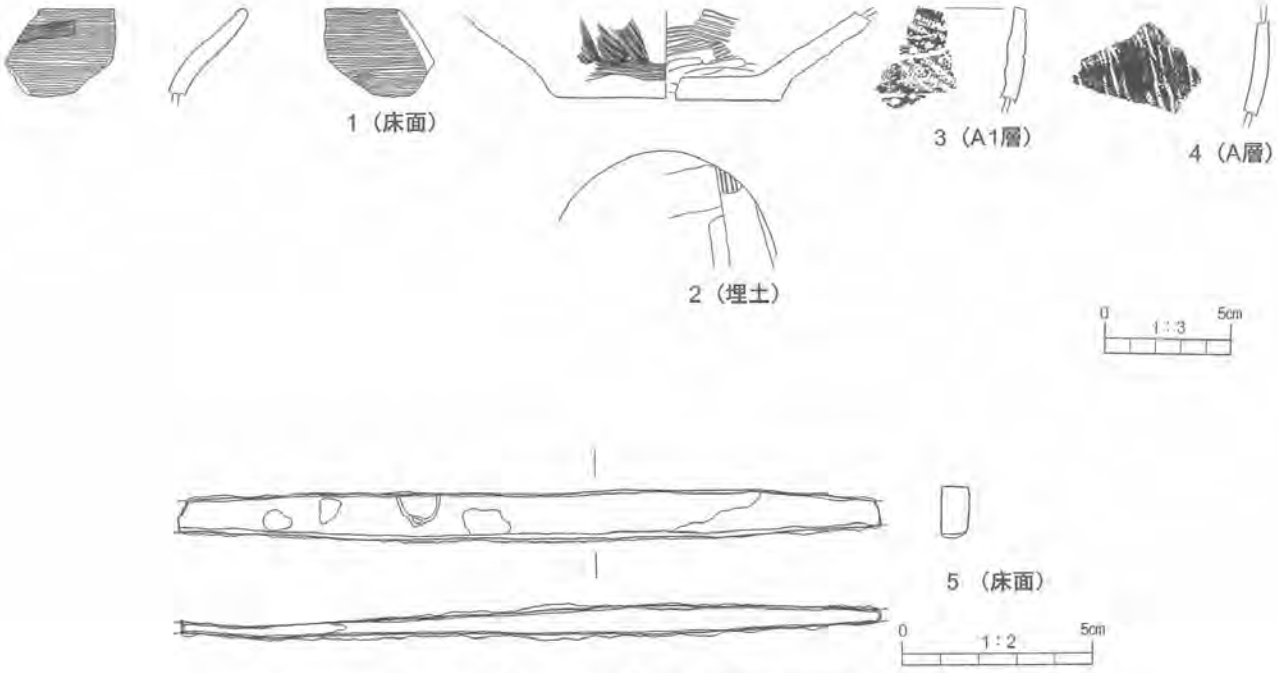



第154図　B－18号溝跡

第155図　B－18号溝出土遺物




第156図　B－9号道状遺構、B－10号土坑跡




第157図　B－9号道状遺構出土遺物

（5）遺構外出土遺物

**A区遺構外出土遺物**（第158～160図）

1～9はA1区から出土した遺物である。

1～3は沈線と交互刺突文で施文される。4は須恵器の長頸壷の口縁部である。

5～9は陶磁器である。5は擂鉢で外面に鉄釉を施される。6、7は染付磁器、8、9は陶器である。6は内面に草花文、見込は蛇ノ目釉ハギを施される。7は見込に五弁花文をほどこされる。6、7は肥前系と思われる。8は青緑釉で、見込は蛇ノ目釉ハギされる。高台は無釉で、ヘラケズリ成形痕を残す。唐津系青緑釉皿か。9は鉄釉が施された皿で、高台は無釉である。

10～31はA2区から出土した遺物である。

10、11は隆沈線で施文された胴張り深鉢の口縁部である。大木8b式に伴う。12、13は沈線と磨消が施され、12は沈線の間に付加刺突が施されている。大木10式に伴う。14は口縁部に平行沈線を施文する。15は付加鉢の頸部で、隆線をめぐらし、地文はLR単節を縦走させる。16～20は沈線と交互刺突文、21、22は撚糸文で施文される。23は小形の甕の底部である。

24～27は土師器である。24は黒色処理された口縁部で、体部に広い沈線をもつ。25、26は土師器甕の口縁部で、26は補修孔をもつ。27は土師器甕の底部で、強く張出し、底面に木葉痕をもつ。28は須恵器の体部片である。

29～31は陶磁器である。29は外面に鉄釉を施された水差しである。30は染付磁器で、外面に草花文を施す。31は擂鉢である。外面に鉄釉を施す。

32～35はA3区から出土した遺物である。

32はキャリパー形深鉢の波状の口縁部である。口縁部文様帯は、沈線の下に隆沈線で横位楕円区画を施し、頸部に無文帯を設ける。無文帯の下に粘土紐をめぐらし縦位の付加刺突を施す。下部文様帯は隆沈線による渦巻文か。大木8a式に伴う。33は土師器の坏である。丸底で、体部に明瞭な段をもち、黒色処理されている。34は須恵器の体部片である。35は陶器の碗である。外面は鉄釉、内面は灰白色釉が施される。塗分け碗である。瀬戸美濃か。

36～40はA4区から出土したものである。

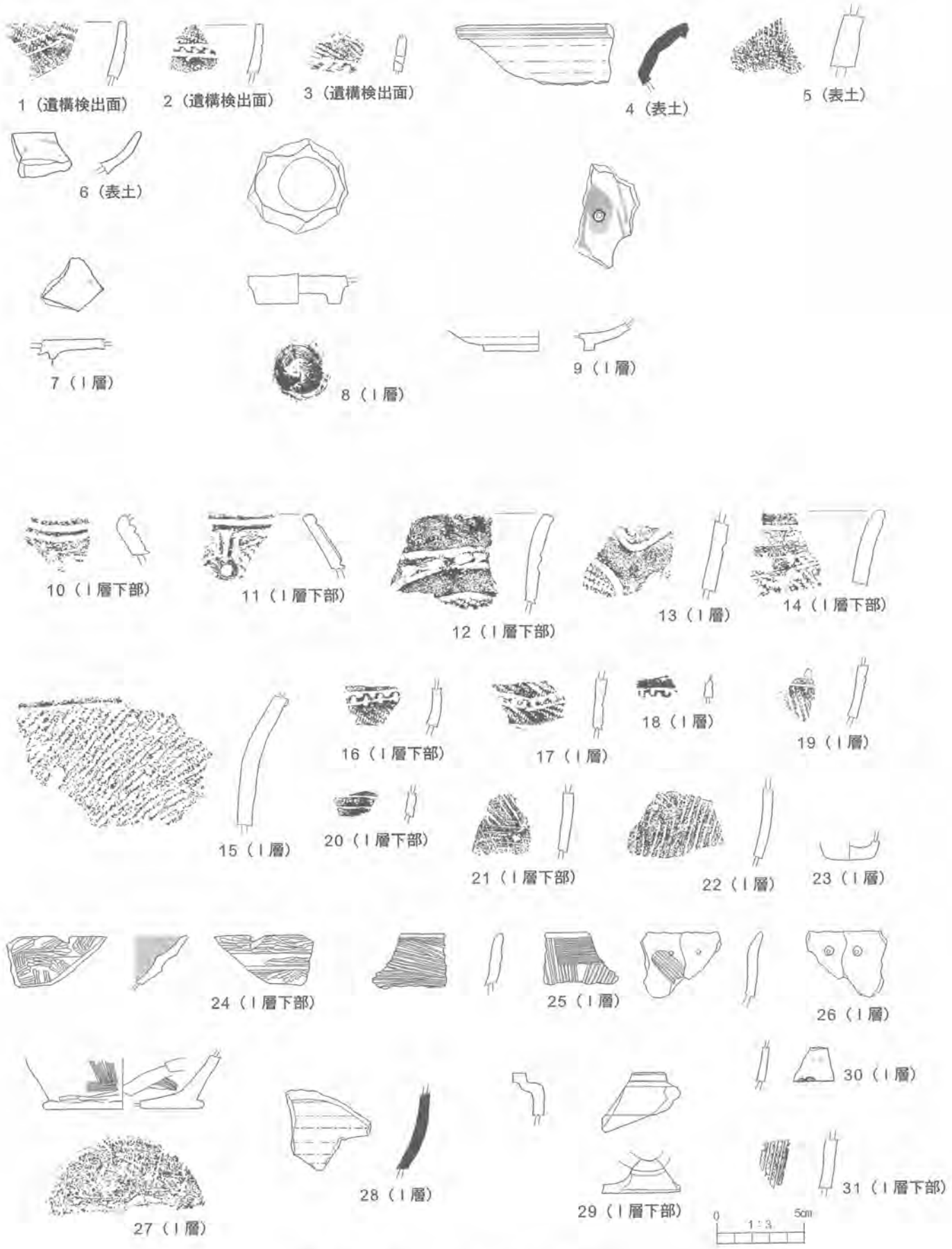
36は隆沈線で施文した深鉢の口縁部である。37は結節縄文で施文された体部片である。38は平行沈線の間に横位の連続刺突文を施している。内面はナデ調整され、胎土は密なほうである。39は須恵器の体部片である。40は染付磁器の徳利の底部である。外面に若松？文を施す。

41～43は石器である。41は砥石で、4面が使用され、各面に擦痕を残す。42は石斧である。胴部上半より胴部下半の幅が大きく、刃部は全体に丸みをもつ。43は石鏃である。二等辺三角形型で、凹基、側縁は平縁である。

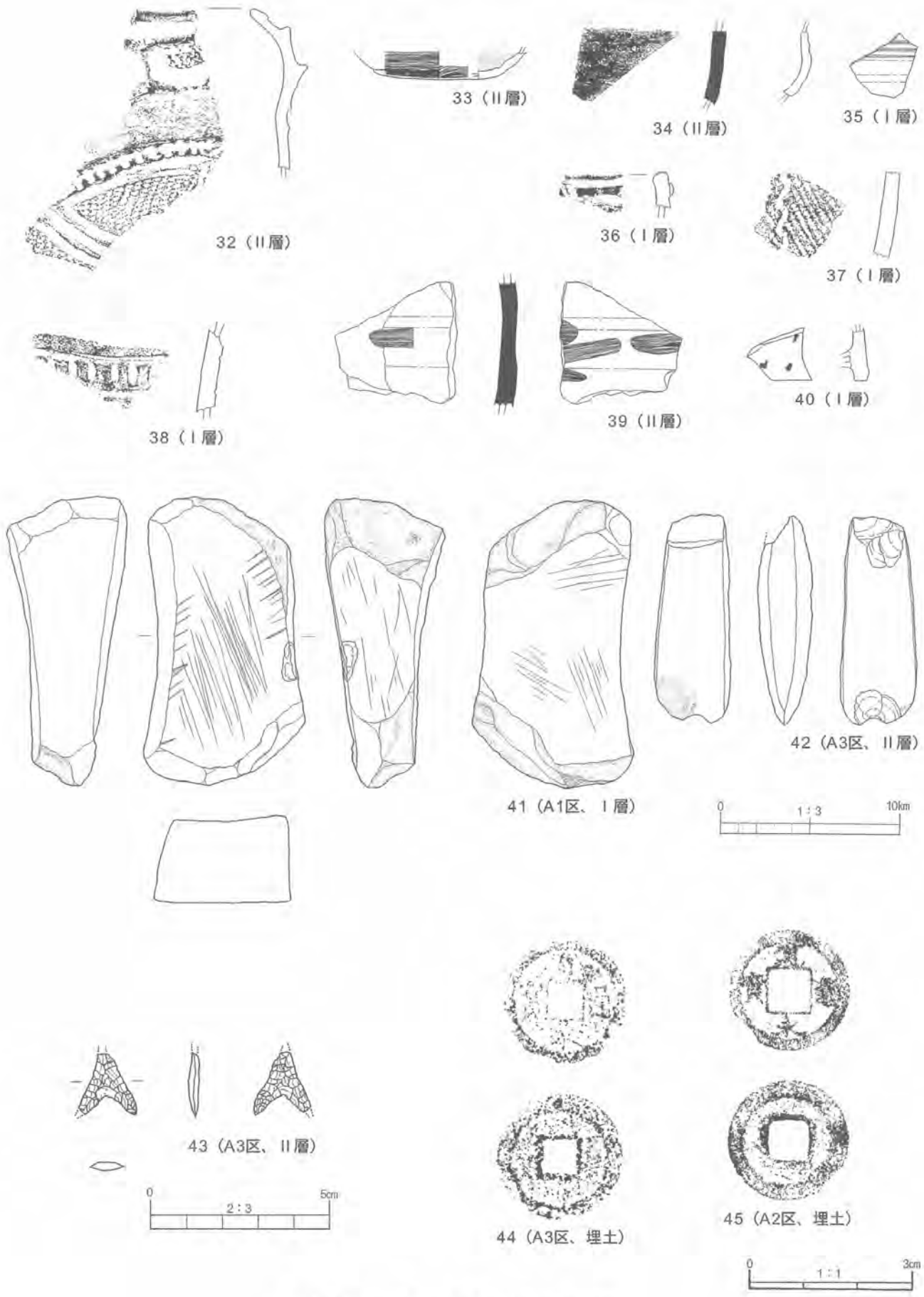
44、45は銭貨である。いずれも銘は「寛永通宝」である。

46～55は鉄製品である。46は細い板状で、先端に台形の切れ込みをもつ。47～50は船釘である。51は円盤状の製品である。紡錘車と思われる。52～55は船釘である。

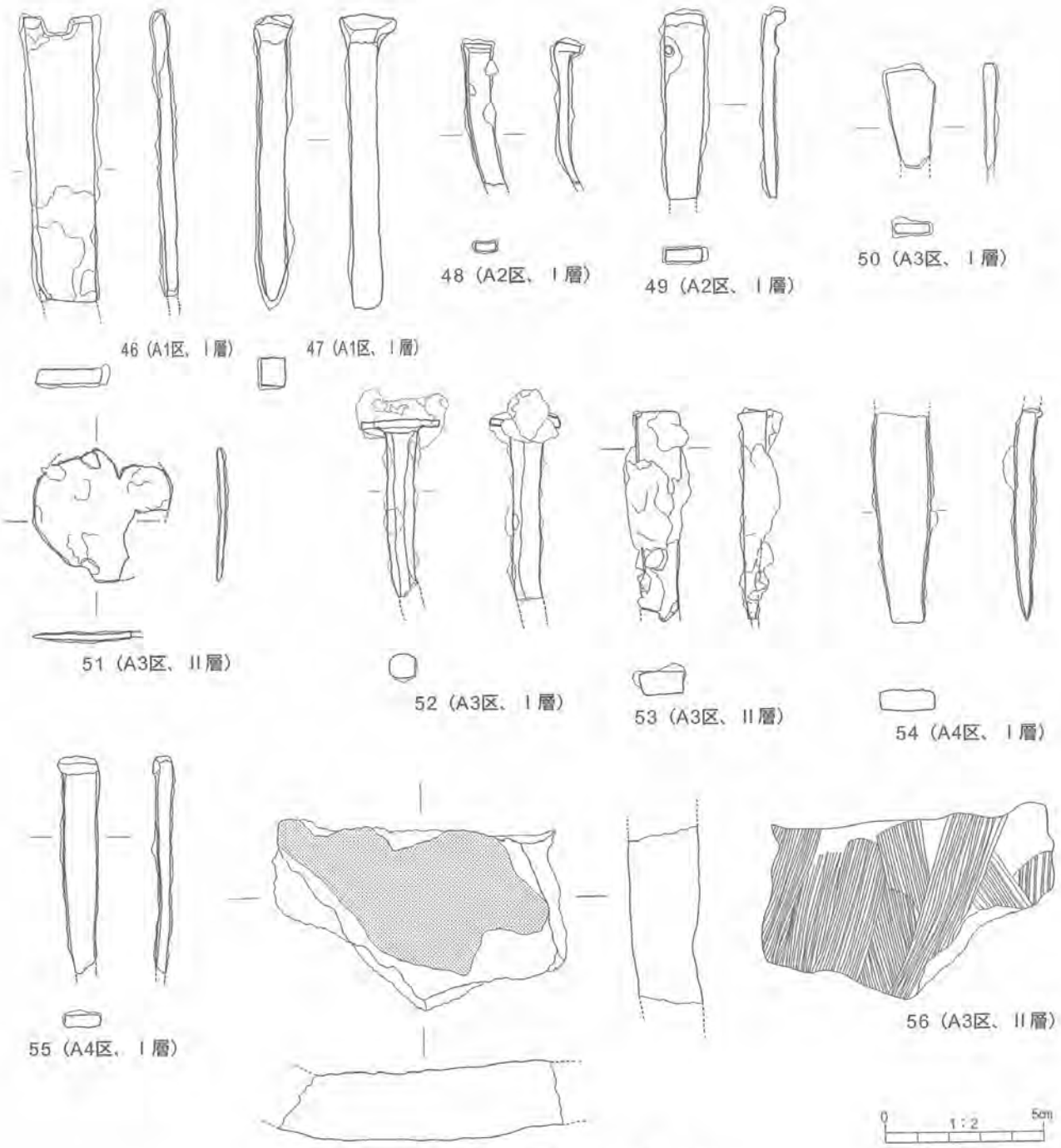
56は土製品である。板状でわずかに湾曲している。網点で示した範囲には、暗褐色に変色し、鉄滓が付着する。炉壁か。




第158図　A区遺構外出土遺物（1）




第159図　A区遺構外出土遺物（2）



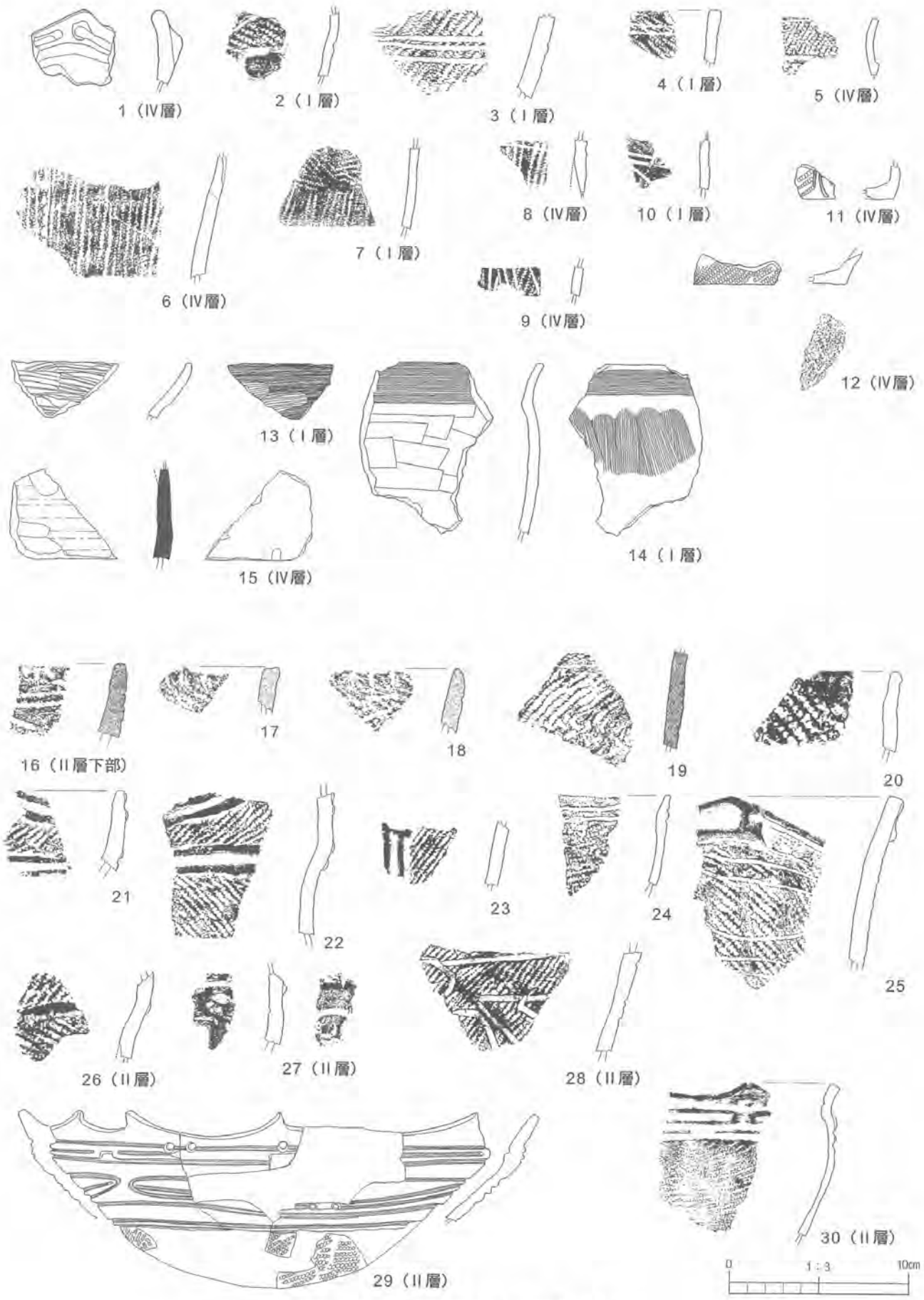

第160図　A区遺構外出土遺物（3）

**B区遺構外出土遺物**（第161～167図）

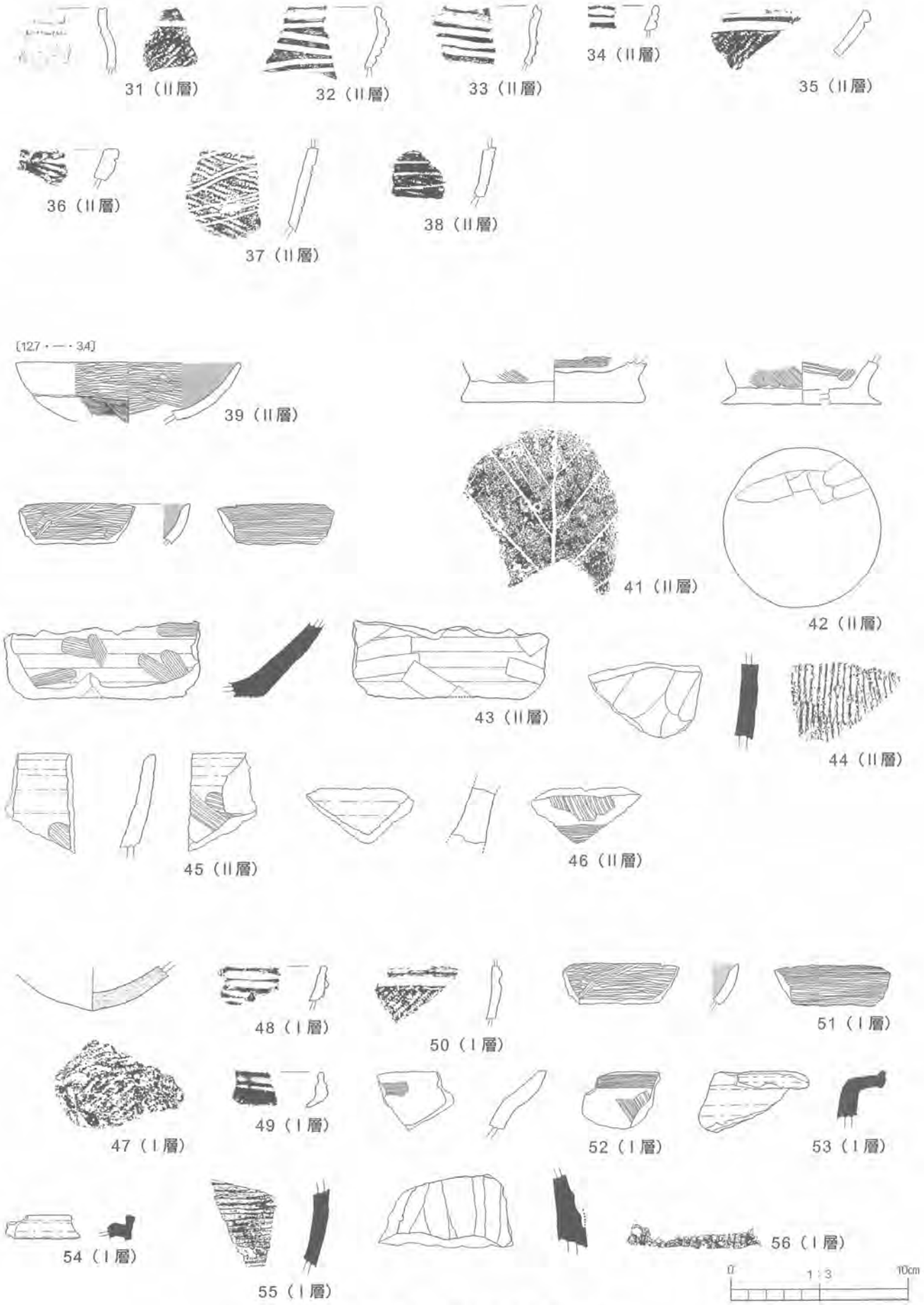
1～14はB１区から出土した遺物である。

1～3は縄文土器である。1は波状口縁の頂部である。沈線を施し、無文帯が続く。大木8b式に伴う。2は磨消を伴う。3は縄文に平行沈線で施文される。4、5は沈線に交互刺突文、6～7は撚糸文による施文である。8～10は撚糸文に沈線が加わる。11、12は底部である。11は縄文に沈線、12は底面にも縄文が施される。4～12は弥生土器と思われる。

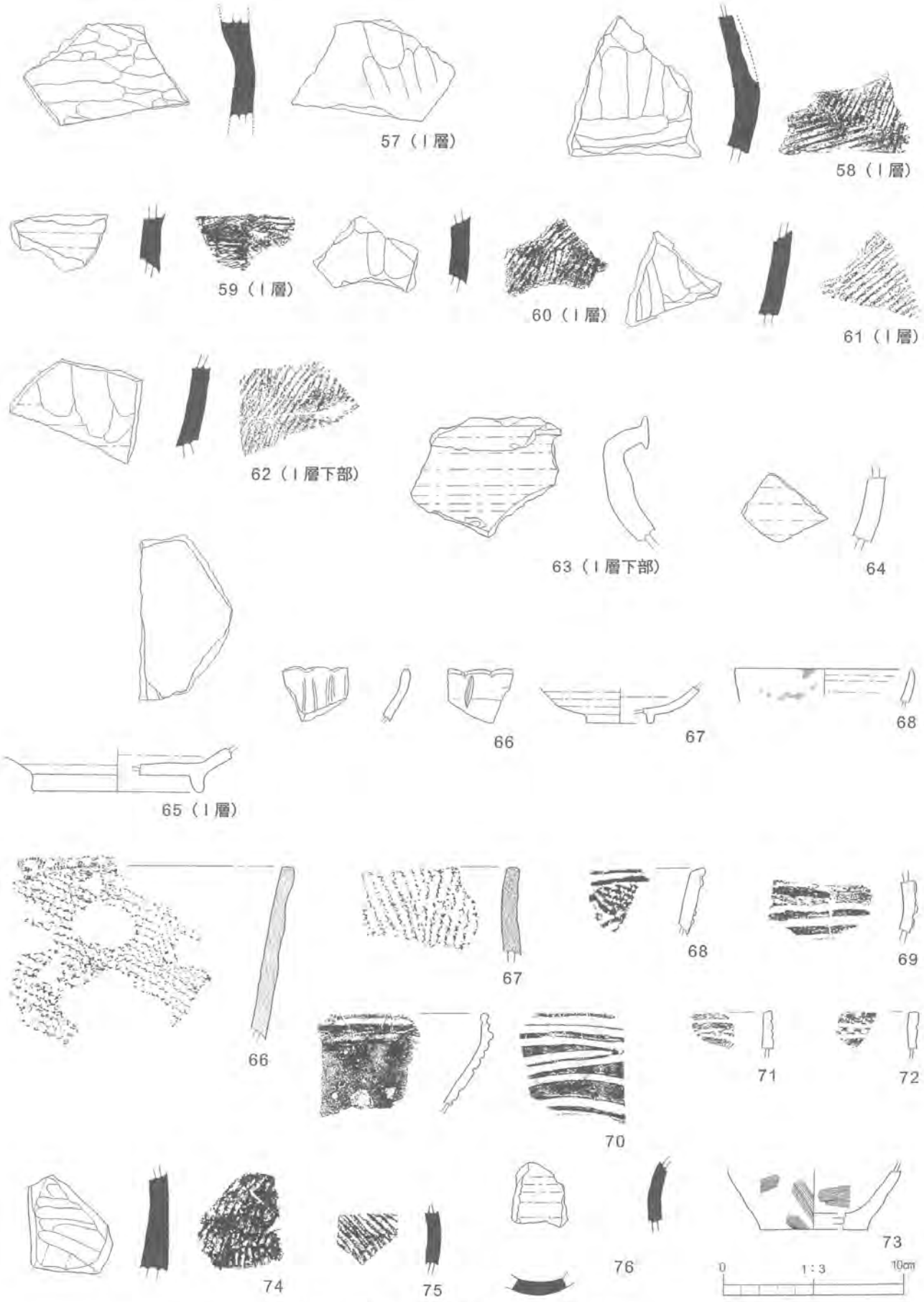
13、14は土師器である。13は坏である。内面の一部をミガキ処理する。14は甕である。口縁




第161図　B区遺構外出土遺物（1）




第162図　B区遺構外出土遺物（2）




第163図　B区遺構外出土遺物（3）

部は短く、わずかに外反し、最大径は胴部にある。15は須恵器の体部片、ナデ調整痕をもつ。

16～69はＢ２区から出土した遺物である。

16～28は縄文土器である。１は刺突文の下に原体圧痕が施される上川名Ⅱ式に伴う。17、18は波状口縁に爪形の刺突痕を施す。19は結節縄文を横走させる→大木１。16～19は胎土に繊維を含む。20は口縁部に無文帯をもち、地文はＲＬ単節を縦走させる。21から23は隆沈線により施文される。いずれもキャリパー型深鉢の一部である。21は波状の口縁部、22は頸部、23は胴部である。21～23は大木８ｂ式に伴う。24は口縁部に平行沈線をめぐらし、地文はＬＲ単節を縦走させる。25は波状の口縁部に沈線文を施し、地文はＲＬ単節を縦走させ、その上に平行沈線を施している。26は深鉢の頸部で、横位の隆線を境に縄文の横走、縦走が分れる。27は、外面が隆線と磨消？、内面にも沈線が施されている。28は沈線による不定形な区画文である。

29から38は弥生土器である。29は高坏である。山形口縁で、外反する。12の波頂部をもち、そのうちの４つは大きく抉られていると推定される。坏部上半は貼瘤付きの変形工字文で施文され、下半部は縄文を施される。30は波状口縁の甕である。波頂部には切れ込みが入り、口縁部は無文。頸部には変形工字文が施され、体部にはＬＲ単節を斜走させる。31は甕の口縁部である。内外面に沈線をめぐらし、その下に縄文をお施す。32～35は沈線によって施文された高坏あるいは浅鉢の口縁部、体部である。36は沈線に交互刺突文、37、38は撚糸文と沈線で施文される。

39～42は土師器である。39は丸底の坏である。黒色処理され、体部に段をもつ。40は黒色処理された坏の口縁部である。41、42は甕の底部である。41は張出しが弱く、底面に木葉痕をもつ。42は強く張出し、底面はケズリ調整である。43、44は須恵器である。44は甕の底部である。外面はヘラケズリ調整されているが、底面は磨滅し、調整は不明である。44は内面にナデ調整痕、外面にタタキメを残す。

45、46は瓦質土器である。器形は鉢か。46は底部からの立上がりである。胎土は、明黄褐色、黄橙の粘土粒が混じり、密で、焼成は良好である。45、46は同一個体である。

47は尖底土器の底部で、繊維を含む。48、49は沈線で施文された浅鉢あるいは高坏の口縁部である。50は口唇部に縄文を施文され、口縁部は無文である。51は土師器の坏である。黒色処理されている。52は土師器甕の口縁部である。外反して立上がる。

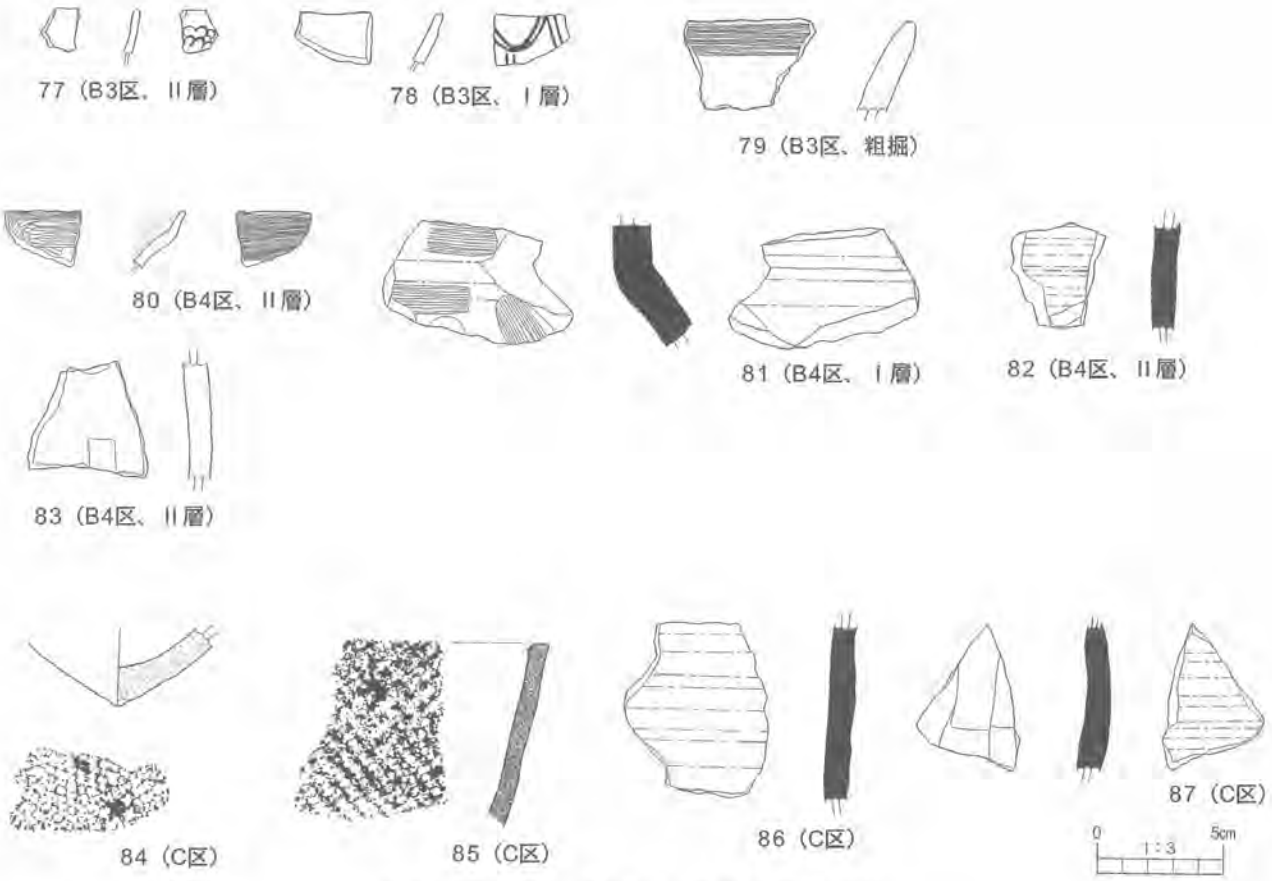
53～62は須恵器である。53、54は長頸壺の口縁部である。55～62は体部片である。いずれもヘラケズリとタタキメの調整痕を残す。

63～67は陶器である。63は、常滑焼の広口壺である。口縁部は頸部と直角をなして外反し、縁帯は垂直に近くなる。生産年代は13世紀中～末である。64は63の体部片である。

65～67は陶器の皿である。65は、畳付が丸く成形され高台は無釉である。見込みに透明な緑釉が施され、胎土はにぶい黄橙である。66は菊皿の口縁部である。両面をノミで削り、口唇部に切込みを入れる。透明な緑釉が施され、胎土はにぶい黄橙である。67は高台脇から湾曲して立上がる。内外面に灰白釉が施されているが、高台は無釉である。胎土は、浅黄橙である。68は染付磁器の碗である。外面に草花文を施す。

66～79はＢ３区から出土した遺物である。

66、67は深鉢の口縁部である。いずれも繊維を含む。66は口唇部に連続する楕円形の圧痕を




第164図　B，C区遺構外出土遺物（4）

もち、地文はＲＬ単節を横走させる。67は口唇部は無文で、地文はＬＲ単節を縦走、斜走させる。68、69は隆沈線で施文された深鉢の頸部である。70は高坏あるいは浅鉢の口縁部である、変形工字文で施文される。71は沈線と撚糸文、72は沈線と交互刺突文で施文される。73は甕あるいは壷の底部である。器面は平滑で、外面にケズリ調整痕を残す。胎土は密である。70～73は弥生土器である。

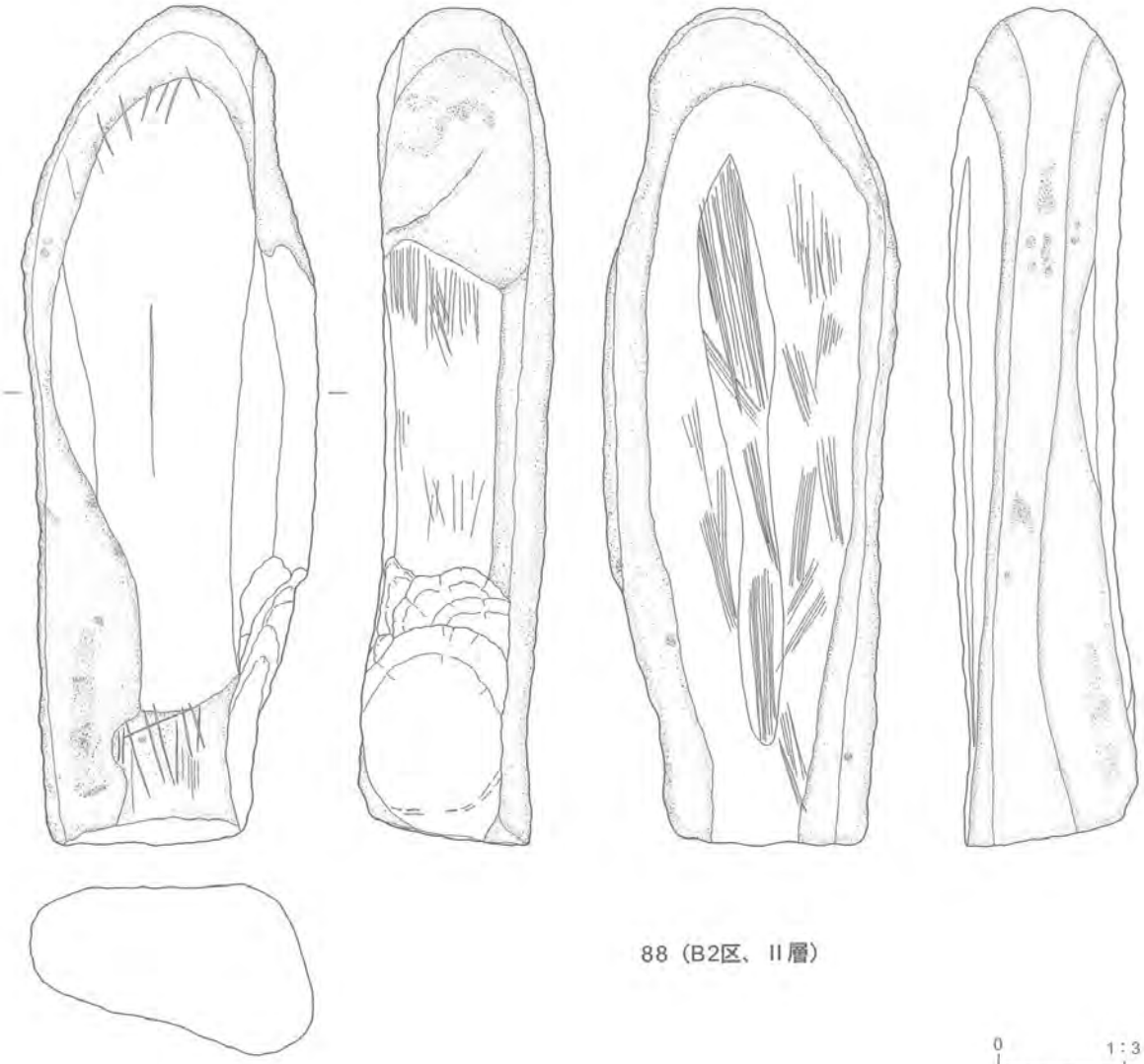
74～76は須恵器である。74、75は体部片で、外面にタタキメを残す。76は長頸壷の頸部と思われる。

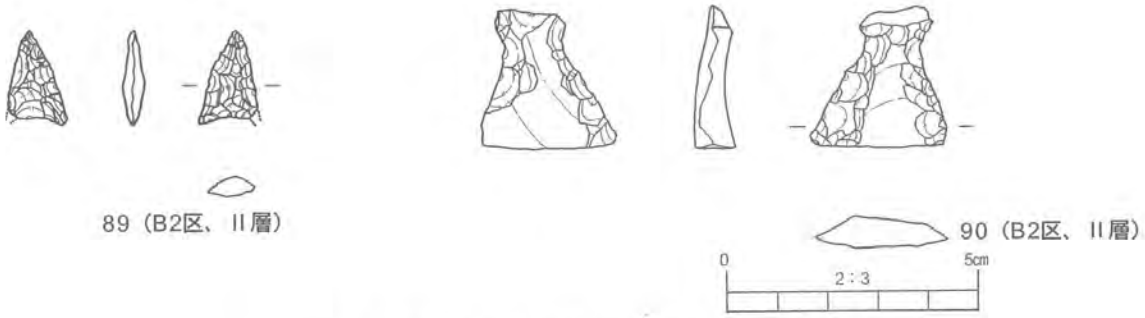
77、78は陶磁器である。77、78は染付磁器の碗である。77は外面に唐草文？を施す。中国産、明朝16世紀のものである。78は外面に二重網目文を施す。肥前系で、18世紀前半～中葉と思われる。

79は瓦質土器である。器形は不明であるが、底部が肥厚になり、外面にナデ調整痕を残す。胎土は暗赤褐色で密である。

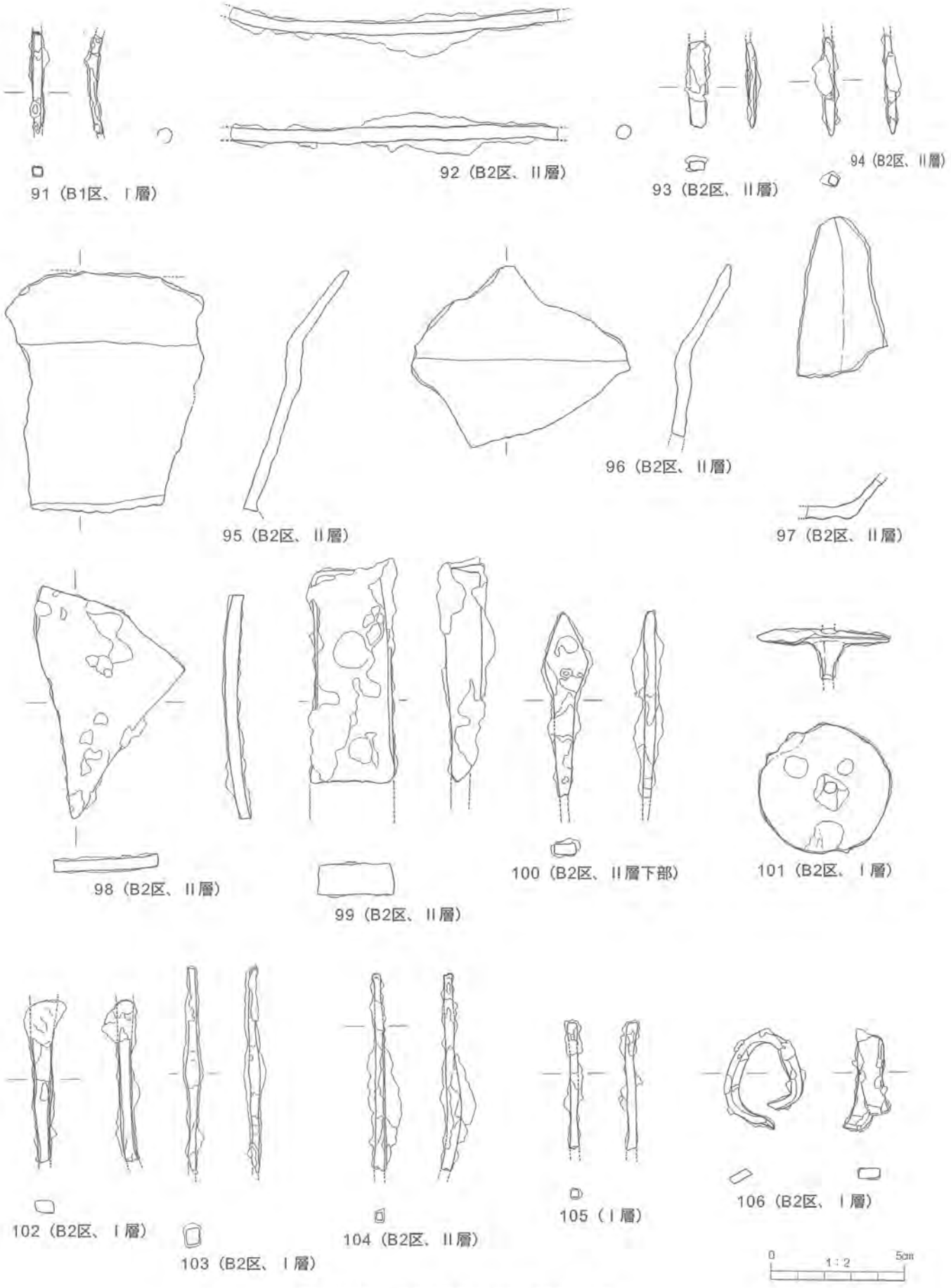
80～83はＢ４区から出土した遺物である。

80は土師器の坏である。口縁部はわずかに内反し、黒色処理される。81、82は須恵器である。81は頸部で、内面にナデ調整痕を残す。82は体部片で、内面が一部ケズリ調整されている。83は瓦質土器である。胎土はにぶい黄橙で、密である。Ｂ３区で出土したもの同質であるが、外面に薄く鉄釉が施されている。

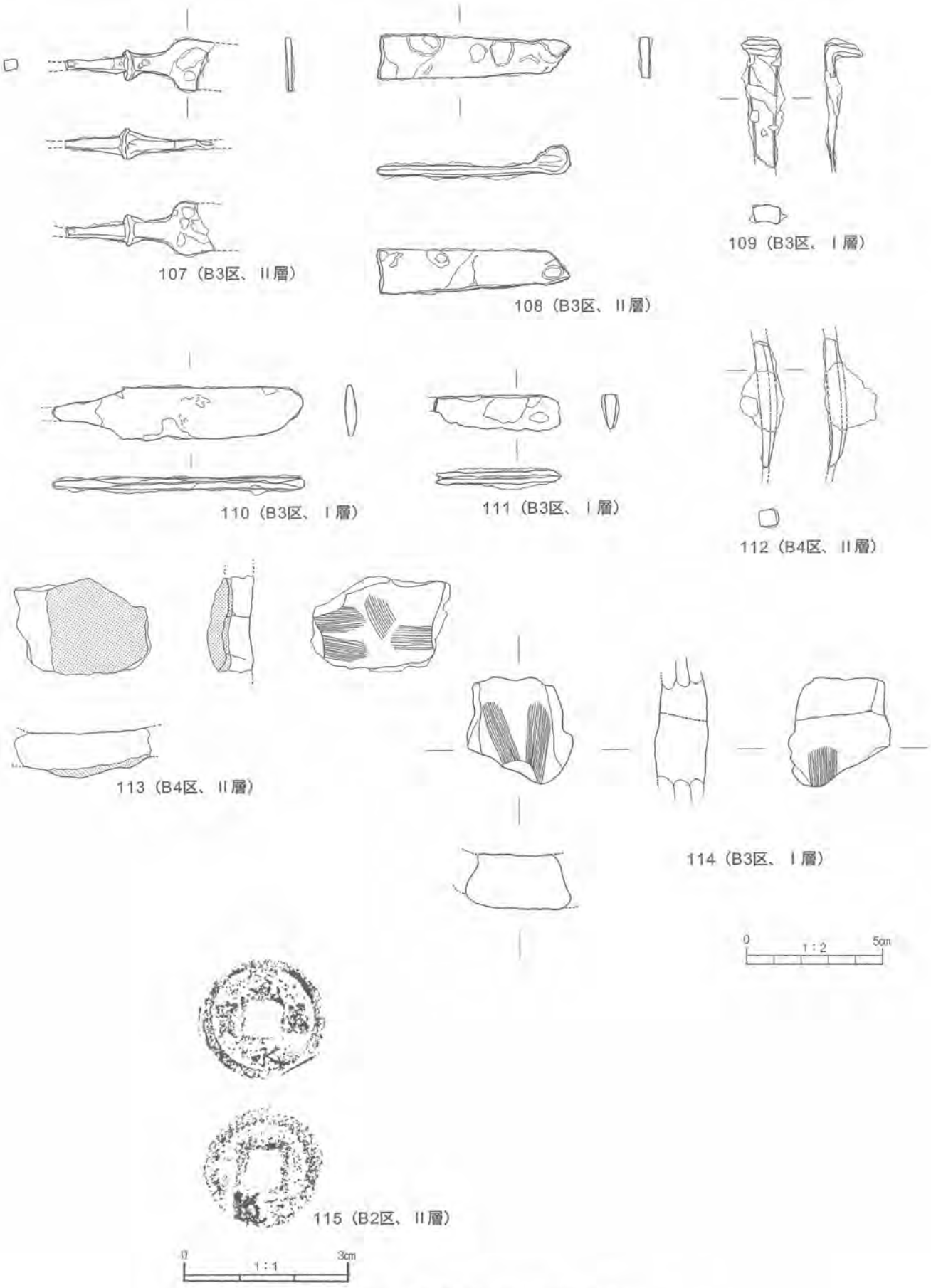



第165図　B区遺構外出土遺物（5）




第166図　B区遺構外出土遺物（6）




第167図　B区遺構外出土遺物（7）

88～90は石器である。いずれもＢ２区から出土したものである。

89は砥石である。４面を使用して、各面の擦痕を残している。89は石鏃である。平基であるが、わずかに抉りをもつ。側縁は平側で、二等辺三角形型である。90は石匙である。横型で、片面の周縁部を加工して刃部を作っている。

91～112は鉄製品である。91は角釘である。92は丸い棒状の製品である。93、94は角釘である。95～98は鍋と思われる。95、96は口縁部、97が底部、98が体部にあたる。99はタガネ状の製品である。100は形状からは鉄鏃と思われるが、刃部が小さい。101は紡錘車の円盤である。径は4.9cm。102～105は四角な棒状の製品で、釘などに使用されたものと考えられる。106は輪金状の製品である。107は刀子と思われるが、区（まち）を丸く成形している。108は刀子の刃部である。109は船釘である。110、111は刀子である。112は角釘である。

113、114は土製品である。いずれも厚い板状の製品で、わずかに湾曲している。支脚、炉壁などが考えられる。

115は銭貨である。銘は「寛永通宝」である。

**Ｃ区出土遺物**（第164図）

84、85は胎土に繊維を含む。84は尖底土器の底部である。85は外反する深鉢の口縁部である。地文は上部はＲＬ単節を横走させ、下部は縦走させている。86、87は須恵器の体部片である。87は内面をケズリ調整されている。

第３表　赤前Ⅳ八枚田遺跡出土鉄滓集計表　(g)

| | | 遺構、地区名 | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 形状 | 反応度 | A－1 | A－11 | A－2 | A－21 | A－3 | A－31 | A－4 | A－5 | A－53 | A－58 | A－6 | A－7 | A－8 | A－1 | A－2 | A－3 | A－4 |
| 椀形 | 合計：H | | | | | | | | | | | 2640 | 580 | | | | 150 | |
| | 合計：M | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：L | | | | | | | | | | | 1950 | | | | | | |
| | 合計：N | 79 | | 35 | | | | | | | | | 22 | | | | | 87 |
| 飴状 | 合計：H | 30 | | | | | | 40 | | | | | | | | | | |
| | 合計：M | | 20 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：L | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：N | 42 | 30 | 20 | | | | | | 5 | | 3320 | 750 | 30 | | 35 | 195 | 18 |
| 塊状 | 合計：H | | 20 | | | | 50 | | | 150 | 110 | | 60 | | 200 | 60 | 300 | 140 |
| | 合計：M | | 25 | | | | 5 | | | | | 5 | 125 | | | | 560 | 90 |
| | 合計：L | 50 | 100 | | | 130 | | | | 230 | | | | | 5 | | 490 | |
| | 合計：N | 24 | 51 | | 2 | 55 | | 45 | | | | 3347 | 64 | 12 | 20 | 104 | 539 | 8 |
| 炉壁を噛む | 合計：H | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：M | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：L | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：N | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| その他 | 合計：H | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：M | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：L | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：N | | | | | | | 120 | 9 | | | | | | | | | |
| 全体の合計：H | | 30 | 20 | | | | 50 | 40 | | 150 | 110 | 2640 | 640 | | 200 | 60 | 450 | 140 |
| 全体の合計：M | | | 45 | | | | 5 | | | | | 8 | 125 | | | 1 | 570 | 90 |
| 全体の合計：L | | 50 | 100 | | | 130 | | | | 230 | | 1950 | | | 5 | | 490 | |
| 全体の合計：N | | 145 | 81 | 55 | 2 | 55 | | 165 | 9 | 5 | | 6667 | 836 | 42 | 20 | 139 | 734 | 113 |

(g)

| | | 遺構、地区名 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 形状 | 反応度 | B－1 | B－11 | B－13 | B－14 | B－15 | B－16 | B－18 | B－2 | B－3 | B－4 | B－9 | B 1 区 | B 2 区 | B 3 区 | B 4 区 | C 2 区 | C 6 区 | 総計 |
| 椀形 | 合計：H | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：M | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 |
| | 合計：L | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：N | | | | | | | | | | | | | | | | | | 129 |
| 飴状 | 合計：H | | 615 | | | | | | 10 | | | | | 110 | | | | | 805 |
| | 合計：M | | 20 | | | | | | | 70 | | | | | | | | | 110 |
| | 合計：L | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：N | 520 | 6316 | | 205 | | 50 | 145 | 330 | 1230 | 105 | | 330 | 9319 | 470 | 45 | | | 23510 |
| 塊状 | 合計：H | 120 | 440 | | | 310 | | 140 | 1060 | 450 | 60 | | 160 | 2120 | 805 | 490 | 50 | | 7295 |
| | 合計：M | | 20 | | | | | | | 75 | | | | 320 | 10 | | | | 1235 |
| | 合計：L | | 150 | | | | | 20 | | | | | 20 | 1595 | 660 | | | | 3450 |
| | 合計：N | 58 | 280 | 230 | 128 | 480 | | 4 | 183 | | 1004 | 150 | 760 | 3840 | 438 | 170 | | | 11996 |
| 炉壁を噛む | 合計：H | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：M | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：L | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：N | | 865 | | | | | | 50 | | | | | | | | | | 915 |
| その他 | 合計：H | | 140 | | | | | | | | | | | | | | | 250 | 3760 |
| | 合計：M | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 合計：L | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1950 |
| | 合計：N | | 1160 | | | | | | | | | | | | | | | | 1383 |
| 全体の合計：H | | 120 | 1195 | | | 310 | | 140 | 1070 | 450 | 60 | | 160 | 2230 | 805 | 490 | 50 | 250 | 11860 |
| 全体の合計：M | | | 40 | | | | | | | 145 | | | | 320 | 10 | | | | 1359 |
| 全体の合計：L | | | 150 | | | | | 20 | | | | | 20 | 1595 | 660 | | | | 5400 |
| 全体の合計：N | | 578 | 8621 | 230 | 333 | 480 | 50 | 149 | 563 | 1230 | 1109 | 150 | 1090 | 13159 | 908 | 215 | | | 37933 |

鉄滓を形状によって分類し、さらにそれらの金属鉄の残留度をメタルチェッカーによって調べたものをまとめたものである。H，M，L，Nはその反応度を示す。

H：小さな金属鉄を残留する。　M：一般の金属鉄を残留する。

L：大きな金属鉄を残留する。　N：金属鉄を含まない

鉄滓の総出土量は、約56kgである。A－6号製鉄遺構とB－11号製鉄炉跡からの椀形滓の出土量が目立つことと遺跡全体から出土していることが特徴的である。金属鉄を残留する鉄滓の割合は高い。

## 4－3．ま と め

古代の土器、製鉄遺構については他の遺跡のものと一括して「調査のまとめ」で検討したいので、ここでは縄文時代、弥生時代、古代のそれぞれの住居跡、溝跡、土坑跡についてまとめる。

### a．縄文時代の遺構

住居跡は、Ｂ１区の斜面を削平して構築されたＢ－４号竪穴住居跡と同じくＢ１区の狭い平坦部に築かれたＢ－５号住居跡の２棟である。いずれも弥生、平安時代の住居に削られており、性格な規模は不明である。

Ｂ－４号住居跡は縄文時代中期に伴う所謂複式炉を伴った住居跡である。炉跡は、「日」の字形の石組みと南側に斜めに組まれた石を残して南側は削られいる。埋設土器は伴わず、南側の石は「八」の字形の「前庭部」の掘り込みを予想させる。複式炉については「トロノ木Ⅰ　89」で考察されており[1]、その分類に従うなら土器埋設を伴わない中村分類のＢ類に含まれる。考察では、炉の前庭部あるいは反対側に付属する施設、特別な遺物について検討されているが、当住居跡の場合は残念ながら前庭部は消失している。炉の反対側については特別な施設は確認できなっかた。またＢ－４号住居は斜面を削平して構築されており、炉の反対側は壁の最も高い部分に当り、出入口などの施設があったとは考え難い。肝心の前庭部を欠いているので残念ながら消極的な検討しかできない。Ｂ－５号住居跡については、埋土中の土器から縄文時代としたが、炉跡などからみて弥生時代に伴うの可能性もあることを指摘しておきたい。

### b．弥生時代の遺構

Ｂ１区から竪穴住居跡１棟、土坑２基、Ｂ２区から竪穴住居跡１棟、出土している。住居跡は斜面の中位に形成された狭い平坦面に構築され、土坑跡は同じ斜面の下位を掘り込んで作られている。住居跡と土坑跡の距離は数メートルである。住居跡と土坑からは同種の土器が出土しており、同時期の遺構と考えられる。撚糸のみあるいは交互刺突を伴って施文された器厚の薄い甕である。赤穴式に伴う弥生後期のものと考える。土坑はやや規模の大きいものであり、墓坑であった可能性がある[2]。

赤穴式に伴う土器は、市内では、鰹沢遺跡のやはり斜面に掘られた小土坑から出土し[3]、芋野Ⅱ遺跡の弥生前期から後期にかけての包含層にも含まれている[4]。

Ｂ２区から出土した住居跡は谷の緩斜面に位置する。奈良、平安の住居跡に削られており正確な規模は不明であるが、やや大形の住居と思われる。竪穴からは、壺、浅鉢または高坏、甕などが出土している。壺は小形で、口縁部に隆帯をもち体部は無文である。浅鉢は変形工字文と平行沈線で施文されものがほとんどである。甕は、縄文で口縁部まで施文されたものと口頸部無文のものに分れる。後者は肩部に膨らみをもつ。いずれも大洞A′式の系統の土器であり、弥生時代初頭に伴うものと考える。市内の類例としては、上村貝塚の弥生５棟の竪穴住居跡[5]、狐崎遺跡の第５号住居跡[6]、千鶏Ⅳ遺跡の弥生時代の４棟の竪穴住居跡などがあげられる[7]。

### 古代の遺構について

### c．奈良時代の遺構

奈良時代の住居跡は、尾根の平坦部で１棟（Ａ－８号）と谷の緩斜面で１棟（Ｂ－14号）で

出土している。いずれも８世紀後半に位置付けられる。またどちらも平安時代の住居跡に削られており形状、規模とも正確なところは不明であるが、形状はどちらも隅丸方形で、規模はＢ－14号がやや大形と推定される。

尾根と谷という立地状況からみたとき、Ｂ－14号の谷の緩斜面という立地は、隣接する赤前Ｖ遺跡Ｄ－１号と類似している。地形は北から谷（Ｄ－１）、湿地、尾根（Ａ－８号）、谷（Ｂ－14号）、湿地と続いている。これら１棟、１棟が集落を構成する１棟なのか、それともこれらが一つの大きな集落を構成しているのか判断に迷う曖昧な位置関係にあるように思われる。尾根のＡ－８号については孤立している１棟であることは確認できたが、谷の住居跡については周辺の資料を待つしかないが、遺物の出土状況などからみて、周辺の遺構の存在の可能性は低いように思われる。

**ｄ．平安時代の竪穴住居跡と製鉄遺構**

竪穴住居跡は９棟出土しているが、完掘できたのは２棟だけである。形状は隅丸方形で、規模は中～小形におさまり、大形のものは出土していない。カマドを検出できなかったものが３棟、鍛冶炉を伴ったものが２棟である。鍛冶炉などの遺構、羽口、鉄滓などの遺物から、Ａ－２号、Ａ－７号、Ｂ－13号をのぞいた住居跡は「製鉄」に関っていることが確認された。

立地状況は、尾根の平坦面に２棟、南の斜面際と斜面に３棟、谷の緩斜面に２棟という配置である。南斜面に集中しているのが特徴的である。製鉄遺構（Ａ－６号）は、南斜面を削平して構築されている。床面の南端に鍛冶炉が設けられ、その周辺を焼土遺構が囲んでいる。西端のＡ－５号焼土遺構は鍛冶炉に伴う炭窯と考えられる。炉の形態、鍛造剥片を伴うことなどから鍛冶炉と判断したが、住居跡の床面から出土した鍛冶炉（Ａ－１、４号など）と比べたとき、規模、構造が異なる。仕事の違いを反映しているものと思われるが、今回は残念ながらその違いを明らかにすることはできなかった。Ｂ区の製鉄遺構（Ｂ－11号）は、形態、鍛造剥片を伴わないことなどから精練炉（大鍛冶）と判断した遺構であるが、Ａ－６号製鉄遺構とセットになって機能していた可能性がある（巻末「調査のまとめ」）。年代については、いずれの遺構も決め手となる遺物が少なくにわかに特定できないが、遺物、切り合いなどから大まかに９世紀

**古代住居跡一覧表**

| 住居番号 | 平面形 | 規模 | 柱穴数 | カマドの位置 | 煙道 | 鍛冶炉 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Ｂ－14号 | 隅丸方形 | 5.0m×－ | 6 | 北壁 | 水平 | | 奈良時代 |
| Ａ－８号 | 隅丸方形？ | (3.6m)×－ | 2？ | 不明 | | | 奈良時代 |
| Ａ－１号 | 隅丸方形 | 4.5m×4.5m | 9 | 東壁 | 上り勾配 | ○ | 平安時代 |
| Ａ－２号 | 隅丸方形 | 4.2m×(4.2m) | 5 | 検出せず | | | 平安時代 |
| Ａ－３号 | 隅丸方形 | 4.7m×－ | 検出せず | 検出せず | | | 平安時代 |
| Ａ－４号 | 隅丸方形 | 4.2m×－ | 4 | 検出せず | | ○ | 平安時代 |
| Ａ－７号 | 隅丸方形？ | | 5 | 北壁 | 水平 | | 平安時代 |
| Ｂ－12号 | 隅丸方形 | 3.5m×3.5m | 6 | 東壁 | 下り勾配 | | 平安時代 |
| Ｂ－13号 | 隅丸方形 | | | 不明 | | | 平安時代？ |

（Ｂ－１、２号については極く一部の発掘であったので省いた）

代に位置付けられるものと思われる。

建物跡、製鉄遺構、溝跡などを含めた全体的配置については次項で検討したい。

**e．掘立柱建物跡、溝跡について**

建物跡については、規模は３間×２間で、配置、遺物から南北の溝（Ａ－11、12号、Ａ－13号）を伴う遺構と想定できる。さらに、これらの遺構は周辺の製鉄関連の遺構（Ａ－６号、Ｂ－11号など）、北の大溝（Ａ－９号）と平行する可能性があり、これらの想定のもとに遺跡全体の構成、性格などを検討してみたい。

溝跡は５条検出しているが、ここでは今回の調査区のなかではもっとも広い尾根の平坦面であるＡ区から出土した４条の溝跡を取り上げその性格をみてみる。

尾根平坦面の北端に際立って規模の大きい溝（Ａ－９号）が掘り込まれ、そのすぐ傍らに住居（Ａ－１号）が作られている。中央部には北と南の溝に挟まれた建物跡が位置する。南の斜面際には鍛冶炉を伴った竪穴が掘られ、南側の斜面には規模の大きい作業場もつ鍛冶炉と炭窯が並ぶ。南斜面の下の谷には製鉄炉（大鍛冶と思われる）が築かれている。そこから南には湿地が広がり、遺構はない。遺構はざっとこのような位置関係にあり、これらの遺構は、「鉄の生産」に関連していることが大きな特徴である。

北の大溝は、平坦面との高低差は人の背丈程に掘られており、「防御」的効果よりは「区画」を意図して作られたものと思われる。大溝の北の急斜面を下りたところから谷の湿地、緩斜面が続き柳沢遺跡のＣ，Ｂ，Ｄ区にあたり、200メートル離れたＡ区までは、平安時代の遺構は出土せず、空白域となっている。こういう「北」に対して南の何の「区画」を意図したのか。すぐ傍らにある住居（Ａ－１号）であろうか。ひるがえって尾根全体を見てみると、中央部は住居には絶好の平坦面でありながら、住居跡が少ないことにまず気付く。他の平安時代の尾根の集落、例えば鰹沢遺跡[3]、磯鶏館山遺跡[8]、近内館山遺跡[9]などと比べたときその違いは著しい。中央部で建物跡に伴うと思われる住居跡は北側の１棟（Ａ－１号）だけであり、南には空白域が広がり、遺構は南斜面に集中している。このことに注目するなら、中央部と周辺部では何らかの役割分担ができていて、意図的に中央部を避けたのではないか。さらにこの集落が大きく鉄に関っている性格を考えたとき、中央の溝で区画されたなかの建物が中心的な役割をはたし、「鉄」に関る集落を統括するような役目を担っていたのではないか。そして大溝が「区画」していたのは建物を中心として小鍛冶、大鍛冶と役割分担されて構成された集落全体であった、とそういう想定が成り立つのではないかと思われる。

市内の遺跡では、区画を設けた平安時代の遺跡はこれまで出土していない。石田遺跡おいて古代集落に関する予察がなされ、奈良時代の“自然村落”、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸・大溝・窯などの遺構種別の増加する平安時代初期～前半代の“計画村落”に大別している。“計画村落”は前代との連続性を示すものとそうでないものに分けられ、後者はさらに特異な要素もつもの（例えば、須恵器窯、多量の鉄滓、羽口など、多量の鉄製武具……）とそうでないものに分けられている。[10] 当遺跡は、「計画村落のなかでも特異な要素をもつもの」におおむね該当するものと考えられる。

**f．土坑跡について**

Ａ１区の小土坑跡については、あかやき土器を出土したＡ－17号のぞいては時期を推定でき

る遺物も出土せず、また柱跡なども確認できずその性格は不明である。A－19号土坑跡は床面から小刀を出土している。小刀は、形状からみて日本刀の系列に分類できるものではなく、所謂山刀のような民具に属するものと思われる。時期は不明である。

A２区から出土したA－20号土坑跡は、A区のなかでは最大規模の土坑であるが、埋土層から「永楽銭」が出土しており、中世の可能性をもつ唯一の遺構である。

A４区から出土したA－53号土坑は平安時代のものである。床面を焼土と炭が覆っており、その焼土、炭からイネが出土している（巻末「種実遺体の同定」参照）。

**g．遺構外出土遺物について**

遺構外出土遺物は、B２区からの出土量が際立って多く、そのなかでも中国明朝の染付磁器や常滑焼の壺などの中世の遺物が注目に値する。昭和57年の調査では赤前Ⅲ遺跡で天目茶碗が出土しており、これは当遺跡の南にある「赤前館」関連の遺物であることは間違いない。前述したように今回の調査で中世の遺構と思われるのはA２区の土坑跡だけであるが、今後も周辺部での遺構、[11]遺物の出土が予想される。


1．高橋憲太郎　1989「トロノ木Ⅰ遺跡」宮古市教育委員会
2．小田野哲憲氏の御教示による。
3．鎌田祐二　他　1992「鰹沢遺跡調査報告書」宮古市教育委員会
4．高橋憲太郎　1992「細越Ⅰ遺跡、芋野Ⅱ遺跡」宮古市教育委員会
5．小田野哲憲・高橋義介　1990「上村貝塚発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
6．盛合義信　1990「狐崎遺跡」宮古市教育委員会
7．鎌田祐二　1989「千鶏遺跡」宮古市教育委員会
8．竹下將男　他　1995「磯鶏舘山遺跡発掘調査報告書」宮古市教育委員会
9．阿部豊　他　1993　未報告
10．相原康二　他　1981「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅻ（石田遺跡）」岩手県教育委員会
11．竹下將男　1984「赤前遺跡群」宮古市教育委員会